BIN... OCT 4 1976

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

AC
146
Y326

Yamaji, Aizan
Sekai no kako genzai mirai

East Asia

83

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/sekainokakogenza00yama

山路愛山著

世界の過去現在未來

東京
大江書房發行

AC
146
Y326

LIBRARY
MAY 28 1976
UNIVERSITY OF TORONTO

為我帝國史學界

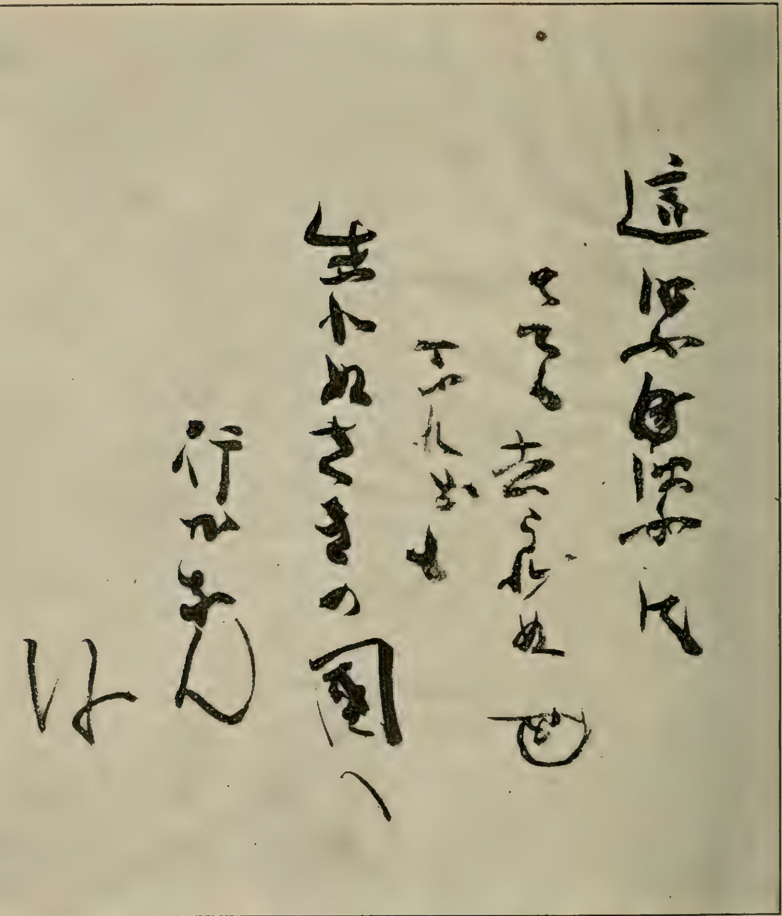
痛愛山氏之永眠

嗚呼

孝[illegible]書

山路愛山先生

山路愛山先生の辭世



這娑婆はとても去られぬ世なれども
生れぬさきの國へ行かなん
『彌』

『世界の過去現在未來』を出版するに就いて

出版者

一

愛山山路彌吉先生、夙に『大日本國民史』を著はすの志あり、其資料を蒐集するの傍ら、世界の既往將來に就いて豫め一定の成見を立てむと欲し、世界の歴史を渉獵せらる。偶ゝ歐洲大戰の勃發に際す。此大戰の後、世界の狀況は漸次統一の傾向あるべきを察し、日本國民の覺醒を促さむが爲め、驟然其研究の結果を發表することとせられたり。『世界の過去現在未來』は則ち先生が其研究の結果を叙述せられたるものなり。

二

『世界の過去現在未來』は、先生の講述を速記家林茂淳氏が書取りしものにして、大正五年八月に著手し、本年一月に終了す。反文の成る毎に先生校閲し、全部の淨寫成れる後、更に之を再閲せらる。三月十四日再閲全く終り、其夜、突如、病魔の侵す所となる。翌十五日夜、自ら起たざるを知り、夫人を呼び机上の再閲濟の稿本を指して出版者に渡すべきことを囑し、十數分を經、遽焉として長逝す。此書、實に先生が心血を濺ぎたる最後の著書にして、偶然にも日本國民に寄與する遺言書となりしは、出版者の哀悼を禁ずる能はざる所とす。

先生、元治元年十二月二十六日、江戸に生れ、大正六年三月十五日、東京に歿す。享年五十四。

先生の『大日本國民史』の大著、未定稿の儘にて長逝せられたるは深惜に堪へず。さりながら、先生が生前に此『世界の過去現在未來』を完成し得たるは、寶玉を餘燼の中より拾ひ得たるの感あり。先生、曩に日露戰爭に先ち、筆に口に日露戰爭の已むべからざるを說き、世人に甚大なる注意を與へたることは人の知る所なり。今亦、歐洲の大戰に際し、警鐘を鳴らして世界統一の傾向あるを報ず。先生の意見、早晚、實現せらるゝの期あるを疑はず。出版者は先生が生前に此著書の反響を聽く能はざりしを深く遺憾とす。

大正六年四月

世界の過去現在未來　目次

一　赤裸々の事實……一
二　自然法の自覺の時代……二五
三　犧牲果して惡むべきか……三一
四　原始社會　食人時代……三九
五　遊牧時代……四四
六　農業時代……五七
七　都市國の時代……六七
八　都市の聯合體としての國の興亡を論ず……一〇六
九　小國の時代……一七七

十　小國變じて大國とならむとす……………二〇五
十一　大國の時代……………二一七
十二　大國の時代一轉して强國の時代となる……………二三五
十三　强國の時代進んで帝國の時代とならむとす……………二八二
十四　國家創造の努力……………三三五
イ　舊物破壞の思想……………三三七
ロ　社會主義……………三三八
ハ　民衆の團結……………三四一
ニ　ストライキ……………三四五
ホ　個人の躍出……………三四六
ヘ　新しき女……………三四八
ト　享樂主義……………三五二

チ　非戰論及び休戰論……三五五
リ　古道復興……三五六

十五　動かすべからざる事實……三五八

甲　人間の本能は滅ぼすべからず……三五九
乙　個人滅ぼすべからず……三六一
丙　歴史は人を支配す……三六三
丁　人の道義感情は滅びず……三六四
戊　人は超物質のものたること……三六七
己　人間の最大なる問題は人種としての生存競爭なること……三七一
庚　立國は虚榮に非ず……三七二
辛　戰爭は止むべからず……三七九
壬　全民主義……三八二
癸　新貴族主義……三八九

十六　將來の日本……………………………………四〇二
十七　犧牲論……………………………………………四五〇

世界の過去現在未來

山路愛山 著

一 赤裸々の事實

世の中に二つの事實あり

世の中に二つの事實があります。此事實は、人間の世界を造り、人間の世界を維持し、人間の世界を進めて行く力になるものであります。哲學でも、議論でも、感情でも、凡そ如何なる勢力でも、此二つの事實を動かすことは出來ない。然らば、此二つの事實と云ふのは何ものであるかと云ふと、一は『個人の心』であります。私は之を國家創造の力と名づけました。一は『公共の心』でありま

す。私は之を國家維持の力と名づけます。

先づ

個人の心、則ち國家創造の力

から述べる。昔から世の中に、個人の心と云ふものの『力』のあることは、誰も認めない者は無い。孔子も『三軍可レ奪レ帥。匹夫不レ可レ奪レ志』と言はれました。一人の心の中には、其人が已めようとしても已むことの出來ない要求がある。則ち、外から這入つて來るのでなくて、內から外に働き出す力がある。此力は如何なる物も抑へることは出來ない。禪學だとか、陽明學だとか云ふのは、此力に重きを置き、萬法の基礎は、唯だ此一個人の中から動き出す力にありと認めたものである。

王陽明が、人から『道と云ふものは、どんなものでありますか』と尋ねられた時に、答へた名高い詩がある。

個人の心

三軍可奪帥。匹夫不可奪志

禪と陽明

王陽明の人の道を問ふに答ふる詩

王陽明の諸生に示す詩

饑來喫レ飯倦來眠。只此修行玄更玄。
說二與世人一渾不レ知。却從二身外一覓二神仙一。

其意味は『人間の心の中に良知良能と云ふものが有つて、腹が減れば飯を喫ひたくなるし、草臥れゝば眠くなる。これは素と人間の心の中に具はつた力が現はれて出るに過ぎないが、併し此中にあるものを外に押出して、完全に現はすと云ふことは、實はむつかしい修行である。斯樣に人間の內にある力が、總ての行儀の基礎になることを、人に說いて聽かせても、人は自分の中にそんなものが有るとは信じない、却つて道は自分の身の外にあるとのみ思つて、外を探して居るが、其實は神仙は外にあるものでない、自分が則ち神仙である』と云ふことである。同じ意味を、王陽明は又、次のやうな詩で示して居る。

無聲無臭獨知時。此是乾坤萬有基。
抛二却自家無盡藏一。沿レ門持レ鉢效二貧兒一。

天上天下
唯我獨尊

三界唯一
心。心外
無別法

人は天然
よりも偉
大なり

これは『自分の中に天地萬有があるのに、其限り無き藏の物を用ゐないで、乞丐が鉢を持つて他人の門を貰つて歩くやうに、自分の外にのみ眞理が有るとして尋ね回る』と云ふ意味である。詰り、禪でも、陽明でも、謂はゆる『天上天下、唯我獨尊』の教理に執著するものであつて、天地萬有の源は唯だ此心にある。此心が天地萬有を造るものである。則ち『三界唯一心、心外無別法』と云ふ原則を立てたのである。成るほど個人の內から起る已むべからざる要求に重きを置いて、其處に脚を立てて萬事を眺めれば、此力より大きなものは無い。天然は偉大なるものである、併し人間の內から起る力は天然を征服する。國家も實は此力が創造するのでありますから、之を國家創造の力と云つても誤ではない。

斯う云ふ立場から考へれば、經驗が人を作るのではない。テニソンは『人間を作るものは、彼を圍んで居る總ての物である』と言つて、周圍の感化に重きを

人は社會よりも偉大なり

置いたけれども、併しこれは一個人の内から働き出す力に重きを置いた者の考へではない。一個人の力に重きを置いて、其所から物を見渡すと、周圍が人間を作るのでない、人間が周圍を作るのである。則ち、人間の力が周圍を征服して、周圍の狀態を自分の好むやうにして仕舞ふのである。謂はゆる『萬物心造』である。

斯う云ふ見地から言ふと、一個人の心は社會よりも大きい。人の心は社會から離れて獨立して居るものである、寧ろ社會に反對するものである、社會と戰ふものである。則ち、一個人が社會全體を相手にして、それと相撲を取るのが、英雄豪傑の事業である。人の志の深く確くなるのは

反社會の努力

に在る。それが人格を作るのである。

歷史の我々に示す所に依ると、世の中の形の改まつて行く其力、則ち國家創造の

大なる思想は先づ個人に來り然る後に社會を征服す

力は、最初に何處に起るかと云ふと、新しい理想が先づ一個人の心に起る。一個人の心の中に、已むに已まれない力となつて這入つて來る。

かくすれば斯くなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂

と云ふのは吉田寅次郎の歌であるが、さう云ふやうな已むことの出來ない要求が一個人の心に宿つて來る。此要求は通例、永い間、群衆に依つて社會から拒絶される。さうして、此一個人と社會の矛盾衝突の爲めに、謂はゆる犧牲の

犧牲の血

血（いけにへになる血）が流される。或るときは個人の力が負けて、社會の爲めに壓倒されたやうに見ゆる。さりながら、個人の心の中に深く宿つた要求は、決して敗北して其儘、已むものではない。社會の全力を盡して個人の中から起る力を壓迫しようと思つても、さうして一時は壓迫し得たやうに見えても、個人の心は決して亡びるものでない。丁度、それは一時、冬が來て、草木の葉がすツかり枯落ちて仕舞つたやうに見ゆるけれども、春が來れば、青々と復び芽

個人遂に社會に勝つ

を出すやうに幾たび燒かれても、幾たび霜に逢つても、遂に復び起り立つて來る。犧牲者の血は必ず第二の犧牲者を出すべき肥料になる。さうして社會と戰ひ鬪つて居る中に、段々味方が出來る。一の強い品性は他の強い品性を喚び起すやうになる。『德不レ孤。必有レ鄰』と言つたやうに、必ず友人が出來る、必ず同志者が出來る、さうして終ひには社會を制御するやうになる。則ち國家を創造するやうになる。これは則ち、一人の中に生れた力が遂に社會に勝つたのである。此個人の中に起る力は、結局何ものも亡ぼすことの出來ないものである。我々は先づ此事實を認めなければならない。

公共心

併し、此力のことは暫く論じない。此外に他の力がある。他の力と云ふは何ものであるかと云ふと、私は之を名づけて

　　公共心、則ち國家維持の力

と云ふ。此『公共心』と云ふものも、矢張り大いなる力である。恐ろしい力で

人獸の分岐點

である。我々は此公共心が、どうして出來たかと云ふことを考へて見たい。此力は一體、何處から出たのであらうか。我々は、これが人類と動物の分れる追分の場所に於いて、卽ち人獸の分岐點に於いて發生した德であると思ふ。

人類は言ふまでもなく動物である。他の動物と何も變つたことは無い。併しながら、人類が動物として他の動物と同じやうな進化の道中をする間に、いつの間にか或る偶然の結果から、社會を結んで、さうして他の社會若くは他の生物と戰ふことを學んだ。人類が社會を結んだのは、則ち人類と動物の分れた始めである。これが追分である。此追分からして、一方は東海道に行き、一方は中山道に行くと云ふやうになつて、段々、人類と他の動物との區別が大きくなつて、終ひには人類は爪も鋭くないものになり、毛も寒さを凌ぐに足りないものになり、筋肉の力も比較的に弱くなり、木にも登れなくなり、山にも馳けられなくなり、さうして段々、動物たる實力が減つて來たのである。

火星の動物、地球の人類を評價す

一體、人間は萬物の靈長で、動物の中では第一等の動物であると誇つて居るが、人間なるものは果して動物として左樣な立派な價値の有るものであらうか、我々は之を考へて見なければならない。假に、火星の世界から、人間のやうな他の動物が、此地球の上に下りて來たとして、人間は地球の上に於いて第一等の動物だと聞いて、人間一人を火星の動物が火星の世界に連れて歸つて、此人間は果して第一等の動物であるや否やを試驗して見ると假定することは、頗る面白い。『お前は、地球の上では第一等の動物だと云ふことだが、左樣か』と聞かれたら『左樣です、私は萬物の靈長だと言はれたものです』と答へるに違ひない。『然らば、果してさうであるか無いかを吟味して見る』と言つて、人間の著物を剝いで見る。著物を取去つて、赤裸々にして人間を見て『貴樣の爪は何だ、それで戰が出來るか、それで喧嘩が出來るか、そんな足でドレほど駈けずり囘ることが出來るか、身體の毛も其んなことでは暑さ寒さに堪へられまいではな

いか。又、敵に鋭利の爪でもあれば、お前の無防禦の腹は忽ち突き破られて仕舞ふではないか。何でお前は萬物の靈長だの、第一等の動物だのと言ふのだ。戰をするとしたところで、如何にも貧弱な裸蟲と言つて宜いやうなものではないか』と言はれるに違ひない。さうしたら、人類は何と言つて答へるか。「私の身體は、そんなに強いものではない、裸では雨露も凌げず、寒暑にも堪へられない、私の手足の爪では、迚も虎や狼のやうな強い動物と喧嘩をする譯には行かない。さりながら、私には「心」と云ふものがある、「智慧」と云ふものがある。心と智慧は他の動物に無いところ。それを考へて呉れなくては困る』と、斯う言つて自慢するに違ひない。さうすると、火星の動物が『それならオレが題を出すから答へて見ろ。「三百六十五に三百六十五を乘けると、幾つになる？」やッて見ろ』『それは、やッて見ようが、鉛筆と紙を呉れ』『何だ、鉛筆と紙と云ふのは？、そんなものは此火星の世界には無い。貴樣は「他の動物に無い心と

智慧を有つて居る」と言つたでは無いか。答へて見ろ』『鉛筆と紙が無ければ答へは出來ない』『鉛筆と紙が無くては答へが出來ないのなら、お前は一個人として價値は無い。鉛筆とか紙とか云ふものは、お前の住んで居た地球には有るか知らぬが、此火星には無い。お前一人だけ此火星に來たのだから、そんな物を供給することは出來ない、紙とか鉛筆とか云ふものを用ゐないで答へて見ろ』と言ふと『それは出來ませぬ』と答へるより仕方があるまい。火星の動物が又、人間に向つて『お前は「智慧が有る」の「哲學とか科學とかを知つて居る」のと言つて自慢するが、お前の世界には元素と云ふものが幾つあるのか』『それは、七十幾つか、八十幾つあります』『さうか、能く知つて居る。然らば其元素の化合量と名を言つて聞かせろ』『それは此處では出來ませぬ。私の方には化學書と云つて、さう云ふことを書いた本があります。それを見れば直ぐ分りますが、諳記では覺えて居ませぬ』『何だ、貴樣は唯だ元素の數だけしか

動物としての人類の退化

知らないのか、化合量も名も知らないのか、さうして見ると、お前は「萬物の靈長だ」などと言つて威張つたが、頭腦で僅かの數學も出來ず、元素の化合量も名も知らぬ、「本を見れば直ぐ分ります」などと言ふ。それなら精神の方に於いても「萬物の靈長だ」などと言つて、誇ることは出來ないではないか」と言はれるに違ひない。

此火星の動物の言ふやうに、人間と云ふものも一人として孤立させて見れば、全く『萬物の靈長だ』などと言つて、誇ることは出來ない。人間の偉いのも、社會を組織してから社會の一人として偉くなつたので
社會の中に在る人として偉いのであつて、社會を離れては一向偉くない者になつて仕舞つた。さうして、人類は社會を組織すると同時に、動物の性を失つて、動物としては誠に弱い者になつて仕舞つた。人類に近い高等動物の哺乳獸でも、生れると僅かの間に自分

人類の強きは其社會的動物たる陣立に在り

一身を保護する力を有ち、親の保護の下に居るのは極めて短い間である。然るに人類はどうであるか。今日の人間は、生れて立つて歩み、物を食ふことの出來て、稍〻自ら危險を防ぐことの出來るまでには、少なくも數年を費やすではないか。そればかりでない、完全した成熟した人間になつても、人間は動物として極めて弱い者ではないか。則ち、人類の強いのは社會的動物として強いのである。人類の強い程度は、其社會の陣立則ち社會の構造が、他の動物、若くは他の人類社會に優つた點と人類が其社會に適合する點に在る。此人類社會構造の陣立が、則ち宗敎、道德、政治である。一言にして曰へば、國家維持の力である。動物には社會的生活と云ふものは無い。然るに、或る動物は、社會的生活を始めてから、特別に他の動物と違つた方角の方に進んで來た。それが人類である。人類が社會を結ばない獨り棲みの動物から、どうして社會的の動物になつたのであらうか。他の言葉で言へば、人類がどうして、

偶然か天命か

宗教、道德、政治を有つ者になつたであらうか。それは人類と動物の分れ目であるけれども、其分れたのは、偶然と云へば偶然、天命と言へば天命である。名はどッちの方に附いても構はないが、兎も角も人類は社會的の動物たることに依つて、始めて獸の世界から超越し得たのである。

適者生存

ダルウヰンが進化論を言ひ出して、總て有機物には生存競爭と云ふ理法が行はれて居て、周圍の狀況に最も適したるものが勝つて存在し、不適當のものが滅びる。謂はゆる

適者生存の理法

が行はれて、始終進化して行くものだと云ふことを言ひ始めた。此發見は、何人と雖も非難することの出來ないもので、動物の世界も、植物の世界も、總て進化の理法に據つて、一日も進步發展を止めないものであるから、無論、人類にも此理法が行はれて居るに違ひない。併し、人類が前に言つた通り社會的動

生存競爭は社會と社會の間に行はる

宗教道德も要する生存競爭に具たに過ぎず

物となつた上は、此生存競爭の理法は、個人と個人の間にも勿論行はれないことは無いが、併し主もに社會と社會の間に行はれるやうになつた。動物に於いでは生存競爭が、孤立した一の動物と他の孤立した動物の間に行はれるのが通例であるけれども、人類に於いては一の社會と他の社會の間に行はれる。則ち、甲の社會の陣立が乙の社會の陣立よりも能く出來て居れば、甲の社會が勝つて乙の社會が敗れる。さうして勝つた方の社會が善い構造を有つものとして殘る。然るに、それよりも又更に善い構造の社會が起ると、前の古い構造の社會は、社會と社會の生存競爭の爲めに敗北する。此間に個人の國家創造の力、則ち舊い社會を破壞し、新しい社會を造らうとする力も働く。斯うして、社會の組立方が段々に變つて來る。

一の社會が他の社會と戰ふときの陣立、それが則ち宗教と云ふものでもあり、道德と云ふものでもあり、政治と云ふものでもある。則ち、此社會を組織して

居る一個人一個人を綜合した力を、敵の社會を倒すのに最も有效に使用する社會が、段々勢力を得て、他の社會を壓倒し、若くは他の社會を併呑する。さうして、更に周圍の狀況に最も適當した社會の陣立を作る。之に依れば、宗教も道德も要するに一の社會が他の社會と生存競爭をする道具たるに過ぎない。則ち

宗教道德は他の社會を壓倒する武器

だと言はなければならぬ。

宗教道德が他の社會を壓倒する武器だと言ふと、如何にも奇妙な論のやうに聞ゆるが、さりながら是れは三千年の昔に、莊子が既に言つて居る眞理である。莊子は斯う云ふ譬喩を言つて居る。盜跖と云ふ大泥棒があつた。※盜跖の仲間の小泥棒が、

※跖之徒。問於跖曰。盜亦有道乎。跖曰。何適而無有道邪。夫妄意室中之藏。聖也。入先。勇也。出後。義也。知可否。知也。分均。仁也。五者不備。而能成大盜者。天下未之有也。（胠篋）

或るとき盜跖に聞くのに『泥棒をするのにも、道德と云ふものが入り用でせうか。親分どんなもんで御坐んすり』。盜跖が言ふに『道德は無論要る。先づ考へて見ろ、泥棒する前には、今度這入る家は、どれ程の物があると云ふことを、豫め見當を附けなければ成らない。此見當を附けるのは則ち「聖」の働きではないか。いよ〳〵泥棒に這入ると云ふ場合になると、怖いから誰も先きに這入りたがらない、それを思ひ切つて先きへ這入る者があれば、他の奴がそれに勵まされて這入つて來る。其思ひ切つて先きへ這入ると云ふのは何か。それは、「勇」ではないか。さて、這入つて物を取つた。取るまでは「取りたい」と云ふ一心で（謂はゆる「鹿を逐ふ獵師は山を見ず」で）元氣よく這入つて取つたが、取つて仕舞つたあとでは俄に怯氣が付いて來て、誰も先きへ逃げようとする。其場合に緩くり構へて仲間の者を先きへ外へ出して、殿りをして跡始末をして出て來る奴が要る。それは何だと云ふと「義」と云ふものではないか。又、這入

道德、宗教、政治は社會的攻擊略奪の具なり

るとしても、今日は泥棒に這入つて宜いか惡るいかと云ふやうなことを考へなければ成らない。其場合を考へると云ふは「知」すなはち才の働きではないか。さて、泥棒して引上げて、盜んだ物を「親分だから」と云つて自分の懷ろばかりに入れゝば、子分だとて宜い心持はしない、永く親分子分の關係を保つて行くことは出來ない。又、餘計働いた奴ばかりで分けて取つて仕舞つて、提燈持には分けて遣らないと云ふやうなことをすると、是れ亦、仲間の間柄が圓滑に行かない。それで、泥棒した物は、仲間の皆なが滿足をするやうに分けなければならぬ。これは則ち「仁」と言ふものである。斯うして見ると、これだけの德が無ければ、泥棒をすることは出來ない。大きな泥棒になるには、これだけの道德が要る』と、盜跖が言つたと云ふ話が書いてある。莊子の此言葉は、道德とか、宗教とか、政治とか云ふものは、畢竟、甲の社會が乙の社會を攻擊するとき、則ち泥棒をし、侵掠をするときの陣立に過ぎないと云ふことを看破し

たものである。

斯うして見ると、宗教、道德、政治と云ふやうなものは、社會を强くする陣立で、さうして此陣立が堅固で周圍の狀況に適したものであれば、其社會は永く生存し、他の社會を併呑し、さうして强い國になつて殘ると云ふことが分かる。一體、人間は前に言つた通り社會的動物であるから、社會に生れて、社會の中に育てられたものである。我々は生れる前に、著物も食物も用意して來た者ではない。さりながら、

我々の生れた所

は荒野ではない、草の中でもない、駝鳥の卵の置かれるやうな砂の中でもない。我々の生れて來た所は社會である。社會は我々の生れぬ前から父母を供給し、衣食を供給し、生れゝば直ぐに衣食に困らないやうにしてある。斯う云ふやうに、人類は社會に生れて來て、社會の中に育てられ、さうして社會の必要に指

公共心は第二の天性

揮せられ、常に社會の中に浮んだり沈んだりして居るものだから、其習慣からして第二の天性を作り出した。これが公共心である。則ち國家維持の力である。人類が社會を結ぶと云ふ、其源に溯つて見れば、社會を結ばなければ生存することは出來ないから、便宜の爲めに社會を結んだのである。社會を結ぶことは、人類の天然の約束ではないかも知れない。さうしなくても人類は立派に生存することが出來たかも知れない。併し、社會が出來上つて居る此地上に我々は生れて來たのだから、どうしても此約束に從はなければ成らぬやうに、子供の時からなつた。さうして永い間の習慣が第二の天性に變じて、公共心は恰も先天的の約束のやうになつた。

ミルの守錢奴の譬喩

ジョン スチュワード ミルは、斯う云ふことを言つた。『世の中に

守錢奴

と云ふ者がある。彼は初めから錢を貯めることが唯一の目的であつたのではな

公共心は社會を保存する爲の便宜法

い。錢は物の代表物で、物を買ふことが出來るから、それを持つて居れば都合が好いところから、初めは錢を貯めた。けれども、段々やつて居る中に、錢を貯めることが面白くなつて來て、唯だ錢の爲めに錢を貯めるやうになつた。さう云ふ場合には、錢は物を買ふ力があるから欲しいのではない、錢は錢だから欲しいのだ。さう云ふ心理狀態になつたのが、守錢奴と云ふものである』と言つた。それと同じやうに、人類の公共心は、初めは人類社會を保存する爲めの便宜の方法であつたに相違ない。詰り、利益の爲めに、便宜の爲めに、社會を維持して、他の社會と戰ふことになつたのが初めである。併しながら、生れるより死ぬるまで、祖先より裔孫まで、其中に生れて、其中に育つて、其中に死んだが爲めに、遂にこれが第二の天性になつた。さうして公共心は恰も人間の心に燒付けられた一つの力のやうになつた。

宗敎は、全く社會を離れた出世間のことのやうに思ふ人があるけれども、實は

宗教は多くの場合に於て戰鬪の具なり

多くの場合に於いては、
　　宗教は社會を維持する道具の一つ
である。宗教は博愛を説き、平等を敎へ、人類の兄弟なることを敎へ、敵を愛すべきことを敎へるから、ちよつと考へると社會の利害を超絶したもののやうに思はれるけれども、歷史の示す所に據れば、其實、宗教が博愛、平等、人類同胞と云ふやうなことを主張するのは、それを主張する社會が、他の種類の社會、卽ち壓制、專權、階級の鋭い差別などの行はれて居る社會よりも、社會として有力の間のみ、さう云ふことを宗教家が言ふのである。若し、其社會の存在が危いとか、或は大いに社會の構造を變へなければ成らないとか云ふ場合になると、其人民の奉じて居る宗教は、其社會の元氣を鼓舞して、社會としての生存競爭に從事する力を培養するものになるのが通例である。則ち、宗教も公共心の一つの顯現で、畢竟は自分の社會を強くして他の社會を壓倒する道具になる

貧乏も幸福も對照の感覺なり

のが、歴史の示す事實である。

然らば、公共心なるものは、結局どう云ふことを目的として進んで行くか。

公共心の向つて進む目的

は、前に言つたやうに社會の維持に外ならない。然らばなぜ又社會を維持するかと云ふに、其社會の幸福を維持する爲めであるに違ひない。併し、幸福と云ふのは何ものか。或る人は『貧乏とは對照なり』と言つたことがある。實に名言である。貧乏に一定の標準は無い。百圓持つて居る者は千圓持つて居る者に比べれば貧乏であるが、何も持つて居ない者に比べれば貧乏ではない。苟も餓ゑて死ぬと云ふ貧乏の底にまで達しない以上は、貧乏とは唯だ對照の語である。則ち對照の感覺である、對照の感情である。之と同じやうに、幸福と云ふものも對照である。幸とか不幸とか云ふのは關係的の感情であつて、何も定まつた標準は無い。人の慾望は無限である。社會の幸福と云ふことにも際限は無い。

幸福に際限なし故に社會の進化にも亦際限なし

一つの幸福の狀態が出來る、さうして他のものが其れより良い狀態に進まなければ、それをいつまでも幸福に感じて居ることが出來ようが、他にそれに優つた幸福の狀態が出來れば、對照の感覺に依つて前の幸福が其儘不幸になる。なぜならば、幸福とか不幸とかは對照の感じに過ぎないからである。茲に於いて、幸福の維持を目的とする社會でも、事實に於いては、常に間斷なく生存競爭に從事しなければならない。社會の陣立を、周圍の情況に從つて、日々に新たにしなければならない。自分で新たにしなければ、他の方で新たなる社會が出來て、こちらの幸福を直ぐに不幸にし、其社會を滅亡の狀態に陷れる。

私が此講演の最初に於いて、是非記憶して貰ひたいことは、此二つの心、則ち國家創造の力と國家維持の力の二つは、恰も人類の天性、若くは第二の天性であつて、國家社會は此二つの力に依つて世の中に現はれると云ふことである。此事實を腹に置いて貰はぬと、私の此講演が完全に理會されないことと思ふ。

人類は個人として相殺さゞれども國家即ち社會として相戰ふ

戰爭は人の結びたる社會間の生存競

二　自然法の自覺の時代

前の話の趣意から、自然の結果として來るべき結論は、斯う云ふことである。人類は、彼が動物であつた時代のやうに、個人としては喧嘩をしない。勿論殺し合ひもしないけれども、國家即ち社會としては、今日でも殺し合つて居るものである。さうして、國家の間の此生存競爭は、是れから先き、いつまで經つても止むと云ふ見込は無いものである。斯う云ふ次第であるから、戰爭は人間に取つては離るべからざる、又已むことを得ざる事實であることを承認しなければならない。

戰爭は、一の社會が他の社會に對する生存競爭

爭の意味を具體的に現はせしものなり

の意味を具體的に現はしたものである。而して、謂はゆる人類の進歩は、實に此競爭の結果に外ならぬのである。現代のやうな社會組織が、なぜ今日まで遺つて居るかと云ふと、それは社會としての戰爭に於いて最も有效なるものであるから、適者生存の理法に依つて存在して居るのである。

適者生存の理法

斯う云ふ理窟は昔から有つたことで、世の初めから人類は此理法で支配されて居たものに違ひない。併し、人類社會が斯う云ふ理法で支配されると云ふことは、昔からのことであるが、此理法の有ることを知り得たのは最近のことである。丁度、經濟學の教へた事實は、太古から存在して居ても、經濟學と云ふ學問は最近のものであるやうに『國家は人類が社會となつて他の社會と生存競爭に從事する爲めに出來たものである。さうして、國家を作るには國家創造の力(個人の)と國家維持の力とがある』と云ふことも、漸く最近に至つて發見された理法である。進化の理法は、古今に通じ、萬世に亙つて、變化の無いもので

ラマーク遺傳と適用を説く

ダルウヰン自然淘汰を説く

あるけれども、併し進化論を世間の人が眞理なりと認めるに至つたのは第十九世紀であつた。第十九世紀に於いて、ラマークと云ふ人が出で、始めて生物には遺傳と云ふものがある。又其境遇に對して、いろ／＼に自分の性質を當嵌めて行く適用の力もあると云ふことを言ひ出し、之に次いでダルウヰンが出て、之を大成して、自然淘汰（ナチュラル　セレクション）と云ふことが、生物の機關を今日のやうにした主もな原因で、適者が生存して不適者が滅び、さうして適者の血統が又他の適者と生存競爭して、其中で更に最適者が遺ると云ふことを發見したので、進化論なるものが始めて動かすべからざる理法であることを人類が認めるやうに成つたのである。進化と云ふ事實は世の初めから有つたのであるが、それを覺り得たのは第十九世紀である。それと同樣に、國家なるものは人の結んだ社會として社會同士の生存競爭の間に起つたもので、社會と社會と生存競爭の結果、自然淘汰の理法に依つて、最適者たる社會の構造が現代に

遺り、更に將來に於いて限り無く同じやうな生存競爭を續けて行くと云ふことは、ダルウヰン以後に於いて社會の現象を研究する人が發見したことで、詰り

ダルウヰンの發見した
　生物進化の理法が國家と國家間の關係にも行はれて居る

のを覺つて、こゝに始めて此理法の有ることを知つたのである。

人生は戰闘なり

此覺り得た理法に據ると、人間は昔から戰闘をして居る。個人としての戰爭は勿論止んだのではないが、社會と社會、國と國との戰爭は、それよりも偉大な勢を以て今も尚ほ行はれ、將來と雖も盛に行はるゝであらう。人間の理想は決して安靜でも平和でもない。『兎角、世間に事無かれ』と云ふ諺はあるが、人間の理想は無事泰平を樂まむとするのではない。又、無事泰平と云ふことの、世に有るべき筈は無い。

人の仕事も理想も戰爭なり

『人間の仕事、即ち其從事して居ることは戰爭である。其理想も矢張り戰爭である。此世界は、一つの社會が他の社會と生存競爭に從事し

世界は戰場なり

公共心の最後の目的は社會の爲に戰ふに外ならず

故に人類の目的は社會の犠牲となるに在り

て、他の社會を併呑し、若くは壓制する戰場だ。さうして、此戰爭の最優者となるには、國家維持の力と國家創造の力が適當に働かなければならぬ」と云ふことを知り得るやうになつた。一言にして此意味を曰ふと、人類は動物と分れて人類となつた時から、此身體を社會の犠牲にしなければ成らぬやうな状況に置かれたものである。則ち、前に申した公共心、則ち國家維持の力の最後の目的は何だと言ふと、社會の一員となつて社會の爲めに戰ふと云ふのに外ならぬ。國家創造の力も戰勝者たり得べき國家を現出しやうと云ふ努力に外ならぬ。さうして、其戰は必ず犠牲を要求するものなるが故に、

人類の目的は社會の犠牲となるに在る

と云ふ事實を覺り得たのが、則ち現代の國家社會に對する諒解の結果である。

前に申した通り、人類は一個人としても、鬱勃として滅ぼすべからざる、已むを得ざる要求を有つて居るものである。さうして之と同時に、人類は單純なる

動物たることから分れて人類となつた其時から、人類たる約束の爲めに、社會の犧牲にならなければ成らない第二の要求を有つて居るものである。さうすると茲に二つの要求が有る。此要求はどうして調和すべきものであらうか。私は前の力を國家創造の力と云ひ、後の力を國家維持の力と云ひ、此二つの力を調和して働くものと見るのである。併し私は此處には暫くそれを說かない。私は先づそれより先きに、議論の順序として『社會なるものが他の社會に對する戰鬪の機關であつて、此世界が人類に要求する公共心の最後の目的は犧牲である。さうして、此犧牲あることに依つて、社會の構造が日々變化し、進步し、現代の政治、道德、宗教を生み出だし、さうして生物界に於いて行はるゝ生存競爭が一秒時間も休まざる如く、社會と社會の戰鬪も決して寸時も止まずして、常に永へに新しい犧牲を要求して居る』と云ふ事實を、これから段々話さうと思ふ。

三　犧牲果して惡むべきか

それに付いて、先づ言はなければならぬことがある。社會の犧牲となることは果して人間の嫌ふことであらうか、前に申した個人の內から發する力、個人の已むを得ない要求は、個人をして社會の犧牲たらしむることを嫌ふものであらうか。成るたけ個人を社會の犧牲にならないやうにしたいと言つて、社會の犧牲になることを回避するものであらうか。則ち他の言葉を以て言へば、

個人が社會の犧牲となる

のは、畜類が屠殺場に屠殺されに行くやうに、唯だ致し方ないから、其所に引摺られて行くと云ふやうなものであらうか。則ち犧牲の中には、自由の意思は少しも無くて、唯だ社會の爲めに屠殺されに行く如き悲むべき事として、人類

はそれを受取つて居るであらうか。私はそれに付いて空論はしない。唯だ事實を語りたい。事實は、個人は社會の犠牲になることを常に嫌がるものであらうか、どうか。

孟子の意見

孟子は此問題に答へて居る樣に思はれる。孟子は支那の昔の賢人であるが、孟子の說に據ると、人類は自分の中に自分の命よりも大切なものを有つて居て、さうして時としては、其大切なものの爲めに、命を捨てることも厭はないことを明かに認めて居るやうに見える。則ち、犠牲と云ふものは、仕方なしに其所に引摺られて行く機械的の仕事ではなくて、好んで自由の意思を以て其所に行くものであることの、事實のあるのを示して居る。孟子は斯う言つて居る。

魚は旨い物で、オレは好物だ。熊の掌もオレは好物だ。併しながら、魚と熊の掌と此二つのものが同時に得ることが出來なくて、どッちか一つを擇ばなければ成らぬと云ふ時には、オレは魚よりも熊の掌を取る。生命は大切なも

ので、オレも生命の長いことを希望して居るが、併し義と云ふことも實に大切なものだ。義に違はないやうにしたいと思つて居る。今、生命を續けて行くことと、義に違はないことと、此二つを同時に得ることが出來なくて、二つの者の中のどッちか一つを擇ばなければ成らぬと云ふ場合には、オレは生命を捨てゝ義を取る。なぜなれば義の方が大切であつて、さうして唯だ生きて居たところで、義に外れたことをすれば生き甲斐が無いから、義の方を取らなければ成らない。死ぬと云ふことは、オレもあんまり有難いこととも思はない、イヤなことだと思つて居るが、併し世の中には死ぬと云ふことより、もッとイヤなことがある。さう云ふ時には、死ぬと云ふことを避ける譯には行かない。死を取つても致し方

*魚我所レ欲也。熊掌亦我所レ欲也。二者不レ可レ得レ兼。舍レ魚而取二熊掌一者也。生我所レ欲也。義亦我所レ欲也。二者不レ可レ得レ兼。舍レ生而取レ義者也。生亦我所レ欲。所レ欲有下甚二於生一者上。故不レ爲二苟得一也。死亦我所レ惡。所レ惡有下甚二於死一者上。故患有レ所レ不レ辟也。

好んで犠牲となりし者の實例

の無い場合もある。

斯う云ふことを孟子は言つて居る。されば孟子を讀む者の今日まで格言として尊ぶ言葉である。

此孟子の言草が、道理に合つて居るか、或は道理に合つて居らぬかは、暫く議論する必要は無い。私は唯だ人間の中には、生命よりも大切に思つて居るものがあり、死ぬことよりも恐ろしいことに思つて居るものがあると云ふだけ證明すれば足りるのである。

此事は歴史上の事實である。斯う云ふやうに

人間が好んで犠牲とならむと欲する要求

を自身の中に有つて居ることは、歴史の上に掩ふことの出來ない事實である。此要求あるに依つて、赤穗の義士は讐討の爲めに法に死して厭はなかつた。此要求あるに依つて、下總佐倉の民、木內惣五郎は刑辟に死して猶ほ悔えなかつ

支那人にも犧牲の精神あり

韓退之の文章

男兒死耳不可爲不義屈

た。此要求あるが爲めに、滿洲の野に於いて『萬歲』を歌つて、快く死んだ我が同胞は、萬を以て算へ、十萬を以て算へるほどあつた、此要求に依つて、キリスト敎の最初の信者は好んで殉敎者たる血を流した。

支那人のやうな、見樣に依つては自己中心主義の我利我利亡者と云ふべき人種でも、其歷史を見ると、矢張り好んで犧牲となる精神の有つたことを示して居る。私は時々退屈して來ると、八家文を出して、韓退之の張巡、南霽雲が睢陽の城で、賊に城を陷れられて死んだときの記事を讀んで、自分の精神を慰める。城が落ちて、賊が刄を以て張巡を脅かし『貴樣、降參しろ』と言ふと張巡は※屈せずして降參しない。『それでは殺して仕舞ふぞ』と、張巡を引張つて連れて行かうとする。今度は賊が又、南霽雲に向つて『お前、降參しろ』。南霽雲は返事をしない。グヅ〱して居る中に、張巡が南霽雲を呼んで『南八、男兒死なんのみ、不義の爲めに屈すべからず』と言つた。南霽雲はそれを聞

いて笑ひながら『私も考へがあつて默つて居ましたけれども、あなたが「死ね」と仰しやるなら、私だッて死ぬことくらゐ何でもありませぬ』と言つて、南霽雲も降參しない。そこで、賊が怒つて張巡其他數十人の者を縛つて、地面の上に跪かせて、段々に殺戮を加へようとする。其時に張巡が立つて、あッちこッち歩いた。さうすると皆なが其れを見て、或は立ち、或は泣いた。其時、張巡が皆なに言ふに『汝怖るゝ勿れ、死は命なり』。泰然として居る。皆なは張巡の樣子を見、泣いて仰いで見ることが出來なかつた。面を上げる者は無かつた。張巡が從容として戮に就いたとき、顏色亂れず、陽々として平常の如し。

賊※以刃脅降巡。巡
不屈。即牽去。將斬
之。又降霽雲。雲未
應。巡呼雲曰。南八
男兒死耳。不可爲
不義屈。雲笑曰。欲
將以有爲也。公有
言。雲敢不死。即不
屈。（中略）賊縛巡
等數十人坐。且將
戮。巡起旋。其衆見
巡起。或起。或泣。巡
曰。汝勿怖。死命也。
衆泣不能仰見。巡
就戮時。顏色不亂。
陽陽如平常。

人類の中には好んで社會の犠牲たるを甘んずる徳ありて存在す

と云ふことが書いてあるのを讀んで、私は愉快を感ずる。斯う云ふ心の存在して居ることは人間は此世に生きて居ると云ふことをのみ最大の目的とするものであると云ふ說を、事實の上から打破るに足りる。

或は言ふであらう。『さう云ふことは迷信である。人間の最も大切なものは、自分の命より外には無い筈だ。其命を捨てるのを恐れずして、好んで犠牲になると云ふのは、それは無智の迷信である』と云ふやうなことを言ふ人があるかも知れない。併し、迷信であるか迷信でないかは、私は茲に議論する必要は無い。私は唯だ、人類の中には好んで社會の犠牲になることを甘んずる德、即ちさう云ふ力が潜んで居ると云ふことを證明すれば、それで宜いのである。さうして、此犠牲が社會の進歩を促して、段々今日の狀態を作つて來たものであることは、古今の歴史が證明して居る。

但し、犧牲と云ふ意味に二つある。一は國家創造の爲めの犧牲である。斯う云ふ犧牲は舊い國家が新しい個人を迫害する場合に起る。二は國家維持の爲めの犧牲である。此犧牲は國家が其力を保存する爲めに個人の生命を要求する場合に起る。どちらにしても個人が國の犧牲たるは同じである。

私は是れから、前に申した犧牲の精神が人間の歴史始まつてより以來、現代に至るまで、一貫して居つて、それが社會の進歩を促して、今日の文明を生んだものであることを説明したいと思ふ。

四　原始社會　食人時代

人類が動物から分れて社會を結ぶ特殊の動物即ち人類になつたことは前に述べたが、人類になつた後に最初に出來た社會、即ち原始社會に於いても、犧牲の精神が其社會の土臺になつて居たと云ふことを話して見たい。

原始社會と云ふ時代は

自然物を其儘に用うる時代

であつて、物を養成して良い物にするとか、或は製造して他の物にするとか云ふことの無い、唯だ方々歩いて見て、衣食に供すべき或る自然物を發見して、其發見した物に依つて生活すると云ふ時代である。山へ行つて椎實を探して來て、其椎實で菓子を造る社會なら、原始社會ではない。椎實を椎實として唯だ

食ふだけの社會が原始社會である。後の社會になると、材料がある、製造人がある、或は畑があつて、其所に穀物や野菜を種ゑたりすることもあるが、原始の社會には物を種ゑたり造つたり拵へたりすることは無い。唯だ物を其儘見付け出して、其儘用ゐると云ふ時代である、言換へて見ると、漁業と狩獵の時代である。

漁業と狩獵の時代

漁業と狩獵は或る物を發見して取つて用ゐるだけである。此時代でも其れに必要な道具は出來て居る。則ち弓矢の類である。此弓矢を用ゐて獵をし、或は簡單なる仕掛で以て魚を捕る。斯う云ふやうな時代である。今日でもオーストラリアの土人、或はポリネシア人などは、猶ほ原始社會の狀態を維持して居る。

部落の生活

斯う云ふ時代の人類は町には住まない。町などと云ふものは未だ出來ない。唯だ部落があるだけである。部落と云つても一定の住所ではない。唯だ人が或る場所に少しばかり集まつて居るだけのことである。これが

獵にて生活するには一人に二萬町歩の地を要す

人口增加

である と言つて宜い。

最初の人類が作つた社會の形

獵と云ふものは、なか〳〵むつかしいもので、獵で人間が生活しようと云ふには、一人を養ふ爲めに二萬町歩ほどの地面が要る。二萬町歩ほどの地面を弓矢で狩くらして居なければ、それから捕る鳥や獸で一人を養ふことは出來ない。故に狩獵で生活しようと云ふ時には、餘程の廣い地面が無ければならない。さうして、人類は多く子を生んで、人口が段々增加して來るものだから、どんなに廣い地面があつても、其地面が直きに足りなくなつて、食物に苦しむやうになる。畑でも作れば食物には困らないが、弓矢で野原を狩くらして居るだけでは、人間の數が殖えれば直ぐ食物に困る、玆に於いて、此時代の人類は、屢〻極端なる饑に迫られるやうになる。そこで、唯だ死を待つて居る譯には行かぬから、勢ひ他の村を襲擊し、他の村の人間を捕つて食ふことになる。則ち

食人の風

食人の風起る

が起つたのである。

犧牲者の必要

戰爭は常に絶間ない。斯う云ふ場合には、自分の部落を他の部落の攻撃から免れさせる爲めに、戰場に出て命を捨てる犧牲者が入り用である。敵を奪ひ、敵を殺し、時としては敵の肉を食ふ必要のある社會であるから、それと同時に、敵に奪はれ、敵に殺され、時としては敵に食はれる犧牲者になるものが無ければ成らない。

犧牲者なければ社會存續せず

其犧牲者が無ければ、其社會は一日も存續する譯には行かない。然らば、此犧牲者なるものは、唯だ『致し方なし』と言つて命を捨てたものであらうかと云ふと、決してさうでない。彼等も矢張り犧牲となるときに、自分の自由の意思に依り、喜んで死地に就いた者が多い。彼等の考へに依ると、彼等の仲間は一家族である、或は一家族を大きくした一部落である。さうして、其部落全體は言はゞ兄弟である。部落の財産は彼等が分つて之を利

好んで戰場の犧牲となる

用すべき共有のものである。さうして、其部落を保護する神は彼等の祖先である。故に、彼等は此部落の爲めに死ぬるのは、兄弟の爲めに死ぬることであつて、祖先たる神に喜ばるべきものだと信じて、好んで戰場の犧牲になつたのである。

斯う云ふ精神に依つて、原始社會は維持されたのである。此精神が無ければ、原始社會は必ず他の同じ強い原始社會の爲めに壓倒されて滅びるより外に仕方が無かつたのである。

五　遊牧時代

遊牧社會興る

社會の構造が、前のやうな獵をしたり漁をしたりして、唯だ有る物を取つて食ふと云ふ仕組では、それよりもモウ少し優等な社會が出て來ると、それに抵抗することが出來なくて、さう云ふ社會は衰へ、新式の社會が興つて來る。其新式の社會とは如何なるものであるかと云ふと、私は之を遊牧社會と名を付ける。前の狩獵の時代では、原料を探し出して、それを其儘、衣食にして居つた故に、物が少なくて足りなくなり易い。それに、人間は一定の比例で殖えるから、食物に困り、終ひに人を食ふと云ふことさへ行はれたが、此時代に及んでは社會の構造が稍〻進んで少しは物を生産することを覺えるやうになつて來た。けれども、矢張り其生産した物に何等の加工をすることも無く、言はゞ原料其儘を

衣食の爲に動物を牧養す

其牧する獸群の食を求むる爲に彷徨す

用うることは、前の時代と變らぬけれども、兎に角、物を養成することを覺えるやうになつて來た。則ち、少しばかりではあるが、自然の力を人間の心に從はせることを知つて來た。言換へて見ると、食物の爲め、著物の爲めに、獸を養つて、其乳を飲み、其毛を著、其肉を食つて、さうして其仔を蕃殖せしむることを知るやうになつて來た。もう斯うなれば獵や漁で生活する必要は無くなつて來た。斯うして人間は弓矢を携へて、鳥や獸を逐つて歩く必要は無くなつたけれども、自分の飼つて居る獸の食物の爲めに、方々に行つて草木を發見しなければならぬ狀態になつて來た。言換へると、人は自分の食物を求むる爲め方々を徨つて歩く必要は無くなつたけれど、同時に自分の飼つて居る獸の群の食物を求むる爲め、矢ツ張り方々を歩かなければならなくなつた。それゆゑ一つ所に定住することは矢張り出來ない。都會の生活は其時代にも起りやうは無かつた。

獸群を養ふ爲に多くの土地を要す

獸を養ふにも矢ッ張り澤山の地面が要る。さりながら獵をする時のやうには要らない。牛や羊や馬を飼つて、仔を生ませ、乳を取るには、遊獵をして居る時ほどの地面は要らない。併し、獸を飼ふだけの地所は要るから、田畑を作るよりは餘計の廣さが要る。さうして、此時代では獸の食物は自然に生える草木に求める外は無いから、可なり廣い所を自分の勢力範圍にして置かなければならない。之が爲めに、或る種族、若くは或る家は、矢ッ張り一定の廣い區域を自分の勢力範圍に定めて、さうして其れを守る爲めに、他の種族、若くは家に對して、戰鬪しなければ成らなかつた。狩獵の時代には人類は殆ど常に食物に困つて居つたから、常に戰鬪しなければ成らなかつたが、此時代になつては『常に』と云ふ程には困らなくなつた。併し『屢々』と云ふ位の程度に困つた。故に、屢々戰鬪に從事しなければ成らなかつた。

斯う云ふ社會には、今の民法で言ふやうな

土地の所有權

土地の所有權未だ完からず

は無い。併しながら『これは此部落の勢力範圍』『あれはあの部落の勢力範圍』と定めて置かなければならない。則ち、其定めた勢力範圍に於いては、其種族のみが『これはオレの物だ』と云ふ權利を有つて居る。

蒙古人、牧地を分割す

昔の蒙古人などが、ちやんと牧地を分割して居たのは、之が爲めである。併しながら、一個人は決して土地を有つて居はしない、『これは山路愛山の所有地だ』などと云ふやうな物は、其時分には無い。又、一の種族でも、或は一つの家でも、今日のやうな土地所有權は無論有つて居ない。なぜなれば、其土地は獸を飼ふべき材料が無くなれば、謂はゆる『水草を逐つて居を移す』で、他に移らなければ成らぬから、『此所は永久、此種族のものだ』と云ふやうな約束は無論ない。

王又は酋長生ず

さりながら、此時代になつて、王とか酋長とか云ふ者が出來て、其部落全體を治めるやうになり、又、王とか酋長とかの命令が強い力を有つて居つて、それ

に屬して居る部落の人民は、決して背くことが出來なかつたから、それに依つて、

法律の萌芽

法律の萌芽

も其所に始めて出來るやうになつた。併し、經濟狀態は極めて簡單で、皆な獸を飼つて衣食して居たものだから、酋長でも普通の人間でも餘り變りは無かつた。稅などを取立てはしなかつた。又、取立てなくても濟むやうになつて居つた。

獸群を有す

騎射に長ず

水草を逐ふ

風の如き人

此遊牧社會の人間は、前に言つた通り獸の群を有つて居る。獸の群が彼等の富である。從つて馬が多い。彼等は騎射に長じ『馬上の勇者』と言つて宜しい奴ばかりである。獸を飼ふ爲めに水草を逐つて移る彼等の生活から起る自然の結果として、彼等は恰も風のやうな働きを人類社會に呈して居る。赤道の方の海が非常に熱くて、其所の空氣が膨脹して上に騰ると、北の方の陸の寒い風が其

亞細亞廣原の東部は遊牧民族の自然の住所なり

れを補ふが爲めに、南の方に向いて吹いて來る。それに反して、太陽の熱が中央アジアの高原を照りつけると、其所の溫度が非常に騰つて來る。從つて、南の方の海の上の空氣が、稀薄になつて上に騰る北の空氣を補ふ爲めに吹いて來る。さう云ふ理窟で、風には必ず一定の方向があり、一定の時期がある如く、遊牧人種も同じやうに、一定の時期を以て、一定の方角に動いて行くものである。故に、私は『彼等は恰も風のやうな働きを人類社會に呈して居る』と言ふのである。

概して言ふと、アジアの高原の最も廣い部分と云ふべき東アジアの野は、（北はシベリアの荒地に接して居り）牧畜を事とする人民、卽ち遊牧民族のいつでも居る所で、さうして彼等の侵掠的の群は、どう云ふ方角に向つて進んで行くかと云ふと、其高い原から低い肥えた草木の多い所に向つて、水の低きに就く如く流れて行く。アジアの北の高原と南の肥えた低い地面との間に、いろ〳〵な

支那人も其始は遊牧の民なり

大きな山脈がある。其山脈の間を川が山の間を縫つて流れ出すやうに出て來る。インドは則ち其低い方の肥えた地面であるから、いつでも斯う云ふ風で、ヒマラヤ山の北から遊牧社會は山の間を押出して其所に來る。インドの歷史は、此遊牧民族に始終嚇されて征服された人民の記事である。

支那人の古い傳說を考へると、
　支那人も其昔は遊牧の民であつたらしい。インドにオクサス河と云ふ河があるが、其水源の地方に高原がある。支那人は其初め此高原に住んで居た遊牧の人民らしい。彼等は遊牧社會を、前に言つたやうな譯で、風が北から南に吹くやうに、段々其故鄕から出て、黃河の流れに沿うて、支那の平原に押出して來た。さうして、常に西北から東南に向いて進んで、今の山西省の地方に這入つて來て、そこで始めて遊牧の生活を脫して、今日の支那の始めを爲したものらしく思はれる。

埃及人も其始は遊牧の民なり

遊牧民は往々大帝國を造る

明の太宗元の順帝を祭る文

エジプトの文明も非常に古いものだけれども、其初めは矢張り遊牧社會で、これはアジアからエジプトの肥沃の平野に向つて這入つて來たもののやうに思はれる。斯う云ふやうにして、遊牧社會は風の吹渡るやうな勢ひで、やつて來るから、大きな社會を造り得ることもある、大きな帝國を創めることもある。例へば、農業社會と云ふやうな社會に於いては、人間が土地に著いて離れないから、堅固な小さい國を造ることは出來るけれども、大きな廣い帝國を造ることは、なか／＼容易でない。然るに、遊牧社會は前に言つた通り、方々に移つて行くのが天性で、自然の約束であつて、おまけに『馬上の勇者』であるから、大いなる群を爲して他國に攻めて行つて、往々大帝國を造る傾きが有つた。例へば、蒙古の如きは其一例でありまして、明の太宗が元の順帝を祭る文章を作つて

＊君の祖先は、昔は沙漠から起つて、弓矢を彎いて、我が中國に這入つて來て、

※君之祖宗、昔起二沙漠一、彎二弓矢一、入二我中國一、横二行天下一、九彝八蠻、盡皆歸レ之、非二天命一不レ至レ此

さうして天下を横行したものだから、九彝八蠻、盡く皆之に歸した。天命にあらずんば何ぞ此に至らむ。

と言つたことがあるが、實に蒙古なるものは、世界に比類なき大きな帝國を建てた人民であるが、蒙古には限らない、トルコ人でも矢張り遊牧人種であつて、さうして大帝國を建てた。

遊牧社會の基礎

遊牧社會の輪廓は前に話したやうなものであるが、此社會を護る精神、此社會の基礎になる精神は何であるかと云ふと、矢張り犠牲の精神に他ならぬ。犠牲と云ふことが無ければ、此社會も前の社會と同じやうに、一日も保つて行くことは出來ない。此社會は前に言つた通り、屢〻戰鬪に從事する。戰鬪に從事するには、どうしても其社會を組織して居る人間

匈奴賤長貴壯

鮮卑烏丸貴少賤老

酋長の言に違ふ者は之を殺す

が強くなければ成らない。故に、此社會に於いては、若い強い者が貴ばれて、年を取つた者が賤まれると云ふのが、自然の必要から起つた狀態であつた。匈奴は長を賤み壯を貴ぶと言はれ、鮮卑、烏丸は少を貴び老を賤むとも言はれた。これは何れも斯う云ふ必要から出た習慣を言つたものである。此社會に於いては、年を取つた者、力の弱くなつた者は、其社會の犧牲たることを覺悟しなければ成らない。又斯う云ふ社會は強い結合の力を要する。他の部落と大いなる戰ひをするには、仲間がしッかりしなければ成らぬから、強い結合を要する。強い結合を要するには、酋長の命令を嚴重にしなければ成らない。故に、鮮卑に於いても、烏丸に於いても、其酋長の命令は非常に重く、『酋長の一言にだも背いた者は、それを殺す』と云ふ、強い號令が行はれて居る。さうしなければ、其社會の健全を保つて、他の社會との生存競爭に當ることは出來ない。さう云ふ場合に、其酋長の命令の下に快く死ぬる奴は、矢張り其社會の犧牲にな

つたのである、いや〳〵死んだのでも、犧牲になつたのである。斯う云ふ社會

戰死を幸榮とす

に於いては、戰つて死ぬると云ふことを、非常に貴いことにして、戰死と云ふものを幸榮と心得る慣習がある。これは最初にインドに這入つて來た遊牧民、卽ちサンスクリットを話すアリアン人種でも、鮮卑でも、烏丸でも、匈奴でも同じことである。國の爲めに死ぬると云ふことは、確に社會の犧牲になつたのである。此犧牲があればこそ、此社會は其健全を保つて居たのである。

此犧牲の精神は、唯だ戰鬪の場合とか或は刑罰の行はるゝ場合などにのみ行はれるのでない。此社會の總ての組織が犧牲を要求するやうに出來て居る。而して

宗教はシャマイズム

其宗教は如何なるものか

と云ふに、謂はゆるシャマイズムで、これは狩獵時代も大概同じことである。鮮卑、烏丸では鬼神を祭り、天地山川を祭る。それから、昔の酋長及び酋長の下

廣大なる天の子

匈奴必ず宗種を立つ

下馬仰天而拜

に戰つた勇將猛卒の靈を祭る。匈奴は天を祭る。さうして、匈奴の王は天の神の子であると信じて居た。匈奴の王のことを『撐犂孤塗單于』と云ふ。單于と云ふのは廣大のこと、孤塗と云ふのは子のこと、撐犂と云ふのは天のこと、卽ち『廣大なる天の子』と云ふことである。其『天』と云ふのは蒼々の天ではない、天の神のことです。匈奴は斯う云ふ風に其王を天の神の子だと信じて居て、どんな騷動があつても其王の血統でない者は王にはしない。支那には『王侯將相、寧有レ種乎』と云ふ諺がある位で、隨分、泥棒みたやうな奴が、天子になつたことも有るけれども、匈奴に於いては永い間、天の神の子である王者の血統でなければ君にはしない。突厥と云ふ遊牧民がある。（今のトルコと同じ種類）。これも其王は天から生れたもので、天下の一番の賢い者であると信仰して居た。彼等は常に天の神を拜んで、何か感謝すべきことが有れば、馬から下りて天を仰いで拜した。斯う云ふ宗敎は結局どう云ふ役目をしたものか

遊牧時代の社會の基礎も犠牲の精神なり

と云ふと、則ち犠牲を要求する教である。『汝の君は天神の子であるから、汝等は天神の子たる君の爲めに、喜んで死ぬべし』と云ふ犠牲を要求する教である。此教に依つて。彼等は人心を固結し、勇ましく戰はせて其社會を保つて來たのである。一言にして曰へば、此社會の基礎も犠牲である。此社會の存在したる所以も犠牲である。さうして、さう云ふ風に育てられた結果、此社會の勇將猛士の樂んですることも、矢張り犠牲となることであつた。

農業社會起る

六 農業時代

さりながら、社會の形なるものは前に言つた通り、敵の陣形に依つて此方の陣形も變つて來る。適者生存、不適者滅亡の理法に依つて、遊牧社會もいつまでも其形を維持することは出來なくて、新しい社會が起つて來た。それは如何なる社會であるかと云ふと、農業社會である。

農業社會と遊牧社會との差

は何處に在るかと云ふに、一言にして曰へば、遊牧社會は一定の住所が無く、農業社會は一定の住所がある。これは第一の重要なる差ひである。どうして斯う云ふ差ひが起つて來たかと云ふと、遊牧社會に於いては、獸を養つて育てることは知つて居たけれども、それを人間の好むやうに變へることは知つて居な

草木を家庭的にすること始まる

かつた。況や草木の如きは詰り其處に在るものを其儘取つて用うるのであつた。水草を逐つて歩くだけであつた。さりながら、農業社會になると趣きが變つて來る。さうして人間は始めて

草木を征服する

ことを學んだ。他の言葉で言へば、草木を家庭的にすることを學んだ。草木を征服すると言ふのは、頗る訝しい言葉のやうであるが、能く考へて見れば、決して訝しくはない。人間が始めて世の中に出來た原始時代に於いては、草木は人間の味方ではなかつた。彼等は人間と生存競爭をするものであつた。其有樣を例へると、我々が山の中に這入つて、道に迷つて、急に人家のある方に行かうとする。前に大きな藪がある、其藪を越えなければ人家のある所に行けないとなると、其藪は我々の利益にはならない、我々の進行を妨げるものになる。此場合には、草や木が多ければ多いだけ邪魔になる。それと同じやうに、人間

木燧の發見、草木の生存競爭より人を救ふ

が未だ草木を征服することを始めない時分には、草木は我々と一緒に地上に在つて、我々が勝つか、草木が勝つか、生存競爭の恐ろしい相手であつた。我々が生存する所に、筍も菌もドン／＼生存すれば、我々は居所が無くなると云ふ騷ぎになる。さう云ふ場合から我々を救つた者は何であるかと云ふと、木を鑽つて火を出すことであつた。

木燧の發見

が我々を草木との生存競爭から免れさせるやうにした。我々は火を出して、我々と生存競爭する草木を燒いて、我々の住むべき場所を作つた。我々の道具はまだ至つて簡單で、鋸も無ければ斧も無い。さう云ふ場合に、我々が大きな杉や、大きな松や、葦だの茅だのと云ふものの繁殖と闘つて、兎に角、住むことの出來る場所を作つたのは、火の發見の御蔭である。火で草木を燒くことが出來たればこそ、我々が住むことの出來る場所を定め得たのである。

草木、人類に服從す

さりながら、それだけでは未だ草木を征服したのではない。此草木の間に我々の住む所を發見しただけで、我々と草木とは何等の主從的關係は無い。併し、それより進んで草木の中に我々の食物になるもの、若くは著る物になるものを見付け出して、それを畑に種ゑて、段々變質させて、さうして今の穀物のやうにし、或は今の野菜のやうなものにした。又、我々の家を造るに適當した材木を擇んで、さうして無益な茨、枳殼を伐拂つて、林を人間の用に適し得べきやうに作り直す。さう云ふことが行はるゝやうになつて、始めて人間が草木を征服したとも言ひ、又、家庭的にしたとも言ふことが出來る。我々は

稻や野菜

を見て『あれは天然の物だ』と思つてはならない。あれは或る植物を擇んで我々の嗜好に適すべき稻や野菜に變質させたものである。我々はそれを發見したのではない、製造したのである。我々はドンな所に行つても、決して稻や麥を

小麥大麥を家庭的にせしはバビロニア人ならむ

天然的に發見する譯には行かない。なぜなれば、あれは天然の物ではない、人間が或る植物を手なづけて、自分の需要に適するやうに拵へ直したものだから、天然に發見されやうは無い。

斯うして、謂はゆる農業社會が始まつた。多分、小麥、大麥と云ふやうなものを拵へて、それを今のやうな物にしたのは、バビロニア人が始めだらうと云ふ話である。誰が始めでも其れは此處に詳論する必要は無い。兎に角、人間が天然から斯う云ふものを拵へたのである。さうして小麥が出來る、大麥が出來る、燕麥が出來る、米が出來る。斯う云ふやうな物が出來ると、今度は社會の構造が大いに變つて來なければ成らない。モウ我々は獸の群に依つて生活をする必要はない。水草を逐つて移る苦勞も要らない。大きな廣い地面を勢力範圍にして、それを守る必要も無い。二町歩か三町歩の地面に於いて、我々の家庭的にした植物を能く養つてさへ居れば、我々の家族を十分に養ふことが出來る。玆

テーラーの言

に於いて、遊牧社會は一變して農業の社會に移らざるを得ない。故にテーラーと云ふ歴史家は『小麥、大麥、燕麥、米、此四つは

社會を造る四本柱

だ』と言つたが、これは決して誇大な言ではない。さうして、僅かな地面の中で澤山の食物を提供する植物を製作し得たのは、歴史的に言へば實に造國の大事業であつて、其四種の植物を『社會を造る四本柱』と言つたのに無理はない。

后稷

故に、古人も此製作した植物のことには重きを置いたもので、支那人はそれが爲めに后稷と云ふ五穀の神を祭つた。后稷と云ふのを周の祖先である英雄だとしたのは、後の歴史家の拵へ事で、支那人は昔は后稷と云ふ穀物の神があるとして拜んだのである。

穀神

日本にも、大歳神、御歳神、大氣都比賣神などと云ふ五穀の神がある。なぜ、さう云ふものを古人が祭つたかと云ふと、今日こそ我々は注意を拂はなくなつたけれども、穀物其ものは、人間が遊牧の社會から農業

人、一定の鄰人を有する爲に制度の必要を生ず

政治、形らしき形を現はす

の社會に移る大革命の基礎となつたもののゆゑ、其大いなる功德を讃美せざるを得なかつたからである。

農業社會が出來て、始めて人が一定の所に住むと同時に『鄰』と云ふものが出來た。則ち一定の鄰人と云ふものが出來て來た。一定の鄰人が出來ると、どうしても雙方互に理會して、さうして人の自由を害さないやうに、身を振舞はなければ成らないと云ふ必要から、制度が起つて來た。さうして、互に人を害さないことを必要とする爲めに、平和を維持する社會の力も入り用になつて來た。一言にして曰へば、後の世の『政治』と云ふものは、此時から始めて形らしい形を現はした。今言つた政治と云ふのは內政のことである。外に對する政治のことではない。社會の中に於いて、社會の一員たる者が互に人の權利を尊敬して、平和にくらさなければ成らぬと云ふ必要が其所に起つて來た。それから又、此社會を他の社會から護る武士と云ふもの卽ち此社會の主人と、其武士の保護

君子小人の別

に依つて自分たちの畑と定つた其畑を耕す奴隷と云ふ者が起つて來た。君子、小人の別と云ふのは其事であつて、君子と云ふのは其社會を他の社會に對して護るべき職分と、其社會の中の政治を掌るべき役をする者である。小人と云ふのは、武士に依つて維持された社會の中に在つて農業に從事する者である。

斯う云ふ次第で、

農業社會の最初の構造

自由民と奴隷

は、どう云ふ形になつて現はれたかと云ふと、自由民と奴隷の二階級になつて現はれた。自由民と云ふのは則ち武士である。奴隷と云ふのは則ち農民である。武士の力で其社會を他國の侵掠から保護することに依つて、奴隷は自由に農業に從事することが出來たから、人民の富は玆に至つて非常に殖えて來た。食ふ物にも困らなくなつたから、戰爭も次第に減つて來た。

農業時代の社會の

斯う云ふ社會に於いても、それを維持する精神は何であるかと云ふと、矢ッ張

基礎も犠牲の精神なり奴隷必要の時代

自由の懶惰に代ふるに奴隷の勤勞を以てす

農業社會は遊牧社會

り犠牲の精神である。奴隷は其時代に於いては、社會の存在の爲めには實に有用のものであつた。遊牧時代に於いては、農業時代のやうな奴隷は無かつた。農業時代の奴隷は、一口に言へば始めて紀律に從つた勞働を社會に提供したものである。自由主義と奴隷主義とでは、自由主義の方が善いのは勿論であるが、さりながら、自由なる懶惰は、如何なる社會に於いても益を爲すものでない。其自由なる懶惰を奴隷制度と云ふ一つの組織に當嵌めて、一定の勤勞に從事せしむることは、矢張り國の富を增加する所以である。さうして其富が增せば、其社會は強くなつて他の社會を壓倒することが出來る。なぜなれば、富が增せば人間が自由に殖える、則ち狹い場所に澤山の人口を支へることが出來る。さうして、其れを軍隊として用うるときは、多數の軍隊を戰場に送り出すことが出來る。故に其時代に於いては、多くの奴隷を以て多くの兵糧を造り出して、多くの兵隊を戰場に集中することが出來る農業社會は、遊牧社會の人數の少な

會よりも強し

死生有命富貴在天

自己を制限す

いのよりも強い譯である。一人一人の力を比べれば、遊牧社會の人の方が無論農業社會の人より強いには決つて居るが、人數の多いことと糧食の永く續くことの爲めに、遊牧社會は農業社會に壓倒され易い。さうして、其社會は永く續くことが出來るから、矢張り奴隷は其時代に於いては存在の必要があつた。奴隷は其時代に於いては、自己の位置を天命だと覺悟して居た。『死生有レ命。富貴在レ天』と云ふのは、其時代の何人にも安心立命の道であつて、自分たちの位置は天命の定むる所なりと、主人も奴隷も考へて、さうして其社會の爲めに自分の利益を殺ぎ、自分の活動を制限して、全體の幸福を圖ることに依つて、此社會は維持された。

七　都市國の時代

前に言つた農業社會の中ごろから、都市即ち町と云ふものが起つた。それが段々變化して、都市即ち町が國家であると云ふやうになつた。

都市起る

何故に都市が起つたか

と云ふに、これに二つの理由が有る。其一は、農業の社會が始まつた時も、其近所には勿論、昔からの遊牧社會がある。遊牧社會は前に言つた通り『馬上の勇者』である。人間の數から言へば、農業社會の方が適者生存の理法で優勝者として殘るべき約束であるが、一人から言へば遊牧社會の人間の方が強い。日本人は早くから農業の社會を組織した。日本は瑞穗の國と言はれたくらゐ穀物の良く出來た國であつて、純然たる農業社會であつたけれども、之に反してア

アイヌ強し

イヌは久しく狩獵社會、若くは遊牧社會の狀態を保つて居て、從つて一人としてはアイヌの方が强かつた。故に其時代に『蝦夷一人は並の人の百人に當る』と云ふ意味の歌が有つた位である。斯う云ふ個人としては强い異人種が農業社會に向つて押掛けて來る時には、農業社會はそれを禦ぐべき手段が無ければならない。それには城郭を拵へて、其周圍に池でも周らして置けば、何ほど强い人種でも其所に向つて突喊して來る譯には行かない。斯う云ふ社會組織の異つた人種の侵擊、攻擊に抵抗する爲めに、農業社會は

城郭の必要

城郭を造る必要が有つたのである。

日本でも昔の城は、多くはアイヌの社會に觸接した所に造られた。則ち、越後の磐舟の柵、渟足の柵などと云ふのは其れである。奧州には幾つも斯う云ふ柵があつたが、何れも皆さう云ふ社會組織の異つた人間の攻擊を禦ぐ爲めに出來

たものである。同じ種類の農業者でも、勢力を強くして地面を餘計に用ゐたい爲めに、戰爭して他國を侵略することがある。さう云ふ場合にも城地を造つて其進擊を防ぐ必要があつた。さうして、其城地の中に人民が集まることに成るから、それが都市の始めになるやうになつた。

都市の起源(甲)

これは敵の侵略から自分を保護する必要に依つて起つたものであるが、都市の起るにはモウ一つ他の理由が有つた。それは何であるかと云ふと、前の時代に於いては唯だ草木を植ゑて人間の需要に、若くは食用に適するやうにしただけであつたが、それが段々進んで來るに從つて、今度は細工物を始めるやうになつた。

手工起る

則ち、手細工を人間が始めるやうになつた。例へば、獸を獵をしたり、或は戰爭に用ゐたりする武器を段々改良して、もツと銳利のものにする爲めに

鍛冶

鍛冶の仕事が始まつた。それから昔のやうに山野を跋涉することが止んで來る

靴
織業
染業
交易
貨幣
人の集中
都市の起源(乙)

と、人間の足も弱くなつて來るから、足を保護する爲めに靴も入り用になる。獸の皮ばかりも著て居られぬから、木の皮の柔かい纖維を取つて、織物を拵へることが始まる。其織物が出來たら、それを染めて、赤とか黄色とか色取をする染物の業も起つた。斯う云ふやうな仕事が起れば、又仕事をして造つた物を互に交易すると云ふことも起る。其交易の媒介物たる貨幣のやうなものが自ら生じて來る。さうすると、それだけのことをするには、人類同士が餘り彼方此方の邑に離れて居ては不便だから、段々一つ所に集まつて、互に分業の方法に依り分けて造つた物を復た集めて、一の品物を造り出すことになり、從つて人間の密集を要するやうになる。斯う云ふ必要からも、謂はゆる都市が起らざるを得ない。其他、政治上、宗教上の、いろ〳〵の要求もあるが、先づ斯う云ふことが主もなる理由になつて、人間が一所に集まつて、之を周らすに城と池を以てして、都市が發達して來た。

漢字の『國』に二義あり

此都市が

始めて歴史に現はれた『國』と云ふものである。エウロッパで昔は『國』と『都市』とは同じ意味の言葉であつた。それと同様に、支那でも昔の國は都市であつたらしいことは、文字の格構で見ても分かる。支那の文字は謂はゆる象形文字から發達したものであるが『國』と云ふ字を見ると、周圍を四角に取卷かれて居る。則ち、城壁の中に人民の住んで居る有樣を現はして居るやうに見ゆる。併し、文字の詮議は私の能く知らぬことであるから、間違つて居るか分らぬけれども、實際、左傳や何か讀んで見ると、支那の昔は都市の國であつたらしい。尤も春秋時代には『國』と云ふ語に二つの意味があつた。則ち『國、都、邑』と分けて言ふときには『國』は城壁を以て圍まれた人民の集團であつて、『都』と『邑』は、それよりは小さい城壁を以て圍まれた同じ種類のものである。さりながら『國』と云ふ言葉が

都城不過三雉

『魯國』とか或は『衛國』とか云ふやうな場合に於いて用ゐられる時は、それは前に言つたやうな一の大きな人民の集團、即ち大都市と、其大都市を盟主にして其盟主に從つて居る小さな都市、即ち『都』と云ひ或は『邑』と云ふ、さう云ふやうなものの聯合體を合せて『魯國』『衛國』と言つたものである。單に『國』と云ふときは、其中の最大の土地だけを言つたのである。故に『國門』と云へば大きな都市の門を言ふのである。さうして、中心の大きな國（大都市）を盟主にした小さい都市、即ち『都』とか『邑』とか云ふものは、其時代の政治學の原則として、前の中心の國より大きくあつてはならぬことにしてあつた。若し、從屬して居る都市が大きい時には、中心の國と勢力を競つて、中心の國が危險になるから、他の都市は小さくなければ成らぬと云ふことが決つてあつた。それゆゑ『都城不レ過二三雉一』などと云ふこともあつて、都城の大きさは國よりも小さくなければ成らぬことになつて居たのである。之に由つて見て

も、支那の其時代の國は城郭の中に圍まれたものであることは分らうと思ふ。則ち、其時代の國は、城を周らしてあつて、其城の中に、宗廟あり、社稷あり、王侯の宮室あり、政府があり、人民があり、店舗があり、往來があり、國民の生活は悉く其中に這入つて居て、此外を周らすに城を以てしたものであつた。

墓は城外

併し、左傳に書いた所を見ると、人民の墓場だけは城の外に在つたものらしく思はれる。

田舍の生活は春秋時代に無し

斯う云ふ風であるから、今の田舍住みと云ふやうな離れた孤立した家に住むと云ふことは、支那の昔には無かつた。實際、田舍の一つ家に住むと云ふやうなことは、ギリシア人にも無く、支那の昔にも無く、獨りチユートン人種特有の現象であつたのでは無いかと思はれる。兎も角も、昔の支那には、こう云ふ田舍住ひは無くて、皆な大なり小なり城を以て周らして、其周圍に池の

各の都市皆國家

小國を亡ぼすは蜻蛉を弄殺するに等し

ある堅固な防禦工事の中に住んで居たものに違ひない。

斯う云ふ時代には、各々の都市が皆な國家であつたから、獨立の國家は數が多かつた。『禹のとき、玉帛を執つて禹に朝會したものが萬國あつた』と云ふことが、何かに書いてあつたが、それは拵へ話であらうけれども、兎に角、昔は澤山の獨立國があつたに違ひない。則ち澤山の獨立の都市があつたのである。さうして、此獨立の都市同士が互に生存競爭するやうになると、國の亡びたり興つたりすることは、造作の無いことであつた。我々が蟬や蜻蛉を殺すことは極めて容易であるけれども、虎や狼を殺すことは、ちよいと難しい。それと同じやうに、國も大きな國になると、ちよいとは亡びない。さりながら、唯だ一つの城則ち一つの國だと云ふ時代には、國の盛衰興亡は蜻蛉一疋弄り殺すも同じことで、あんまり難しい事ではない。故に

小國の盛衰興亡

君臣無常位

昨日の淵今日の瀬

は常に絶間なくあるから、昨日まで殿樣であつた者が、今日は下郎にならなければ成らぬやうなことが始終あつて、謂はゆる『君臣無常位』と云ふ言葉は全くの事實であつた。其時代に行はれた詩に、斯う云ふ言葉が有つた。

高岸爲谷。深谷爲陵。……三后之後。於今爲庶

これは

世の中は何が常なる飛鳥川、昨日の淵は今日の瀬にして

と云ふ歌と同じやうな意味で『高い崖も谷になり、深い谷も陵になり、夏、殷、周、三代の榮華を極めた者の子孫でも、直きに並の人間になる』と云ふ意味であつて、小國の盛衰興亡の常なき有樣を語つたものである。

斯う云ふやうに、國の盛衰興亡が頻繁であつた時代だから、其時代の人間が一番大切にしたことは何であるかと云ふと、無論『戰』であるべきである。少しの勝敗の變化でも直ぐに自國の運命に關係するから、戰を非常に重んじたのは

當然である。

論語好き

近ごろ、論語好きの人があつて『おれは、論語をバイブルにして、之を實行する積りだ』と言つて居る人があるが、一體、

論語は、いつ書かれたものか

論語多く戰爭を說く

と云ふと、斯う云ふ時代に書かれたもので『うツかりすると國が亡びる』と云ふやうな時代に生れて來た孔子の教を書いたものである。それ故に、論語を見ると戰のことが多い。論語は道德を教へる本には違ひないが、一面から言ふと、戰爭を教へる本と言つても宜い位に、戰のことが多い。論語に、孔子の弟子が

子路の言

寄つて、いろ〳〵自分の志を言つたことが書いてある。其時、子路が何と言つたかと云ふと、『こゝに千乘の國（馬を千頭飼ふことの出來る國）が*ある。其千乘の國が強い國と強い國の間に介まつ

※子路曰、千乘之國。攝乎大國之間。加之以師旅。因之以饑饉。由也爲之。比及三年。使民有勇且知方也。

て居る。さうして今强い國から兵を加へられて、戰が始まると云ふ場合がある。敵國は今や我が國を亡ぼさむとして、四境に押出して來て居る。おまけに其歳は穀物が出來なくて、人民が饑饉に苦しんで、兵糧が不十分だ。斯う云ふ危急存亡の場合に私は出ツくはして見たい。さうしたら私は、さう云ふ大切な時機に其國を治めて、三年の中に其人民を勇氣の有り、しかも人民たる義務を十分知つて居るものにすることの出來るやうな政治を施して見たい』と言つた。孔門の高足弟子たる子路の理想とした所は則ち是れであつて、大いなる敵國の間に介在しながら、其運命を確立し、立派に存在させて自分の男振を揚げたいと云ふことであつた。

※子貢が孔子に政治の事を聞いたところが、孔子は『一番大切なのは兵糧だ、人民の食物を十分に備へなければ成らぬ。其次に大切なのは武器だ、武器を十分に備へて、いつでも戰爭の出來るやう

※子貢問レ政。子曰。足レ食足レ兵。民信レ之矣。

有馬千駟

治軍旅。不喪國。

にして置かなければ成らぬ』と言はれた。孔子の常に心がけて居られたことも、人民をして善く戰ひ其國を護る者たらしめむとしたと云ふことが、これで分つて居る。

論語には、齊の景公の德を賞めて『齊景公。有二馬千駟一』と云つて、景公は馬が四千頭あつたと云ふことが書いてあつて、齊の國の武運の盛んなことを說いて居る。又、※衞の靈公は極行儀の惡るい人であつたが、靈公の家來に王孫賈と云ふ人物があつて、これが軍政を善く治めたから、靈公も無道の君ながら其國を失はなかつたと云ふことも書いてある。

衞※靈公。無道。
王孫賈治二軍
旅一不レ喪。云云

論語は斯う云ふやうなことが書いてある書であるから、御公家樣のやうな、天下泰平、國家安穩を祝して、懷ろ手をして居る泰平の閑人の讀むべき書ではない。

論語の中に漲つて居る精神

論語は小國の生存競爭激烈なりし時代の産物なり

師克在和

は『如何にして其國を護つて、敵國の侵略に備ふべきか』と云ふことを教へる軍人的の氣概の滿ちたものである。なぜ、さう云ふ風であつたかと云ふと、前に言つた通り、其時は都市の國の時代で、國が小さくて數が多かつたので、生存競爭が激しく、國の存亡が常に人民の大問題になつたからである。

斯う云ふ國を如何にして護るべきか。先づ支那の都市國に就いて言はうならば、其時代の支那人は如何なることを原則として其國を護つたかと言ふと、一言にして曰へば

人民が一致協力して國防に當る

と云ふ主義を確立し、それに依つて國を護らうとしたと言つて宜しい。さう云ふ意味の言葉は、其時代のことを書いた本の方々に現はれて居る。左傳に『師克レ在レ和。不レ在レ衆』とある。又『民保レ于レ城。城保レ于レ德』と云ふ言葉もある。日本の都々逸に

信玄の歌

鮎は瀬に棲む鳥は樹に留る、人は情の淵に住む

と云ふ言葉もある。又、嘘だか本當だか知らぬが、武田信玄の歌だと云つて、今の世まで傳はつて居るのがある。

　人は城、人は石垣、人は堀、なさけは味方、あだは讐敵ぞ

不知人和

斯う云うやうな言葉は、多分『民は城で保ち、城は德で保つ』と云ふ、昔の支那の諺を飜案したものであらう。孟子も『天時不レ如二地利一。地利不レ如二人和一』と言つて『國を有つなら、どうしても其國の衆心を一致ならしめなければ成らない』と言つて居る。實際、國が小さい時代には、國民が一緒になつて、城にもなり、石垣にもなり、堀にもなる心がけが無ければ、其國は決して護れなかつたのである。

民主主義の發達

さう云ふ場合に於いて、人民を大切にすると云ふ

民主主義の發達

民之欲望
天必從之

したのは勿論のことである。大國になると人民の一致の必要は其れほど具體的に分りにくい。人民の他に專門の兵隊が出來るし、官吏も人民とは階級の違つた者になるから、國の盛衰興亡は人民の協同一致を待つと云ふことが直接に著しく分らない。それに違ひないけれども、著しく分らない。併しながら、小さな國で國民全體が唯だ一城の中に包まれるに過ぎないときは、衆人が一致して居ると否とは其國の盛衰存亡に直ちに關係する。故に、人民の意思を重んずる慣習が起り易い。支那に於いて民主主義の著しく發達したのは、此時代及び此時代に次いだ時代が一番である。

それで、其時代の事を書いた本には、いろ／＼な民主主義の意義を現はした文が多く遺つて居る。或は『民之欲望。天必從之』と云ふ言葉もあり、又『國將興。聽於民。將亡。聽於神』と云ふ言葉もある。或は『*天は人民を非

*天之愛民甚矣。豈其使一人肆於民之上。以從其淫。而棄天地

常に愛するものだ。其非常に人民を愛する天　之性必不レ然矣。（師曠）
が人君と云ふ者唯た一人を人民の上に据ゑて、其人君に勝手なことをさせる理窟は決して無い。さう云ふやうな、自分一個の情慾を恣にするやうな人君は、天の好まざる所だ』と云ふやうなこともある。孟子の如きは殊に民主主義者の最も甚しい者で

天下と民心

※天下を得るのには道が有る。人民を得れば天下は得らるゝ。人民を得るに道が有る。人民の心を得れば人民を得ることが出來る。人民の心を得るには道が有る。それは人民の欲する所を與へ、人民の惡む所を行はないより外に道は無い。

※得二天下一有レ道。得二其民一。斯得二天下一。得二其民一有レ道。得二其心一。斯得レ民矣。得二其心一有レ道。所レ欲與レ之聚レ之。所レ惡勿レ施爾也。

と言つて居る。斯う云ふやうなのは、これは都市の中に住み、都市を以て國家とした人民の中に是非發達しなければ成らぬ思想である。

人和

寡婦、國を憂ふ

斯う云ふ都市の時代の社會は、どうして保てるかと云ふと、これも矢張り犧牲の精神で保つて居る。則ち、人民が一緒になつて、此城を高くし、此池を深くして、君主と共に死ぬると云ふ、犧牲の精神が無ければ、其國は保てはしない。『地利不レ如二人和一』と云ふ『和』と云ふことは、己の『私』を殺して衆と方向を同じくする

犧牲の精神の半面

を言つたのである。

※周の國の盛な時分には、其寡婦が自分の機絲の心配をしないで、周の國の亡びるのを心配したと云ふことである。其時代には全くそれに違ひ無かつた。若し周の國が亡びれば、自分の生命も財產も直ぐと安全を失ふから、寡婦でも自分の機絲よりも國の存亡を憂へたのである。又、左傳に『車甚澤。人必瘁』と云ふ諺が

※嫠不レ恤二其緯一。而憂二宗周之隕一。爲二將及一焉。（恐二禍及一レ之）

都市國時代の社會の基礎も犠牲の精神なり

希臘羅馬も昔は都市國なり

國の生命と人民の生命とは全然相分つべからず

ある。これは、戰爭が多くなると兵車の油が餘計に要るから、兵車の油が餘計に要るほど人民が瘠せると云ふことであつて、其時代には、國の盛衰興亡は直ちに人民をして肥えしめ瘠せめした。斯る國家を維持するには、自分の身を國家に投じて、國家を護らなければ成らぬから、犠牲の精神を熾んにしなければ成らぬ。是れ亦、其社會の基礎は犠牲の精神であつたと云ふことを證明して餘りあるものである。

これまでは支那の例であるが、我々は同じ都市の國であるギリシアの國に就いて少し話して見たい。

ギリシアも、ローマも、昔は支那と同じく都市の國であつた。斯う云ふ國に於いては

　國の生命と人民の生命

とは殆ど分けることが出來ないほど密接の關係が有る。國の利害と個人の利害

勝利は敵人を奴隷

とは、今日のやうな大國の時代では、其關係が間接すぎて、可なり疎いもののやうに思はれることが有る。さりながら、一つの都市を一つの國とした小さな國が澤山列んで居る場合には、國の利害と其國に住んで居る個人の利害とは殆ど一である。さう云ふ場合に、敵國が押込んで來たものと假定する。さうすると、其國民の銘々が有つて居る畑も荒される、葡萄畑も打毀されて仕舞ふ、住居から追出される。さうして謂はゆる戰爭中の生活の悲慘な目に直ぐ逢はなければ成らない。今日のやうな國では、自分の國が敗軍したからとて、直ぐに畑を荒されたり、直ぐに裸にされたりするやうなことも無いが、小さな國が澤山あつて喧嘩ばかりして居た時代には、さう云ふことが度々起り易かつた。斯う云ふやうに、國が危いときは直ぐと自分の身に惡影響を及ぼす。其代り、國が勝ち、平和條約が結ばれたと云ふ場合になると、今まで失つた安全と愉快とを忽ちの間に恢復する。若し、其國が勝利を得れば、敵國の人民を捕まへて

にし敗北は自身を奴隷にす

奴隷にすることが出來るから、銘々の奴隷が二倍にもなる。其代り敗北すると、自分の奴隷を持つて行かれて仕舞ふばかりで無く、自分自身も奴隷に持つて行かれなければ成らぬやうな、悲慘な目に遇ふ。

ペリクリスの演說

ペロポネサスの戰

は、ギリシアの歷史に名高いものであるが、其戰のとき、アゼンスの政治家のペリクリスが人民に向つて演說した。其演說に『若し、我がアゼンスが勝つたならば、卿曹が一身上の損害は速かに賠償せらるべく、卿曹の武器が若し使用を誤つて成功を得なかつた場合には、卿曹は皆な零落しなければ成らぬぞ』と言つたことがある。これは其當時の國の成立ちに於いては、確に眞理を道破したものである。

戰勝國の利益

戰に勝つた國は、自分が征服した國から貢を取つて、人民に分けて、それが人民の衣食にもなり、又公けの富にもなり、其富を用ゐて、今で言ふと娛樂ク

ラブのやうな浴場にもし、演戯場にもする。無償で以て面白い立派な演戯を觀らるゝと云ふのは、征服して取つた國の貢で出來る。征服された國、即ち戰敗國の人民は、戰勝國の人民の前に恐れ慄いて『大國の人民樣』と云ふやうに尊敬し、戰勝國の人民は大威張りに威張ることが出來る。戰敗國の人民に對しては、戰勝國の人民は御公家樣のやうな態度を取り、戰敗國の人民は恰も徳川時代の土百姓が素町人のやうな態度を取るやうになる。これは戰勝の利益であるけれども、其代り若しも負けたらドウする?。負けたら實に大變だ。負ければ人民は直ちに自分の愉快を奪はれる、自分の榮譽も奪はれる。おまけに燒きたてられた兵火が未だ消えやらぬ間に、獸のやうに打殺されることも有らうし、左もなければ、鎖に繋がれて奴隷の市場に引張つて行かれることも有らうし、或はシヽリーの島の石を掘出す所に引張られて行く自分の息子の悲慘な有樣を目撃しなければ成らぬことも有らうし、或は敵國の人民の女部屋の番人とする

爲めに自分の他の子供の引摺られて行くのを見なければ成らぬやうなことも有らう。

希臘に於ては愛國心が人を支配する大主義となれり

斯う云ふやうな風で、ギリシアの都市國では國の盛衰興亡は直ちに人民の生活に關係する。支那に於いて小國が屢〻盛衰興亡して、王侯將相の地位が瞬く間に易はるやうに、一つの都市を一つの國とした國が澤山列んで居て、盛衰興亡、飛鳥川の淵瀬の如く變つたギリシアでは、これは免るべからざる現象であつた。斯う云ふ時代であつたから、ギリシア人の中に於いては、愛國（ペトリヲチスム）と云ふことが、人を支配する一番大きな主義になつた。なぜなれば其國を愛さなければ自分の幸福は守れなかつたからである。

希臘人の國家に關する觀念

斯う云ふ風であつたから、ギリシア人の

國家に關する觀念

は、後の世とは一種特別のものであつた。彼等の考へに依ると、人間の最上の

目的は則ち國家である。善い國家を造ることが人間の全心全力を要求する目的であつた。彼等の時代には一個人と云ふものだけでは決して完全な人間では無かつた。一個人は人間の一部分に過ぎなかつた。人間と云ふべきもの、人間の全體と言ひ得べきものは、唯だ國家あるのみであつた。國家の權利と個人の權利とは、後の世のやうに分れては居なかつた。個人の世の中に存在する目的は、國家の爲めに何か役に立つことをすると云ふことであつた。後の英國の民權家が主張した個人の自由は、其時代には人間の知らないものであつた。其代り、國民が他の國民に對して主張する國民としての自由獨立は、非常に重く見られた。則ち、ギリシア人の考へでは、個人の自由は、國民の自由の一部である時にのみ價値の有るものであつて、國民の爲めと云ふことを離れて、個人の爲めの自由は、其時分には在存しないものであつた。

斯う云ふ次第であつたから、家庭の生活、人民の敎育、或は夫婦間の關係と云

何事も國家の干渉を免るゝ能はず

ふやうなことまでも、其時代では國家の指圖で定まつたものである。國家がそれを定めて、さうして人民は國家の監督の下に、國家の好むやうな家庭を造り、國家の好むやうな教育を受け、國家の好むやうな夫婦關係を結んだのである。さう云ふ次第であつたから、私有財産なんか云ふやうなものも無いことは無かつたけれども、併しながら國家の指圖次第で、國家の目的の爲めに使用さるゝ時分には、何等の抵抗をせずして、それを國家の目的に提供しなければならぬものであつた。國家は何ものにも干渉した。國家の權利には『こゝまでは國家の干渉すべき所だ』と云ふやうな制限は無かつた。國家は其社員である國民の身體を管理するばかりでなく、其心の働きまでも處理する權利を有つて居つた。國家は其社員たる個人をして國家の好む官職に就かせる權利を有つて居つた。國家の好む兵役に服せしむべく餘儀なくせしむる權利を有つて居つた。演戲場の俳優のやうな者でも、其時代に於いては國家が自分の費用で教育をして、さ

うして國家から給金を受取つた。謂ふ所の

國家萬能主義

を極端に發揮したものである。

國家萬能主義

斯う云ふ國家萬能主義の時代でも、個人の力は、始めて其中から芽を發して、後世の個人主義を生むべき最初の運動を始めた。私が此講演の最初に言つたやうに、個人の中から出て何ものも動かすことの出來ない『力』なるものは、此時に至つて始めて稍〻著しく現はれた。これは城郭で其都市の安全を保護し、奴隷制度があつて、いろ〳〵の勞働に從事する者があつた爲めに、自由民の中には閑な者が出來て、彼等が其閑に任せて、いろ〳〵自分の心の働きを始めたから起つた一つの現象である。詰り、都市が起つたと同時に、個人主義は早く其萠芽を現はしたのである。それが名高いギリシヤの文明を形づくる要素である文學にも哲學にもなつたのである。併し、其事はこゝに話すと、話が八重く

個人の力芽を發す

民主主義

るしくなるから、それは後に於いて論ずることにする。

それで、斯う云ふやうな國家萬能主義がギリシアに起つたのは、前に述べたやうに、國が小さくて、國の盛衰興亡の運命が急激に來易く、さうして其盛衰興亡に依つて、個人が直ちに樂にもなり、苦しみもすると云ふ場合に於いては、已むを得ざることであつた。

さて、斯う云ふ風であつたから、矢張り支那と同じやうに、民主主義がどうしても發達せざるを得なかつた。それは支那のことを話す時にも言つた通り、さう云ふ城に圍まれた小さな都市に於いては

　敵を禦ぐべき爲めに最も必要な條件

は、人民の心が一致して居ることであつたから、從つて人民の權利が強くならなければ成らぬ必要に基いたものである。

併し、こゝに人民の權利と云ふこと、或は民主主義と云ふことを、我々の時代

人民大會は君なり一個人は民なり

の個人主義のやうなものだと誤解しては困る。我々の時代の個人主義のやうなものは、古の支那にも、ギリシアにも、決して有りはしない。古の支那の民主主義でも、ギリシアの民主主義でも、其民主主義は則ち衆民の權利を意味するのである。一人の權利のことではないのである。ギリシアにして見ると、例へばアゼンスの人民大會は、アゼンスに於いては何者も抵抗することの出來ない主權であつた。則ち、人民大會に於いて『イエス』とか或は『ノー』とか言つたことは、王でも貴族でも役人でも、それに抵抗する權利は無かつた。一言にして曰へば、アゼンスの主權者は則ち人民大會であつた。さりながら、其アゼンスの一市人は一個人として何等の權利が有るのではない。彼は此大會の主權の下に跪いて、其命令を必ず聽かなければ成らない一個の柔順なる臣民に過ぎなかつた。斯う云ふ意味に於いての民主主義であつた。

最善の國家

プラトーは此全民主義を善く言ひ現はした。プラトーが言ふには『最も善い國

プラトーの全民主義

家と云ふのは、一個人の狀態に最も近いものである。一個人は身體の一部が痛むと、全體が苦痛を感ずる。指の先が痛くても、からだぢうが之が爲めに苦惱を覺える。さうして、例へば額に傷を受けると、手が直ぐに額の苦痛を和げる爲めに働くやうに、身體の全體が身體の一部の苦痛に同情する如く出來て居る。國家はさう云ふやうなもので有らねばならぬ』と言つて居る。これが全民主義と云ふものである。則ち善い國家は國民全體が喜びを同うし、憂へを同じうするものである。堯舜は一人の民でも難儀をして居る者があると、自分がそれを溝の中に突落したものの如く、強い同情を有つと云ふことを、儒教で言つて居るが、丁度それと同じやうに『どんな人の難儀でも、國民全體がそれを自分の苦痛と感じて、皆なが其救ひに赴くと云ふやうに成らねば成らない』と云ふのが、

プラトーの全民主義

プラトーのリポブリック

貧富の懸隔自ら止む

妻の共有

子の共有

であつて、さうして斯う云ふやうな風の狀態に、全民を改めようとするのが、ギリシアの民主主義である。故に、ギリシア人の民主主義は、一個人としての民主主義ではない、集合體としての民主主義である。

プラトーの名高い著述である『リポブリック』と云ふ政治學の理想を書いた書物を讀んで見ると、集合體としての民主主義の意味は更に能く分かる。プラトーは此書に於いて『人民の要求する總てのものは、國家に依つて供給せらるべきものである』と云ふことを主張して居る。さうして『國家は人民の入り用な物を悉く與へるならば、貧富の懸隔などと云ふことは起るべき筈は無い。貧富の懸隔から起る競爭若くは不公平の出やうは無い』と言つて『妻も共有にするが宜からう。子供も國家共有の子として育てるが宜からう。子が生れたら親の手から取つて、國家自ら監督者となり、國家自ら敎育者になつて、其子を育てたら宜からう。國家の元首たるべきものは國民の保護者であるから、國民の敎育

一の國家の中に二の國家あり

も、婚姻も、其婚姻の結果たる出産の數も、職業も、皆な悉く國家の元首が支配したら宜からう。斯う云ふ主義に依つて國家を立直すときには、其國家は本當の完璧と云ふべきものであつて、内に於いて爭ふと云ふやうなことは無い筈だ。然るに、現在ギリシアに在るいろ／＼の國家は、其國家が假令小さくとも、内輪揉めがして國内に爭ひのある國家であつて、一個の國家のやうに見えるけれども、其實は二つの國家が對立して居るものである。一は金持の國家、一は貧乏人の國家。此二つの國家が喧嘩をして居る。さうして、其喧嘩をして居る檻の中を假に一の國家だと名を付けたものが多い。本當の國家なるものは、そんなもので有つてはならぬ』と、斯う言つて居る。彼れの全民主義は之に依つて能く言ひ現はされて居る。

斯う云ふのが、ギリシア人の實際と、さうして理想であつた。ギリシアには昔から王があつた。王の下に貴族があつた。貴族は初めから平民と違つたもので

貴族、權を得て王政を廢し若くは王の權力を制限す

タイラント

は無かつたけれども、平民の中の有力者が貴族になつた。さうして、此貴族が段々、力を得るやうになつて、王政を廢して貴族政治にしたものであるし、或は王の權力を制限して、名は王の政治であつても、實は貴族の政治であると云ふやうにしたものもある。さう云ふ風に、貴族が力を得るに從つて、平民は貴族に反抗して、貴族と平民の間の階級の爭ひが始まつた。此階級の爭ひが激烈になつた時分に、貴族の中に野心家が起つて、平民の味方をする。平民は其野心家に煽動されて、彼れを援けて貴族と鬪ふ。野心家は平民の援兵に依つて、遂に自分に反對する貴族を壓倒して、獨裁權を握る。斯う云ふことが屢〻歴史には繰返された。斯う云ふやうに、平民に味方されて貴族を壓倒し、獨裁權を握つた人望家を、ギリシア人は

タイラント

と言つた。則ち擅權者の意味である。タイラントには、いろ〳〵なものが有つ

たけれども、概して言ふと、一番初めに平民に味方されて貴族を壓倒したタイラントは、大概良い支配者であつた。併しながら、其跡を繼いだ第二第三のタイラント云ふ奴は、戰功も無く、人民の爲めに戰つたのでもなく、唯だ主權者の位置を占めたものである。一言に曰へば生れながらの君主である。故に、人望だとか、或は人民の利害だとか云ふやうなことには、重きを置かないで、唯だ自分の權力を增さう增さうとのみ圖る。そこで、貴族や人民がそれに對して反抗する。其反抗を抑へる爲めに、タイラントの方でも、いろ／＼工夫をして

壓制政治

其結果が壓制政治になる。

斯う云ふことは、屢〻ギリシアの歷史に現はれた事實であるが、さう云ふ場合でも、結局、國の主權は人民大會其ものに在ると云ふのが、ギリシア諸國の政治學の原則であつた。

希臘の國家を維持したるもの

斯う云ふギリシアのやうな都市の國家を維持する基礎は何ものであるかと云へ

のも犧牲の精神なり

ば、是れ亦、犧牲の精神である。ギリシア人の其國家を支へた根柢の主義は他ではない

個人の幸福は國家の幸福の爲めに犧牲にすべきものなり

個人の幸福は國家の幸福の爲めには犧牲に供すべきものであると云ふ思想である。此思想に依つて、又此思想から出た行爲に依つて、ギリシアは久しく繁昌を保つたものである。ギリシアでは、政務を行ふときは、其行ふ前に必ず神に祈禱と犧牲を獻じた。彼等は其仕事を、神の命じたまふ所で、神の喜ばれる所であると信じて居た。彼等は宗教的に犧牲となることを喜んで居た。

希臘人の戰の歌

ギリシア人の戰の歌を見ると、此精神は最も善く表はれて居る。『我等の同胞よ、我國の自由の爲めに敵を攻撃せよ。汝の家、汝の神の宮、汝の祖先の墓の爲めに戰へよ。國家の盛衰興亡は唯だ此一擧に在り』と云ふやうな歌は、ギリシア人の國の爲めに命を捨てる犧牲の精神を最も能く言ひ現はしたものである。

勞働の强要

勞働と云ふやうなことも、ギリシア人は決して一人の爲めにするものではないと考へて居た。『人は社會の必要の爲めに働かなければ成らぬものである』とは、ギリシア人の信仰であつて、ギリシアの大昔の政治家の言葉として遺つて居る格言がある。それは『働かない奴は裁判官に引渡すが宜い』と云ふことである。又『働かない奴は泥棒同樣だ』とも言つた。ギリシアに在つては勞働は國家に拂ふべき犧牲であつた。

奴隷の必要

ギリシアは、市民權を有つて居る者と、奴隷と、二つの種類の人民で其國を有つて居つた。市民は富の持主であつたが、富の生產者では無かつた。富の生產者は奴隷であつた。奴隷が勞働をし、奴隷が耕作をし、奴隷が物を產出したのであつた。此奴隷の仕事は何であるかと云ふと、則ち緘默したる犧牲に他ならぬ。彼等は默つて自分の運命に服從して居た。さうしてギリシア國の御臺所を勤めて居た。プラトーは『奴隷が無ければ國家は成立たない。或る人は自然の

孟子の君子小人

運命に依つて主人になり、或る人は自然の運命に依つて奴隷になる。共に國家の經營に缺くべからざるものである』と言つた。此奴隷の犧牲が無ければ、ギリシアは一日と雖も存在することは出來なかつたのである。丁度、孟子が
※君子は人を治める。其代り人に養はれる。君子は政治をする、政治界の主人になる。さりながら食物は小人卽ち人民の作つた物を貰はねばならぬ。之に反して、小人は人を養ふ物を作つて君子に供給する。其代り君子に治めて貰ふ。

※勞レ心者治レ人。勞レ力者治レ於レ人。治レ於レ人者食レ人。治レ人者食レ於レ人。

と云ふことを言つて居るが、ギリシアの奴隷と市民の關係は、孟子の言ふ君子小人の關係と同じものであつた。

ギリシアの社會が犧牲の精神に依つて支へられて來たことは、單に奴隷の働きにのみ現はれては居ない。ギリシアの全民の權も、矢張り强い犧牲の精神に依つて其存在を固められて居た。名高い話がある。アゼンスに

シエーナと云ふ一女子

があつた。此女の家でビシスッチデスと云ふタイラントの政治に反抗して、其政府を顚覆しようと云ふ謀叛の計畫をしたことがある。其時に隱謀が露顯して、シエーナは孱弱き女の身で官吏に捕縛されて、其祕密を白狀するやうに、栲問に逢つた。すると、此女は自分で舌を嚙切つて、口の利けないやうにして仕舞つた。女性は弱い者だから、強い栲問の苦痛に逢へば、どれほど堅固な心を有つて居ても、白狀しなければ成らぬやうな誘惑に陷らないものでもない。それでは同志の爲めにならないと云ふので、自分で舌を嚙切つて、口の利けないやうにして仕舞つて、白狀の誘惑に陷るべき根を絕つたと云ふ話がある。一女子にすら斯樣な精神が有つたればこそ、ギリシアの全民主義は完全に維持せられたのである。

併しながら、盛なりしギリシアも遂に衰ふべき運命に達した。

何故に希臘は衰徴したるか

何故にギリシアは衰微したるか

これはギリシアが小さな國であつた爲めに、大きな勢力を集中することが出來なかつた爲めに、大國の出來た爲めに、亡びなければ成らない運命に達したのであるが、併しギリシア人の國の中の事情も、結局、衰微に赴かなければ成らぬ一原因になつた。

貴族と人民の懸隔

外部から來つたギリシア滅亡の原因は後に話すが、こゝに唯だ内部から起つた滅亡の原因に就いて言はうならば、金持が多くなつて來て、市民の中に貴族と人民の懸隔が強くなつた。さうすると、黨派の爭ひも之と同時に激しくなつて來て、人民が國家の利害よりも黨派の利害を強く思ふやうに成つた。即ち、プラトーの言ふ單一なる完璧である可き國家が、貴族の黨と人民の黨の二つに分れたから、此罅隙に乘じて敵が押込んで來た。

黨派の爲に國家を犠牲にす

自分の黨派の利益の爲めには國の利益も犠牲にして構はないと云ふ無分別が、ギリシアを内から破壞した。

哲學、古信仰を破壞す

力是權利

モウ一つは、前に申した一個人の力が段々發達して來た爲めに、哲學が起つた。ギリシアの哲學は無論、人類全體には利益を與へた。それは後に至つて話す機會が有らうと思ふから、こゝには言はないが、其れと同時に、ギリシアの今までの國家を支へて居た信仰を破壞する力になつた。ギリシアの國家を支へるには、前に言つた通り宗教の力があつた。宗教の力に依つて、ギリシアの義人節婦は其身を國家の爲めに犧牲にして、喜んで戰ひもし、喜んで死にもした。然るに、不幸にして哲學が其信仰を根柢から破壞した。昔の道德は悉く信ずべからざるものとせられて、何が正しい、何が正しくないと云ふやうに、正邪の區別が滅びて仕舞つた。さうなると、人間の中で賴むべきものは唯だ『力』のみ。力が是れ權利であると云ふ考へが跋扈して來た。富が是れ權利であると云ふのも、或は嘘を吐いて成功しても、其成功が則ち權利であると云ふのも、意味は同じである。唯だ事をするだけの力があれば、それで宜いのだ、成功して仕舞

自ら兵たるを好まず傭兵を用う

へば宜いのだと云ふやうな考へが、人民の心を支配するやうになつた。則ち、昔は國を目的にして、國の爲めに死にもし生きもした犧牲の精神は全く滅びて、唯だ力、我より出づる力、我の有つて居る力、それが權利であると云ふ考へが起つて來た。これもギリシアを衰へさせる一つの原因になつた。

モウ一つは、國の内に段々工業も起り、或は戰爭の結果に依つて國の富が増したが爲めに、國民が惰弱になつた。國民が國の爲めに戰ふと云ふ義務を苦痛に感ずるやうになつた。さうして、其富の大きいことを利用して、自分が兵隊にならないで、戰爭を商賣にする者を脇から傭つて來ると云ふ、謂はゆる『傭兵』の制度が起つた。斯う云ふやうなことが綜合して、遂にギリシアを内から亡ぼした。少くも内から亡ぼすべき原因を作つた。一言にして曰へば、國民をして國の犧牲たらしむべき道德上の權威を失つたが爲めに、ギリシアは歴史の表面から影を隱して仕舞つたのである。

都市の聯合體としての國興る

夏、殷、周、共に都市の聯合體なり

八　都市の聯合體としての國の興亡を論ず

都市は前に言つた通り獨立の國家の始めであるけれども、其都市が永い間、獨立して居たのではない。其都市の中で或る强い都市は他の都市を屬國にして、さうして其中心の國と其屬國になつた國とを合せて、一つの大きな團體を作るやうになつた。則ち

都市の聯合體としての國

が出來たのである。ギリシアの時代にも、さう云ふ國が興るし、ローマは元來さう云ふ性質の國であつたし、又中世にもさう云ふ國が有つた。支那の夏、殷、周、三代も、矢張り都市の國と聯合した聯合體としての國の名であつた。併し

希臘人は初めは單純なる農夫なり

海賊の業起る

支那のことは暫く擱いて、此處には先づ

ギリシアに起つた聯合國

のことから話して行かうと思ふ。

ギリシア人は初めは單純な農民であつて、地面を耕して居たもので、其仕事も地面の上にのみ限られたものであつた。ところが、フェニシア人と交はるに連れて、ギリシア人は、いろ〳〵なことを覺えた。先づエウロッパの『いろは』たるアルファベットを輸入した。それから度量衡を用ゐることになつた。それから舟を造つて、海岸近くを乘回すことを覺えた。それと共に、海賊をすることをも覺えた。

其時代の人は

海賊をすること

を惡事とは思はなかつた。海賊は男子の爲すべき榮譽ある事業と思つて居た。

希臘の植民事業

大膽なる人間の一群は舟に乘出して、其時分のことだから大洋の眞中を航海すると云ふ譯には行かない、海岸の山などを目當にして行くのであるが、兎に角、海岸を乘回して、商船にでも逢へば、それを攻擊し、或は上陸して海岸の村落を掠奪し回るやうなことをした。其時代には其れを勇敢なる男子らしい仕事と心得て居つた。これはギリシア人がフェニシア人から學んだ仕事である。故に其時代には、都市を海の端に造つて置くと、海賊に襲擊されるから、海岸を離れた或る距離の所に都市を造る習慣さへ起つた。

斯う云ふやうに、ギリシア人が始めて舟を海に浮べてから、ギリシアの植民事業は急に發達して、さうして方々に植民地が出來るやうになつた。それで、植民地は本國とは人間の血統も同じもの、風俗も同じもの、法律も同じもの、宗教も同じものであつた。其時分のギリシアの都市には何處にもプリタニウムと云

神聖なる火

ふものがある。それは何かと云ふと、神聖なる火を保存して置くことで。ギリシアの昔の信仰に依ると、方々の國には皆な祖神と云ふものが有つて、其祖神から傳はつた火がある。其火をいつまでも保存して置くのが、ギリシア人の宗敎的慣例であつた。それで、植民地を開くと、本國のプリタニウムにある火を植民地に持つて行つて保存するやうにした。さうして、祖先を同じうするものであると云ふことを記憶するやうにし、同じ宗敎を保つやうにした。

斯うして植民地なるものは祖國と同じ宗敎を保つて居る人民である。言換へて見れば、全く一つの幹から出た枝のやうなものであるが、其植民地は直きに獨立の國になつて、本國とは別になつた。斯う云ふ風にして、ギリシアの植民地は段々廣がつた。此廣がつた譯は、前に言つた通りフエニシア人から舟を造ることを學び、海賊をするやうになり、それが爲めに植民地の發達の激しくなつたのであるは言ふまでも無い。斯う云ふ風に植民地が方々に廣がるに連れて、

希臘、他國と觸接す

ギリシアは始めて、ギリシア人の國全體と、國の組織も違ひ量の更に大きな國と、衝突しなければ成らないやうになつた。さう云ふ國の中でギリシア人に最も强い激動を與へたのは、言ふまでなくペルシアであつた。ペルシアは、いろ〳〵の澤山なる都市の國や田舍のやうな國の聯合體で、大きな帝國であつた。それに個々別々に獨立したギリシアの國が始めて出ッくはして『お前の國が强いか、おれの方の國が强いか』と云ふ生存競爭をやらなければ成らないやうに成つて來た。

玆に申して置きたいが、其戰爭の起らない前に、ギリシアではアゼンスだの、スパルタだのと云ふ國が早く他の國よりも强い國として認めらるるやうになつたのであるが、其中でもスパルタ人は其武勇を以てギリシア諸國に怖がられた。

スパルタ人の强かりし所以

なぜ、スパルタ人がさう强かつたか

と云ふと、スパルタ人は一國を擧げて一の常備軍のやうにして居り、謂はゆる

スパルタの方隊、諸州を恐怖せしむ

『國民皆兵』と云ふやうな國の組織であつたから、他の諸國は其武威を恐れざるを得なかつた。スパルタ人は戰爭の他には職業が無いと云ふ位な單純な武人の國で、他のギリシア諸國に發達した文學だの科學だの美術だのと云ふやうなものは有つて居ない。商業若くは農業などは奴隷の仕事として全く輕蔑して居た。さうしてスパルタの士民は、其時代の人にスパルタの方隊（ファランクス）と言はれた軍隊を造つて、さうして何か事が有れば直ぐと其方隊を繰出したから、非常な強い國として、皆なが恐れて居たのである。

ところが、ペルシアがやつて來た。さうして、ギリシア諸國は國として

ペルシアと生存競爭

をしなければ成らぬことに成つた。フエニシア人は此時分、多くペルシアに服從して居たからして、フエニシア人の有つて居た艦隊は、ペルシア人が使用した。卽ちペルシア人は、フエニシア人の長所を利用して、大いなる海權となつ

マラソンの戰

て、其大きなる陸軍と共にギリシアに攻め掛つたのである。ギリシア人の方は艦隊らしい艦隊は無かつた。

そこで、歴史に名高い西暦紀元前四百九十年(懿徳天皇二十一年)の

マラソンの戰

と云ふものが起つた。此マラソンの戰は、其時代の歴史を學んだ者は善く知つて居ることであるが、ミルチアデスと云ふアゼンスの大將の下に、アゼンス人若干、それから其れよりも人數の極少ないプラテア人若干、此二つの軍隊に對して、それに十倍するペルシア人が攻め掛つて、さうして強い勇ましい戰爭のあと、ギリシア人の方が勝つて、ペルシアは敗軍した。ギリシア人の自由が之に由つてペルシアの壓制から救はれた名高い話である。

それまでは、ペルシア人はリヂアを亡ぼし、バビロンを亡ぼし、さうして小アジア地方に在つたギリシアの小さな國を皆な降參させて、海を渡つて世界に敵

何故にアゼンス人は波斯人に勝ちしや

の無き勢ひでやつて來たが、茲に至つて未だ曾て豫期しない強敵に逢ひ、ペルシアの武運は茲に頓挫した。それゆゑ此戰ひは確かに歷史上の一紀元を作るべきものであつた。此戰ひに於いて

何故にアゼンス人がペルシア人に勝つたかと云ふと、これは其筈である。アゼンス人は此戰ひに若し負ければ奴隸にされなければ成らない。勝てば國民の自由を得られるが、負ければ全民盡くペルシア人の脚の下に跪かなければ成らない。詰り、アゼンス人に取つては『死ぬるか、活きるか』と云ふ、極めて大事な場合であつた。之に反して、ペルシア人の方は、言はゞ外國を侵略するだけの慾心から出た戰爭であつて、ペルシアの大軍はギリシアに十倍して居たけれども、本當に戰はうと思つたものは其中でペルシヤ人だけで、あとのガヤ〳〵くッついて來たものは、ペルシアが勝つても負けても、たいした利害關係の無い、仕方なしに引張り出されたのであつ

たから、第一に意氣込が違つて居た。おまけにアゼンス人は丁度其前に其國に於いて政治上の非常な改革が有つて、人民の權利がタイラントの手から取返された、謂はゆる水の出端の勢ひを以て全民主義の行はれた時であるから、アゼンス人に取つては國の爲めに戰ふのは一身の爲めに戰ふと同じことであると云ふ感覺が强かつた。それゆゑ、アゼンス人は一所懸命、莊嚴な御祭りをして、神の託宣を求め、神託に於いても、此戰爭の終局は必ずアゼンスの幸福に終ると云ふことを承はり、歡喜踊躍して戰場に赴いたから士氣が非常に振つて居た。

猶ほ此外に

波斯人の武器

アゼンス人が勝利を得た理由

が有る。それは何かと云ふと、ペルシア人の武器は、從軍した人種がいろ〳〵であつたやうに一樣ではなかつたが、其中で本當に戰はうと云ふ、軍中の精鋭と稱すべく、又其中堅とも言ふべきペルシア人の武器は、名高いペルシアの短

アゼンス人の武器

アゼンス人將來を注意す

劍であつた。ところが、アゼンス人の方の武器は、長い槍であつた。謂はゆる槍兵である。其槍兵が隊を組んで密集して居ると、味方は長い武器、敵は短い武器であるから、ペルシア人の短劍若くは小さな槍などで、當ることが出來ない。これは武器に於いてアゼンス人が優つて居つたのである。兎も角も斯う云ふ事情で、マラソンの戰ひはアゼンス人の勝利に歸して、ペルシアは、とんだところで强敵に出ツくはしたのである。

然るに、此戰ひが濟むと共に、アゼンス人は更に大いに將來を注意せざるを得なかつた。なぜなれば唯だ此一敗に依つてペルシア人が其儘引込んで仕舞ふ理窟は無い。彼は世界的帝國を建つて居る大きな國である。其國が僅に一敗した爲めに、再びギリシアに攻めて來ることは無いと決める譯にはいけない。ペルシアが必ず再び來ると云ふことを覺悟しなければ成らない。丁度、日本の昔、元寇の亂の時に、蒙古が再び來るであらうと、日本人は其事に付いて安き思ひ

セミストクルスの海軍振興論

の無かりし如く、ペルシアは必ず復讐に來るであらうと云ふ恐怖の心がアゼンス人にあつた。殊にアゼンスはペルシア人の當の敵であつたから、其事に付いていろ／＼考へた。そこで、アゼンスの政治家の名高いセミストクルスと云ふ人が、謂はゆる

海軍振興論

を主張した。『コッちには未だ碌な海軍は無い。敵はフェニシア人の艦隊を用ゐて海上權を握つて居る。これでは可かぬ。どうしてもアゼンスに艦隊を作らねば成らぬ』と言出した。

セミストクルスがアゼンスに於いて、斯樣に海軍振興論を唱へたのは、二つの理由が有る。一つは、前に言つた通りスパルタは陸軍が强い。アゼンスなどもグヅ／＼すると其下風を仰がなければ成らない。幸ひアゼンスは海岸の國であるから、アゼンスに於いて海軍を興せば以てスパルタの陸軍に對抗するに足り

アセンスの貴族、一時、海軍振興に反對す

ると思つた。これが彼が海軍振興論をやつた一の理由である。モウ一つの理由は、勿論、ペルシアの復讐に對して豫備しなければ成らぬと云ふことであつた。此二つの理由で、彼はアセンスの全民會議に訴へて、海軍振興論を主張した。歴史は繰返すものである。今日、北米合衆國などに起つて居る海軍擴張論も同じ意味である。

ところが、アセンスは議論家が多く、利害を異にして居る者が多かつたので、セミストクルスの海軍振興論も反對者が多かつた。なぜなれば、貴族は土地を有つて居て、さうして本當の武士だから、陸軍を盛にすると云ふことは、彼等自身の權を增すことになるから異論は無い。併し海軍を盛にすると、船員の位置を重くしなければ成らない。船員は極の下等の平民でも出來るし、言つて見れば、貧乏人の貧、骨に徹するやうな奴でも、海に飛出せば直ぐに船員になれると云ふ譯であるから、貴族連中は『海軍を盛にするのは宜いが、下等な奴が

ツリメルスの艦隊

希臘諸國の聯合起る

威張り出して、おれたちの權利を奪はれるやうに成つてはならぬ』と云ふので、いろ〳〵な理窟を設けて反對した。さりながら、內にはスパルタと云ふ敵國があるし、外にはギリシアの大帝國が捲土重來せむとする勢ひを示して居るから、アゼンス人も遂にセミストクルスの說に聽いて、海軍を建設した。ところが、セミストクルスの先見違はず、ペルシアが復讐にやつて來た。これは紀元前四百八十年（懿德天皇三十一年）で此時アゼンスに取つては、幸ひに立派な艦隊が出來て居た。其時分、ツリメルスと云ふ、船の兩側に各〻三段の櫂がある船を二百艘合せた艦隊があつた。これがアゼンスの新海權であつて、ギリシアの海軍では一番强いものであつた。此海軍あるが爲めに再びペルシア人を打破つて、十年一劍を磨いたペルシア王の雄志を空しくせしめた。玆に於いて始めてギリシアの諸國の聯合が起つた。則ち都市の國を聯合した聯合體の國が興つたのである。

アカヤ同盟

アゼンスが前に言つた通り自分の國の海軍を盛にして、其海軍力でペルシアの侵撃を禦ぐことを得た爲めに、アゼンスの海權が始めてギリシア人の怖れる所となつて、さうして諸國がアゼンスを主盟にして、謂はゆる

アカヤ同盟

と云ふものを拵へた。さうして諸國が、後の世に於いてプルシアを同盟の主にしてドイツ聯合を造つたやうに、聯合することになつた。アゼンスは此アカヤ同盟の聯合諸國の主盟になつた。此狀態を簡單に言ひ現はせば、詰り今までは都市が一國であつたのが、今度は都市と都市の聯合體が一國になるやうな形式になつて來たのである。其盟主の權利をヘゲモニーと言つた。それは領袖若くは覇者と云ふやうな意味であつた。それで、アゼンスがアカヤ同盟中のヘゲモニーになつて、非常な勢ひを振つて大きな艦隊を持つて居た。其同盟の形式はどう云ふものかと言ふと、其同盟國總體の立法機關は方々の國民の總集會であつ

同盟は名のみ事實はアゼンスの天下

た。今までは國の事は國の中の人民大會が主權者であつたが、今度は同盟國の全體の仕事だから、同盟國の人民全體が總集會を催して決めることにした。此同盟國全體の人民大會が『イエス』とか『ノー』とか言つて法律を定めることになつて居た。同盟國全體の軍隊を率ゐる爲めに、同盟の大將を選んだ。同盟國聯合の參事院と云ふやうなものが出來、又、同盟國聯合の裁判官と云ふものも出來た。斯うして見ると、形式だけでは同盟諸國全體から人を出したので何も不平は無いやうだが、其實は同盟の大將になつた者も、裁判官になつた者も、皆なアゼンス人であつて、事實に於いてアゼンス人の天下であつたのである。

さうして、前に言つた通りアゼンスには艦隊がある。其艦隊の名は聯合國全體の艦隊と云ふのであつて、聯合國が悉く艦隊を有つて居るやうな譯であつたけ

聯合艦隊は名のみ事實はアゼンスの威力を增す爲めの艦隊なり

れど、それは唯だ形式のみであつた。なぜなれば、聯合國からは人間と船を出させるのでなく、唯だ金を出させるので、さうして其金に依つて盟主たるアゼンスが自國の好む儘の艦隊を造り、造つた船も自國の勝手に使ふし、艦隊に使ふ士官や兵隊もアゼンス人を使つた。故に聯合艦隊と云ふは名ばかりであつて、實際はアゼンスの威力を增す道具たるに過ぎなかつた。

斯う云ふやうにして、アゼンスは兵力集中主義を取つて、同盟國には其國に何等の兵備が無いやうにして仕舞つた。其代りアゼンスは堅固な立派な城で取卷いて、其屬國から出させるいろ〳〵な租稅、いろ〳〵な貢物を貯へて、それで船渠を拵へ、兵器製造所を拵へ、造船所を拵へたから、同盟の諸國は全くアゼンスの領分のやうになつて仕舞つた。……言ひ後れたが、勿論、租稅も屬國から取立てた。其租稅はアゼンスが隨意に課する。のみならず、其支出の方法など も說明も何もしない、屬國の方から『金をどう使つたか』と說明を求めれば、

アゼンスの專橫

アゼンスは傲然として其說明をすることを拒絕した。若し『そんな曖昧な金なら納めませぬ』とでも言へば『同盟の規約に背く謀叛人だ』と言つて罰するやうにした。詰り、アゼンスは、同盟諸國には何等の自由の權を與へず、又、官職を分け與へもしない。事實に於いては獨裁權を振つて居たのである。ギリシアの獨立國の中で、アカヤ同盟に屬する諸國は、斯う云ふ仕組で名は聯合體ながら實は一國になつて仕舞つた。

これではアゼンスが獨り自ら專橫を極めたやうではあるけれども、斯う云ふ風に諸國を統一して兵力を集中した海權であつたればこそ、戰爭の後もペルシアを向ふに回して其威力に對抗することが出來たのである。

アゼンスに對する不平

ところが、アゼンス人が餘り威張り過ぎたから、同盟國は皆な不平であつた。一體ギリシア人はいつでも他人の命令に服從することを好まない傾向がある。おまけに人種が一つでない。アゼンス人及び之に屬するアカヤ同盟は、人種が

大概アイオニア人種と云ふので、全民主義の民主的精神の盛んな國であつた。ところが、之に反してスパルタなどはドリアン人種と云ふ人種の國で、此人種は全民主義を信じない。本當の政治をするには權力を少數の人間に委ねなければ成らぬと云ふ、謂はゆる寡人主義を信ずる人民であつた。斯う云ふ風に、いろ〳〵な人種があつて、人氣が相異つて居る。故に、ギリシアの諸國は、いつでも折角統一しかゝつても、それが直ぐに妨害が出て割れ易い。アゼンスの同盟諸國はアゼンスが餘り威張ると言つて不平を懷く。スパルタ人のやうに人種の違つた者は、アゼンスの勢ひがえら過ぎるから、アゼンスと喧嘩すればペルシア人の爲めに其擧に乘ぜらるゝことは知つて居ないではないが、どうもアゼンスが癪に障つて堪らないからと云ふので、アゼンスの同盟國を煽動して、アゼンスに反抗させた。それで、折角アゼンスの海上權が強くなつて、ペルシアの大敵を物の數とも思はなくなつた時に、ギリシア全體の力は内から毀れ始め

た。スパルタ人は敵國たるペルシアから金を借り、其金で軍艦を買ひ、兵隊を備ひ、さうしてアゼンスに背かうとするアゼンスの同盟國を煽動した。アゼンスに喧嘩を吹ッかけた。斯う云ふやうにして、名高い

ペロポネサスの戰

ペロポネサスの戰起る

と云ふのが紀元前四百三十一年（孝昭天皇四十五年）に始まつた。斯うして内輪揉めが盛んになつた。スパルタがさうすれば、アゼンスの方でもペルシアから金を借りて、さうして其金を原資にして、スパルタと戰爭して、スパルタを破ると云ふやうなことをする。折角ギリシア人全體の爲めにマラソンで戰ひ、又アゼンスの海軍に依つてペルシアの復讐戰を防いで、ギリシア人としての總體の獨立を完全にしかけた時に、斯う云ふやうな譯になつて、ギリシア人同士が戰爭をして、共同の敵たるべきペルシアに援兵を求むると云ふやうな失態を始めた。これがギリシアが聯合國として久しきこと能はざりし弱點である。スツキ

プルンチュリーの言

ツルランドの名高い國法學者のブルンチュリーと云ふ人が此事を論じて『ギリシアは聯合體の國家であるべき運命を有つて居ながら、とう〳〵それが出來ずに仕舞つたのは、斯う云ふ種族的の反感があつて、其反感が破裂した爲めである』と言つたのは、能くギリシア人の弱點を語つたものである。

斯う云ふ風に、ギリシア人は先づ内輪揉めがして居た。さりながら此時代に

シ、リーの海岸は概れ希臘人に依りて占めらる

ギリシア人の海權

は地中海に廣がつて行つた。紀元前四百年(孝昭天皇七十六年)ごろ、イタリーのシ、リーの島の海岸は、概ねギリシア人に依つて占めらる、やうに成つた。フエニシア人はギリシア人と海權を爭ふ唯一の競爭者であつて、しかも實はギリシア人に航海を敎へた人種であるけれども、段々ギリシア人の爲めに其勢力範圍を狹められて、地中海を二つに分けて、イタリーから東を地中海の東部とするときは、其部分だけは全くギリシア人の海權に服從して仕舞つた。西の方の

地中海だけがフェニシア人の作つた植民地のカルセージと云ふ戰爭好きの強い國の力で、仍ほフェニシア人の手に保つて居ることが出來た。

セベス興る

斯う云ふ風にして、ギリシア人の海權はまだ盛んであつたが、兎に角、內輪揉めがするやうになり、聯合體としてのギリシア人の力が弱くなつた。其中にアゼンスも衰へ、スパルタも衰へて、セベスと云ふ國が興り、其名將エパミノンダスの下に、セベス人がスパルタ軍を打破り、一時、雄をギリシア諸國の中に稱した。

セベスの歩兵

なぜ、セベス人がギリシアの或る時代に盟主になることが出來たかと云ふと、一は其兵力に依る。エパミノンダスの作つたセベスの歩兵は其時代のギリシアで最も有力なものであつた。セベス人は軍事教育には非常に長じた人種で、軍事の學問も發達して居た。併し、其他の知識的の性質のものでは特別な長所を

示したものは無い。其青年は議論を好まない。アゼンス人のやうに哲學の研究などに長じて居る者は無かつた。彼等は唯だ武人として強かつただけである。

エパミノンダス死し、セベスの勢力衰ふ

斯う云ふ譯で、セベスは一時、主權を握りかけたけれども、名將エパミノンダスの死したと共に、其勢力は衰へて、間も無く何でも無いものになつた。之に次いで

マセドセドニア國民の特質

マセドニアが興つてギリシアを統一した。マセドニアがギリシアの諸國の一つであるならば、マセドニアに依つてギリシアが統一されたと言へる。さりながら、マセドニアをギリシア人とは違つた人種、違つた國だとすれば、此時にギリシアはマセドニアに亡ぼされたのである。此マセドニアはどうしてギリシア諸國を統一したかと云ふと、マセドニア國民の特質がギリシア諸國とは大分違つて居つたからである。一體、マセドニア人は全くギリシア人と同じ人種で有るか無いかは疑ふべきことであつて、人

フイリツプ、マセドニア方隊を作る

種が違つて居たのかも知れない。併し、其王はギリシア人種に違ひない。其王に治められたマセドニア人なるものは、ギリシア人の外の人種か、若くは人種は同じでもギリシア人とは全く違つた生活をして居たものである。彼等は都市に住んで居ない。城郭で取圍した都邑の住民ではない。田舍住ひをして居つた。書物は持つて居ない、文學はマルで知らない、藝事は無い、仕事は耕作と獵のみであつた。それで、艱難にはどの位でも堪へる。勇氣は有る。野生其儘の極荒い人間であつたが、王の命令、大將の言付に對しては、議論は少しもしない、極めて柔順な人民であつた。丁度、支那の昔の議論好きな哲學好きな雄辯家の多い六國に反して、秦の民が議論も好まず、哲學も有たず、法律に從順で、善く戰鬪に從事した如く、マセドニア人は秦人と其性情慣習が符節を合はする如き人種であつた。其人種の王にフイリツプと云ふ豪傑が出て、エパミノンダスの兵法を承繼いで、マセドニア方隊と云ふものを作つた。さうして此軍隊の

歷山大王希臘諸國を統一す

威力に依つて、ギリシア諸國を片端から攻取り、或は降參させた。それから、其子の

アレキサンダー大王

が父の偉業を承けて、遂にギリシヤ諸國を悉く自分の節度の下に統一して、謂はゆるアレキサンダー大王の帝國を造つた。

歷山大王の帝國亡ぶ羅馬興る

私は歷史を話すのでない。唯だ國と國との組織の變つて來た狀態、其變遷の理由を話すのであるから、アレキサンダー大王の事業は歷史家に讓つて、こゝには言はないが、兎に角、其大王の帝國も遂に亡びて、其あとにローマ國が興つた。ローマ國は都市を聯合した大きな國の歷史上に現はれた偉大なるものである。

我々は進んで、ローマ國が如何にして都市と聯合した世界的大帝國を造り得たかと云ふことを話して見たいと思ふ。先づ

から話さなければ成らぬ。

ローマ人の特質

羅馬人の特質

ローマ人は（後のローマ人のことは此所には言はない。）其古代の狀態を言へば、極信心深い、質樸な心を以て其宗教の神を拜んだ人種であつた。彼等は宗教的に熱誠であつたから、良心を完全に保たうとする感覺が非常に銳かつた。彼等は好き農夫であつた。昔からローマには貴族と平民の區別が有つたが、貴族でも昔は田舍に居て、平民と同じやうに、毎日、野に出て耕作をして居つた。例へば、シンシナタスと云ふ豪傑は、敵國がローマを攻めた時に獨宰官（デクテートル）になつた人であるが、其時にローマの役人が『今度、貴君を獨宰官に御賴みしたい』と言つて來た時に、彼は鋤を持つて自分の畑を耕して居たが、畑から直ぐ出て來て獨宰官の衣を著たと云ふことである。又、マセドニア王のピルラスがイタリーに攻込んだ時分に、それを禦いでピルラスを追出したカリウスと云ふ英雄があつた。此人は自分の戰功を

羅馬の貴族は平民の如く野に耕耘す

羅馬人は貴族も平民も好個の農夫なり

遂げると共に、小さい自分の畑に歸つて熱心に耕作をして居た。カルセージの英雄ハンニバルを打破つたスシピオ　アフリカナスと云ふ人は、ローマの歷史に名高い人物であるが、彼はハンニバルを破つてカルセージの兵力を全く破壞した後、先祖から持傳へた田舍の畑に歸つて、自分で果物を種ゑ、さうして接木などをして日を送つて居た。一言にして曰へば、ローマ人は貴族も平民も好き農夫であつた。これと共にローマ人は好い軍人であつた。ローマ人の敎育の要部は軍事敎育であつた。紀律を守り、命令に從ひ、死生共に避けないと云ふ軍人的訓練は、ローマの兵卒が皆な有つて居た所である。

ローマの領地の中にポムペーと云ふ都市があつて、それがベスビアスと云ふ火山の脇にある。其火山が破裂して澤山な灰を降らしたとき、ポムペーの町は全く埋まつて仕舞つた。それが永い間、其儘になつて居たのを、近世になつて其灰を搔分けて、ポムペーの昔の町を灰の中から見出だすことが出來たが、ロー

ポムペーの一番兵灰液の中に泰然たり

マ人の生活は、灰の中に其儘腐敗せずに、ちやんと遺つて居た。ところが、其中に始めて灰の中のポムペーを發見した人に非常の感動を與へた一つの事實がある。それは何かと云ふと、ポムペーの町の番兵が灰の中に埋まつて腐らずに遺つて居たことである。それを掘出して見ると、其熱い灰が液體のやうに流れて來て、町を埋めると云ふ場合にも、番兵は其任務の位置を變せずに泰然として居たことが分かる。則ち、ポムペーの番兵の灰の中に遺つたものは、ローマ人の軍人的精神を見物人に語つて餘りある。

斯う云ふ風に、ローマ人は好き軍人であつた。これがローマの世界を征服するに至つたローマ人自身の價値である。斯う云ふ風な實質を有つたローマ人が、其世界征服の事業に從事する時に、其進行の前途に横はつて、最も面倒な、さうして最も難儀であつたことは何であるかと云ふと、前に申したカルセージとの戰ひであつた。則ち、地中海の西の半分に於いて當時比類なき海權であつた

カルセージ亡ぶ。

羅馬人は勝つべき素質を有す

羅馬人の人種は一、カルセージの人種は烏合の衆

カルセージをローマが打破つて、ローマ國自身がそれに代つて地中海の海權になつたことである。これは世界の都市の諸國をローマ自身を中心として聯合して大きな帝國にした始めの大戰であると言つて宜い。

此戰ひは今日の我等に取つても頗る興味ある事實であるから

何故にローマが勝つて、カルセージが負けたか

と云ふことを語つて見たい。

ローマ人は多くの點に於いて勝つべき素質を有つて居つた。第一にローマ人は人種が一つであつて、ローマ及びローマの同盟國は人種としては先づ一色の人種であつた。細かく別けたら小さい區別は有るだらうが、言語、風俗、習慣に於いて、大體同じだと言ひ得る人種であつた。然るに、之に反して相手のカルセージは、いろ〳〵な人種の混合體であつた。其幹部と云ふべきものは勿論フエニシア人であつたが、フエニシア人の數は多くは無い。其他はリビア人と云

羅馬の兵は民兵

ふ北アフリカの人種である。これはカルセージの市民權を有つて居らない、フエニシア人に壓制されて、フエニシア人の專横を憤つて居つた人民であつた。彼等にはカルセージに對して愛國心なんか云ふものが、どの位あつたか、極めて稀薄なものであつたらうと思はなければ成らない。其他、遊牧人種も居た。言つて見れば、カルセージは人種としては烏合の衆であつて、有機的に統一しては居なかつた。これがカルセージの破れた第一の原因であつた。

次には、ローマの兵隊は民兵で、人民悉く兵であつた。カルセージの兵隊の方が兵隊としては熟練して居た。方々の戰ひに經驗も多かつた。ローマ人の方は農民から直ぐに兵隊になつた未熟の軍人が多かつたから、最初はカルセージの方が勝つた。カルセージの英雄ハンニバルがローマの同盟國を攻擊して非常に成功したのも之が爲めであつた。併しながら、ローマ人は元が農民から出た純粹の民兵だから、段々戰爭に熟して來ると、強くなつて來た。之に反して、

カルセーヂの兵は傭兵

羅馬人は執著力強し

カルセーヂの軍人は、大將にはハンニバルのやうな豪傑もあつた如く、良將猛帥が無いことは無かつたのみならず、兵隊も戰爭に經驗の多い者であつたが、彼等は畢竟するに傭兵であつた。カルセーヂの人民は元來謂はゆる町人であつて、商賣をするは其得意とする所であつたが、戰爭をする柄で無いので、軍旅の事は傭兵に一任すると云ふ風であつた。一方は戰爭に經驗が無くても、農民の生粹から出た兵隊である。一方は戰爭に經驗は有つても、俸給で働く傭兵であつた。これがローマが勝つて、カルセーヂが負けた第二の原因であつた。

ローマ人は非常に執著力の强い人種で、摑んだら放さない、始めたら止めない、死ぬまでやると云ふ剛毅の性質の人民である。カルセーヂ人は之に反して進むときは非常に鋭いが、退くときにも鋭いと云ふ、謂はゆる始め有つて終り無く、耐忍力に乏しい人間であつた。ローマ人の方は擧國一致で働いて居た。ローマ人の愛國心は非常に旺盛であつた。ローマの同盟であつた方々の町も、

カルセージ人は耐忍力乏し

羅馬自ら弱點を改良す

同盟に對して極めて忠實であつた。之に反してカルセージは、仲間同士で喧嘩をして居つた。士官同士嫉み合つて居つた。衆心一致しない有樣であつた。カルセージは海軍國で、海軍に於いてはローマ人の到底及ぶ所で無かつた。ローマ人は初めは一の軍艦だも有つて居なかつた。併し、負けぬ氣のローマ人は追々船を造ることを學び、後にはカルセージに負けないやうな艦隊を造るやうになつた。さうして、カルセージも獨り海上の勇者たることの出來ないやうになつた。勿論、ローマ人にも弱點の無いことは無い。ローマの政治は謂はゆる元老院(セネート)會議で決まる。ところが、此元老院會議は――何の會議でも同じだが、日々意見が變はる。中央政府で日々意見が變はると云ふことは、戰勝國になるには不適當な資格と言はなければ成らない。ローマには又、年々役人を公選する慣習が有つたから、毎年、士官が更まつた。折角、一の士官が軍事に熟練して、其士官と兵隊との間が和熟して、手足を使ふやうな風になつた

かと思ふと、士官が迭つて仕舞ふ。これもローマに取つては隨分不都合なことであつた。ローマでは又、毎年、夏になると、選擧騒ぎがある。議員を選擧するのでない、役人を選擧するのである。其選擧する度毎に、兵隊卽ち選擧人は故郷に歸る。故に、夏の選擧の間は戰爭を止めなければ成らない。斯樣な多くの弱點がローマにあつた。けれども、ローマ人は政治の才のある人種であつたから、元老院を有力なものにして、政治の仕組をいろ〳〵改めた。之が爲めに、國民皆な一致して國の協同の目的に向つて働くことの出來るやうになつた。此政治上の改革もローマの總ての好い長所を助けて、遂に大敵カルセージを討亡すことが出來たのである。

都市の聯合體たる國

ローマ人は此戰勝を其成功の最も著しいものにして、それから段々進んで遂に其時代の文明諸國の主人と言はれるやうに、大きな帝國を建てた。其建てた帝國は、一言で曰へば、前に言つた通り都市の國の聯合體であつて、ローマが其

霸權を握つて居つた團體であつた。

斯う云ふ風にローマ人が大きな帝國を造り得て、それを永い間、保つことが出來たのは、いろ〳〵原因が有ることであらうが、概括して言ふと、

ローマ人の政治的天才

に歸すべきものである。蜂が巧妙な巣を作る如く、烏賊が獨特の黑汁を吐くが如く、人種若くは國民にも、銘々不思議な特質の有るものであるが、ローマ人は政治の才に於いては、世界の歷史に現はれた國民の中で、最も著しいものであつた。ローマは亡びたけれども、今日に於いてもローマ人の創めた政治法律は、現代のヨウロッパに活きて居ると言つて宜い。現代のヨウロッパの政治法律の意味を根本的に學ばうと思つたならば、勢ひローマ人の政治法律に遡らざるを得ないと云ふ程に、ローマ人は政治の天才を有つた人民であつた。

ギリシア人は前に言つた通り敵國のペルシアを前に控へながら、諸國互に喧嘩

羅馬人は外國と戰ふときは國內の紛爭を止めて擧國一致の態度を執る

をすると云ふやうに、肝腎の時に內輪割れのする人民であつたが、ローマ人は外國と戰ふ時分には、如何なる場合でも自分の仲間同士の聯合は實に堅かつたものである。どんなに議論の囂しい時でも、國內を擧げて敵と戰はなければ成らぬと云ふ時分には、其議論をピタリと止めて仕舞つて、さうして一人の獨宰官を選んで、彼れの命令の下に柔順に擧國一致して働く美風を有つて居つた。ローマ人は、アゼンスがアカヤ同盟の覇權を握つて居る時に、自分の國ばかり好い事をして、さうして同盟國をまるで奴隷同樣に扱つて、同盟國の反感を買つたと云ふやうな、さう云ふ手腕の無い、一口に言へば不粹なやり方を屬國に對してもしない人民であつた。則ち、ローマ人は自分の屬國を多くすれば多くするほど、其屬國の歡心を結んで、ローマに敵意を表さないで、ローマの節度に從はせるだけの技倆を有つて居つた。例へば、イタリーの中に在るいろ〳〵の獨立國をローマが自分の仲間にした時分には、其くタリーの諸國にローマ人

伊太利人に羅馬の市民權を與ふ

羅馬、東方諸國を支配す

と同じ特權、即ち

ローマの市民權

を與へて、彼等も等しくローマ共和國の名譽ある一民であると云ふ感情を與へて、彼等の心を和げた。それからイタリー以外の諸國を征服した時分でも、其人民の中から兵隊を取つて、ローマの軍隊に入れたのもある。役人に用ゐたのもある。斯う云ふ輩に併せて、才能技藝の特に秀でた者を撰り拔いて、何れもローマの市民權を與へて、彼等は其屬國の民であると同時にローマの市民であると云ふ考へを有たせ、ローマと離れられないやうにした。

地中海の東に、いろ／＼な文明の國があつて、それが段々にローマに支配されるやうに成つたのであるが、さう云ふ時でもローマは決して成功を急ぎはしなかつた。無理押しに押して其人民の心に乖いて其國を取つて仕舞ふと云ふやうな遣方をしなかつた。例へば、或る國に強い王がある。さう云ふ時はローマ

大國を分ちて小國とす

小國をして自治の形を以て羅馬の爲す所を爲さしむ

人は直ぐ其王室を亡ぼしはしない。遮二無二に強い王室を亡ぼして仕舞ふと云ふやうな、急激な態度は取らない。唯さう云ふ強い王があると、其代りに弱い王を立て、大きな國であつたら其國を王の多勢の子に分けて、小さな國にして仕舞ふ。さう云ふやうにすれば、向ふの王室に取つても、急激の變化が有つたのではない。革命が行はれたのではない。又向ふの國も無くなつたのではない。其人民は仍ほ昔の歴史に安んじて居ることが出來る。昔の自負心を害はれないで居ることが出來る。さりながら、之と同時にローマ人は強い王を弱い王にして仕舞ひ、大きな國を分けて小さな國にして仕舞つたから、ローマ人に取つては非常に取扱ひ好い。ローマ人の思ふことを、其國、其王の名を通して、自由に行ふことの出來る結果になるのであるから、所の人氣に障らないで、事實上、ローマのものにすることが出來た。又、さう云ふ小さな國を建つて置くものだから、小さな國同士で互に喧嘩をすることが多い。ローマ人は其間に喧嘩の仲

小國をなして相爭はしめ羅馬は其間に滿を取る

要地に軍隊を置く

裁に這入つたり、又『さうお前たちが喧嘩ばかりして居て、國を治めることが出來なければ、仕方が無いから、おれが治めて遣らう』と云ふやうなことを言つて、其國を取つて仕舞ふこともある。いよ〳〵其國を取つて仕舞ふと云ふことになると、謂はゆる

直屬州（ローマに直接に隷屬した州）

にして仕舞ふのであるから、其所にコンシュルと云ふ役人を置いて、それを治める。一言にして曰ふと、ローマ人は後のイギリス人のやうに、屬國に對しては極寛大の態度を取りながら、段々に首を絞めて行つて、終ひに動けないやうにして仕舞ふと云ふ、特殊の才能を有つて居つた。いよ〳〵さう云ふ風にして仕舞ふと、要地に强い軍隊を置いて、其土地の人民が假令ローマに不服であつても、何もすることの出來ないやうにした。

ローマ人は其廣い國を治める爲めに、重要な設備を怠らなかつた人民である。

驛傳の制

羅馬の大道

ローマ人は交通機關に最も深い注意を拂つた。方々の大きな都市の國を聯合したのだから、其聯合した都市の國を治めるには、どうしても交通機關が十分でなければ成らぬので、それに深い注意を拂つた。先づ諸方に驛と云ふものを置いた。さうして馬を繼ぐ所にし、役人を休ませる所にし、糧食を繼ぐ所にした。斯う云ふ驛傳の制は勿論ローマ人に始まつたのでは無い。ペルシアにも出來て居た。大帝國を造る國民は大抵同じやうな方法を用ゐた。ローマ人も其例に漏れず、殊に其設備を完全にした。ローマ人は大きな道を造つた。謂はゆる

ローマの大道

なるもので、今でも其蹟が遺つて居る。此大道の最も著しい一例を言ふと、スペインのカデスと云ふ所から始まつて、フランスを通過して、イタリーに這入つて來て、イタリーから又ギリシアの方に回つて行く大きな道がある。其道の蹟は今でも往々遺つて居る。支那に於いて始めて大帝國を造つた秦と云ふ國の

秦の馳道

大帝國を造る國民の通有性

羅馬人は到る所に法律を與へ到る所に政治を與ふ

人民も大きな道を造ることを特色として居た。秦の馳道と云つて、馬を四頭列べて通れる位の道を、支那中に縱橫に拵へて、さうして支那の統一の事業に成功した。イギリスの植民地に行つて見て、何人も驚くことは、道路の廣大なることである。斯う云ふ仕事は、大帝國を造る國民には殆ど共通の性格と見えるが、ローマ人はさう云ふ道を造つて居た。エジプトでもダニユーブ河の岸でもローマ人の造つた道の蹟が遺つて居る。

斯う云ふやうに、ローマ人は

大帝國を造るに著しい特質

を有つて居つたが、其中でも殊に注意すべきは、到る所にローマ流の法律を廣め、ローマ流の政治の仕方を敎へたことである。一言にして曰へば、ローマ人は自分が征服した所に行つてローマ主義を打立つたのである。ギリシア人は政治と道德を殆ど一にして居つたけれども、ローマ人は法律と政治は別なものだ

羅馬人は固有の政治思想、法律思想を領域に擴む

と云ふ風に立てて、さうして一定の法律を拵へて、其法律を自分の勢力範圍になつた所に廣めるやうにした。其廣めると云ふのは、學問を廣めるやうに廣めたのである。則ち、ローマの政治學を其自分の勢力範圍に廣げて行つた。丁度、極印を打つやうに、自分の權力の下に來たものには、ローマの法律、ローマの政治と云ふ極印を打つた。それゆゑ、ローマの勢力範圍に屬して居る人民は、皆な同じやうな政治思想、法律思想を懷くやうに成つた。これがローマ人が世界の主人たることを得た一の原因である。殊に大いなる原因である。丁度、イギリス人が行くと、何處へでもイギリスの思想、イギリスの文學を持つて行つて、さうしてイギリスの領地は唯だ政治的にイギリスに從ふばかりでなく、イギリス人の議論も感情も同時に採用するやうに、ローマ人はローマ人の固有の政治思想、法律思想を其領域內に擴げることに依つて、其主權を堅固ならしめた。

羅馬人の變質

ローマ人は斯う云ふ風にして、其時代の西の世界の主人になつたが、ローマ人自身は其間に段々昔と違つたものになつて來た。一言で曰ふと

ローマは變質した。

衣食住の變化

素質が變つた。なぜ又變質したかと云ふに、東の方の諸國に交はつた結果が其一原因である。東の諸國はローマ人とは違つた文明を有つて居つた。食物、著物、家屋と云つたやうなものが、まるで違ふ。ローマ人よりは、ずッと奢侈を極めて居つた。それをローマ人は移入して、昔のやうな質素な習慣を捨てゝ、旨い物を食ひ、美い著物を著、美い家屋を造つて住むやうになつた。則ちローマ人は其生活狀態が變つて來た。

希臘文明の感化

此外、ローマ人に非常な變化を與へたものが有つた。それは何かと言ふと、言ふまでもなく

ギリシア文明の感化

であつた。ギリシア人は政治的にローマに征服されたけれども、多くの點に於いてローマ人よりも優れたものを有つて居た。文學でも、美術でも、或は思想の問題に於いても、ギリシア人はローマ人の夢にだも思はない高い立派なものを有つて居た。ローマ人はギリシアを征服し、ギリシア人を奴隷にして連れて來たり、或はギリシアの人民がローマに遊びに來、又ローマからギリシアに學問をしに行く者が殖えるやうに成つたので、ギリシア思想がローマを感化した。

外國文明の惡感化

早い時代のローマ人の國民的の歌は、極質樸な、極勇ましいものであつたが、それがギリシア文人のスタイルを眞似をしたギリシア式のものに變つて仕舞つた。ギリシアの詩や歌は飜譯され若くは模倣されて、古とはまるで變つた考へがローマ人を支配するやうに成つた。古のローマ人は宗敎心の強い人民で、其國の神には極正直な心を以て事へたものであつたが、ギリシアの哲學が這入つて來ると共に、ローマ人は其信仰を捨てゝ自分の宗敎を侮るやうになつた。

宗敎を輕侮す

天の神

宗教的制裁の顚覆

戰爭の結果、貧富の懸隔を甚しくす

ジュピトルと云ふのは、ローマ人の昔から非常な尊敬を以て拜んだ神であつたが、ギリシアの哲學が這入ると共に『ジュピトルは拵へ物である。人間の想像が造つた一つの空しき影に過ぎない』と云ふやうに思ふ者が出來で來た。ローマ人は昔は人間の總ての務めを宗教的の義務だと考へて、諸の神が見て御ゐでになる下で其義務を行ふものだと信仰して居たが、後にはさう云ふ神の信仰を捨てゝ仕舞つて、人間の仕事に對して神は何の監視も監督もするものでないと云ふ『宗教的無政府主義』が行はれるやうに成つた。これもローマ人の性質が變化した一つの原因である。

ローマ人は戰爭に勝つて、世界の富をローマに集めたから、其結果として大金持が出來た。或る者は非常に富むやうになり、或る者は土地を失つて、無賴漢同樣な貧乏人になつた。斯樣に

貧富の懸隔

貨殖の事人間一般の情慾となる

自由民滅びて投票を賣る者となる

が甚しくなつて來て、一方には大富豪が生ずると共に、平民は他人の厄介になつて居て、選擧日が來るのを待ち、投票を賣つて、それで辛うじて生活すると云ふやうな、愍れむべき者になつて仕舞つた。一般の人心も、まるで昔とは變つて、人間の第一に爲すべきことは何であるかと云ふと、金を拵へることで、それが最大の目的だと云ふやうに成つた。大將でも政治家でも金が無ければ何でもないと云ふことに成つて、其目的とする所は唯だ金を積むに在ると云ふ有樣になつて來た。

それは其筈である。役人にならうと云ふには、人民大會で選擧して貰はなければ、なることは出來ない。其人民大會と云ふは、どんなものかと云ふと、昔は田舎の地主であつた自由民だから、投票の權を賣ると云ふやうなことは無い、自分が好い人物だと思ふ人を隨意に選擧したのであつたが、貧富の隔絶が甚くなつた爲め、投票を賣らなければ食へないので、投票を金にしたがるやうにな

裁判官は錢の爲に不正の裁判を爲す

賄賂は裁判官の判決を買ふ

る。すると、役人になるには投票を買收するだけの金が無ければ、役人になれない。人間の名譽も、名譽に伴ふ仕事も、金を積んで人民の投票を買ふに非ざれば得られないと云ふことに成つたからには、金を積み金を貯めると云ふことが、英雄豪傑の最大の目的になつたのも、是れ亦、致し方ないことである。

これが爲めに、裁判官は不正な裁判をしてまで金を取るやうになつた。方々の植民地のコンシュルは、金を澤山貯めて、ローマに歸つて自分の政治的野心を遂げようとするから、其領分の人民から無闇に金を取つて懐ろに入れる。若し金の取り方が不正だと云ふので、人民からローマの元老院に訴へると、其元老院の裁判をする者を買收する爲めに、矢ッ張り金が要るから、なほさら人民の金を貪り取るやうになる。さうして、元老院の元老連も亦、政治的野心を遂げるには、金が無ければ成らぬと云ふことを知つて居るから、賄賂を取つて不正な裁判をする。斯う云ふやうになつて、謂はゆる

兵士完全なる武器を有せず

將校は自己の奴隷を率ゐる柔弱なる殿様なり

黄金萬能主義

は、ローマ人の間に跋扈するやうになつた。此主義が餘り盛んなので、ローマの元老院の判決に不服であつた或る國の王が斯う云ふことを言つた。『ローマは賣買することの出來る町だ。誰かそれを買ふ者があつたら、ローマは直ぐに亡びて仕舞ふであらう』。さう云ふ風に、金を貯めて富を拵へることが、流行物のやうに、國民の心を集中すべき問題になつた。

ローマでは兵士は前に言つた通り市民から採る。其市民と云ふのは無頼漢同様の貧乏人が多くなつたから、十分なる武器も持つて居ない。さう云ふ者が集まつて兵隊になつたところが、畢竟するに唯だ群衆と云ふものであつて、兵隊と云ふ價値は無かつた。將校なんか云ふのは、唯だ自分の奴隷を御供に連れて戰場に出て來ると云ふやうな柔弱な殿様になつて仕舞つた。人の目に立つ將官、大將なんか云ふやうな者でも、戰場に經驗の有る者は無くなつて、唯だ下の者

に敎はつて戰爭をすると云ふやうな、無能力者になつて仕舞つた。一時は武を以て誇つたローマの兵隊も何の役にも立たない者になつて仕舞つた。

今日主義

斯う云ふ風に、黃金萬能主義が世の中を風靡し、宗教的信仰も全く亡びて仕舞ひ、何ものも信ぜず、唯だ浮世の快樂のみが人々の目的になつた今日主義の世には

男女間の倫理問題

男女間の倫理頹敗

などが、まるで亂脈なものになつたのは、言ふまでも無い。一夫一婦の道だとか、男女の貞操問題だとか云ふやうなことは、今日主義のローマには更に權威は無かつた。

シセロ

シセロと云ふ人は、ローマで名高い哲學者でもあり、政治家でもあり、文人でもあつたが、そんな眞面目さうな人でも、矢張り時代の感化は免れ得なかつたと見え、自分の妻のテレンチヤと云ふ者が、年を取り且つ癇癪持になつたと云ふので、それを逐出して若い婦人を妻にした。

カトー

カトーと云ふ人は

歴史家、羅馬人の變質腐敗を悲む

名高い愛國者であつたけれども、自分に澤山の子を生んで呉れた謂はゆる糟糠の妻なるマルシヤを自分の友人の金持のポルテシュアスと云ふ者に與へたが、ポルテシュアスが死んだ後、マルシヤは金持の後家になつたので、再びそれを納れて妻にしたと云ふやうな例が有る。ポムペーなどでもシルラの言付で『お前の妻を離緣しろ』と言はれて『はい』と言つて離緣して、他の人の妻であつた者を第二の妻としたこともある。斯う云ふやうな風で、唯だ情慾の行く所に行くと云ふやうな風儀が平氣で行はれるやうに成つて來た。

斯うしてローマ人は變質した。外は世界の盟主になつて、其勢力範圍はズンズン廣がつて行つて、文明國の主人と云ふやうに成つたが、內は斯う云ふ風に變つて來た。然らば、此變つたことは、ローマに取つて惡るいことであつたかと云ふと、歴史家はそれを非常に悲む人が多い。ローマ人の變質、ローマ人の腐敗と云ふことは、歴史家がいつも好い考へを以て迎へない事實である。併し、

私どもの見る所を以てすると、さう云ふ風に『ローマは變質した、腐敗した』と言はれながら、亡びなかつた。ローマ人の變質、腐敗が甚しくなつたと云ふ後、ローマ人は仍ほ數百年間、大きな都市同盟の首長たる位置を維持して居ることが出來た。一言にして曰へば、ローマ人の謂はゆる變質、腐敗なるものは、都市の聯合たる帝國を維持するローマ人の事業の上には、餘り關係は無かつたやうに思はれる。

それはドウ云ふ譯であるかと云ふと、私は斯う云ふ理窟だらうと思ふ。前に云つたやうにローマ人が變つて來た。變つて來た結果はドウなつたかと云ふと、

專門政治家の發生

第一に專門の政治家が起つたことである。昔はローマの政治家は、平常は農業をして居て、國家事あるときには呼出されて、大將にもなり、廟堂に座して軍國の大事を掌り、事が濟むと又再

富、羅馬に集まる

兵農分る

威力高大なる個人を生ず

び田園に歸つて歸臥すると云ふ生活であつて、謂はゆる兵農未だ分れずと云つたやうに、政治家と良民とは全然區別すべきもので無かつた。けれども、戰勝の結果、富がローマに集まつて、さうして大金持が出來るやうに成つて來ると、今度は總ての精力、總ての時を政治の事務、若くは軍務に用ゐることの出來る人間が出來て來た。則ち兵と農が分れて來た。政治家と良民が分れて來た。今まではローマの大將、ローマの政治家は一個の市民であつたのだ、今度はローマには始終、軍人を職業にして居る者、始終、政治家を職業にして居る者が出來るやうに成つた。一言で曰へばローマには平民の他に威力高大なる個人が出來て來た。則ち貴族が出來て來た。軍人を常職にする兵隊が出來て來た。これはローマを共和國から帝國に行かしむべき下地であつた。

斯う云ふ風になると、官吏でも、或は政治家でも、將軍でも、それを出す家は、極少數に限られて仕舞つて、他からは出られないやうになる。又さう云ふ家柄

自己の貴きを自覺す

からのみ元老、議員が出るやうになる。さうすると、さう云ふ人々が、段々『自分は並の平民よりは違つた位置に立つ者である、自分は貴い者である。ローマの盛衰興亡、總て自分の肩の上に在る』と云ふ自覺を有つやうになつて來る。斯う云ふ風になつて來たことは、ローマに取つて決して悲むべきことのみでは無かつたらうと思ふ。なぜなれば、全體、一つの町が多くの町を支配すると云ふことは、極めて不自然なことであるから、さう云ふ大きな帝國を治めるには、どうしても專門の政治家が要り、また常備軍のやうな專門の兵隊が必要になるのは、當然のことであるのに、昔のローマの狀態では、さう云ふものが出來さうな光景では無かつた。けれども富が少數の富豪の手に集まり、兵隊を商賣にする常職の軍人が出來るやうになれば、强い中央の權を立てて、其權で全體の領地を治めることが、比較的出來易くなつた。

斯うして、ローマは帝國に行くべき道を造つた。さうして、ローマが帝國にな

羅馬人の變質腐敗は必しも悲むべきに非ず

ると、大きな富、大きなる兵力を自分の掌の中に收めて、自由に使ひ得る帝國が出來たから、それに依つてローマでは仍ほ永い間、其廣い國を統治することが出來たのであらうと思ふ。ローマ人の變質、ローマ人の腐敗は、非常に悲むべきことのやうであるが、斯う云ふ結果を生ずる爲めには、必ずしも悲むべきことのみでは無かつた。

斯うして、ローマは共和政治から帝政に移るべき勢ひになつた。併し、これだけでは、全民政治のローマが帝政になる原因としては、未だ足りない。其他にいろ／＼な原因が有つて、ローマが遂に一の帝を戴く一の大きな帝國になつた。其原因の主もなものは、異つた人種の勢ひが段々強くなつて來て、さうしてローマの國境が屢〻異つた人種に脅されると云ふことであつた。第一、ローマ人は今のドイツ人に脅された。眼の碧

羅馬異人種に脅さる

い、髪の毛のちゞれた戰爭好きの、さうして戰爭する時分には、妻子眷族を悉く連れて、大波の寄せ來る如くにやつて來たドイツ人は、ローマ人の夢をして屢〻安からざらしめたものである。それから、アジアのハンスと云ふ人種もやつて來た。いろ〳〵な異人種が段々ローマの國の存在を脅した。さう云ふときには、どうしても國の中心を堅くして、之に當らなければ成らぬ。此必要が前に言つた原因と相合して、ローマを一の帝國の下に服從させるやうな狀況を生んで來た。

弱兵となる

そればかりでない、ローマの兵隊は前に言つた通り段々弱くなつた。弱くなつて、さうして地方官の惡るい政治は屢〻人民の叛亂を起した。ゴタ〳〵騷ぎが有れば有るだけ、段々、兵隊の仕事を常職にする軍隊の力を增して來た。ローマの兵隊が弱くなつて、それで軍隊の力が增したと云ふと、訝しいことのやうに聽ゆるけれども、決してさうでない。ローマの昔流の兵隊が弱くなつて、

叛亂起る

叛亂は兵事を常職とする兵士の必要を生ず

ローマ市民は兵隊として役に立たなくなつた。故にそれを侮つて、屬國で謀叛をする。謀叛が多くなるに從つて、それを鎭壓する爲め、戰を常職にする本職の軍隊が出來た。斯う云ふ譯である。これも矢張りローマ人の政治的天才の現はれたものであつて、其時と場合に連れて好い鹽梅に屬國の叛亂を防ぐべき手段を作つたのである。

さりながら、之が爲めに軍人を常職にする兵隊が威力を增して、其兵隊の大將が政治上にも軍事上にも重きを爲すやうに成るのは當り前である。斯う云ふ大將が自分の征服した土地から澤山の金や物品を持つて來て、ローマに歸り、投票權を有つて居る者を買收するやうに成ると、尙ほ勢力が增して來る。斯うして強い軍人を有つて居る強い大將が五人とか六人とか多くローマに出來るやうに成つて、それがローマ全體の最も強い有力者となつた。さうすると『兩雄並び立たず』と云ふ諺がある通り、斯う云ふ者が五人も六人も居るからには、勢

權威、最强の大將に歸す

ひ喧嘩せざるを得ない。其喧嘩をした結果、一番強い者が遂にローマに於いて何人も抵抗することの出來ない威力になつた。

ローマの帝政は斯う云ふ風にして起つた。全民政治のローマであつたのが、一個の帝王を戴き、帝王の命令の下に從ふ專門常職の軍人に依つて治められるやうに成つたのは、之が爲めである。併しながら、ローマの變つたのは唯それだけであつて、其他のことは昔の通り變りはしない。ローマの大道も依然として存して居る、ローマの驛傳も其儘存して居る、ローマ人の他國を征服する天才も衰へない。故にローマは永々仍ほ泰平を保つことが出來たのである。さりながら、此ローマも遂に滅亡すべき運命が來て、其大きな帝國も全く打毀されて仕舞つた。

ローマの滅亡に至つた原因を話す前に、今一應

羅馬改造せらる

ローマが改造されたこと

を話さねば成らぬ。ローマが改造されなければ、もッと早く亡びる筈であつたが、改造されたことに依つて、割合に永く其國としての壽命を保つことが出來たことは、我々の注意しなければ成らないことである。

然らば、其改造の順序はどう云ふことであつたかと云ふと、則ちローマに於いて始めて

個人と國家が分離して兩立する

やうに成つたこと、及び此兩立するやうに成つた個人と國家が調和したことが、ローマを改造する道であつた。此講演の最初に於いて私が言つたやうに、人には二つの已むべからざる要求がある、二つの已むべからざる力がある、其一つは個人の中に起る力である。此個人の力は、ローマに於いて始めて著しく現はれて來た。都市に人間が住むやうになれば、從つて職業の分配に於いて閑な者が出來る。則ち、君子と小人と云つたやうな差別が出來て、君子と云ふ種類の

哲學、宗教、文學の發生

人間は割合に閑が出來る。さうすると、此閑の出來た者は其閑を精神的の事業に用ゐることが出來る、之に依つて哲學が起る、宗教が起る、文學が起る。さう云ふことは則ち個人の心に關係する仕事であるが故に、これが個人の始めて國家を超越して、個人的に發展する原因になつた。ギリシアに於いても既に此端緒が現はれて、個人の心は漸く國家の權威から解脱しようとして居つたが、ローマの時代に此傾向が益〻著しくなつて、遂に個人の心が國家の領域を超えて現はれるやうに成つた。

國家を超越せし思想の著しく現はれたるもの

此個人の心が國家を超越して著しく現はれたものの具體的になつたのを擧げれば、ストア哲學の如きは其一例である。中にも最も著しいものは

キリスト教の起つたこと

である。キリスト教なるものは、個人の心が國家の權威から離れて別に活動し始めた最も著しい現象の一つであつて、ローマの文明に格別の色彩を與へたも

基督教は國民的宗教に非ず

基督教は國家全能てふ教理に抗し國家の權威の上に超越せし高き法あることを主張す

基督教は兄弟仲間を結ぶ

のであるから、其特別の性質に付いて少し考へて見たい。

キリスト教は謂はゆる國民的宗教ではない。ギリシア人の思想でも、初めのローマ人の思想でも、國家は全能である、何ものも國家の權威に抗し得るものは無い。故に、其時代の總ての宗教は國民的宗教であつた。國民をして强からしむべく、國民をして其國民たる活動を健かにせしむべき爲めの道具であつた。併し、キリスト教は全く之と行き方を異にして居る。キリスト教は國家全能の舊い思想に反抗して、國家の權威の上に超越した高い法のあることを主張する。故に、キリスト教は皇帝を拜まない、又いろ〳〵の神の宮に行つて其神を拜まない。キリスト教は總ての神を否定して、唯だ一つの神を拜む。それゆゑ、ローマ人はキリスト教信者を無神論を有つて居る者だと言つた。

キリスト教は國家を離れて
人類全體が兄弟である

基督教徒は物質的滿足に代ふるに精神的滿足を以てせむとす

と云ふことを主張して、さうして兄弟仲間を結びつゝあつた。常に信者同士の集會を保つて居つた。其時代のキリスト教徒は奴隷の存在を惡るいこととは言はなかつた。さりながら奴隷も天の神の前には主人と同等の人類だと主張した。ローマ人も、外國人も、文明人も、野蠻人も、キリスト教徒の目から見れば、同じく兄弟である。彼等は國民と云ふ外に、『四海兄弟』と云ふ新しい社會を造らうとした者である。

キリスト教徒は物質的の滿足に代へるのに精神的の滿足を以てしやうとした。『自然の狀態は決して人間の理想ではない、人間は自然の狀態を超越しなければ成らない』と云ふことを言つて、精神を揚げて物質を貶し、感覺に觸れることの出來る世界とは全く違つた世界、感覺の世界よりは遙かに高い、見るべからざる世界を基礎として、其見るべからざる世界に人間

基督教徒は力の世界に代ふるに愛の世界を以てせむとす

の生涯を結ぶことを以て理想とした。さうして懺悔を教へ、新生を教へ、好んで殉教者となるべきことを説いた。ギリシアの時代、ローマの始めの時代に於いては、人類の目的は總て國家の爲めと云ふことに統一されて、政治組織、政治の利害は人間の總ての注意を集中したが、キリスト教はそれより他の高いものに對して人間の注意を喚起した。一言にして曰へば、總ての人間を國民若くは市民にするよりは、寧ろ神の子とすると云ふ方に注意を集めた。さうして、國家の現出した世界は力の世界であるに反し、キリスト教徒は

愛の世界

を實現しやうと努力した。國家の仕事は戰鬪であるに反し、キリスト教は敵を愛すべきこと、貧民に親切なるべきことを教へた。國家の元首は王侯であるに反し、キリスト教は其祖師を俗世の君に非ずと教へた。

此教の出現は、國家全能の時代に於いて、始めて個人の中に存在する力が著し

羅馬の國家は始は基督敎の破壞に努力す

羅馬の國家は終に基督敎と調和す

羅馬の事業は人種の混合に非ず人類を羅馬化するに在り

き抵抗力を示したものであるから、ローマの賢い諸帝は非常に此新しい個人主義の發生を驚いた。『斯う云ふ敎が起つて來ては、ローマは其國家の根柢から動搖を感じなければ成らない』と言つて、彼等は此敎の破壞に骨を折つた。さりながら、ローマは遂に個人の中に在る此强い要求の顯現を抑へることは出來なかつた。國家でも個人の中に潜んで居る已むを得ない要求、卽ち何ものも打消すことの出來ない力を滅ぼす譯にはいかないことは、此事實に依つて明白になつた。玆に於いて、第四世紀になつて、ローマの國家は、とう／＼キリスト敎と調和した。キリスト敎と共に働いて、ローマの國を維持することに、其政策を一變した。之に依つてローマの精神界は改造された。

一體、ローマ人の仕事は、いろ／＼な人種に對し、擂鉢の中に物を入れて、擂小木で掻回すやうな混合を目的としたものでは無い。さう云ふことは、アレキサンダー大王が曾て試みたけれども、失敗した。ローマの仕事は、唯だ人類を

世界的宗敎の共働羅馬帝國を堅固ならしむ

羅馬は何故に亡びたるか

ローマ化するに在つた。則ち、ローマの法律、ローマの慣習、ローマの制度を他の人民に敎へて、他の人民をローマの秩序に倣はしむるに在つた。一言にして曰へば、ローマの模範を以て世界を同化するに在つた。斯う云ふ使命を帶びたローマ人に取つては、人類を同胞と看做して世界を一つの神の支配する所だと敎へたキリスト敎は、共に働くのに都合の好いものであつた。茲に於いて、最初に國家に危險だと思はれたキリスト敎は、却つてローマ帝國を堅固ならしめる力になつた。個人と國家はローマに於いて始めて分離して、さうしてローマに於いて共同して働くやうになつた。これがローマとギリシアの開化の相違した點であつた。

さりながら、ローマは遂に亡びた。

何故にローマは亡びたるか。

ローマは前に話した通り共和政治から帝國になつた。ローマの帝國を統治した

力は無論、兵力であつた。ローマ帝は此偉大なる兵力の中心たりしが故に、ローマに君臨したのである。さりながら、其一番大切なものとして恃んだローマの軍隊それ自身が、段々恃み少きものとなつた。

將校の腐敗

ローマの軍隊の將校なり士官となるべきものは、無論ローマの貴族である。さりながら、其貴族はカルセージを退治した時代の元老院のやうな貴い者では無くて、唯だローマ帝に寵愛された朝人になつて仕舞つた。彼等は金持であつた。さりながら、極めて懶惰なる者であつた。斯う云ふ者が大將若くは將校であつた。

兵士の懶惰

其下のローマの兵士は、昔は健全なる農民から出て働いた者であつたが、帝政の時代には、ローマの町にゴロ〳〵して居る懶惰なる群衆から募るやうになつた。此懶惰なる群衆は、勞働をしないで暮したい、代價を拂はないで娯樂を得たいと云ふ者ばかりであつた。さう云ふ者を兵卒にした軍隊は、決して強かるべき筈は無い。其上、世界に勝つて世界の富を集めたローマ人は、其

婦人の生産力衰へ人口減少す

奢つた生活の結果として、婦人の生産力が衰へて、人口が段々減つて來た。これではローマ人の運命も久しかるべき筈は無い。これがローマの衰へた第一の、さうして最も重要な原因である。此事は前にも言つて置いた。

蠻人の侵入

さりながら、ローマは内から破れたのではない。内に破れるべき素因は（前に言つた通り）有つたけれども、ローマの亡びたのは決して此素因ばかりの爲めではない。ローマを破壞したのは、他に大いなる誘因が有つた。それは言ふまでもない**野蠻人の侵入**である。モウ少し具體的に言へば、ドイツ人種の侵入である。ドイツ人はローマ人が世界をローマ流に改めて行かうとする運動の先きを折つたものであつて、ドイツ人の若い氣力はローマ帝國の前途に横はる一大抵抗力であつた。さ

うして、ローマ帝國は遂に此人種の押込んで來たことに因つて破壞されて仕舞つた。

一番先きにローマ人の中に侵入して來たのは、ドイツ人の中のゴスと云ふ人種であつた。ゴスの王アラリックがローマを圍んで、一時之を占領したことがあつた。それから後、ゴスの王侯がローマ人の中に這入つて來て、ローマ人と一緒に住んだ。丁度、支那の昔、魏晋の世に諸胡が漢人種の國に雜居したやうに、ゴス人は始めてローマ人と境を接し、若くはローマ人の土地の中に雜居するやうになつた。ゴス人はローマの文明を採用して、ローマ帝の娘を其王の妻とし、其王はローマ帝の代官と稱して居たけれど、其實は獨立のゴスの國であつた。

ゴスが來た後に、エウロッパ人とは全く種類の違つたハンスがやつて來た。ハンスは勿論ドイツ人種ではない。我々日本人などと種類の餘り遠くない蒙古人種であつた。それ故に、ローマ人はハンスの這入つて來た時分には『人類では

西羅馬の諸國は獨逸人種の爲に事實に於て亡ぼさる

あるまい、野獸だらう」と思つた位である。此時はローマ人とゴス人と共同してハンスを禦いだ。

さりながら、此時代から西ローマの諸國は、事實に於いてドイツ人種の有になつて仕舞つた。スペイン、西ゴール地方は、ゴス人種の住む所になつた。中央ゴールはバルガンヂア人と云ふドイツ人種の爲めに占領された。北ゴールはフランクスと云ふドイツ人種に取られ、今のイギリスはイングリッシュと云ふドイツ人種に征服された。イタリー即ちローマの本國と云ふべき所にも、ドイツ人種の將校、ドイツ人種の兵士が澤山居た。此ドイツ人種の將校とドイツ人種の兵士は、名目だけはローマ帝の軍隊だと云つて居つたけれども、事實に於いては己れの好むことを勝手にやつて居つたのである。

斯うして、ローマは尚ほ外形に於いてはローマ人の國である如く見えたけれども、其實はドイツ人種の有になつて仕舞つた。イングリッシュと云ふドイツ人種

東羅馬帝國の西羅馬帝國より遲く亡びたる理由

の外は、大抵ローマの文明を採用して、訛つたラテン語を語つて、ローマの法律制度を其儘用ゐることになつたから、まだローマは亡びないやうに見えたけれども、事實に於いてはローマは既に亡びて、ドイツ人種の國が其跡に建つたのである。

ローマは帝國の時代に、東ローマ、西ローマの二つに分れたが、二つの帝國の中でも、西ローマ帝國の方が先きにドイツ人種に混合して仕舞つて、早く昔の形を失つたが、東ローマ帝國の方は割合に後まで殘つて居つた。それはドウ云ふ譯かと云ふと、西ローマの文明はローマの町を除いての他は唯ローマ人に征服されたことに依つて、若くはローマ人と接觸したことに依つて、一時ローマ文明を採用しただけあつて、言はゞ其文明は齡の極幼きものであつた。それゆゑ野蠻人が這入つて來ると、直きに其れに混合し易かつた。ところが、東ローマの文明は舊い文明である。則ち其歴史のローマよりも舊く、さうしてローマ

羅馬帝國滅亡す

に征服された前から早くギリシア語を話しギリシア文化に化して居た人民が後にローマにて服從したものであるから、其文明は舊い齡を有つて居る。それゆゑ野蠻人が來て其れを襲撃することは出來たけれども、固有の舊い文明を有つて居る人民は、容易に野蠻人に同化することはしない。丁度、支那人が幾たび蒙古人若くは金人に征服されても、支那人の文明の齡が舊いから、容易に征服者に同化しないで、それが他へ行つて仕舞ふと直ぐ元に還ると同じことである。これが東ローマ帝國の西ローマ帝國よりも遲く亡びた所以である。さりながら、どのみちローマ帝國は滅亡に歸し、之に代つてドイツ人種の小國時代が現はれた。

ローマは都市の聯合體たる帝國の終りであつた。

ローマの天下後世に與へた恩惠は我々の感謝を以て記憶すべきものである。ローマに至つて始めて國家は自分

國家自ら其權利を制限す

法律と道德を區別す

國家に堅固と力とを與ふ

の權利を制限して、個人と國家が分離した。キリスト教の發達は之を證明して居る。ギリシアの時代に在つては、總ての問題は國家問題に集中した。さりながら、ローマの時代に於いては、必ずしもさうでは無かつた。『社會の習慣も貴ばなければ成らない、人間の宗教性をも重じなければ成らない、さう云ふものは國家と雖も自分の思ふ如くに爲し得るものでない』と云ふことを、ローマ人は事實に於いて證明した。法律と道德は、ローマに至つて始めて區別されるやうになつた。私有財產及び私權は、國家と雖も恣に使用することの出來ないことを、ローマ人は始めて世に明かにした。斯う云ふやうにして、ローマは始めて國家萬能主義の極端なる壓制から、人間を救つた。之と同時に、ローマは又、國家を強くし力ある者にした。ローマが國家の仕事を制限したことは、國家を小さくしたとも言へるけれども、國家の仕事を制限したことに依つて、却つて國家を堅固にし、有力にした點から見れば、ローマは國家を大いならしめ

四海兄弟萬國同胞の思想起る

たとも言へる。

斯樣に强い國家をローマは造つたが爲めに、人類が得た利益は非常に多かつた。先づ之に依つて人類は平和を得た、安靜に生涯を送ることが出來た。今まで地中海で暴れて居た海賊は、ローマの國の權威に恐れて、其惡るい商賣を廢めなければ成らないやうに成つた。人類の幸福の源である貿易と商賣は、ローマが維持した平和の下に榮えた。ギリシヤ人の文學は、ローマ人の支配の下に一層速かなる速力を以て諸方に廣まつた。商賣の天才を有つて居るユデア人は、最も活潑に諸國に往來して働いた。文明はローマの征服した國に、隅から隅まで廣がつた。人間の交通は自由になつた。大きな道路は蜘蛛の巣の如くに廣がつて、人類交際の區域を極端まで廣げた。之に依つて

四海兄弟、萬國同胞の思想

が始めて起つた。これはローマ人が世界に與へた恩惠である。世界は此點に於

いて、未來永刧、ローマ人に感謝すべき理由がある。

此恩惠は何者がそれを與へたかと云へば、則ちローマの強い力である。法律と秩序を強ふるローマの主權である。其主權を維持する力は何であるかと云へば、則ちローマの兵力である。ローマの軍隊はローマ帝の指揮の下に、世界をローマ化する努力を手傳つた。ローマの名に依つて、勇ましい軍隊は世界の泰平を維持した。軍隊の基礎は、いつでも犧牲の心である、軍隊はいつでも勇氣を必要とする。畢竟するに、ローマの天下は矢張り犧牲の精神と、進んで犧牲に赴く勇氣とに依つて支へられたのであつた。併し、軍隊が其元氣を失ひ、其犧牲の精神を失つたと同時に、ローマは遂に亡びて仕舞つた。

九　小國の時代

獨逸羅馬帝國

ローマの亡びた後に於いて、ドイツ人はローマ帝國の形式を學んで、謂はゆる
ドイツローマ帝國（ローマン　ジャーマン　エムパイア）
を造つたけれども、それは唯ローマ政治の影を學んだものであつて、其實は都市同盟の大帝國が亡びて、之に代つて小さい個々別々の國が起つたのに過ぎない。ローマ帝の後を承けたと稱するドイツ帝は、仍ほ帝として君臨して居たけれども、それは唯だ名のみであつた。其時代の帝と云ふものは、諸國民を統一した有力の專制君主ではない、唯だ諸國民各自の權利と自由を保護すると云ふ役だけの名であつた。

帝國の名の下に實質的の獨立の國家あり

帝國と云ふ大きな概括的の名の下に、實質的に於いては全く獨立した小さな國が竝んで居た。此小さな國は形式的に帝に從屬して居た

けれども、實質的の事務に於いては、獨立して地方地方の固有の仕方に依つて、銘々其國を治めて居たものである。ローマの時代までは國は都市であつたけれども、此時代に於いては國は單に都市ではない、田舍を合せた廣い土地を有つて居つて、都市をも其保護專制の下に治めた大名の國であつた。他の言葉を以て言へば、田舍と都市を合せた一定の區域を有つて居る國であつた。さう云ふやうな一定の國を有つて居る大名が、自分の城を堅固に强く建てて、さうして自分の意思に從つて、謂はゆる强者の權を行つて、自分の王侯たる位置を維持し、事實に於いて獨立して居たのが、其時代の國と云ふものである。

斯うして、國は小さい獨立國に分れたのである。ローマの時代に於いては、世界の都市の國を統一して、それを綜合すると云ふ集中力が著しく現はれて居つたが、此時代に於いては、國が幾つにも分れ易く、方々に獨立國が出來る傾向が多くつて、强い中心の力が無くなつて仕舞つた。此時代でも帝は在つたけ

都市の國一變して都市と田舍を聯結せし國となる

れども、殆ど唯だ形式に過ぎなかつた。則ち、ローマ帝國は玆に於いて分解して小さな國になつたのである。都市の國は玆に於いて都市と田舍を聯結した國になつたのである。斯樣に個々別々に小さな獨立國の起るに至つた原因は、いろ〳〵有らうけれども、其主もな理由とすべきものは、此時代にローマ人の權威に取つて代つたドイツ人の性格に依ることが多い。

ドイツ人種は如何なる特長を有つて居るかと云ふと、先づ彼等の著しいことは

獨立自治の精神

である。彼等は人に從ふ前には、必ず『なぜ從はなければならぬか』と考へる人民である。彼等は如何なる場合にも、自分を曲げることを好まない人民である。故に、彼等を支配した王侯は、其支配の下に在る土豪、酋長、若くは自由民に對して、專制的に命令に依つて其運動を指揮することは出來なかつた。侯伯は常に彼等と共同の働きをすると云ふ意味に於いてのみ彼等を自分の意思に

個人の自由を尊重す

個人の自由の一部を犠牲として國家に獻ずるは其他の部分を安全ならしめむが爲なり

代議政治は其萌芽を獨逸の森林中に發見す

從はしめることが出來た。ドイツ人の中に在つては、命令は何等の力も無い、命令されて動く者は無い。相談、協同、協議と云ふやうな、一緒に働くと云ふ形式を用ゐなければ、其下に在る人民は決して動かなかつた。ドイツ人は非常に個人の自由を重じた人種であつて、其個人の自由の一部を犠牲にして國家に獻げるのは彼等の好む所では無かつた。彼等は唯だ自由の全部を失はない爲めに、其一部だけを犠牲にしたのである。斯う云ふ『我』の強い人種を治めるには、どうしても協議、相談の形を以てしなければ成らなかつた。命令の形を以てしては、これが到底行はるべき勢では無かつた。此狀態をフランスの哲學者のモンテスキューが評して『代議政治は其萌芽をドイツの森林の中に發見した』と言つたのである。代議政治は則ち、王と貴族と自由民と共に協議すると云ふドイツ人の習慣が生んだ實である。

ドイツ人は斯う云ふやうに獨立自治を重じた人民であつた。それと同時に、彼

食言せず

婦人を尊敬す

個人が全體の意思に從ふはイヤ〳〵にすることなり

部落と部落の間には守るべき法律なし

等は勇氣ある人民であつた。彼等も昔のローマ人と同じく戰を好む人民であつた。ローマの帝が彼等の酋長、梟帥に依頼して、其國の治安を保つたことのあるのは、前に話した通りである。彼等は虚言を吐かぬ人民であつた。婦人を尊敬する人民であつた。彼等はローマ人のやうな城壁を圍んだる町を有つて居らなかつた。故に、彼等の國は都市の國でなくて田舎の國であつた。若し彼等の弱點を言へば、彼等の個々別々に分れ易くて統一を維持し難いことであつた。彼等は時として一個人の意思を曲げて全體の意思に從ふことも無いではなかつた。さりながら、これはイヤ〳〵にすることであつて、彼等の本能から出た働きではない。彼等の部落と部落の間には、雙方守るべき普通の法律は無かつた。國を一つの集合的人格と見て、さうして國の意思とか國の輿論とか云ふことを言ふのは、未だドイツ人の知らない思想であつた。それゆゑ彼等は一

部分の獨立は強し一致の力は弱し

國家の絶對主義を破壞す

致し難い人民であつた。部分の獨立心が非常に強くつて、一致の力はそれと比例して居なかつた。それゆゑ、ローマの歴史家は『ドイツ人が若し公けの目的を決めて、其目的の爲めに一致することが出來たら、實に恐ろしいものであるが、それが出來ないから、ローマの爲めには仕合せだ』と言つた。

斯う云ふやうな人種が新しく歴史の主人になつたのであるから、ローマ帝國が瓦解して、其跡に小さい國が方々に起つたのは、自然の勢ひである。ドイツ人は之を統一するには非常な強い力を要したのであるけれども、其力は未だ現はれなかつたから、どうしても小さい國に分れなければ成らなかつたのである。

さりながら、此ドイツ人が我々に與へた恩惠も決して小さいものでは無かつた。ドイツ人は『國家は絶對の力を有つて居るものだ』と云ふ、ギリシア以來の國家至上主義、國家絶對主義を破壞して、人

格、結社、所有權の自由を法律學の上に加へた。ドイツ人は『人間の權利は國家が作つたものではない』と主張した。『人間の權利は固有なものである、國家は其固有の權利を保護する役に當るべきものであつて、此權利は國家に依つて作られたものではない、國家より前に在るものだ』と主張した。則ち

天賦の人權

と云ふことを世界に敎へた。彼等は天賦の人權の爲めには、全世界に對してすらも戰を挑まうと準備して居た。政府の權威でも、國家の必要でも、此權利を全く滅ぼすことは出來ないものだと思つて居た。これがドイツ人の天下後世に與へた恩惠である。我々はドイツ人に依つて、個人の中に存して居る已むべからざる強い要求を尊重すべきことを學んだ。

斯う云ふ風にして、エウロッパには小國が澤山出來たが、此

小國が合して大國とならむとす

ならむとす

る勢ひが起つた。どうして此小さい國が其ドイツ人種固有の天性に反して、合して一つにならなければ成らぬやうな勢ひになつたかと云ふと、これは澤山の理由が有るけれども、最も大いなる理由とすべきは

回教國民の勃興

回教國民の勃興

である。回教のことは別に話す機會も有らうから、こゝには言はぬが、兎に角、回教がアラビア人に依つて世界に廣められて、世界の諸人種が此宗教に這入つて、或は此宗教の政府に支配されて、一大帝國となつて、さうしてエウロッパに攻寄せて來たと云ふことが、エウロッパの個々別々に分離した國を、足並を揃へて一つの方角に向はしむべき原因になつた。歷史に名高いローマ法王の權威は、實は此回教國民に對抗する爲めに強くなつて來たものである。則ち、回教の勃興は

法王權の發達

法王權の發達

を助けたものである。法王は神と敎會の名に依り、自分の支配の下にある僧正司祭等を使役し。敎會の條例を立つて、エウロッパ諸國の人民に、自分を宗敎上の中心、耶蘇の代官として尊敬させた。さうして、此主義を無數の僧侶と尼との力に依つて實行した。『敎會は太陽である、國家は月である、國家は人の身體を支配するものである、敎會は人の心を支配するものである、帝の劒も法王の劒も兩方ながら此世に於いて最も貴いものであつて、等く宇宙の眞の主宰者である神から出たものである』と主張した。斯うして法王は、個々別々に分離せむとするエウロッパ諸國を精神的に統一しようとした。ローマは曾て世界を統一したが、此世界統一の舊いローマの思想は、精神的の形を取つて再び法王政治に於いて表はれた。之に依つて、世界の諸國は俗權としては小國に分離して居たけれども、精神的には一つの帝國になつた。さうして、ローマを其帝國の中心として仰いだ。ローマ法王の權威は、回敎の勢ひが強くなれば強くな

異端者を刑殺すること始まる

僧侶、神の休戰と云ふことを定む

敎會と敎士を隱遁の場所とす

るほど盛んになつた。異端を唱へる者を殺すことも、此時代から始まつた。坊さんが俗人の戰爭に干涉して

神の休戰

と云ふことを決めたのも、此時代である。神の休戰と云ふのは、一年の中に一定の期節を定め、若くは一週の中に何曜日と云ふ一定の日を定めて、此期節、此日は戰爭することと血を流すことを禁じて、之に背く者は敵に背く者だと云ふことにして、俗權に干涉した。敎會とそれから敎會の有つて居る領地を、人々の身を隱す場所にして、どんなことをした奴でも、どんな敵を有つて居る者でも、其所に這入りさへすれば、何人もそれを追跡することは出來ないことに決めた。これは丁度、日本の中世にあつた寺社の『守護不入』の特權のやうなもので、其所までは俗世の王侯の權利は及ばないと云ふことにして、戰に疲れて逃げて來た者を扶け、時としては惡るい奴すら庇つたのである。是れ皆な法

王權の強くなつて來た特徴である。

其時代から法王はエウロッパ諸國の思想に立入つて、舊い信仰を非難する傾向のある者は、兵力を以て退治した。其著しい例を擧げると、第十三世紀にフランスの南にアルビと云ふ都市があつた。此アルビ及びアルビの近所の人民は早く.

古典復興の文明

に浴して、宗教上にも新しい說を唱へるやうになつた。此徒は其時代の僧侶の不品行を憤慨し、道德的純潔と云ふことを主張し、法王の宗教に反抗した。すると、法王は『彼等は回教を信仰する奴だ』と言つて、アルビの町の異端を唱へる者、竝にそれを保護する大名に對して『十字軍を起せ』とエウロッパの王侯を勸め、遂に其十字軍に依つて此新しい信仰を滅ぼして仕舞つた。此事實は法王權が非常な勢ひを以て發達したことを證明するものである。

法王が英國民より得る財は英國王室の所得に五倍す

僧侶の獨立と權力增す

此時代の法王は其朝廷に澤山な資本を集めたものであつて、當時の法王がイギリスの人民から取上げた金は、イギリスの王が其人民から取上げた金の五倍に當ると言はれた位である。イギリス一國でさへ、王の所得よりも五倍の金を取上げ得る程の勢ひを有つて居つた法王であつたから、其富の大いなることは知るべきである。斯樣に、大きな精神的の中心が起つたことは、確に小さい國が合して大きな國になるべき傾向を示すものであつたに相違ない。法王權は唯だ人類に禍ひしたものと思つてはならない。これも矢張り相應に利益を社會全體に與へたものである。先づ、僧侶の獨立と力は之に依つて强くなつた。精神的に働く者の自任の力は之に依つて增した。國家は法律を造つて、それに依つて人民の良心さへも支配することの出來るものだと云ふ、舊い要求を拒絶することが出來た。宗教的信仰と云ふこと、神に對する尊敬と云ふやうなことは、俗界の王侯の奈何ともすることの出來ないものであると云ふことは、

封建制度は主從の關係を以て社會を結びたるものなり

之に依つて學ぶことが出來た。これは

法王政治の我々に與へた利益

と言はなければならない。

斯う云ふやうに、回教の外部の壓迫に依つて、精神的に一致しかけたエウロッパ諸國は又、俗世的に於いても封建制度の確立に依つて、前のやうな個々別々の狀態を脫して、稍々一致の方角に向ふやうになつた。これも小國が大國に變化すべき徑路の一つである。

封建制度

は一口に言つて見ると、主從の關係を以て社會を結んだものである。其

主從の關係

は、唯だ主と家來と二つの階級が有るのみではない。一番貴い主人を假に第一等の主人とすれば、それに附いて居る家人即ち從者は更に第二等の主人になる

譯である。さうして、彼は又自分に屬する第二等の從者を有つて居る。其從者が又第三等の主人になつて、其下に又家人がある。丁度、將軍の下に大名があり、大名の下に武士があり、武士の下に又之に屬する家來があるやうに、鎖を上から下に幾つも繫いだ如く、段々の階級があつて、互に主となり、從者となるが、歐洲封建制度の仕組である。

之を圖で示すと、次の如きものになる。

主（第一階の）
　從（第一階の）則ち第二階の主
　　從（第二階の）則ち第三階の主
　　　從（第三階の）則ち第四階の主
（以下傚之）

主人は家人に知行を與へ、其家人の知行が、他人の侵掠に依り危險に陥つた場合には、主人は兵を出して之を助ける義務を有つて居る。家人は主人から知行

從の義務

を貰ふ代りに、主人に對して『其主人の家の人である』と云ふことを誓はなければならぬ。其誓のことを英語でホメージと云ふ。ホモは人の意であるから、ホメージは家人になる。則ち主人に屬する人となつたと云ふ意味である。詰り、主人に知行を貰つた代りに、主從の盟約を結んで、主人に對する一定の義務を盡すのである。其主人に對する一定の義務とは、どんなものかと云ふと、先づ軍事上の義務を負ふのである。戰場に主人に從つて出陣をすること、一定の兵役の義務を負つて、事が有れば其れだけの兵を出すこと、或は一箇年間一定の日だけ主人の城を守ること（則ち日本で云ふ在番のこと）、これが兵役の義務。

主從緩急相救ふ

それから、主人が其國の政治の爲めに『お前出て來て手傳つて吳れ』と呼ぶときは、其主人の政治堂に入つて、政務の相談に與かること。或は主人が裁判所を開くときは、主人の要求に應して其裁判の事務を助けること。これが行政上の義務、若くは司法上の義務である。主人が敵の捕虜になつた時分に、若し敵

が賠償を求めて『幾ら賠償を寄越せば主人を還してやる』と言つた場合には、其賠償金の御手傳をするのが家人の義務である。又、主人の總領息子がナイトとなること、則ち始めてナイトの甲を被つたとき（日本で云へば元服をしたとき）金錢の贈與をすること。主人の總領娘が他へ嫁に行くときも、同じやうな寄附をすること。これが金錢上の義務である。これだけのことを行へば、主人から知行を與へられて、其知行に屬する利益を收めることが出來る。其

知行

になるものは、いろ／＼なものがある。勿論、土地に對する全體の權利を知行にすることも出來る。さりながら、さう云ふやうな完全した權利でなくても、此森の木は自由に使ふことの出來ると云ふ、森林に對する或る權利、或は此川だけは自由に川狩をすることが出來ると云ふ權利、若くは外を往來するときに家來を連れて歩くと云ふやうな權利も、知行の部に屬する。字引を引いて見る

同等の階級に裁判せらるゝ權利

と、フィーフス卽ち知行は『軍役を勤めると云ふ條件を以て、自分よりも強い者から得た財産である』とも書いてあるし、『一定の條件を行ふことを約束して委託された土地若くは遺産である』とも書いてある。詰り、主人に對して家人たる義務を盡すと云ふ約束の報酬として得る利益全體の名である。又、此知行のことを恩澤とも言つた。恩澤と云つたのは、主人から與へられる恩惠と云ふことを意味して居るのである。これが家人の特權である。

家人たる者は他人に訴へられ、若くは裁判を受くべき犯罪或は過失ありとされたときは、自分と同等の貴族に依つて審問されべき權利を有つて居る。此審問の判決に服從することを好まなければ、更に自分より上級の貴族の裁判を受ける爲めに控訴することも出來た。併し、通例、主人は家人の間に訴訟の起つたときに、さう云ふ面倒な手續をしないで『汝は汝の劍を以て汝の權利を主張すべし』と言

領主

邑民

農奴

つて、多くは私の戰爭で勝負を決せしめた。今日から見れば誠に訝しい事のやうではあるが、此時代には私戰、若くは決鬪に依つて、自分の正義を維持することが多かつたのである。

斯う云ふやうな家人が主人に附屬して居つて、其家人が矢張り前に言つたやうな譯で、又家人を有つて居る。又、主人も其上に主人を有つて居ると云ふやうな者もある。此家人は通例、知行を有つて居る者であるから、多くは土地の所有者である、それゆゑ又之を領主とも言つた。其家人の下には二つの種類の人民があつた。一つは邑民と云ふものであつた。これは地代を領主に拂つて土地を耕す自由の民である。一つは農奴と云ふ者である。農奴は通例の奴隷とは違ふ。奴隷は何處へでも使ふことが出來て、且つ賣買の出來る物件と同じやうなものであるけれども、農奴は土地に附屬したもので、土地を離れることの出來ないものである。領主の許可を得なければ自分の住所を變へる譯にも行かない、

世襲の貴族生ず

結婚することも出來ない。又、財産を遺すことも出來なくて、其土地に留まつて主人の爲めに働く義務を有つて居つた。けれども、奴隷のやうに賣買の出來るものではなく、無報酬で働く者でない。彼等は主人から相當の報酬を受けて働いた。其報酬の額は大概、習慣で定まり、若くは其時代の輿論で決つた。此輿論はキリスト敎會の說などが之を作るに與つて力があつたから、報酬の額も往々農奴の都合の好いやうに定めたことが無いでもなかつた。

此封建制度は、第十一世紀あたりに、しツかり定まつた。さうして、知行は大抵。世襲に決つて、方々に世襲の貴族が出來た。官職も一定の家に定まつて、大抵は其定まつた家で引受けると云ふやうになつて、自然、世襲の形になつた。前に言つた通り、一方に於いてはキリスト敎會で以てエウロツパを精神的に統一し、ローマ法王はエウロツパ世界

の精神上の王になり、他方では封建制度が整頓して、階級を重ねた社會が出來て、エウロッパの人を一つの鎖に繋ぐやうにしたのは、如何なる仔細であつたかと云ふに、要するに回教國が統一してエウロッパの三方から大きな帝國の力を以て壓迫して來たから、之に對抗する手段として然らざるを得なかつたのである。之が爲めに、其時代のエウロッパは内部の秩序も稍〻整頓し、外部に對し共同の防禦も出來るやうになつて、回教國に對して自分の位置を維持し得たのである。

さりながら、斯う云ふ風になつて見ると、それが小國が合して大國と爲る前提になつたことは勿論であつたから、或る機會に依つて遂に進んで大國の時代になつた。小國が進んで大國になつた原因に就いては後に話すが、其前に先づ此時代に於いて如何なる種類の小國が繁昌したかと云ふことを考へて見たい。

天險を得且つ人類交通線上の要部を占めしもの繁昌す

ヴエニス

斯う云ふ時代に於いて繁昌した小國には、自ら共通の點がある。それは何であるかと云ふと、何れも他の國から容易に攻めて來ることの出來ない天然の好い位置を占めて居るのみならず、人間の交通線を綜合的に廣く監視し得る重要の位置を占めて居たことである。此時代では大國は未だ起つて出なかつたから、小國でも斯樣な自然の地利を得た所なら、それ相應に權威を振ふことが出來た。斯うして小國で權威を振つた國の著しいものの例を擧げると、先づイタリーに起つた小さい幾つもの共和國がある。則ち、ローマ時代から殘つて居た都市の國の復活し、若くは昔から生き殘つた者の時を得て繁昌したものである。其著しいものを擧げると、ヴエニスの如きは其一つである。

ヴエニス

は、イタリーの半島に沿つた島であるから、エウロッパの北のドイツ人種が、イタリーに這入つて非常に暴れ回つた時でも、此ドイツ人種たるや元來、山林

其時代の地中海

に育つた野武士のやうな者であるから、航海には熟練せず、艫櫂を動かすことに長じて居なかつたから、ヴエニスの島には攻めて來ることは出來なかつた。それゆゑ、ヴエニス人は自分の倉庫を野蠻人の侵略に委ねずに安全に守ることが出來た。これがヴエニス人の天險を以て其獨立を守り得た所以である。

其時代に、地中海は世界のたツた一つの貿易の海であつたから、ヴエニスは地中海に乘出して方々と貿易をした。コンスタンチノープル、ギリシア、シリア、エジプト等に、ヴエニス人の船は訪問して、到る處に貿易を營んだ。モレア海、レバノン海、さう云ふやうな海の島々は、ヴエニス人の商業區域になつて居つた。丁度、其時分に十字軍が起つて、エウロツパの軍隊がパレスタインを恢復する爲めに始終出掛けた。ヴエニスは、軍隊の輸送、軍需品の供給等を努めて、更に非常に富むことを得た。之が爲めに銀行が出來、爲替手形が行はれ、簿記法が一つの專門の技藝になつて調法がられることになり、ヴエニスの富は非常

フローレンス

ネープルス

に増加した。

ヴェニスばかりでない、イタリーの沿岸の獨立の都市は、ヴェニスの眞似をして、段々同じやうに貿易の利を占めて勃興することになつて來た。例へば、ゼノア、ネープルス、ガエタ、フローレンスなどと云ふのは、則ちそれであつた。

フローレンス

は、ヴェニスよりは後に發達したのだけれども、其繁昌の理由は矢張りヴェニスと同じことであつた。絹の布、木綿の布の製造を以て名高く、フローレンスの町の中に毛織物ばかりの機織場が三百箇所もあつて、年々八萬反の毛布を織出したと云ふ程の繁昌を極めた。イタリー全土の銀行業も、殆どフローレンス人の一手に歸して仕舞つて、其立てた銀行が府内に八十箇所もあつたと云ふことである。

ネープルス

オーブルスの收入エリサベス女王時代の英政府の歳入より多し

などもヽ小さな所であつたけれども、其繁昌の絶頂に於いては、其國の收入はエリサベス女王時代のイギリス政府の歳入よりも稍々多いと言はれる位であつた。

航海律

海關税

斯う云ふやうなイタリーの小さな國は個々別々に獨立して居たが、何れも外國の船の競爭に對して自國の船の發達を保護する航海律を拵へ、又外國の製造品の競爭に對して自國の製造品を保護する海關税の法を作り、多く商船を製造し、海軍を盛んにして、諸國から原料を輸入し、製造品を輸出することを努めて、各々其國を富ますことに盡力した。さうして、イタリーの富はエウロッパの王侯を羨ませるやうになり、イタリーの文明はエウロッパの文明の魁をするやうになつた。

イタリーの多くの小さな共和國は、地の利を得て小國ながら繁昌した。それと稍々後れて、エウロッパの北の海に

ハンサ同盟

と云ふものが起つた。ハンサと云ふのは、ドイツの語で、同盟と云ふ意味である。ドイツ人が今日工業を以て世界を壓して、ドイツの文明、ドイツの工業が殆ど世界に新しい舞臺を開きかけたことは、我々の驚くことであるけれども、ドイツ人種の能力は、ハンサ同盟の昔を考へれば、何も珍しい事でなくて、實はイギリスが商業貿易に於いて世界に雄飛した三百年前に、ドイツ人は此同盟に依つて世界に大工業國の權威を振つたのであつた。

此ハンサ同盟はどうして起つたと云ふと、これは千二百四十一年（四條天皇、仁治二年）に、ハムブルグ、ルユベックと云ふ二つの町で、海賊並に陸上の盜賊を禦ぐ爲めに同盟したのが始まりである。それで、第十三世紀の末に至るまで段々にドイツの方々の都市及び小國が之と同盟して、バルチック海と北海の沿岸、並にあの邊のオーデル河、エルベ河、ウェーセルランド河などの附近の

同盟八十五に及ぶ

いろ〳〵の市邑が皆な一緒になつて、さうして大きな同盟を作つた數は八十五に及んだ。八十五の市邑が聯合した。

此時分は、前に申した通り封建時代のことであるから、

武士の元氣

が壯んであつた。ドイツの武士は殊に元氣の壯んなものであつたから、此武士がハンサ同盟を支へる中心の力になつて、海軍を建て、同盟の町から出す產物は、必ず同盟國の船に乘せて賣出すと云ふことに、航海律を定めて、自國の航海業を保護し、エウロッパの北の海は魚族の捕れる所だから、漁業にも骨を折つて、エッロッパの北の海から南まで橫行濶步して、航海、貿易の權を一手に收めた。

其時代に於ける

ハンサ同盟の商權

英國の貿易は一時ハンスー同盟の手に在り

は實に盛んなものであつて、イギリスは今でこそ世界の貿易權を其手に握つて、自國の製造品を諸國に賣出して、諸國の工業の發達を自國の製造品の競爭で妨害するとまで言はれるやうな、盛んな位置を占めることになつたが、ハンサ同盟の盛時には、イギリスはハンサ同盟の商業の領分同樣になつて仕舞つて、貿易の利益は悉く此同盟の手に收められた。イギリス人は唯だ獸の毛や皮、ミルク、錫、其他の農產物を供給するだけで、製造工藝の品は皆なハンサ同盟から買つた。ハンサ同盟はイギリス其他北の方の都市から得た原料をブルッセルの商館に持つて行つて、其所でベルジアムで出來る織物並に製造品、それからイタリーから來る東洋諸國の產物と換へて、それを又北の方の國に送り出す。ロシアのノブゴロット、ノルウエーのベルゲンに商館を拵へて、ロシアから獸の皮、苧其他の原料品を買出し、ノルウエーでは自分で漁業を營み、斯うして北方の海に於いて南方のイタリー都市に對抗する大きな商業を營み、一時、貿

易の世界に雄飛するやうになつた。

斯う云ふやうに小國の繁昌し得たのは、何れも他國から侵掠されない天險を占めたことと、人類の交通線の集まる所を監視し得る位置を占めた結果であつたが、斯うして居る間に世界の形勢は更に大に變動すべき勢になり、小國が變じて大國となつた爲めに、イタリーの諸共和國も、ハンサ同盟も、遂に夢の如く世界の表面から消え去るやうになつた。

一の貴族の助けを假り他の貴族を壓す

十　小國變じて大國とならむとす

前に言つた通り、小さい國は段々大きくなるべき傾向を現はして來た。それは唯ローマ法王の權力が增して、エウロッパの世界がローマ敎會の精神的支配を受けるに至つたと云ふばかりではない。又、封建制度が確立して、主從の關係を以て階級的にエウロッパの人民を統一し得ただけではない。內部にも

小國が大國になるべき、いろ〳〵の原因

が有つた。人は如何なる場合に於いても自ら大きくならうと願ふ本能を有つて居るから、王はいつでも自分の權利を廣げようと云ふ傾きがあり、從つて自分の下に澤山の貴族が居て、それが半ば獨立の權威を振つて居るのを甘んじて見ては居られなかつた。それゆゑ、王は機會がある每に、一の貴族の助けを假り

印刷術・人の隔絶を結び付く

て他の貴族を壓制する。又、貴族、高僧などの會議を開かせて、其會議の同意と援助とを得て、自分の言付に從はない貴族を征伐する。斯う云ふ政策に依つて王は常に自ら其權威を增すことに努力した。これも小さい國が大きな國になるべき一つの原因になつた。

其時分、始めて**印刷術**が行はれるやうになつて、書物が廉く出來て多くの人に讀まれることになつた。これも遠くに離れて居る人間の心を互に結び付けるには大きな助けになつたものであつたから、小さい國を合せて大きな國とする手續を容易にする一つの道具であつたに違ひない。

回教徒がエルサレムの都を取つて居たが爲めに、それをキリスト教徒の手に恢復する運動、卽ち十字軍の起つた結果として、エウロッパには方々に大きな都

都市の農産物に對する要求田舍の農業に活力を與ふ

市が起つた。前に話したイタリーの諸共和國の如きは則ちそれである。斯う云ふやうな都市が出來ると、都市を相手に方々の農産物を都市に送つて來るから、それが爲めに農産物が非常に發達する。農産物が發達すれば、從つて交通機關も改良する。一體、

交通機關の發達

交通機關は産物を發達せしむる道具であるのみならず、時としては産物が多く出來て、其産物を持運ぶ必要が起る爲めに、更に交通機關の發達することがある。都市が發達して來て、都市が買ふ農産物が多くなつて來るが爲めに、都市と田舍の間に交通機關の發達するのは、此例である。斯う云ふ風に、交通機關が發達するのも勿論、小さな國が大きな國になる原因になる。

磁石の發明

其時代に磁石の發明

工業階級起る

があつて、磁石を船に用ゐることが始まつた。これは第十四世紀の始めにエウロツパには行はれたことであるが、之に依つて航海が前から見ると、ずツと廣い區域に行はれた。從つて廣い航海から運んで來た貨物を取扱ふ都會が膨脹したのは勿論のことである。都會が膨脹すれば、其都會が獨立をする。其都會の獨立は王の權力と相待つて、小さな大名を兩方から挾擊にして、其勢力を滅ぼすことが出來る。これも小さな國が合して大きい國になつた原因である。斯う云ふ風にして、世界の形勢が追々變つて來た爲めに、今までの歷史には見ることの出來なかつた一つの階級が人類の世界に起つた。それは謂はゆる工業の社會である。

工業の階級

卽ち實業家である。これまでは人間の階級と云へば、唯ナイトと云ふやうな領主と、其下の人民とのみ在つたものであるが、貿易が發達し、都會が大きくな

り、製造工業が繁昌するに連れて、其製造工業に從事する工業社會が頭を擡げて來た。此工業社會は皆な一つの組合を組織して、自分の利益を護つた。これまでは、さう云ふものは歴史の面に現はれて來なかつたが、茲に至つて始めてさう云ふ階級が現はれた。例へば、一軒ならば主人、それからして主人に就いて仕事を習ふ弟子と云ふやうな者があつて、これが一軒の工業をやつて行く。此一軒の工業が澤山集まつて組合を立つたものが、則ち工業の組合であつて、これが其時代の經濟社會に於いて有力なものになつた。これは前の時代には無かつた。

斯う云ふやうに、工業社會が出來ると、それに連れて

富豪

富豪起る

が起つて來た。其時代の富豪は今日の富豪とは幾らか趣きが違つて居つた。其時代の富豪の家の組織は、どう云ふものであるかと云ふと、一口に言へば家門

家門主義

主義と言つて宜い。則ち、主人は其經濟機關の中心になつて居る、家族は其社員になる、それから使用人の中で怜悧で藝の能く出來るやうな者は、主人が其娘を與へることも有るし、或は身代を分けて遣つて、一門若くは家族に準ずる。さうして家門の內容を大きくして、それを一つの經濟機關にする。これが其時代の富豪である。イタリーには此大きな富豪が居つて、それがイタリー諸共和國の中軸になつて居つた。イギリスにも斯う云ふやうな家門主義の富豪が起つた。此狀態を一口に言へば、封建貴族の外に、工業、商賈の貴族が出來たものであつて、此貴族が王權と結んで、小さな俗權を段々破壞して、小國の時代を大國の時代にすべき準備をした。

併し、これだけでは未だ小國が大國になる強い原因と言ふことは出來ない。其他、有力な原因が澤山加はつて、小國が遂に大國になつた。其有力な原因とは、どんなものかと云ふに、小國の時代に於いては經濟組織は物品經濟と云ふべき

新世界の發見

物品經濟の時代去りて貨幣經濟の時代來る

貨幣の行はるゝこと廣く富を集中する者強し

もので、『富とは何ぞや』と云へば、富は土地である、農産物である、畜類である。概して言へば物品是れ富である。其時分でも貨幣は行はれなかつたと言ふことは出來ないけれども、貨幣は唯だ貿易の媒介物たるに過ぎなくて、貨幣自身が富の要部ではなかつた。故に小國の時代の經濟は、一口に言へば物品經濟である。然るに、航海が開け、貿易が廣がるに付いて、エウロッパ人はアメリカを發見した。アメリカは黄金の非常に産出する國であつたが爲めに、エウロッパの貨幣は非常に增加した。之が爲めに物品經濟の時代が過去つて

貨幣經濟の時代

になつた。則ち、人々が貨幣を以て自分の富を算し、貨幣を澤山積んで何ぞの用に用ゐると云ふ時代が來た。貨幣の行はるゝ區域が非常に廣くなつたが爲めに、貨幣を澤山積んで置く者は、いつでも其貨幣を自由に使ひ、思ふ儘に仕事が出來る時代が來た。則ち、今度は貨幣が單に貿易の媒介物になるのみでなく

火藥の發明

て、貨幣それ自身が富の目的になつて、貨幣それ自身を貯へることが力の源になつた。斯うなると、貨幣を澤山積むことの出來る國が、一番強い者にならざるを得ない。大國でなければ貨幣を澤山積むことが出來ないから、優勝劣敗の自然の道理で、國は大きくならざるを得ない。

併し、小國の時代が去つて大國の時代になつた最も重大なる原因は何であるかと云ふと、

火藥の發明

である。鐵砲が出來ると、兵制はまるで一變して仕舞ふ。今までは何か事が有れば百姓を畑から引張り出して、戰陣に用ゐることであつたが、火藥が發明されるやうになつては、百姓兵は直ぐに役をしなくなつた。是非、鐵砲撃ちを稽古させて、其操縦に慣れるやうにして、一定の調練をした者で無ければ用ゐられないやうになつた。茲に於いて兵農は自ら二つに分れざるを得ない。武器の

使用は一般の人民の注意から離れて、戰爭を專業にする特別の人民の仕事となるやうになつた。戰爭を生涯の事業とする、謂はゆる『兵』なるものが起らざるを得ない。他の語を以て言へば

常備兵

なるものが起つて來た。斯う云ふ常備兵が起つて見れば、澤山の武器を有し、澤山の常備兵を有する國が、どうしても優勝者の位置を占めなければ成らない。これが小國を大國にした總ての原因の中で、最も大いなる原因として見るべきものである。

『國が大きくても小さくても、何も一個人の利害には關係ないでは無いか』と言ふ人があるかも知れないけれども、それは思はざることの甚しきものである。

國が大きくて兵力が强ければ

其力を以て自分の國の富を好い都合に整頓して、他國の富の進步を妨害するこ

英國の隆盛になりし理由

とが出來る。外國の品の輸入することを禁じ、若くは重稅を課して、自分の國の製造を保護すると云ふ場合、或は外國の市場に於いて、他の國が其所へ競爭品を出して、此方の貿易を妨害しようとするのを禦ぐ場合、さう云ふ場合、若しくは植民地を作つて其植民地には本國の外、他國とは貿易が出來ないと云ふ制限を設けて、本國と植民地の關係を親密にして、本國の產業を發達せしめようとする場合、さう云ふやうな場合に、何が一番必要であるかと云ふと、國の兵力である。國が弱くて、其兵力が自分の國の主張を維持することが出來なければ、さう云ふ約束を行ふことは出來ない。

イギリス

の如きは、早くから先づ其國を強くして、其國の強き結果として起つた海軍の強さに依つて、其國の製造工業を發達せしめたものである。イギリスはスペインの大艦隊アルマダを打破り、其後オランダを押へ付けて、自分の好きな條約

を締結させて、さうして保護政策を執つて、始めて大きな工業國になることが出來た。これは何に因るかと言へば、イギリスが大國になつた御蔭である。則ち、イギリスの諸島が悉く一の政府を仰いで統一して大きな國になることが出來た御蔭である。之に反して

和蘭の衰微せし理由

オランダ

は一時、海上に雄を稱して、世界の何處へでも行つて貿易をした國であるが、それがなぜ勢ひの無い國になつて仕舞つたかと云へば、オランダ人の考へでは『國がどうであらうとも、さう云ふことは個人の富を作るには關係は無い。一個人が骨を折つて金持になりさへすれば其れで宜い。政府の力などを借りるには及ばない』と云ふ自由主義に執著したが爲めに、唯だ物質的の滿足をのみ求めて、自分の國を強くすることに注意しなかつた。則ち、小國に甘んじて大國になることに骨を折らなかつた。之が爲めに近所に大國が起つてオランダを虐め

て、遂にオランダは其國の獨立國たる體面を破壞せらるゝと共に、其海上權は地を拂つて無くなつて、方々で自分の働き場を塞げられ、邪魔をされて、自然に弱い國になつて仕舞つた。これは小國既に大國となるべき時期に於いて、國の陣立がいつまでも昔風の小國に甘んじた結果であつて、誠に已むを得ないことであつた。

十一 大國の時代

斯うして小國の時代が

大國の時代

になつた。前に話す機會が無かつたけれども、此大國の時代が出來るのには、新しい國語の發達して來たことも與つて力がある。昔はラテン語の文學のみがエウロッパ人の唯一の文學であつて、諸國の土語は文學にはならなかつた諸國が段々、土語の文學を有つやうになつて、土語の力が興りそれがラテン語の文學に代つて重要の位置を占めるやうになつた。日本で、奈良朝から平安朝の初めまでは、文學と云へば漢文だけで、其他は僅に歌のみが國文學として存在して居つたのを、後には國語を以て自由自在に國民の思想、感情を表はすこ

土耳其帝國の勃興

とになつて、始めて日本國が自國の固有の文明を發見したやうに、エウロッパでも土語で文學が書かれるやうになつたので、それが國民としての自信を强め、さうして小國が大國になる下地を造つた。此事は前に話す機會が無かつたから、玆に言つて置く。

此時代には、どうしても國は大きくならざるを得ないことになつて來た。此勢ひを刺擊したものは澤山あるけれども、一つの著しい原因は

トルコ帝國の勃興

である。トルコ帝國は回教國のあとに起つて、今のアジアトルコ及びエウロッパトルコに跨つた大帝國を造つた。其トルコ帝國は、從來の回教國のエウロッパに對する態度とは又違つた强みを以て、エウロッパ諸國に對した。トルコは回教を信仰した國であつたけれども、他の一面に於いて一個の强國であつた。それで、たゞの回教國民と云ふよりも、更に堅實な、更に强い力を有つて、エ

地中海其重要の度を失ふ

ウロッパ人の前面に横はつた。回教の教主が後にトルコ帝國のものになつた人民を支配して居たときは、エウロッパ人は仍ほ多少之を侮ることが出來たけれども、トルコ帝が其代りに起るに至つては、エウロッパ人は其地方に齒が立たなくなつて仕舞つた。詰りエウロッパ人の東方を通じて營んだ商業も、それから東方を通じて世界に進んで行かうと云ふ力も、トルコの爲めに遮斷せられて仕舞つたのである。

斯樣に大きな人間の堤防を築かれて、それから先きへは進んで行くことが出來なくなつた爲めに、今まで繁昌の海であつた地中海は、其重要の度を失つた。之を日本のことに譬へて見ると、九州に强い敵國が起つたが爲めに、瀨戶內海は商業の通路たる値が減つたと同じことである。玆に於いて、エウロッパ人の頭腦は勢ひ他の貿易の通路を發見しなければならなくなつた。從來の道路はトルコ人に遮られて仕舞つたから、何處か他を潜つて世界に廣がらなければなら

コロムバスが米國を發見するに至りし理由

コロムバスの目的は日本に達せむとするに在りき

ない。おまけに、前に言つた通り磁石なんか發明されて、航海は自由になり、世界の地理學に關係ある知識も進んで來て、是非、世界に乘出したいと云ふ、謂はゞ水の出端のやうな時に、トルコに前面を遮られたので、已むを得ず他に道を求めなければならないやうになつた。則ち、新しい海路の發見は、此時代の人の切なる要求であつた。

　コロムバスが新世界を發見するに至つたのも、實は此要求が刺擊したのである。コロムバスは初めインドに達する道を求めた。トルコが前面に横はつて、エウロツパ人のインドに達する道を遮つて仕舞つたから、從來、回教諸國を通じてエウロツパに運ばれたインドの品は、之に依つてエウロツパに達しなくなつた。それでは困るから、是非インドに通ずる道を發見しなければならぬと云ふのが、コロムバスの希望であつた。コロムバスの考へでは『蒙古帝國の東にジパングリと云ふ國がある、其國は世

界の東の極端に在ると、マルコポーロが書いて居る。どうか其國に達したいものだ、地球が圓形なれば東の方に行かないでも、西の海をズン〳〵行けば、ジパングリに達する筈だ。』彼は、さう云ふことを考へて、遂に其目的を實行する爲めに、スペイン王の補助を得て出帆した。(此ジパングリと云ふのは日本のことである。)それゆゑ、彼は新世界に達したときに、此新世界はインドの東に在るべき筈だと云ふことを考へて、それをインド諸島と名を附けたが、其實はインドの東でなく、アメリカ大陸の東の島であつたことは、彼れの誤算に出でたのであるが、兎に角、彼れの目的はトルコに妨げられた道の外に東洋に達する道を求めたのであつたことは、其アメリカの島にインド諸島の名を附けたのでも明白である。

斯う云ふインドに達する新しい道を求めたいと云ふエウロッパ人の要求は、アフリカの大陸を南に回つてインドに行く道も發見したし、思ひ設けぬ結果とし

地中海の位置大西洋に移る

てアメリカも發見をし、世界が段々廣くなつて來た。今までは地中海の海がエウロッパ人の植民地を建てるべき慾望の燒點であつたのが、今度は大西洋が地中海の海に代はる勢ひになつて來た。則ち、地中海の位置が大西洋に移つた。インド及び東洋が植民の目的になつた。斯う云ふやうに仕事が大きくなつて見ると、どうしても國は大きな力でなければならない。何となれば大きな力でなければ大きな仕事は出來ないからである。これも國が大きくなつた一つの有力な原因である。斯う云ふやうに總ての原因が、いろ／＼な山から落來る水の一つの谷川に達するが如く、皆な大國主義に傾いた。此大國主義の曉の鐘を報ずる豫言者は誰であつたかと云へば、則ち名高い

マキアベリ

マキアベリ

であつた。マキアベリズム（マキアベリの主義）と云へば、今日でも非常な惡

る意味に取られて、權謀術數を弄し、如何なる惡事でもすることを厭はない、自分の國の利益になる事なら何でもやる、鬼か惡魔の術のやうに言はれて居るけれども、彼に取つては氣の毒な批評である。彼は其實は、小國が大國に赴かなければならぬ時代を早く報じた豫言者に過ぎない。彼はエウロッパの政治學に新しい紀元を開いた新時代の開祖である。エウロッパの人々は彼を非難しても、若くは彼を歎美しても、或は彼に對して無感覺であつても、結局彼れの指示した方角に向つて進んで來たのである。マキアベリ主義は此意味に於いて大國主義の精神的基礎を据ゑたものである。

マキアベリの議論を一言にして曰へば『力は是れ權利』と云ふことである。『人は小さい損害を被つたときは復讐をすることが出來る、けれども大きな損害を被むれば復讐することは出來ない。故に敵たる者は其れを痛擊して再び起つことの出來ないやうになすべき筈である。言葉だの、御世辭だの、外交術などと

人は忘恩者なり背恩者なり

人は矛盾者なり

人は僞善者なり僞惡者なり

云ふものは、眞實に人を支配することの出來るものではない。眞實に人を支配するものは力である。人間は決して恩を知つて、恩の爲めに身を捨てると云ふやうな洒落たものではない。概して言へば、人は忘恩者、若くは背恩者である。人は其言つた言葉を當てにして、其行ひも言葉も同じだと定めることの出來る動物ではない、人は前に斯う云ふことをしたから後に斯う云ふことをするだらうと、前の行儀から後の行儀を假定することの出來るほど當てになるものでもない。そんな易しい者ではない。人は概して言へば、矛盾性の多い者である。人は巧いことを言つたからと云つて、信用することの出來るものではない。人の前の言行に依つて後の言行を判斷するのは極めて危險なことである。概して言へば、人は僞善者である、若くは僞惡者である。人類が斯様に

忘恩者、背恩者、矛盾者、僞善者、僞惡者

であると云ふのが眞ならば、人に愛せられるよりも寧ろ恐れられる方が安心で

外交術は狐なり
軍隊は獅子なり
國家は狐たると同時に獅子たらざるべからず

ある。好い言葉、世辭、愛敬、修辭學、交際術を以て人に容れられるよりは、寧ろ力を以て强持てに持てる方が間違ひないことである。外交術は狐のやうなものである、軍隊は獅子のやうなものである。國家は時としては狐のやうな悧口でなければならぬけれども、同時に必ず獅子となることを忘れてはならない。友人は唯だ力ある者のみに出來るものである、併し其友人たることは威力に服從した形式であるから、力ある者にも其實、眞の友人と云ふべきものは無い。國を守るものは善き法律である、さりながら其れよりも善く國を守る者は善き軍隊である。軍隊は國民をして自信の力を養はしむるものである。何よりも大切なることは國民軍を作ることである、大きな國になることである。援兵は決して恃みにするに足りない、傭兵の恃むべからざるは勿論である。援兵を得たときに若し勝てば、援兵を寄越した强い者の言ふことに從はなければならない。若し負ければ「お前が惡るいのだ」と言つて叱られるだけのことである。故に

國は強くなければならない。強くならうと思ふには、大きな國にならなければならない。何事を擱いても國家を強くすることに骨を折らなければならない』と言つて、イタリー統一を思付いたのが、マキアベリの本領であつた。彼は斯う云ふ說を有ちながら、不幸にして其說を實現することが出來ずに死んだけれども、彼れの言つた通り、段々小國は大國になつて來た。さうして、彼が其國に於いて實現することの出來なかつた理想も、他の國に於いて實現するやうになつた。

小國が大國に移つて來る特徵は、又

教權と俗權の對抗及び宗教改革

教權俗權の對抗及宗教改革

に現はれた。小國の時代には誰も法王の教權に反對する者は無かつた。さりながら、國が段々大きくなるに連れて、俗權と教權の爭ひが起つて來た。諸國の王も法王の精神的奴隸たるに甘んじて居なかつた。フランスのフィリップ第四

大國時代の來るべき前提

宗教改革來る

宗教改革は羅甸語の文明に對する獨逸人種の謀叛なり

世と云ふ王が武裝した兵隊を連れて、法王を其宮殿に囚へて、非常な凌辱を加へた。法王はそれを憤り、且つ怖れて、遂に狂死した。斯う云ふ次第であつたから、イギリスの宗教改革家ジョン　ウヰックリフと云ふ人が法王反對の聲を揚げて、法王朝の專橫を罵つた。さりながら、教權と俗權は斯樣に一度は喧嘩したけれども、其後暫く調和した。調和はしたが、これは大國の時代の來るべき前提であつて、此勢ひは今度は名高い宗教改革として現はれた。

宗教改革と云ふのを、單に宗教上の問題に付いての異論が起つたことであると觀察するのは、歷史を讀んで眼光紙背に徹せざる者である。

宗教改革の根本的原因

は、要するにラテン語の文明に對するドイツ人種の謀叛である。ローマ法王がエウロッパ全體の精神的支配をすると云ふことは、ドイツ人種の國民に取つては、異つた人種、則ち外國人の言語、慣習、知識、學問の支配を受けることで

ある。ローマにある精神的の都から出す宗教上のいろ〳〵の命令は、ローマと人種を同じくしないドイツ人種に取つては、他人の奴隷たる標章も同樣なものである。無數の名義に依つてローマ法王の政府に徴收される宗教上の租税は國家を卑しくし、且つ國家を破產せしむる掠奪と云つて宜しい。小國の時代には、さう云ふ感情は少かつたけれども、小國合して大國とならうとする氣運の既に熟したドイツ人種に於いては、斯樣な外國人の支配に堪へべき譯は無い。之に依つて、ドイツ人の中に宗教改革の聲が起つたのである。一言にして曰へば、小國の大國にならうとする氣運がドイツ人種を刺擊して宗教改革を生んだのである。

宗教改革は千六百四十八年（後光明天皇、慶安元年）のウエストフアリア平和條約に於いて終局になつたと言はれて居る。これが名高い三十年戰と云ふ宗教戰爭を經た結果である。此

ウエストファリア條約

の結ばれたとき、エウロッパはどう云ふ結論に達したかと云ふと、それまでは國家も敎會も共に世界的であらねばならぬと云ふ考へであつた。則ち、敎會は世界中の精神的狀態を以て總て敎會の支配を受くべきものだと主張した。之と同時に、政治上から言ふと、前に言つた名のみのローマ帝國の後繼者であつたローマドイツ帝國と云ふものが世界中を支配すべきものであると云ふ主義が、原則に於いて當然のものと認められた。さりながら、宗敎改革の結果として、斯う云ふ主義は全然破壞された。銘々の國家は一番高い權利であると云ふ主義が立てられた。則ち、國民主義が此時に於いて打立てられた。人民は此時、始めて彼等が國民として一個の分つべからざる單位であらねばならぬと云ふことを自覺した。其意味は、國は舊敎徒たり、或は新敎徒たり、或はユダヤ敎徒たり、或は凡神論者たることから超越したもので、さう云ふ宗旨の如何は國民た

マーカンタイルシステム

る自覺と直接の關係は無い。他の國民と自分との差異は唯だ他の國民とは違つた國に屬すると云ふ點に在るのみだと云ふ自覺に達した。

斯樣な國民主義の場合に達したから、之に依つて始めて國民的經濟主義が起つた。

マーカンタイル　システム

卽ち商制と云ふのは、此時代の經濟主義であつた。此經濟主義に依るときは、國家は經濟的利害から見た一つの單位であつて、政府は其頭首である、政府は國民の幼稚な工業を大人的工業たらしむべく、それを育て上げる人爲的溫室のやうなものである。法律を立てて、良い廉價な輸出品を出し、外國の市場に於ける國產の位置を維持するのは國家の役目である、國家は直接に工業を管理し、或は國家が特權を與へた組合若くは商會に、それを管理させなければならない。輸入品には高い稅を課けるが宜い、それは一つには國の歲入を增す爲め、

一つには國民的生產を發達させる爲め、外國の競爭を抑へる爲めにする必要から、さうしなければならない。國家は通商條約に重きを置いて、それを都合好いやうに立てるのを外交の主もなる目的としなければならない。之に依つて、外國市場に於いて外國品の競爭を取除けなければならない。原料の他は成るたけ外國品の輸入して來ないやうに防禦しなければならない。國家は植民地を是非有たなければならない。其植民地には、母國の外、他國と貿易することを禁じて、母國に貴金屬若くは工業の材料を供給するやうに努めなければならない。政府は工業に關する專門的の技術を進步させるやうに、骨を折らなければならない。外國から好い職人を招いて、自分の國の職人を敎育しなければならない。發達しかけて居る工業には税を課けないで、或は税を薄くして、其工業を奬勵しなければならない。海陸の交通機關を改良して、國內の貿易若くは國外への貿易の、容易に行はれるやうにしなければならない。工業階級の位置を高めて、

商制を論ずる者の主張

強大なる中央權起る

自尊自奮の元氣を進めなければならぬと云ふのが商制を論ずる者の主張であつた。一言にして曰へば、國家が自ら其國を富ますことに骨を折らなければならない、國家は國を富ます機關である、經濟上の一個の重大なる單位であると云ふことが、此主義に依つて明かにされたのである。これは大國の時代が是非生まなければならぬ經濟主義であつた。

斯う云ふ時代に於いて、國に強大なる中央權の起つたことは、怪しむに足りない。國を大きくしやうと思へば、中央を堅固にしなければならない。中央を堅固にしやうと思へば、權力を中央に集めなければならない。故に、中央集權なるものは、大國の時代には必ず起るべき產物である。此產物の副產物として

帝王神權說

が起つた。エウロッパの帝王神權說なるものは、實に此時代に於いて著しく發達した。帝王は人民の後見者である、立法者である。又或る意味から言へば、精神的の王であるから、法王でもある。帝王と人民の間には、帝王が必ず守らなければならない約束は存在しない、帝王は人民が斯うして宜いと承知するのを待つて、然る後に政治をするのではない。帝王の專制權は天の定むることであつて、帝王と雖も易へることの出來ないと云ふやうな意味は、此時代に於いても行はれた。前に言つたやうに常備軍が出來たので、貴族の謀叛も、百姓の一揆も、もう國家の權威を動かすには足りなかつた。從つて、人民の力を代表する機會は、大陸に於いては影の如く滅びて仕舞つた。フランスには昔し國會があつたけれども、後には人が其存在をすら忘れたものになつて仕舞つた。スペインの人民は、始めは自分の權利に付いて王と爭つた。併し、遂に人民の方

朕は國家なり

が敗北して仕舞つた。斯うして、フランスの王ルイ第十四世が『朕は國家なり』と言つたやうに

帝王卽ち國家

と云ふ思想が勝を制した。代議政體はエウロッパの何處にでも、イギリスを除くの外、無くなつて仕舞つた。貴族、領主、人民の集會は、まだ有つたけれども、唯だ國家のことを相談する相談役に過ぎなくなつて仕舞つた。彼等は要するに帝王の法律、命令を協賛する委員であつて、獨立して立法の事業に從ふ議員では無かつた。ルイ第十四世の政治でも、プルシアのフレデリッキ大王の政治でも、オーストリアのヨセフ第二世の政治でも、皆な此形式のものであつた。斯うして、大いなる國が方々に起つた。マキアベリの希望は、遂に實現された。

英國先づ強國として現はる

十二　大國の時代一轉して強國の時代となる

さりながら、世の中は駸々として進歩して止まない。大國の時代も更に進んで強國の時代になるべき運に向いて來た。此時代に於いて、先づ強國として成功したものは、イギリスであつた。スペイン、ポルトガル、オランダは、自國を強くすることに注意せず、人民の産業は自由に放任して置けば發達するものだと思つて、強い力たることに注意しなかつた結果、遂に衰へて仕舞つた。フランスは強國たることに骨を折つて、一時はイギリスと覇を爭つたけれども、其時代には其國の位置が強國たるには未だ都合が惡るかつたから、遂にイギリスの爲めに先

英國は其海權に依りて商制に成功す

きに進まれて仕舞つた。イギリスは强國として先づ成功した。約して言へばイギリスは其海權に依つて、前に言つた商制主義を十分に實現し得たのである。大西洋が第二の地中海になつたときに、イギリスの位置はエウロッパの大西洋に臨んだ島であつたから、活動に都合が好かつた。イギリスの鐵と石炭に富んで居ることも、イギリスを

有力なる海上權

たらしむるに與つて力が有つた。

イギリスの早く國民的統一を爲したること及びイギリス政治家の賢明なる政策は、イギリスの海權を確立した。スペインの艦隊は、女王エリザベスの時にイギリスに痛擊された。此時からイギリスの海權は頭を擡げた。クロンツエルは航海律を定めて、オランダ人の貿易事業を破壞して、海上に英帝國を建てた基礎を開いた。それより以來、イギリスは自分の國の製造品を以て他國の製造事

英國は商業には世界の諸國を自國の州縣の如くす

植民地の民には一本の釘と雖も製造せしむべからず

業を壓倒して、商業的に言へば、世界の諸國を自國の州縣のやうにして仕舞つた。ポルトガルは製造品をイギリスに仰いで、自分の國からは原料と鑛山の貴金屬をイギリスに輸出しなければならないやうに、餘儀なくされた。イギリスはインドを取つた。さうして、インドから木綿と絹をイギリスに輸入することを禁じて仕舞つた。イギリスはインドから唯だ原料と食物を輸入して、木綿や絹は此方からインドに送つて、インド人に買はせた。イギリスはアメリカの大部分を自分の植民地にして仕舞つた。さうして、これも矢張りインドと同樣の政策を執つて、アメリカの植民地ではチヤタム卿ピツトの公言した如く一本の釘すら成るたけ造らせないやうにしようと試みた。製造品は何でも本國から買はせるやうに努めた。植民地には本國の製造品を用ゐさせて、原料だけ植民地から輸入するやうにするが宜いと云ふのが、イギリスの植民地に對する政策であつた。此政策はイギリスがアメリカ植民地に對して始終有つて居た所であ

英國は他國に於て製造業を起さむとする者あれば自國の強大なる製造物を以て之を壓倒す

米國獨立の眞意は英國の經

る。千七百五十年（桃園天皇、寛延三年）に、マサチュセッツ州で帽子の製造所が起つた時、イギリスの議會では『それは

植民地政策

に矛盾するものだ』と言つて、囂ましい議論の起つたことさへあつた。

斯う云ふ風にして、イギリスは自分の工業を盛んにして、他國若くは植民地に何か製造業が起らうとすれば、自分の國の強大なる製造品を持つて行つて壓倒する。リバープールやロンドンで物を拵へて、それを直ぐと其所で賣るよりも廉い價で向ふへ持つて行つて競爭する。故に、植民地及び他國では之が爲めに、折角起りかけた製造業が滅ぼされる。製造業が起らなければ、隨つて農業も振はない、地價も廉くなるから、政治的には立派な獨立國であつても、經濟的にはイギリスの屬國同樣になつて、酷い目に逢はせられた。アメリカがイギリスに對して獨立したのは、決して權利の思想の爲めに獨立したのでない。アング

濟的一州たる苦痛より解脱せむと欲したるに在り

科學の進歩、强國の發生を促す

ロサクソン人種は權利など云ふ空想だけで革命戰の危險を冒す人民でない、背に腹は代へられない。最後の問題はいつでも生活問題である。十三州のイギリス植民地が其母國に對して反旗を飜へした理由は『斯うして置いては、いつまで經つても經濟的獨立は出來ない、いつまで經つても製造工業は植民地に起らない、本國の製造品の壓制を受けなければならない』と言つて、それが艱さに遂に獨立戰爭になつたのである。我々は此意味を忘れてはならない。故に、アメリカは其獨立を得ると同時に、保護政策を立てゝイギリスの製造品競爭を抑へた。斯う云ふ風に、イギリスが强國になり得たのは、商制主義を實行するに便利の好い强國になり得たからである。

さりながら、イギリスのみが獨り强國の威を誇る譯には行かない。科學は段々進歩して來た。千七百八十五年（光格天皇、天明五年）には、ワットの蒸氣機關が始めて紡績業に應用されるやうになつた。就中、科學の進歩が齎した最も恐

ナポレオンは砲學の權化なり

佛國革命

ろしいものは何であるかと云ふと

大砲製造の進步及び砲術の發達、砲兵組織の改良

である。此砲學の進步を後ろに負つて、イギリスの鼻を挫かうとしたのは、則ち大ナポレオンである。大ナポレオンは砲學の權化である。

大ナポレオンのことを語る前に、私は話の順序として、佛國革命のことを語らねばならない。

佛國革命

は、個人の中に已むを得ざる要求、則ち私の前に言つた個人の力。其力と國家の力との新しい組合せの出來る前提として起つた大騷動である。私は此事を話す機會に於いて、キリスト教のことを述べたときに言つた個人と國家の共働と云ふことの意味を更に詳かに話して見たい。さうすることが本論の趣意を徹底するに便宜であると思ふ。

個人の力の發現

前に屢〻申した通り、個人の力は國家の力の外にある。最初、人間が唯だ種族と種族の間の戰鬪にのみ從事して居た草昧の時代には、個人の力は發達したくも發達すべき機會が無かつた。例へて見れば、火花を散らして居る戰爭の最中には、何人も自分の家や自分の妻子のことを思ふ暇の無いと同じことで、國が國として間斷なく、しかも激烈に生存競爭をやつて居る場合には、個人は芽の出しやうが無い。さりながら、國が一つの城郭で圍まれて、敵國に陷れられない間は、其城郭の中に個人の安全を保ち得るので、茲に於いて始めて個人が國を離れて働き出すことが出來る。さうして、此個人が今度は自分の國に對して第三者の位置に立つて、國の現在を離れた新しい理想を立つて、國を批評し、國の目的を論ずることが出來るやうになる。則ち、個人は始めて現在の國から分離して、將來の國を造るべき創造若くは破壞の事業に努力することが出來る。

プラトーのリポブリック

哲學は多くは斯樣な個人の働きである。前に言つたプラトーの『リポブリック』は

基督教

文藝復興

マキアベリの新しき國家論

宗教改革

佛國哲學

則ち此働きが哲學者の心に生れたのである。キリスト教も國家を離れて個人の心に精神的の新しい國を植付けたものであるから、それが現實にされる場合には、矢ッ張り新しい國を造る力になる。文藝復興と云ふのも、個人の心に映つた昔の理想が社會の力となつて醱酵したものであるから、是れ亦其時代の現在の國家を超越して、將來如何なる國家を造るべきかと云ふ理想を、國民に暗示したものに違ひない。マキアベリの新しい國家論も、マキアベリと云ふ個人の心に映じた將來の國家の影である。宗教改革も、ルーテル、メランクトンなど云ふ大きなる宗教的天才の頭腦に映つた將來の精神的王國であれば、それが俗界と關係して、矢張り新しい國家を創造し、若くは現在の國家を破壞する力にならなければならない。さりながら、是れ等のものの中で一番有力であつた個人の力は何であるかと云ふと、佛國革命を生んだフランスの哲學であつたと言はなければならない。勿論、

英獨の懷疑哲學

ボルテール

フランスの哲學

は、其當時のイギリス及びドイツの懷疑哲學の影響を受けたもので、殊にイギリスの思想は著しくフランスの哲學に感化を及ぼして、其時分のフランス人はイギリス狂に罹つて居ると言はれた位であるから、委しく言へばイギリスとドイツの哲學の話からして行かなければ成らないのであるが、こゝには其れを省いて、直ぐにフランスの哲學の話をするが、フランス哲學は畢竟、古典復興、宗教改革に次いだ大きな精神的産物であつて、個人の心に深い力を注込んだものである。其哲學の代表者に

ボルテール

と云ふ人がある。彼は一生の間、キリスト教の教へた教理及び形式は、全く信ずべからざるものだと云ふことを人民に教へむが爲めに、其非凡なる天才を用ゐ『我々の最も必要なものは何であるかと云ふと、精神的の權威に對して心の

自由を保つことである』と主張した。彼は總て其時代に於いて、其時代の社會の存在を維持した慣習、制度、法律、典故に反抗して、さう云ふものの何れも信ずべからざるものであると云ふことを十分に説破した人である。又

モンテスキュー

モンテスキュー

と云ふ人があつた。彼は十四年の間、イギリスの政治を研究して『世界の中で一番良い政治の活きた模範はイギリスである』と惚込んで、名高い『萬法精理』と云ふ本を著して、政治の理想を示した。例の三權分立説の如きは、彼れの發見した教理の中で、いつまでも人に尊敬せらるゝ有力なものである。

三權分立説

さりながら、ボルテールよりも、モンテスキューよりも、フランスの人心に多くの影響を與へた者は誰であるかと云ふと

ルッソー

ルッソー

であつた。ルッソーは、一口に言へば、其時代の文明に對して『野蠻に還れ』

と主張した還自然主義の人であつた。彼れの信ずる所に依ると、其時代のフランスの文明なるものは、何のことはない、鬘を著けて、粉を面に振掛けて、綺羅を飾つて、さうして其實は腹の中は空虛な拵へ物で、取るに足らないものであつた。其時代の教育は、人を作るものでなくて、寧ろ賊ふものである、そんな辨慶の七つ道具(日本で言へば)に等しいやうな無益の重荷を、文明とも言ひ教育とも言ふ。我々はそんなものを皆な捨てて、そんなものの專制に反抗して野蠻人に還らなければならない、生れた儘の貴き野蠻人に還ることが、人間の光榮である、此世の法律制度が定めた義務などと云ふものは、人間として更に從ふべき責任は毛頭無い。義務と云ふ積極的の役目は人間にあるものでは無い。人間は唯だ感情の動くが儘に動くが貴いのである。感情は人間の行爲の基礎にならねば成らない。感情に從ふのが則ち善である。感情の囁きに重き注意を拂はなければならない。我々は感情に依つて導かれねばならない。如何なる

難儀でも、我々は我々の感情の導く所に從つて、それから起る苦痛に耐へなければならない。彼は斯う云ふことをフランス國民に教へた。一言にして曰へば『直情徑行の原始的人物に還れ』と云ふのが、彼れの理想であつた。さうして、彼は

民約論

を著した。彼は『國の主權は總ての人民に在り』と主張した。『公衆の聲は則ち神の聲である』と主張した。『人間社會は如何なる社會でも、支配する階級と支配される階級と、二つに分れなければならない。さりながら、さう云ふやうに、或るものは支配し、或るものは支配されると云ふ社會の仕掛は、どうして人類社會に存在することが出來るかと云へば、唯だ「人類社會は根本的に親しき兄弟仲間であらねばならない」と云ふ思想を基礎として、其上にのみ治者と被治者の階級を分つことが出來るのである。故に、斯う云ふ仕掛は一般の人

彼等は單純なる嘲弄者、消極論者、享樂主義者、懷疑者に非ず

民が同意すれば、又どうでも改めることが出來る筈だ』と云ふのが、民約論の主意である。フランスの哲學は、斯樣に其時代に反抗した新しい思想を國民に敎へて、大騷動の種子を播いた。

斯う云ふと、其時代のフランスの哲學なるものは、唯だ制度、法律、慣習を嘲弄し、徒らに消極的の議論を逞しくして、旨い物でも食つて、樂に寢て、遊んで暮せば、それで宜いと云ふ、享樂主義を主張し、何者をも信ぜず、何の前にも跪かざる不信懷疑の思想をのみ鼓吹したやうに見ゆるけれども、決してさうでない。さう思つてはフランスの哲學に對して氣の毒である。彼等は破壞の中に建設の意味を含んで居た。彼等の破壞するのは、單に破壞せむが爲めでは無くて、新しいものを建てむが爲めである。彼等の血は殘忍と不公平を憤る爲めに燃えた。彼等は壓制されて居る者の爲めに權力の有る者と戰つた。彼等の攻擊したものは、宗敎的の迫害とか、或は拷問、恣に人を獄に投ずること、裁

個人の力を弱しと言ふ勿れ

判のやたらに延び後れて、しかも虚僞の多いこと、百姓より租税を無理取りすること、奴隷、奴隷賣買、さう云ふものに對して彼等は反抗したのである。短い言葉で言へば、彼等は新しい人情の世界を建てむが爲めに、總ての舊い物を破壞せむと試みたのである。

個人の力を弱しと言ふこと勿れ。それが一つの個人から他の個人に傳はり、更に他の個人に傳はれば、恰も火の原を燎くが如く、波の動いて更に他の波を動かすが如く、遂に國家國民の性情を內から一變しなければ已まない。遂に國家を新しく造る力にならなければ已まない。さうして其結果が佛國の革命になつて現はれた。

佛國革命は過去の總ての信仰を殆ど完全に破壞したものである。外から來る何等の權威にも從はないで、人間自身の理性を以て物の價値を定める唯一の標準にしたものである。從來の宗敎、科學、社會、政治は、容赦なく批評の斧に解

道理の女神

大なる人民は彼等を繋ぎたる鎖を抛つ

剖され、『何ものも道理の判斷を基礎として立たざるべからず』と主張された。現に其時代に道理の女神と云ふものを作つて、耶蘇の代りに其れを拜んだ位である。封建制度以來、王侯貴人の下に制度慣習の鎖で繋がれて居た大いなる人民は、此革命に依つて其鎖を抛つて、始めて歴史の面に飛出した。此革命に依つて人民は國家の新しい道理に適つた組織を實現しようと試みた。『人間は皆な兄弟である、國家とは人間の自由を組織體にしたものである、自由と平等の理想を現實に現はすべきものである、人民の權利は最上至高の權利である』と云ふのが、佛國革命の世界に教へむとしたる教理であつた。佛國革命は、貴族、僧侶と云ふ特權のある懶惰者の階級を破壞して、工業と商業に働いて居る人民の權威を立つたものである。之を要するに、フランスの哲學が生んだ正統の子である。ルッソーの人

權説は佛國革命に於いて有力に主張された。加之、佛國革命は唯だ其主張の實行をフランス國の中に限らうとのみ思つては居なかつた。佛國革命の有つて居つた主義主張は萬國に宣布せらるべきものであつて、國家とか國民とか云ふ狹い區域に縮まつて居るべきものでないと思つた。先づフランスが例を示して、世界に之に倣はしめむとした。

實際、或る時期に於いて、佛國革命は世界を震ひ撼かした。ドイツ人もフランス人の若き精神を歎美した。イギリスの政治家ピットは『イギリスの群衆が、フランス人の直情徑行の野蠻的行爲を見て「これは實に愉快だ、之に倣はなければならぬ」と言つて騷ぎ立てはしないか』と恐れた。エドモンド バークも、同じ恐怖を懷いた。フランス哲學者の心の中に働いた國を造る力、若くは國を破壞する力は、佛國革命に現はれて、一時はヨウロッパ全洲を震ひ撼かした。

何故に革命時代の佛軍は强かりしや

人民は貴族の歸り來ると共に舊き壓制の還り來らむことを恐る

こゝに注意すべきことは、言はば人民の群に過ぎなかつた革命時代のフランスの軍隊が、エウロツパの常備軍よりも强かつたことである。なぜ、佛國革命の下に在つた軍隊は强かつたのであるか。其意味は明白である。革命の波に動かされ、革命の理想に謳歌して、貴族を國の外に放逐したるフランスの人民は、若し革命がやり損つて貴族が歸つて來れば、貴族の歸つて來ると共に舊い壓制も還つて來るに違ひない。それを彼等は深く恐れた。故に百姓は貴族の還つて來るのを是非防がなければならない、命を賭けても防がなければならない、若し貴族が還つて來れば彼等は酷い目に逢はなければならない。故に彼等の戰ひに從事する心は、エウロツパの他の軍隊の其れに比して眞劍であつた。彼等は死ぬるか活きるかの戰ひをして居たのである。謂はゆる『窮鼠、猫を嚙む』の勢ひを以て、擧國一致したのである。これが彼等の强かつた一つの理由である。これ

までのエウロッパの常備軍なるものは、其士官の進退は功が有るから進むと云ふのでない、士官の屬して居る身分に依つて進級するのである。然るに、佛國革命は四民平等の主義に依り、誰でも人材は直ちに軍隊中に於いて好い位置を占められたのである。故に、フランスの軍隊は新鮮なる精神に充ちて居つた、新鋭の氣に富んで居た。これが佛國革命時代の軍隊が意外に强かつた所以である。

大ナポレオン起る

さりながら、佛國革命は遂に行詰つた。どうしても一つの大きな權力を建てゝ其權力の下に從ふのでなければ、國は治まらないと云ふことになつて、大ナポレオンが起つた。詰りナポレオンが佛國革命の大いなる精神を統御すべき重大なる力になつたのである。私は茲に於いて

ナポレオン論

に入らなければならない。

彼は科學的の頭腦を有せり

彼は輿論人望の無價値なるを知れり

ナポレオンは最も

ナポレオンは科學的の頭腦を有つて居つた人で、フランス哲學者の言ふ理論はナポレオンを動かすに足りなかつた。ナポレオンは唯だ佛國革命の中に動いて居た事實に注意した。彼は科學的に佛國革命を觀察した。ナポレオンは自由平等と云ふやうな理想は、唯だ其理想だけではフランスに騷動を持來たすだけで、決してフランスの重みを爲すに足りないと考へて居た。彼はさう云ふ哲學を信仰しない、彼は哲學はフランスを破壞したとさへ思つて居た。彼は又、輿論だの人望だのの價値の無いことを知つて居た。彼は唯だ堅實なる基礎の上に新しいフランスを造らねばならぬと考へて居た。佛國革命の跡を善くする道は、强い有力な始終活動する中心の力であると信じた。さう云ふ重い力を與へなければ、佛國革命の跡を善くすることは出來ないと信じた。此力は何であつたか。ナポレオンの力の要素と見るべきものも、いろ／＼ある。さりながら、最も大きな力は矢ツ張り兵力であつた。此意味に於いて、ナポレオンは最も明白にマ

明白にマキアベリ主義を具體的にす

キアベリ主義を具體的にしたものである。

私は、前にナポレオンを

砲學の權化

であると言つた。こゝに其意味を説明しなければならない。ナポレオン以前の兵學はどう云ふものであつたかと云ふと、先づ戰をする前に、靜に、注意深く考へた其戰術を戰場に應用すると云ふことであつた。則ち、廟算豫め定まつて然る後に戰ふと云ふのが、其時代の兵學の特質であつた。一言にして曰へば、

智慧の戰

智慧の戰であつた。然るに、ナポレオンは之に反して、神速な鋭い決戰的の攻撃を敵に與へるのを主とした。敵の最も弱い所に自分の力を集中して、先づ敵の一角を破る。それがナポレオンの戰術であつた。一言にして曰へば、ナポレオンの戰術は意思と活動の戰であつた。ナポレオンの特長は目的の在る所に

意思と活動の戰

速に手段を發見し、直ちに之に著手することであつた。これがナポレオンと

正兵と奇兵との差

ヴヰクトル、ユーゴーがワートルローの戰を評す

從來の兵學との分れる點である。一つは廟算を定めて然る後に戰ふと云ふ戰、一つは機に臨み變に應じ、神速機敏に敵の一角を突き崩すと云ふ遣り方。例へて見れば正兵と奇兵との差である。ナポレオンの用うる所は、謂はゆる奇を弄する點に在つたと言へる。動かなければナポレオンの軍人としての妙味は出て來ない、敵に臨まなければ彼れの目的の在る所に手段を發見する神速の作用は現はれない。彼は地圖を見て戰爭をする者ではない。彼は戰爭の火花の中に其敵の虚を突くべき敏捷の力を有つて居るものである。此主義に依つて、ナポレオンは常に其砲兵の力を神速に集中して敵の一角を崩して成功した。ヴヰクトル ユーゴーが、ウヲートルローの戰を評して『フランスの敗れたのは戰の罪ではない、天命である、若しあの戰の前の晩に雨が降らなかつたら、ナポレオンは例の砲兵を自由に動かして、十分に戰場を制し得たであらう。彼が得意の技倆を振ふことの出來なかつたのは、天氣のせいであつて、戰の罪ではないか

國民を兵役に强要す

ら、フランスの敗北は天命である』と言つたのは、正に此技倆を認めたものである。ナポレオンが若いとき、ツーロンを圍んだ。其時でも彼は非常な機敏な働きで其砲兵を指揮して、其堅城を陷れることが出來た。斯う云ふ意味に於いて、私はナポレオンを砲學の權化であると言ふのである。

ナポレオンの力は軍隊に在るが故に、彼は近世の徵兵法に等しき法を用ゐて、フランスの精鋭を悉く其軍隊にした。反對論者はナポレオンを攻擊して『ナポレオンは之が爲めに百姓から最も有力なる勞働者を奪つて仕舞つた、國の青年階級の密度を稀薄ならしめた、人間の命を無益に消耗した』と言ふが、斯う云ふ非難はナポレオンばかりでない、近世の徵兵制度には總て加へ得べきものである。さりながら、ナポレオンは此犧牲を國民に要求した。さうして、此犧牲に依つて國民として大いなることを爲さむと努力した。

斯うして、ナポレオンがしようとしたことは何であるかと云ふと、前に言つた

通り

イギリスの海權を破壞して取つて之に代らむとするに在つた。ナポレオンがエジプトを遠征した目的も茲に在つた。イタリーとオーストリアに勝つた若いナポレオンは斯う云ふことを言つた。『エウロッパはアジアのやうな光榮のある戰功を現はし得べき土地ではない。大いなる帝國、大いなる革命は、唯だ東洋に於いて之を發見することが出來る。此エウロッパの小さい一角では、我が光榮を十分に現はす譯には行かない。我等は是非、東洋に行かなければならない。世界の總ての英雄は皆な東洋に於いて名聲を揚げた』と言つた。彼れの志はイギリスの海權を破壞し、之に代つて大いなる海權たらむとするに在つた。英國膨脹史（ゼ　エキスパンション　オフ　イングランド）を書いたシーレー教授が『第十八世紀の大事紀は、ルイ第十四世の世からナポレオンに至るまでの

ナポレオンコード

國教確立

新世界の領有に關するイギリスとフランスの格闘史である』と言つたのは、正に此意味であつて、ナポレオンはイギリスと大相撲を取つて、イギリスの海權を奪はうと試みた英雄であつた。

ナポレオンは又、例のナポレオン　コード（法典）を作つた。國教を確立した。

ナポレオンの國教確立は前に申した大國の時代の理想、即ち國王は同時に法王でなければならないと云ふ主義の始めて事實に於いて現はれたものであつた。

ナポレオンは、フランスの諸僧正たちはフランスの國の首領（其時、ナポレオンは第一コンシュルであつた）の下に自分の役目を保たなければならぬと云ふことを主義にして、ローマ法王と此主義に依つて契約をした。佛國革命が破壞したフランスの宗教を再び恢復した。これは法王の方から言ふと『教會と國家は日月の如く相竝んで兩立すべきものである』と云ふ權利を犧牲にしたもので、精神界に於ける國家の至上權を確立したものである。宗教がナポレオンに依つ

政教兩立主義全く破壞さる

て恢復されたと云ふことは、ローマ法王の喜ぶべきことで有つたには違ひ無からうけれども、之と同時に、總てのフランスの宗教家はフランスの主權の下に働かなければならない。其役目をフランスの主權の下に受けなければならないと決つたことは、教會が國家と對抗すべき權利を抛つたものである。ローマ教會の政教兩立主義は玆に至つて全く破壞されて、國家の元首は俗世の王にして同時に精神界の王であると云ふことを認めたものである。故に、其時代のフランスの宗教家は『法王が意氣地が無いから、こんな約束をナポレオンにした。おれは俗人たるフランスの主權者から宗教家たる役目を受けるのを屑しとしない』と言つて、大分不平を言ふ者も有つたけれども、遂にナポレオンの思ふ儘になつて仕舞つた。

此事實は我々の最も注意すべき所である。强國の時代になつては、宗教も矢張り國家の一つの機關になつて仕舞つたのである。それゆゑ、ナポレオンが千八

百〇五年（光格天皇、文化二年）の三月二十六日に、エムペロルの冠を戴き、帝號を稱するやうになつたが、其

ナポレオン帝の戴冠式

戴冠式

の日でも、ローマ法王の手から帝冠を受取らず、自分の手で自分の頭上に帝冠を載せた。彼は政教は兩頭の蛇だと云ふ教會の主張に對抗して、國家の至上權を主張し、成功した。現代の國家は總て此方針に向つて進んで行く。

ナポレオン英國工業の壓制に對して歐洲の工業に生色を與ふ

ナポレオンの仕事で、我々の最も興味を感ずるものは、彼がイギリスの工業の壓制に對して、エウロッパの工業に新しい元氣を與へたことである。合衆國の獨立が、イギリス工業の壓制に對する反抗であつたことは、前に話した。ナポレオンの事業も、此點に於いては合衆國の活動に似て居る。ナポレオンは、コンチネンタル　システム（大陸聯合鎖港）と云ふことをして、イギリスとの貿易を絕つて仕舞つた。或る人が之を批評して『ナポレオンは港を鎖めて、自分の

大陸聯合鎖港

ナポレオンは國力の基礎は土地と工業なることを知る

大陸聯合、鎖港、諸國の製造貿易に生色を生ぜしむ

帝國の商賣を滅ぼした。言つて見れば經濟的に自殺したものであつて、フランスに取つては大きな禍であつた』と言つたけれども、これは楯の半面を見た妄評である。ナポレオンは、イギリスの工業品が大波の寄せ來る如くに、エウロッパ諸國に寄せて來て、エウロッパ諸國が其横暴なる競爭に堪へないで、少しも振ひ興らないことを知つて居た。ナポレオンは、昔の國の基本となるべき力は土地であつたが、ナポレオンの時代には土地の外に工業が土地に讓らざる基礎であることを知つて居つた。さうして、工業を盛んにするには、イギリスの自由競爭を防がなければ迚も發達しないと云ふことを信じて居た。今の時に當つて自由貿易主義などを執つて、イギリスの工業品の市場に横行濶歩するのに委せるのは國を亡ぼす術であると、ナポレオンは思つて居た。故に、ナポレオンは大陸聯合鎖港をやつて、イギリスの商品、工業品の競爭を抑へて、自分の支配の下に屬するエウロッパ諸國の工業に元氣を附けた。ドイツ工業は之が爲

彼は強國たるに甘んぜず進んで帝國を建設せむとせり

羅馬が數世紀にて爲したることを彼は一代にて爲さむと試みたり

め始めて稍〻生色を生じた。其外の大陸諸國の工業も、今まではイギリス工業の自由競爭に依つて、殆ど滅亡の狀態に在つたが、元氣を恢復して來た。現代の大陸の工業は、實に此時に於いて其將來發達すべき基礎を作つたと言つても宜い。これはナポレオンの事業を觀察する者の忘れてはならぬことである。さりながら、ナポレオンは餘り進み過ぎた。彼は唯だ強國たるに甘んぜず、進んで。

世界を統一すべき帝國

を建設しようと云ふ野心を起した。彼はエウロッパを諸國民を聯合した大聯合國にしようと思つた。丁度、ローマが都市の國の聯合體であつたやうに、大小の國の聯合體を造り、フランスを其中央に置いて帝權を振はせようと考へた。ローマが數世紀かゝつてした仕事を、彼は一代にして成功しようと試みた。併し、これはナポレオンの時代に於いては難しいことであつた。ナポレオンの時

カーライル、ナポレオンの不成功に終りし原因を評す

英國善く其位置を維持し其海權倍々強くなる

代のやうな機械工藝の十分に發達しない時期に於いては、彼れの絶大なる努力も此大事業を成功するには足りなかつた。方々の國には皆な其國固有の歴史があり、固有の國民性がある。ナポレオンの威力を以てしても、其國民性を蹂躙し、若くは無視して、其上に帝國を建てようと云ふのは、其時代に於いては無理な仕事であつた。カーライルは此ナポレオンの不成功に終つた原因を批評して『世界はなんぼ何でもナポレオンの脚臺の下に蹂躙されべきものではない、世界はフランスとナポレオンの脚臺になる爲めに、神が造つたものでは無い』と言つた。さりながら、是れはナポレオンの時代にのみ出來なかつたので、將來出來ないと限るべきでは無い。兎も角もナポレオンの時代に於いては、稍々無理な仕事であつたから、彼れの帝國建設は空望に歸して仕舞つた。

此時代に於いて、さすがにイギリスは能く自分の位置を維持して、其海權を少しも失はないのみならず、倍々強くした。なぜ、ナポレオンのやうな俊傑も、イ

一衣帶水ナポレオンをして英國に加ふる所ある能はざらしむ

ギリスを破壊することが出來なかつたのであらうか。何よりもイギリスの味方であつたのは、イギリスの文明でもない、イギリス人の人格でもない、イギリスの天然の位置であつた。あの僅かな一衣帶水とも云ふべきイギリス海峽あるが爲めに、ナポレオンは遂にイギリスに志を逞しうすることが出來なくなつた。若し、あの海峽を六時間ナポレオンが占領することが出來たなら、ナポレオンは確かにイギリスを破壊する目的を達したに違ひない。さりながら、此海峽をどうすることも出來なかつたが爲めに、ナポレオンは遂にイギリスに痛撃を加へることが出來なかつたのである。對馬海峽あるが爲めに、豐太閤が朝鮮に新日本を建てること能はざりしと同じ理窟である。併し、イギリスに取つては、唯だ天然の位置ばかり恃んでは居られない。イギリス人は能く努力してナポレオンに抵抗した。

擧國一致內閣、卽ち衆才內閣

ナポレオン戰爭時代の英國民重税を甘んず

英國は依然として大なる海上權なり

と云ふのも、此時代に出來た。當時、イギリス國民は、非常な強い、一寸一分にまでも課けられると云ふ非常な重い租税を我慢した。さうして其租税を集めて、フランスの敵たるエウロッパ大陸の諸國の補助金若くは貸金にした。イギリスがポルトガル、ロシア、スペイン、オーストリア、ドイツ等の諸國に貸した金は、佛國革命以來、ナポレオンの騷ぎの濟むまで、五千七百萬磅に及んだ。其時代の五千七百萬磅であるから、すばらしい金である。其金をイギリス人民は少しの不平も言はずに出した。之に依つて、イギリスは大陸諸國の同盟を維持し、フランスの海上の商業を破壞し、フランスの植民地を取り、海權の競爭者としてのフランスの主張を全く破壞し得た。さうして、イギリスはナポレオン戰爭の嵐が濟んだ後、依然として大いなる海上權であつた。依然として廣い商業を營んだ。總ての他の諸國よりも多くの富を集めることが出來た。ナポレオンの事業は斯樣な次第で遂に成功せずに仕舞つたけれども、ナポレオ

ンの刺擊に依つて、エウロツパの諸民族は、民族同士一つになつて一つの國家を造ること、則ち

民族的國民主義起る

民族的國民主義

と云ふものが起つた。前の大國の時代の國民主義と云ふのは、其範圍がまだ小さかつたけれども、今度は同じ種族を一つの國民に結び付けようとする大きな意味の國民主義が起つて來た。之が爲めにイタリーが統一し、今日のドイツ帝國も興つた。或る意味から言へば、之が爲めに我が日本も幕府を亡ぼし、大名を倒して、國民的統一に趣くことが出來た。其中でドイツ帝國の創造は最も著しいことであるから、少しドイツに就いて話して見たい。

ドイツ帝國の現出に付いて話さうと思ふならば、もう少し前の時代から詮議して行かねば、それがどう云ふ次第で種族的國民主義に依つて統一されるやうになつたかと云ふ原因が分らないから、少し逆戻りするが、昔の小國の時代から

フレデリツキウイリアム

有力なる軍隊を造る

話して行かう。

先づ、上古、中古のことは暫く論ぜず、近世になつて今日のドイツを造つた最初の力は誰に在るかと繹ねて見ると、今のホーヘンゾーレン家の先祖であつたブランデルベルクと云ふ所のエレクトル（選侯）の

フレデリツキ　ウイリアム

と云ふ人の歴史に遡らなければならぬ。彼は有名なるプルシア王フレデリツキ大王の曾祖父である。此人が詰り現代のドイツの政治主義を小さな雛形で現はしたと言つても宜い人物であつた。先づ彼はエウロツパでは餘り大きな國でなく、しかも世間から輕んぜられた小國でありながら、國家の將來の運命は、どうしても有力な軍隊を必要とすると云ふことを思ひ定めて、軍隊を拵へ直した、其量でなく其質からのみ言へば、エウロツパで最も恐るべく、最も有力な軍隊を造つた。唯だ惜いかな、人數は甚だ少かつた。併し、軍隊として何人も之に

歳入を增加す

農工商を奬勵す

貴族を壓し中央集權の制を堅固にす

外交に注意深くす

對して其向ふに回ることの出來ない立派な軍隊であつた。今までは其國の財政が極不確かで、臣民の寄附金に依賴したのみで、一口に言へば『其日暮し』の哀れな遣り口であつたのを、大いに財政を改めて國の歳入を增加した。臨時の寄附金などに依賴して國政を支へると云ふやうな、アヤフヤなことをしないで、堅固な財政の上に國を建てなければならぬと云ふ主義を確定した。それから、農業、製造、商業など政府自ら干渉して奬勵し、補助金を與へて其發達を助けた。一言にして曰へば、國力の開發に骨を折つたのである。又、從來は我儘であつた貴族を押へ付けて、中央政府の權力を堅固にした。外交に於いては、彼は非常に注意深くして、なか〳〵損をするやうなことはしなかつた。さうして、約束にも義理にも囚へられるやうな馬鹿正直でなくて、隨分思ひ切つたことをやつた。詰り、彼れの外交術は臨機應變主義であつて、自國の利益になれば何でもする、何ものにも囚へられないと云ふ方針でやる。『どうせ人間の信義など

大儒的物質主義

フレデリッキ大王起る

予は國家の頭等の僕なり

云ふものは、當てにならないものであるから、唯だ力づくで行くが宜い、此方に立派な軍隊があり、財政が整頓し、國の富が進んで居れば、其他は恐るゝことは無い、自國の利益になることなら何でもする、損をしないやうにするが宜い』と云ふ、人の惡るい物質主義（シニカル　マテリアリズム）を以て、彼れの外政の全般を支配して居つた。歷史家の中に『此フレデリッキ　ウイリアムの遣り方は後のドイツの政治家のすることを悉く代表して居つた、全く此主義をドイツは今日まで續けて居る』と言ふ者もある位である。

此フレデリッキ　ウイリアムの同じ主義を繼いで起つた者が、其曾孫たる名高い

フレデリッキ大王

である。彼はいろ〳〵の短所も有つたけれども、併しながら感心なことには、彼は國王としての責任を深く感じて居た。さうして『自分は國の第一等の公僕（フォルスト　サーバント）である』と言つて居つた。彼は公僕の意味を能く知

彼れの成功の祕訣

有力なる善く訓練された軍隊を造る

壯丁の七分は軍隊に在り

國費を軍費に充て

つて居つて、少しも自分の仕事を怠らなかつた。彼は『自分の權勢を振ふことは則ち自分の義務を盡すことである』と固く信じて居た。さうして、自分の領地たるプルシアを、エウロッパに於いて有力なる強い國にすることに於いて成功した。彼れの成功の祕訣は、畢竟、フレデリッキ　ウイリアムのしたことの線を履んで、其儘進み、其意義を擴張しただけである。先づ彼は大きなる軍隊を造ることに努力した。其時代のプルシアは、人口の上から言つても、富の上から言つても、第二等國であつて第一等國ではなかつた。さりながら、彼は此第二等國に於いてエウロッパの大國を後へに瞠若たらしむる程の大きな力のある善く訓練された軍隊を造つた。プルシアの若い者の七分の一は軍隊の中に這入つて居たと云ふ程に、彼は軍隊を有力ならしむることに努力した。さうして、兎も角も恐ろしい軍隊を造り上げた。斯様に、軍隊にのみ其精力を集中して、國の費用の大部分をそれに用ゐたから、他の費用は節約しなければ成らなかつ

其他の費用は極めて節約す

七年戰

た。プルシアは海岸を有つて居るから、曾祖父王の時代には海軍を造り、植民地にも手を出さうとしたが、今そんなことをしては費用が方々に散つて、自分の理想とする有力な軍隊を實現することは出來ないから、領分が海岸にあるにも拘らず。海軍を廢して仕舞つた。植民地を得ようとする希望も抛つて仕舞つた。役人には極めて廉い給金を與へ、エウロッパに行つて居る彼れの外交官などもゝ、他の國の外交官の贅澤には似ず、大概其駐在する國の都で、公使自ら膝栗毛でテク〳〵歩くと云ふ騷ぎ。偶に馬車に乘れば、極粗末な破れ馬車を用ゐた。斯う云ふ風であつたから、宮廷の費用なども非常に儉約で、嗅煙草の汚染の附いた古い外套を大王自ら一生著て居たと云ふ話もある。謂はゆる『一狐裘三十年』と云つたやうな體裁であつた。

彼は兎も角も斯うして强い軍隊を拵へた。此軍隊あるが爲めに七年戰と云ふ名高い戰爭にも堪へることが出來た。此軍隊は決して國民の犧牲を無駄に要求し、

國民の粒々辛苦した租稅を無益に濫費したものであるとは言へない。なぜなれば、彼は此軍隊あるが爲めに、ドイツの歷史に永久に感謝せらるべき仕事をして居るからである。

スパッヒの戰

此七年戰の中で、彼は

ボスバッヒ

と云ふ所でフランスの大兵を打破つたことがある。此一戰は其精神的影響が非常に大きいものであつた。一體、ドイツ人は兵隊として言へば、世界で最も良い最も強い兵隊の一つであつた。併し、ドイツ人全體としては未だ曾てフランス人と戰つて勝利を博したことは無い。新井白石の采覽異言と云ふ本に、其時代の日本に來たオランダ人のドイツに關する話が出て居て、ドイツは國民全體が一つになれば強い國だけれども、分れて幾つもの國にな

采覽異言

和蘭說。其國最強。而用兵最難。所以然者。九國之君。其議不合。則不可動衆故也。

ボスバッヒの戰は始めて獨逸人が獨逸人として戰ひしものなり

獨逸人種の血燃ゆ

つて居るから弱いと云ふことが書いてある。これは其通りであつて、其時までドイツ人は一人一人では強く、いづれも勇將猛卒と云ふべきであつたけれども、ドイツ全體としては勝つた例しは無い。然るに、ボスバッヒの戰は、ドイツ人が始めてドイツ人として戰つたものである。ドイツ人種は昔シャーレマン帝國を造つた。其帝國が瓦解して以來、ドイツ人種は未だフランス人に對して、ドイツ人として斯樣な勝利を得たことは無い。然るに、此勝利を得たることに依つて、ドイツ人は始めて國民としての自信力を起した。『これならば、ドイツが一つの國民となつて統一するときは、其兵力は傲慢なるフランスの鼻を突くことが出來る。これは實に愉快なことである』と云ふ感覺がドイツ人に起つた。アルプス山の北からバルチック海の南に至るまで廣がつて居たドイツ人種の國々に住んで居る大いなる人民の血は、此戰に依つて燃えた。『斯うならば我々も心掛次第で大國民になることが出來る。ボルテールだのボイリユーなどと

云ふフランスの文學者の書いたものばかり孜々矻々として讀んで居るには及ばない、我々も國民的文學を起すことが出來るに違ひない』と云ふ感覺も、此戰勝に依つて起つた。詰り、今まではフランス人を御師匠樣にし、フランス文學を又無きものに思ひ、フランスの國民的統一の力には到底抵抗することが出來ないと思つて居つたドイツ人が、此戰勝の結果に依つて自信力を恢復したのである。

獨逸人自信力を恢復す

唯だ此一つの戰爭でさへ是れだけの結果が有りとすれば、フレデリッキ大王の作れる軍隊は決して無益の犧牲を人民に要求したものでないことは明かである。

フレデリッキ大王の事業

フレデリッキ大王の事業

を言ふと、彼はプルシアを富ますことに骨を折つた。盛んに外國から百姓を移民させた。田畑牧場を開拓した。小麥、燕麥、野菜、馬鈴薯、煙草などを植ゑるやうに國民を促した。牧牛、牧馬を獎勵した。鑛物を肥料に使ふことを敎へ

獨逸人を興奮せしむ

た。關稅法を設けて國の製造工業を奬勵した。水陸運輸の便を開き、交通機關の發達に骨を折つた。銀行を設立した。斯うして彼は國の兵力を强くすると共に、國の富を裕かにすることに力を盡した。彼れの事業に關して殊に感ずべきことは、彼は國民敎育を盛んにする必要を認めて、生活に一定の標準を設け、其標準に達した家庭の小兒は、悉く學校に行くことを命じたことである。彼れの事業を語れば限り無いけれども、國民敎育に深い注意を拂つたことは我々の殊に忘るまじきことである。

斯うして彼れの事業はドイツ人に元氣を與へた。ドイツ人を興奮させた。ドイツ人は全體としてフレデリッキ大王の事業を誇り、他日ドイツは世界に於ける一つの力になることが出來るであらうと云ふ信仰を起した。則ち、ドイツ人の大國民となり得べしと云ふ自己暗示は、フレデリッキ大王あるに依つて濃厚になつた。

外交家としての態度

獨逸人の國民的自信力眠る

フレデリツキ大王の殊に其曾祖父王に似たことは外交家としての彼れの態度である。彼れの外交も矢張り自己中心主義である。さうして、注意深く鄰國の狀態を觀察した。エウロツパの何處の朝廷でも、彼に使はれて其國の內景を報告する者があつた。

然るに、フレデリツキ大王が、あの世の人になつてから、ドイツ人の國民的自信力は再び眠り始めた。さうして、ナポレオンの大打擊に依つて、ドイツは殆ど粉微塵にされた。ボスバツヒの戰に依つて、ラテン人種、ケルツ人種の文明を代表するフランスを破つたことを誇つたドイツ人種は、再びフランスの脚の下に跪くべく見えた。ドイツはもう再び起ちさうも無かつた。さりながら、ドイツ人の中には依然としてフレデリツキ大王が一たび振ひ起した暗示が殘つて居つた。さうして、此國民的暗示に導かれて、ドイツ國運の再造に努力した者を

シャルンホルスト

ナポレオン普漏西の兵數を四萬二千に制限す

は誰であつたかと云ふと、プルシアの大臣

シャルンホルスト

であつた。彼はナポレオンの壓制に對して、プルシアの軍隊を再び造り直した豪傑である。千八百〇八年（光格天皇、文化五年）のパリー條約で、ナポレオンは勝者の權に依つて『お前の方の兵隊の數は四萬二千人で澤山だ。それより餘計には兵隊を置くことはならぬ』とプルシアに命令をした。如何にプルシア人がナポレオンに對して復讐しようと思つても、僅かに四萬二千人の兵隊では孟賁の勇ありと雖も奈何ともすることは出來ない。どうか此兵數の制限を其儘にして置きながら、其實巧く掠拔けて、兵隊を殖やす道はあるまいかと、シャルンホルストは考へた。或は後備軍、或は民兵、或は地方兵と云ふやうな名を假りて、ナポレオンの目を掠めて他に兵力を養はうとも思つたが、ナポレオンはなか〳〵そんなことに瞞されるものでないから、屢〻謀の裏を缺かれた。茲

ナポレオンの耳目を欺いて十五萬の兵を養ふ

に於いて、彼は常備軍の短期制度を立てた。則ち、短期の間に約束だけの四萬二千人を養成して、期限が來れば、それを直ぐと解散し、次の兵隊を造ることにして、順繰り順繰りに短い期間で國民を兵士たるべく訓練して居つたから、其散じて民間に在る者が未だ全く軍隊たる訓練及び軍人たる氣概を失はない間に、次の兵隊が出來る。此手段に依つて彼はナポレオンの耳目を欺いて、實際十五萬人の兵士たるべき資格ある者を養ふことが出來た。これがヱウロッパの今の徴兵制度の眞實の起源である。丁度、五年目に十五萬人の、戰場に送り出し得べき訓練ある兵が、兵營及び兵營以外に出來上つたときに於いて、プルシアはナポレオンのモスコー敗戰の後に乘じて、それを用ゐ、彼を敗ることが出來たのである。

これは政治家のことであるが、ドイツには又、思想家でナポレオンの敵になつた偉い人がある。それは言ふまでもない

ナポレオンの勢威に抗し國民を激勵す

フィヒテ

其人である。彼は、佛教で『萬物心造』と云ふやうな哲學を唱へたもので『此森羅萬象は何であるかと云ふと「我」（エゴー）の造つたものである』と云ふことを主張した。『萬有は其儘靜止の狀態に在るものは無い。「我」が始終、萬有を造つて居るのであるから、萬有は常に造られつゝあるものである、則ち一の意思が始終活動して居るのが宇宙萬有の實相であるから、我々は何かしなければならない。物をする力の本たる意思、此意思を魂の案內者として何かしなければならない。本當の値のある人間と云ふのは何かと云ふと、何かする人である。死ぬことを構はない、死をすら超絕して意思を强行するものである』と云ふのが、彼れの哲學である。彼は此哲學を應用し、ドイツ國民を鼓舞して『强き意思を以て働くべし。ナポレオンを破壞すべし。個人は國の犧牲となつて其意思を强行すべし』と云ふことを主張し『ドイツはナポレオンの壓制から獨立

普魯西軍ナポレオンを破る

しなければならない』と唱へ、ナポレオンの軍威に抗して、國民の自信力を確めることに骨を折つた。

政治家にシャルンホルストがあり、哲學者にフィヒテがあつて、ドイツは國民的元氣を復活することが出來た。さうして、千八百十三年（光格天皇、文化十年）の大戰に於いて、プルシアの軍隊は見事にナポレオンを打破つた。其時代には、ドイツ大學の生徒は、フィヒテ其他の論に動かされて『國の獨立の爲めに戰はなければならない、今の時に方つて學校で本を讀んで居るのは間違いことである』と言つて、書卷を抛つて戰場に赴き、フィヒテ自身も講壇から直ちに戰場に飛出すと云ふやうな勇氣を出した。

國民主義及び獨立の叫び

國民主義及び獨立は、當時のドイツ青年の叫びであつた。ドイツ人の此愛國心は、ヨウロッパの獨立を導き出して、ナポレオンの事業を破壞することが出來た。

獨逸人中世の盛時を回想す

新獨逸帝國成る

斯うして、ドイツ人はナポレオンを破つた後、始めて中世時代のドイツの盛んであつたことを思ひ出した。『中世にはシャーレマンと云ふ豪傑があつて、大きなドイツの帝國を建てた。オットと云ふ豪傑があつて、神聖ドイツローマ帝國を建てた。我々も其子孫である、同じ血肉である。どうか再び新しいドイツ帝國を造りたいものである』と云ふ氣分が、懷古の感情と共に起つた。此に至つて、中世のドイツ文學の研究に對する新しい興味を持つやうになつたドイツ人は、ドイツ人自身の光榮に關する甘い夢を見るやうになつた。ドイツは之に依つて段々に統一したる强國たるべき氣運に向ひ、千八百七十一年(明治四年)に新しいドイツ帝國が出來るやうになつた。これが現代ドイツ帝國現出の由來である。

强國

十三　强國の時代進んで帝國の時代とならむとす

ナポレオンの死んだ後、同じ人種を一つの國民に結び付けようとする努力の結果として現はれた諸强國の起つたこと、及び其著しい例であるドイツのことは前に話した、强國とは一口に言へば世界の事務を同等の國だけで決めて仕舞ふことの出來る程の力を有つたものである。斯う云ふ國は昔は決して無かつたものである。ウエストファリア條約時代から此强國の起るまでは、文明の諸國は國として殆ど同權であつて、國際間の難問題を解決すべき會議の開かれる場合には、諸國皆な同等の投票權を有つて其會議に列なり、又其會議を動かしたものであつたが、既に强國が出來て後は、其强國だけの協議で世界の事務を解

強國、世界の政を爲す

決して、他の國は唯此決議に對して『イエス』若くは『ノー』と言ひ得るだけのことになつて仕舞つた。即ち強國相合すれば以て世界に號令するに足りる力となり、強國同士の聯合若くは敵對の狀況に依つて世界の問題が解決されるやうになつた。國際法學者は此狀態を評して『強國、世界の政を爲す』と言つて、これが第十九世紀の特徴であつた。さりながら、世の中の進步は恐ろしいもので、此強國の時代も、いつしか過去のものになつて、更に帝國の時代に進んで行かうとして居る。私は今それに付いて、如何にして強國の時代が帝國の時代になるべく進んで來たかと云ふ事情を話して見たい。

科學の大進步

科學の大に進步したこと

それに付いては、先づ

を言はなければならない。世界の國の建て方がいろ／＼に變つて來たことは、畢竟、機械の進步した結果である。小銃と云ふ機械が出來た爲めに封建制度が

蒸氣機關

紡績機械

水力紡績機

瓦斯

蒸氣機關を鐵道に應用す

亡び、大砲と云ふ機械が發達した爲めにナポレオンの事業が興つた。科學の進歩は世界の歴史を通じて一日も止んだことは無い。殊に、第十八世紀の末から現代にかけて急激の進歩をした。千七百六十九年（後櫻町天皇、明和六年）に、ゼームスワットが始めて蒸氣機關の特許を得た。千七百七十年（後櫻町天皇、明和七年）には、ゼームス　ハルグリーヴエスが紡績機械を發明した。其翌年の七十一年（後櫻町天皇、明和八年）には、アークライトが水力紡績機を發明した。それから段々いろ／＼の機械の發明があり、千八百〇八年（光格天皇、文化五年）には瓦斯の使用が始まり、千八百三十年（仁孝天皇、天保元年）には蒸氣機關を鐵道に應用することが起り、謂はゆる

蒸氣の時代

なるものが起つて來た。科學の進歩は蒸氣の時代に入ると共に愈々其歩を早めて、近頃ではラヂウムが發見され、無線電信が發明されるやうになり、殊に電

電氣時代

大機械の時代

筋力の時代

氣の應用が著しく大仕掛に世界の事業に施されるやうになつたので、之を

電氣の時代

と云ふ位になつた。

斯う云ふやうに、科學が發達した爲めに大きな機械が起つた。則ち

大機械の時代

になつた。世界が大機械の時代になるまでの經過に付いて、ちよッと話して見ると、昔は一口に言へば

筋力の時代

であつた。物を造ることも、物を運ぶことも、皆な筋力でやつて居つた。勿論さう云ふ手足を勞して何事でもする時代でも、機械は或る程度までは用ゐられて居た。けれども、機械を用ゐる力は、人或は牛、馬であつて、畢竟、筋力を唯だ大仕掛にしただけに過ぎなかつた。其時代の機械は、一言にして曰へば筋

力の代表物であつた。此外には纔に船とか、風磨、水車などばかりであつた。斯う云ふ時代には勿論、物を運ぶことは盛んにはいかない。運送の道具としては馬と車があるばかりであつた。帆船は其時分でも可なり遠い所まで大きな物を持つて行くことが出來た。そこで、都市は海の港か、それでなければ河の港若くは其近接地に建てられたものである。斯う云ふ時代のことだから、工業も無論、大仕掛でなく、職業と云へば大概、主人自身、或は主人と他の少しばかりの人とで組合つて仕事をするだけで、其他は雇人とか弟子とかがあつて、一家の中の仕事をして居つたが、皆な寄せても幾らも無い少數のものであつた。さうして、彼等は自分の造つた物を自分の物にして直ぐと賣出した。弟子だの雇人だのと云ふ者も、主人と階級の違つた人間ではない、軈ては主人になることの出來るものであつて、主人の家に於いて主人と友達附合で生活することの出來るのであつた。斯う云ふ時代だから、言つて見れば其所に働いて居る者は

皆な獨立自由の人間であつて、其仕事は一個人の小さな私有財產を土臺とする纔かな仕掛のものであつた。製造家は、前に言つた通り自分の筋力を動かして働く、謂はゆる

手の工業者

手の工業者

であつて、自分の家庭を有つて居り、自分の牛、羊を牧し、自分の雞を畜ひ、自分で原料を仕入れて、自分の妻、竝に雇人とそれを製作して、市に持出して其賣上高はすツかり自分の手に收める。斯う云ふ時代に於いては家庭が經濟上の一單位であつて、個人的財產の上に製造工業は立つて居るものであるから、家庭の道德は仕事と密接の關係が有り、女は男に從屬するものとして働いて居れば宜いのであつた。

家庭が經濟上の一單位

其時代には、封建制度の慣習が產業の上にも、まだ遺つて居つて、組合と云ふものがあり、又組合の有つて居る特權は他の者の侵すことの出來ないと云ふ仕

組もあり、雇人、弟子などに對しても、それ〳〵一定の同じやうな制限があつたが、それは佛國革命時代に取去られて、小資本家は皆な自由を得て自分の財產を自由に處置することが出來た。ところが、前に言つたやうな大きな機械が科學の進步に連れて出來て來たから、今度は大きな資本を使ひ、大きな機械を造り、大きな製造所で仕事をしなければならない時期が來た。此大機械の時代が來た爲めに、從來の製造工業に從事した一般の人民は、俄に荒浪の中に乘出したやうな狀態に陷つて、驚心駭魄の天地に飛込まなければならぬやうになつた。さうして、其波瀾が今日に至るまで未だ治まらずに居る。其狀態に對して歷史家が

產業的革命

產業的革命(インダストリアル　レヴォリューション)

と云ふ名を付けた。一體、レヴォリューションと云ふのは政治の革命のことであるが、此激變は政治の革命に讓らない、それよりも恐ろしい激動を人間社會に

與へたから、其言葉を假りて、レヴォリューションと言つたのであるが、此レヴォリューションは佛國革命よりも恐ろしい變化を人心に與へて、さうして今日でも其變化が何處まで行つて窮まるか分らない位な勢ひで、猶ほ其進みを續けて居る。

遲緩と急激

規律と不規律

製造方法の一定と不一定

產業的革命の特徵を言ふと、いろ〳〵ある。前の時代には、產業の進步が極緩くりであつた、十年前の商賣と十年後の商賣とは左程の差異は無かつた。然るに、此時代になつては、其進步が實に急激になつた。前の時代には、何事も規律が立つて居て、其規律も容易に變化することは無く、正しき規律の下に工業も商業も行はれて居た。然るに、此時代に於いては、全く不規律で、まだ規律が立たない、今以て火事場のやうな騷ぎである。前の時代には、製造の方法も一定して居つたから、人が產業の將來に付いて豫期することが出來た、『斯うなれば、斯うなるだらう』と云ふことを、豫め知ることが出來た。然るに、此

時代になつては、物を造る方法が殆ど日々のやうに變り、新規の發明品が日を逐つて出ると云ふ風であるから、人は産業の將來を豫期することが出來ない、どうなるのだか、殆ど見當が附かない。言つて見れば

大暴風雨の中に立つて居るやうな有様

である。前の時代には、人間の收入の高が年々大概定つて居た。ところが、此時代には少しも定らない。前の時代には、必要の爲めに物を造つた、需要があつたから物を造つたのである。經濟學者の言ふ需要供給の理法は、前の時代には殆ど理想的に行はれた。然るに、此時代には物を多く造り過ぎる。屢々生産超過に陷る弊がある。なぜだと云へば、大きな機械で大仕事をするのだから、機械の運轉それ自身が需要供給と調節するのが餘程むつかしい。おまけに前に言つた理由で、主もに外國の市場を相手にして仕事をするのであるから、市場の變化もなか／＼豫測することが出來ない。どうしても物の造り高が、賣ること

收入の一定と不一定

需要供給の不準と生産超過

の出來るよりも餘計に出來る傾きがある。機械が非常に大きくなつたから、其機械を纔に運轉すれば、人類全體の需要を充たすに足る位の物が出來るのであるから、屢〻機械が働き過ぎる。前の時代に於いて人間の恐れたことは、物の足りないと云ふことで、饑饉は前の時代に於いて人間の最も恐れる所であつたが、此時代に於いて人間の恐れることは、物の足りないのでは無く、物の多過ぎることである。製造家は屢〻市場に有り餘る物を造る。さうすると『これは可かぬ』と云ふので、俄に勞働者の數を減す。謂はゆる恐慌、不景氣などと云ふものが起つて來る。さうすると、勞働者は、餘り多く品物を造つた爲めに、製造場を減され、或は仕事を減されて、自分の仕事を失ふが爲めに饑ゑなければならない。例へば、餘り多く薪を造つたが爲めに、薪の需要が減じて、薪の會社が人減しをする。詰り、薪を餘計に造つたが爲めに凍えると云ふ

資本家生す

貧富の兩極端

譯になる。此生産超過は産業的革命の生んだ著しい病氣である。アメリカでは十年に一度此恐慌が來る。他の國は大抵三年に一度來る。其恐慌、其不景氣は、皆な大きな機械が運轉し過ぎて、需要供給の調節を誤つた結果である。

此産業的革命の時代は、前に言つた通り大機械の世であるから、資本を集中しなければならない。隨つて、資本家なるものが生れて來た。前の時代には、物を造る機械、物を造る方法は、製造工業に從事する者は誰も皆な有つことが出來たけれども、此時代では、それが大資本家の手に集まつて仕舞つた。そこで、前の時代に見ることの出來ない强大なる富卽ち資本と其支配の下に有つて居る大富豪が起つた。北米合衆國などは自由平等の國と言はれて居るけれども、其實は米國に平等と云ふ事實は少しも存在して居らない。一方に王侯の宮殿よりも立派な所に住んで居る富豪があれば、一方には貧民窟の憐むべき借家に住んで居る平民がある。富は少數の人に集中せられて、彼等は王侯も及ばざる權威

を振つて居る。合衆國の富の七八割までは富豪の手に獨占せられて居る。其富豪は、人民全體の數から言へば、一割ほども無いものである。其富豪の歳入は、エウロッパの帝王よりも多い。これはアメリカばかりの例では無い、世界の何處にも今日は見ることの出來る大富豪現出の狀態である。

小製造家の獨立と零落

前の時代には、人民は誰でも組合に這入れば製造工業に從事することが出來るし、殊に佛國革命後には勿論、何人も自由に製造工業を獨立して營むことが出來、其所に働いて居る職人と主人とは同階級の人民で、職人も自分の勉强次第で、いつでも主人の位置に昇ることが出來たのであるが、産業的革命の時代に這入つては、さう云ふ小さい製造家は皆な大資本家の大工業の競爭に堪へず、商賣を仕舞つて都會に集まり、製造所に這入つて職工になつて仕舞ふ。英國の歷史家が誇つて居る英國中等階級の存在も、斯うして全く無くなつて仕舞ふべ

き勢ひになつた。大きな町の一部に貧民窟が出來て、中等階級の產業的革命の波瀾に堪へず、墮落した者は段々其所に沈んで仕舞ふ。職工は前の時代とは違つて、どんなに稼いでも、どんなに踠いても、自分で機械を有つことは出來ない。なぜなれば、其機械は餘り大きなもので、餘り價の高きもので、迚も小資本では買ふことが出來ないからである。『身體と常識があれば、勉强次第で立派なものになれる』と云ふのは、それは前の時代のことである。どのくらゐ健康な、どのくらゐ怜悧な職人が、一生の間、眞面目に働いたところで、永久に主人になる機會は無くなつて仕舞つた。玆に於いて、雇人の階級と主人の階級は截然たる區別が起つて來た。それは丁度、昔の大名と百姓との間に容易にそれを混同することの出來ない隔たりが有つたと同じことである。

前の時代には、

資本

商賣の媒介と生産の機械

は唯だ商賣をする道具であつた。商人とか金貸とか云ふものは金を用ゐる商人の事業を助けるものに過ぎなかつた。然るに、此時代に於いては、資本が生産の爲めの最も有力なものになつた。仕事をするから金を使ふのではない、金があるから仕事をするのである。生産する爲めの元手として資本を用ゐると云ふ意味ではなく、資本に利息を附ける爲めに製造に從事するのである。則ち、資本が生産の直接の原因になつたのである。これも大資本家の起つた場合には已むを得ないことである。何となれば、昔は資本が小さく方々に散つて居つたから、資本の入り用なときは東西南北に引合つて借りることが出來た。併しながら、今は資本が少數の大資本家に集中して居て、資本の入り用なときには、どうしても少數の人の所に持つて行かなければならないから、謂はゆる需要供給の理で、需要が多くて供給するものが少いから、資本に威力の生じたのは已むを得ないことである。おまけに、今は

資本に威力を生ず

大きな機械

を大きな製造所で据付けなければならない時代になつたから、金の大きなものが要る。金の大きな分量を得なければ何事も出來ないから、生産事業をする者は、何を擱いても一番先きに金のことを考へなければならぬやうになつた。昔は上手な職人があれば、其れだけでも仕事が出來た。併し、今は上手な職人を得ることは難しくない、極大切で極難しいことは、大きな金を集めることである。それが無ければ仕事は起らぬから、茲に於いて資本が製造の媒介ではなくて、今は生産の有力な直接原因として現はれて來たのである。

全部と一部

昔の職人は品物の全體を造つた。今の職人は物の全體を造ることは出來ない、大仕掛だから全體に智慧を運ばせることも出來ず、力を用ゐることも出來ない、僅かに物の一部分を造るばかりである。故に職人は物を造つて、それを賣ると云ふ譯には行かない。一人で家に居て御客の註文に應じて造つて賣ると云ふや

造りたる物は賣る能はず唯だ給金を受く

夫婦共稼と商賣敵

うな品は、大機械を運轉する今の世に於いては、時勢後れで、粗末で、而かも價の非常に高いものになつて仕舞ふから、さう云ふ物は出來ない、さう云ふ物を造つても賣れツこは無い。そこで、職人は仕方が無いから、製造所に行つて雇はれて、物の一部分を造る、さうして其報酬として給金を受ける。昔は物を造つて賣つて代價を受けた。代價は御客と相談で決めるのだから、いやなら賣らないだけの話であつた、給金は主人が呉れるものだから、相談で決めると云ふ譯には行かない、いやだと云へば饑ゑるより外に仕方が無い。

昔は仕事は家庭でした。

夫婦共稼ぎ

でやつた。故に、女は男を助けて共に家庭的工業を營んで居た。或る人は之を女が男に從屬した時代だと言ふ。併し、私はさうは思はない。さう言つては少し違ふ。其時代は男女相助けて相從屬して仕事をした時代である、女が男に從

屬して居たのみでない、男も女に從屬して、兩性相待つて仕事をして居たのである。故に其時代は女に權威があつた。日本でも家庭の工業の時代には、女房を家の大黒柱と言つた位である。然るに、大製造所が起つて、總ての仕事を製造所ですることになると、子供も其職工として使ふ、女も使ふ。女も子供も給金を貰ふ、從つて財産を有つ。職人としては夫も子供も妻も實は商賣敵である。家庭が産業の重要機關であつた時代は斯うして滅びて仕舞つた。兩性相從屬する昔の家庭は夢となつて仕舞つた。玆に於いて、昔の道德の土臺であつた家庭は、遂に歷史の上から無くなりかゝつて居る。もうエウロッパやアメリカの大きな工業の町には、昔の小說にあるやうな家庭は無くなつて仕舞つた。男も女も夫も妻も子供も製造所と町とに働かなければならない時に、家庭の神聖なるものは一體何處に存在して居るのであらうか。

家の大黒柱

獨立と墮落

昔は人民が皆な獨立であつた。自分の造つた物を自分で賣り、客から代價を受

取つて俯仰して天地に愧ぢざる自由の生活を送つて居た。然るに前に言つたやうな工合で、家庭は其神聖を破られて仕舞つた。機械場に引張つて行かれて、唯だ給金にのみ生活する人民は、獨立を失つて仕舞つた。身體に於いても精神にも於いても瘦せて來た、零落して來た。さうして、謂はゆる墮落した細民が多くなつた。イギリスでは今日、貧民稅の恩惠を受けて

國の厄介になつて居る貧民

が一百萬人からある。いろ〳〵の方法で集められた二億六千萬圓の金は貧民の群を養ふ爲めに年々用ゐられる。浮浪少年などと云ふやうなものは極少く見積つても五千人くらゐある。これは極性の惡るい奴である。監獄に行きさうな運命を有つて居る無賴漢、無賴漢よりも甚い、惡黨とでも言ふべき少年男女が三萬人もある。これは産業的革命時代に産出した人生の暗き半面である。

昔は民政の時代であつた。民主主義の原則は確に能く行はれて居た。併しなが

民政時代の富豪の勢力

ら、大きな富豪が起つて、それが段々社會に力を振ふやうになつて來たから、民政は名のみになり、富豪が法律を造る力を有つやうになつた。彼等は議會に出て法律を作るのでない、

彼等の富豪たる魔力

富豪の御用機關

に依つて、政治でも法律でも左右するのである。正義公道を說くべき耶蘇教會の講壇でも、人民の木鐸たる出版物でも、多くは富豪の御用機關になつて仕舞つた。『ロンドンの警察は、世界の秩序を保護する保護者と云ふよりも、寧ろ富豪の使用人で、貧民の敵だと言つて宜い』と、ロンドンの貧民は言つて居る。米國の政治家には、議會の壇上に於いては大口を叩くに拘らず、富豪に依つて自分を支へられ、富豪の利益を圖る爲めに議會で口を叩く奴が多い。米國議會の財政委員などと云ふ中には、關税のことに付いて評議をする時分に、富豪に賴まれて、ちよいと字句の挿入などをする奴がある。彼等が關税の表に一字で

ウォール街の有力者の一顰一笑、大統領選擧に影響す

も挿入し若くは削除すれば、それが富豪の懐ろに非常な相違が起ることを知つて居て、其れをする。彼等はさう云ふことの爲めに富豪に雇はれて、厚かましく政治家などと言つて面を晒して居る。

政治家と鐵道の株屋との結託

は、米國の政治の內幕を知つて居る者には珍しいものではない。ニウヨークのウォール街の有力者は、其一顰一笑に依つて大統領選擧にも非常な重みを與へる。甚しいのにあると、或る國、或る島などを米國に取らせたいと思ふやうなときに、それが自分たちの利益であると見定めれば、金を出して、態々其土地に騷動を起させ『斯う云ふ騷動を米國政府で見て居る譯には行くまい』と言つて、輿論を拵へて（それも無論、金で）米國政府を動かし、其土地を占領させると云ふやうなことをする。詰り弗の爲めに外交をさせるのである。議會や法律は立派に有つても、其議會や法律を自分たちの利益になるべく用ゐる魔力を

有つて居る恐ろしい富豪の存在が今の世の特徴である。前の世は、中等階級が繁昌した時代であるから、

人間の趣味

趣味の中庸と退化

も謂はゆる中庸を得て居つた。然るに、此時代になつては、中等階級は將に滅びむとして居る。或る者は大金持になり、或る者は奴隷に等しき職人となつた。そこで、趣味も矢張り同じやうに退化して、金持の好きさうな、派手な嫌らしい濃厚なものでなければ、凡俗の好む極めて低級なものになつて仕舞つた。それが、文學、美術、總ての方面に通じて著しく現はれて居る。

これまで言つたことは、主もに科學の大進歩が國の內に起した變化であるが、科學の進歩は一國の中に斯樣な產業的革命を起した如く、國と國とを結び付くべき國際的の關係に於いても非常な變化を與へた。例へば昔の都市は海岸か河岸に出來た。併し、鐵道、電信、其他の文明の利器が發達するに連れて、都

市はさう云ふ所で無くても起るやうになつた。さうして、小さな製造が段々滅びて大工業になつた結果として、地方の小都會は衰へて、大都會に人口が集中して、今までの歴史に見ない大きな都會が出來て來た。アメリカでは、今から百二十年ばかり前には、人口の五千以上を有つて居る都市の數は纔に總人口の百分の三であつた。それが、今から二十年ばかり前には、もう百分の三十に近くなつた。今日では都會の人口がもッと多くなつたに違ひない。これはアメリカの例であるけれども、何處でも大きな都會が起るやうになつて來た。前の時代には、

人口増加率の遲緩と急激

人口の增加

も、さう著しくは無かつた。然るに、此時代には、機械、工藝が發達し、貿易が廣く行はれ、人間の健康の狀態も醫學の進んだ爲めに能く保護され、銘々の生活も樂になつた者が多いから、人口は急に殖えて來た。ドイツはアメリカの

テキサス州くらゐしか無い。併し、其人口は現に六千萬を算へて居る。ロシアは、第十九世紀の初めには三千六百萬ばかりであつたが、第十九世紀の終りには一億三千萬になつて居る。イギリスは、其領地を合せて白人種の數が其間に二千萬人から六千萬人に增加して居る。アメリカ合衆國は、其間に五百三十萬人から七千六百萬人に進んで居る。此頃では、アメリカの人口は既に一億以上に達した。

貨幣時代と信用時代

前の時代は、謂はゆる貨幣の時代であつたが、此時代は更に進んで

信用（クレヂット）の時代

になつたと言つて宜い。貨幣は纔に小賣にのみ用ゐられ、大きな商賣になると、爲替とか切手とか手形とか云ふ信用及び信用の道具に依つて行はれることになつた。一口に言へば、此時代は銀行業及び信用の時代になつたのである。

斯う云ふ風に世の中がなつて見ると、商賣を世界の市場でするやうにならなけ

地方市場と世界市場

ればならない。前の時代にも、商賣は何處でしたかと云へば、矢張り都會の市場でしたに違ひない。併しながら其都會の市場なるものは、主として國內の顧客を待つものであつた。然るに、此時代は、市場が世界的の市場になつて仕舞つた。汽車と汽船の運輸が盛んになつて來た。人類は國境を越えて聯絡する一個の世界的團結になつて來た。信用が貨幣に代はる時期になつては、殆ど經濟的の國の境は無い。何物でも世界に賣出すと云ふのが製造家の目的になつた。製造家は利益を得るのが目的である、利益を得る爲めには其品物を賣らなければならない。國內の人民は其品物を買ふほど富んでは居ない。大きな機械でドン〳〵造る物を買ひ盡す程の力は無い。そこで、どうしても外國の市場に賣出さなければならない。外國の市場を自分のものとして有たなければならない。茲に於いて市場は總て世界的になつて仕舞つた。前の大きな都市は皆な世界的の都市となつて發達して來た。故に其大きさも世界的に大きくなつて來た。

これは産業的革命の生み出した變化である。此變化が有つて見れば、どうしても今までのやうに銘々強國に分れて居た時代は、更に之を合した世界的の帝國に移つて行かなければならぬ筈ではないか。現代には其特徴が澤山ある。先づ株式會社、トラスト、ドイツのカルテルなどと云ふやうなものに依つて、世界の趨くべき傾向が分つて居るやうに思はれる。大機械が起り、大工業が起るに連れて、資本も大きくしなければならぬから、

株式會社トラストカルテルの發生

株式會社

が起り、さうして其株式會社がドン〱物を造つて賣出す。さうすると前に言つた通り大きな機械を動かすことであるから、どうしても生産超過に陷り易い危險がある。會社同士互に競爭をする結果、更に其勢ひを助長する。そこで、これでは可かぬ。斯う云ふ風になつては共倒れである、どうかして生産超過の危險を免れなければならぬ、生産と消費の割合を考へて、さうして好い按排に

それを組合せて、恐慌の起らないやうにするには、各會社互に同盟して競爭を避け、さうして商業を獨り占めにするに在る。これが

トラストの起つた原因

である。それで、大抵の品はトラストで買はなければならぬやうに、アメリカではなつて居る。カルテルと云ふのは、ドイツ人の創めたことで、トラストと同じやうなものである。一のカルテルに這入る會社は、合同してカルテルに這入つたのではない、矢張り獨力の會社だけの經營はして居る。各會社は獨立の法人たる資格を有して居る。併しながら、各會社は或る一つの目的を定めて、其目的の爲めには全體の利益を代表する委員若くは委員會の命令に服從すると云ふ約束をして、さうして利益の共通計算をするのがカルテルである。カルテルでは、各會社の生産物が生産超過になつたと思ふときには、其救濟策として製造品の代價を一定し、國の內では相當の價で賣る、例へば國の內では一圓二

ダンピング

十錢に賣る、其代りどうせ品が餘計にあるのだから、外國の市場に對しては場所を見て非常に廉く八十錢くらゐに賣る。なぜなれば、さうしなければ内の工業社會が困る。どうせ餘計に出來るのだから、外には捨賣同樣に大安賣をやる。さうされると、賣られた市場に物を出す他國の商人は非常に困る。折角、或る市場を制して自分の物にした國でも、其カルテルが廉物を賣る。それをダンピングと云ふ。其ダンピングをやられる爲めに顧客を奪はれて、それが緣になつて、とう〳〵市場から退陣をしなければならぬと云ふ情けない結果に陷ることが無いでもない。イギリス人が甚くドイツ人のダンピングを氣にするのは、之が爲めである。

斯う云ふやうに、世界の市場を相手にして、商賣が世界的になつたことは、軈て國がもッと大きなものになつて、世界的の帝國が起るべき下地でなければならない。

機械、主として働き、人は其助手となる

戰爭に於ても亦然り

前に言つた通り大きな機械の世になると、主として働くものは機械で、人間は機械の助手である。人間のすること、則ち人力の達し得べき所は、唯だ機械の働きがする仕事を監視して居て、其機械が時々狂ふことがあれば、それを直すだけである。これは唯だ製造工業の上のみではない、戰爭に於いても其通りで、大きな機械が働いて居る。ドイツのクルツプ會社、エーヤルト會社、スポーター會社、フランスのクールゾー會社、さう云ふやうな大きな會社で出來る大砲は、今度の大戰にも非常な働きをして居る。今日の戰爭には、軍人よりも軍器の方が大問題である。軍艦でも同じことで、謂はゆる大艦巨砲主義で、弩級艦が出來れば又た超弩級艦が出來る。いろ／＼な軍艦型がドン／＼進歩して來て居る。天には飛行機だとか、地には自動車だとか云ふものが、今度の戰爭に使はれて居るが、其飛行機、自動車の力は何處から出る?。あれはガソリンと云ふ油を燃し

ガソリンの戰

武器の進歩は抵抗を不可能ならしむ

人種は必しも混一

て、其油の力で動かすのであつて、詰りとも言へる。斯う云ふ風に、大きな機械、及び大きな機械を組合はしたものが、

ガソリンの戰。

國を毀し、國を造る偉大なる力になつた場合には、大きな富を積み、大きな機械を並べる奴に對しては、如何なるものも抵抗が出來さうにもない。此勢ひで進んで行けば、どうしても世界は合して大きな帝國にならなければならない。ナポレオンの時代に、彼が成功しなかつた原因はいろ〳〵あつたが、其主なる原因は、彼が異つた人種の有つて居る風俗慣習を顧みず、國民的感情を蹴飛ばして、無理にエウロッパを統一しようとしたからであると言はれて居る。ナポレオンが此國民的感情に逆つて世界的帝國を造らうとしたのが、彼れの失敗の原因であるとして、今日でも國民的感情は到底滅ぼすことの出來ないものであるやうに思つて居る人が多い。さりながら、人種的の感情は必ずしも打毀す

とが出來ないものではない。人種的自負心、國民的感情は、成るほど世界を統一して大きな帝國を造るには障碍物に違ひないけれども、今の世に於いて世界的帝國を建てようとする者に取つては、それが迚も飛越すことの出來ない淵だと云ふことは出來ない。大きな機械、抵抗すべからざる兵力で叩き付けたら、遂には其淵が飛越えられ、其障碍物が打毀されて仕舞はないとも言へない。現に普佛戰爭の時などには、ドイツの若い軍人がフランスの國境に這入つて、其田舍を通ると、フランスの若い娘は其兵士の面を見て『美しい男が來た』と言つて、頷いて微笑して迎へたと云ふ話があるではないか。人情には國境は無い。戀にも國境が無い。人種と人種の結合混一は決して昔から例の無いことでは無いから、出來ないことでは無い。若し、大いなる兵力があつて、國民的、人種的の堤防を跡方なきまでに粉碎することが出來れば、異つた人種を混同した大きな帝國を建てることも、今に於いては必ずしも不可能でない。

人口の増加率が前に言つた通り非常に其度を強くしたものだから、諸國の人口も著しく殖えた。其殖えた結果、謂はゆる

人種の侵撃

人種の侵撃と云ふことが始まつた。人種の侵撃とは訝しな言葉であるけれども、詰り他の人種の住んで居る所に異つた人種が割込むことである。アメリカは國が非常に廣く、人が少かつたから、始めは移住民を歡迎した。併しながら、今日では移住民に制限を置くやうになつた。支那人を逐出した、日本人をも逐出さうとして居る。貧弱なエウロッパ人をすら成るたけは入れない工夫をして居る。なぜであらう?。別に不思議は無い、世界の人間が餘り多くなつて、一の人種が他の人種を壓迫する、則ち割込むと云ふ力が強くなつたから、さう割込まれては困るので、それに對する反動が起つたのである。

斯う云ふ風に、人種の割込みと云ふことが既に問題となつたからには、此次に

來るものは

人種の混一

でなければならない。割込むことが迷惑だからと云つて、それを拒絶して居る間は、それでも濟むが、迷惑でも何でも人間の殖えることが激烈である以上は、割込みの次は混一でなければならない。是れ亦、世界的帝國を生み出すべき徴候の一つである。

斯う云ふ時代になつて來たから、同じ時代の特徴として、國際會議に依つて世界の大事を決したいと云ふやうな感情が、諸國の人民の間に起つて來た。千八百九十九年（明治三十二年）に、ロシア帝の主唱に依つて、ヘーグに於いて開かれた

平和會議

は、此傾向を好く現はしたものである。ヘーグでは、各國の軍備を縮小したい、

米國議會の決議

戰爭の殘忍を和らげたい、成るべく仲裁裁判で國際間の紛議を止めたいと云ふやうな相談が出て、イギリスと合衆國の代表者は『仲裁裁判を設けて、面倒な問題を解決するが宜い』と云ふことまで主張したが、それは多くは唯だ希望を述べたに過ぎなくつて、敢て實行された譯では無いが、兎に角さう云ふ感情が國際會議に現はれて來た。成るたけ戰爭をしないで、國際間の妥協に依つて仕事をしたいと云ふことが、人民の要求として現はれて來た。近ごろ即ち千九百十年（明治四十三年）アメリカの議會で斯う云ふことを決議した。どうかアメリカの外交官は下のやうな仕事に盡力されたい。則ち『國際間の協商で諸國の軍備を減じて貰ひたい。國際間の共同の海軍を拵へて、其海軍の力で世界の平和を維持したい。軍備を減少したい。戰爭の起るべき機會を成るべく少くするやうに盡力されたい。さう云ふことに我が外交官は力を盡して貰ひたい』と云ふ決議をした。是れも唯だアメリカの議會の單純な決議に過ぎなかつたが、

外國の感情、內國の政治家の位置を動かす

現代の希望

を言ひ表はしたものであると見て差支へない。今では未だ夢のやうなものである。それが實行されるか、されないかは未だ分らない。さりながら、夢は遂に事實となる時がある。『噂をすれば影がさす』と云ふ諺もある。空想に等しきことながら、世界の人がさう云ふ聯合隊を作つて、協商して平和の世界を生みたいと云ふ感じを表はした其事は、將來に世界的帝國の起るべきことを暗示するものと言つても宜い。

之に附加へて考へべきことは、現代に於いては時としては外國の感情が內國の政治家の位置を動かすことである。例へば、フランスの外務大臣であつたデルカッセ氏がモロッコ問題に於いてドイツ皇帝の機嫌に觸れて、とう〳〵辭職しなければならぬやうになつたのは、其の一例である。他國の帝の御機嫌が惡るいと言つて、自分の國

の大臣を免職をすると云ふのも訝しい譯だが、國と國とが段々密接して來て、其關係が濃厚になつた時代には、斯う云ふことも起るのである。これも世界が大きな帝國に行くべき道を指示すものとして見れば、無意義の現象ではない。

世界聯邦の時代近づく

合衆國の政府は南北アメリカの諸國を統一した一つの同盟を作りたいと平常から思つて居る。南北アメリカが一つの聯邦になると云ふのは、餘り遠い時期ではないやうに思はれる。『エウロッパも、いろ／＼な國に分れて居る必要は無い。一つの外務局を置き、一つの軍務局を置き、共同關税を設けて、アメリカ合衆國のやうにしたが宜いではないか』と言ふやうな人さへ出來て來た。世界は駸々として大きな帝國たるべく進んで居ると言つて宜い。

同時に外交に勝つ能はざれば戰に勝つ能はず

斯う云ふやうに、現代に於いては、外交と戰爭とが極めて密接なものになつた。同時に外交に勝つのでなければ戰爭に勝てないことになつた。

普佛戰爭

普佛戰爭

の時でも、フランスは唯だ戰爭に負けたのみではない、同時に外交に負けたのである。オーストリアとイタリーがフランスと約束をして『エウロッパの事務は、此三箇國が協商してやらう』と言つて、ドイツを除け物にして、三國だけ氣脈を通じて居た。故に、フランスが戰を始める前に、先づオーストリアとイタリーに相談をして、意向を聞いて置いたならば、二國も或はフランスの加勢をしなければならなかつたかも知れない。然るに、フランスは折角、協商が出來て居た二國に相談せずして開戰をして仕舞つた。故に二國はフランスと共同の働きをすることを免れ、局外に立ち、交戰國に對して嚴正中立を守つた。それでもドイツの後ろにはロシアと云ふ怖いをぢさんが居た。若し、此ロシアがドイツの後ろを牽制すれば、ドイツは仍ほフランスに志を逞しうすることが出來なかつた。ビスマークはそれを知つて居たから、ロシアの御機嫌を取り、其氣に入るやうなことを言つて、とう／＼ロシアに中立をさせた。そこで、フ

ランスは全く孤立に陷つた。其時に乘じて、ドイツは大打擊をフランスに與へたのである。フランスが若し外交に於いて意を用ゐたら、あの戰はパリーの城下の盟にならずして濟んだであらう。

千八百九十八年（明治三十一年）の
アメリカとスペインの戰爭

も矢張り同じことである。ドイツ其他二三の國は、アメリカの强味のある此開戰に於いて、聯合して干涉しようと試みた。併し、其時はイギリスが一緒に干涉することを斷つた。それで、ドイツも已むを得ず默つて仕舞つた。スペインは外交的孤立に陷つた。アメリカはそれに乘じて自分の志を逞しうしたのである。私は外交術を語る爲めに此話をするのでない。私は唯だ『現代に於いては外交に勝たなければ戰爭に勝つことは出來ない、外交と戰爭とは密接の關係あるものだ』と云ふことを語つて、斯樣に各國全體の人氣は戰爭の運命まで

信用制度世界的となる

法律制度の類似

左右する時期であれば、其次は各國共同の帝國が出來る筈であると云ふことを語る爲めに言ふのである。

前に言ふ通り信用の時代になつて、其信用制度は世界的になつた。資本、勞働、鐵道、郵便、電信、皆な世界的になつた。發明、特許の協商も世界的になつた。著作權の協商も出來た。學術上で言ふと、メートル會議、子午線會議も出來た。世界の富も殆ど共通になつた。パリーのシンヂゲートでロシアの公債を引受ける、其金がロシアに這入つて、それがサイベリア鐵道になる。其

サイベリア鐵道の終點

が、日本を嚇した旅順口になつて居る。さう云ふことを考へれば、世界の富には國境が無く働いて居ることが分かる。

法律、制度も類似して來た。伊藤さんは、日本の憲法を拵へる爲めに、エウロッパ諸國の憲法を參考して、ドイツのバヴァリアの憲法が一番宜いと云つて、

日本の模範にしたと云ふ話がある。それは嘘だか本當だか知らぬが、兎に角、世界の法律制度は著しく類似して來た。

世界の文學も相互に影響す

世界の文學も相互に影響して居る。我々はトルストイも讀む、イプセンも讀む、ドイツのオイケンの哲學にも動かされる、フランスのベルグソンにも感服する。

世界は文學に於て一個の共和國となる

世界は文學上に於いて、又思想に於いて、殆ど一個の共和國になつたと言つても宜い。

昔は、宗教は國民の境を分ける堤防であつた。『キリスト教は世界的の教である』と其教徒は自負するけれども、イギリスのキリスト教はイギリスの國民的烙印を捺したイギリス風のものである。ドイツの新教もドイツの國教と言つて差支へない。さう云ふ風にして、宗教は國と國、人種と人種を別つ特徴を帶びて居たが、現代の宗教は世界的である。それはローマ法王の宗教が世界的であると云ふ意味とは違ふ。

ともいふべき人々の頭腦は比較宗教學である。總ての宗教に對して、どの宗教にも多少の眞理はある、どの國の宗教も永遠に亙るべき眞理が其國と其時代と其人民の衣裳を著て現はれたものだと解釋するやうになつた。昔の宗教は『我が佛尊し』の宗教であつたが、今の宗教は『他人の佛も尊い』と云ふ宗教である。新教でも、ローマ教でも、凡神教でも、佛教でも、囘教でも、儒教でも、いろ／＼な宗教の信仰の經驗を集めて、さうして其經驗の中に人類の通じて信ずべき信仰が現はれて居ると云ふことを比較研究するのが、現代の宗教家の泰山北斗とも言はれるやうな中心的人物の有つて居る考へである。自分よりも大きな或るものに調和して、其調和に依つて平和を見出だし、さうして自分の情意を滿足させることが出來れば、其或るものが、ゴットでも、アラーでも、神でも、佛でも、天でも、そんなことは問題ではないと云ふのが、現代の

現代の宗教思想の權威

思想の傾向である。

資本的侵略主義

斯うして、宗教も世界的になつて來た。前に言つた通り資本は世界的になつて來た。金は國境を越えて働く。今度の戰爭でも、アメリカに在るドイツの大使が、

金の外交

機密費としてアメリカの輿論を買ふ爲めに使ふ費用は、非常な高であると云ふことである。藁の一つの屑が流れて行くのを見れば河の方向は分かる。時代の特徴は總ての點から世界統一、若くは少くとも世界的帝國と稱すべき大きな國の起るべき傾向のあることを示して居る。餘ツぽどの愚人でなければ此傾向を見逃がす譯には行かない。

之を事實に當嵌めて見ると、世界には現に強國から帝國に移るべく努力して居る國がある。既に確かに帝國たる位置に達したと言つて差支へない國もある。

英國

イギリスの如きは則ちそれである。イギリスの領土を算へ

れば、實に大いなる帝國である。一の世界とも云ふべきインドを有つて居る。オーストラリアの如きは、人口の數から言へば一個の州縣に過ぎないけれども、若し其國の廣さに相應する密度の人口が廣がつたら、インドよりも更に廣い帝國である。カナダも大きな國である。さう云ふやうな世界をイギリスが一括して有つて居る。我々はどうしてイギリスを世界的帝國でないと言ふことが出來よう。唯イギリスの弱點は、其帝國がまだ組織的に堅固になつて居ないと云ふばかりである。故に、イギリスはどうかして其組織を固くしたいと努力して居る。チャンバレインと云ふ政治家、キップリングと云ふ詩人などの等しく望む所は、此帝國を堅固にする事業の成功であつた。千八百九十七年(明治三十年)の女皇陛下の金剛石婚式(ダイアモンド　ジャビリー)の時に、イギリスの植民地の首相が寄つた。其時、帝國主義者の驍將であるチャンバレインが、非公式ではあつたが、植民地首相の集會を開いた。英帝國を堅固に結束する方法に

付いて、自分の意見も述べ、彼等の說をも聽いた。其時、チャンバレインは植民地と本國との關稅同盟を結びたいと云ふ意見を述べた。彼れの意見は、其時は、實現しなかつたけれども、イギリスの將來進んで行くべき方針を示して居るものである。これはイギリスに於いては、謂はゆる帝國主義者ばかりの望みではない、自由黨でも少し心のある者は植民地問題に懸念して居る。『どうか英帝國を堅固なものにしたい』と云ふのは、彼等と雖も其希望を同じうする所である。斯うして、イギリスは帝國たることに於いて、もツと先きへ進みたいと覺悟して居る。

ドイツは何人も知るが如く、今の皇帝の時代になつて

世界政策

と云ふことを遠慮なく明言して居る。則ち、ドイツを一個の世界的帝國にしようと云ふのである。千八百九十五年（明治二十八年）に、ドイツの今帝は『ド

獨逸

イッ國は今や一個の世界的帝國になつた。世界の總ての部分に於いて、ドイツの商業を保護しなければならぬ、世界政策を立てなければならぬ』と言つた。さうして此『世界政策』と云ふ言葉は、其以來、列國政治家の警語になつた。尋いで海軍擴張を始めた。『ドイツは最强國と戰ふ爲めに、强大な海軍を造らねばならぬ』と云ふのが、ドイツ人の希望になつた。さうして、其方針で進んで行つた。

ドイツ人の希望を最も具體的に現はしたものは、ドイツとロシアの國境の人種的侵擊である。ロシアの西の領分、卽ちポーランドにはドイツ人が澤山植民して居る。さうして、彼等はドイツの俗謠の印刷物を此所彼所に配付して居る。さうして其所に居るドイツ人がそれを歌ふ。驚くべし、此印刷物はドイツ帝の勅令に依つて發行したものである。ポーランドのワルソーに在るドイツの牧師は、ポーランドにドイツ思想を擴める爲めに、一つの結社をして、さうして其

事に骨を折つて居る。牧師は宗教家である、四海萬民を兄弟とする精神的事業をすべきものである。さりながら、彼はポーランドの中にドイツ思想を植付ける爲めに、御役目の外の仕事に奔走して居る。ドイツの銀行はドイツ人がロシアの土地を買はうとする者があるときは、常なら一割の利息を取る所を五分で貸す。さうして、ドイツ人のロシアの中に殖えることを奬勵して居る。ロシア政府の多くの町には、ジヤーマン　ライフル銃會（ジヤーマン　ライフル　アツソシエーション）と云ふものがある。其會員は公然、ドイツの軍服を著けて、ドイツ統一の歌を謠つて、町を練歩いて居る。斯うして、ロシアの西の境は、ドイツ人の人種侵撃に難んで居る。

昔、ハンス、マギアルスなどと云ふ異人種が干戈を携へて侵撃して來た。さう云ふ侵撃は恐るべきものであつたが、現代のドイツは
資本、人間、文學、思想

獨逸、世界に獨逸教化を布く

を他國の國境に植付ける。其外形は平和の仕事のやうに見ゆるけれども、其侵略主義たるや同じである。ドイツ國民の世界に擴がらむとする努力の跡は、著しく茲に現はれて居る。ロシアの政府でも驚いて『これでは堪らぬ』と云ふので、法律を發して、ロシアの西方二十一州に於いては外國人の土地所有權を禁止して仕舞つた。さうして、ドイツ人の這入つて來るのを防がうとした。さうすると、ドイツ皇帝は其れに報ゆるが爲めに『ロシアの人民になつたドイツ人は、其ロシアの臣民であると同時に、其儘ドイツの臣民であることを許す』と云ふ制度を立つて之に復讐し、ロシア政府の發した法律の意義を無效にして仕舞つた。これは總て唯今の大戰前の話である。論より證據である、ドイツ人の世界に廣がつて行かうとする侵撃的意向は此事實に於いて現はれて居る。

ドイツ人は能く『ドイツの教化』と云ふことを言ふ。『エウロッパが寄つて集つて、おれと喧嘩をして居るが、ドイツ人の世界に與へた、謂はゆるドイツ教

化の功績を忘れたのか、ドイツ敎化に感謝しないのか、

ドイツ敎化が如何に世界を利益したか

と云ふことは、我々の敵でも知つて居る筈ではないか』と公言して居る。ドイツは確かに此公言に背かない。彼は大戰のズッと以前から世界にドイツの敎化を布いて居る。世界の各地に學校を開き、新聞を造り、定期の音樂會を催し、演劇を開いた。スペインの都マドリットに行つて見ると、其所にはドイツの立派な學校がある。スペインの文部大臣は、其學校の開設に際して『これは有難いことで御坐います。ドイツの敎育は我々の國に非常に利益を與へて居ります』と禮を言つたではないか。南アメリカのブラジルに於いても、最も良い學校と云へば、ドイツ學校であつた。其大都會たるサンパウロに於いて、最も多く賣れる新聞は、ドイツ新聞であつた。ドイツは確かに世界にドイツ流の敎化を布いて居る。イギリスは早く大帝國を造つたが爲めに世界の到る處に大きな領分

を有つて居る。ドイツは後進國であるが爲めに、有つて居ない。其代りドイツは、ドイツの教化を可なり堅實に世界的に廣めて居る。トルコもドイツ人の目を著けた所である。トルコの軍隊がドイツ人に依つて教育されたことは、言ふまでも無い顯著な事實である。ドイツの青年はトルコに行つて本國で得るよりは好い給金を得て居る。

最も驚くべきことは

ドイツの工業

である。ドイツの工業は矢張り世界的である。ドイツは植民地を有つことは、イギリスの足元にも追付かない。けれども、工業の勢力から言へば、ドイツはイギリスを凌ぐ世界的帝國である。アメリカの農民の使つて居るポッタースは、其大部分はドイツで拵へたものである。戰爭の前までイギリスで買つて居つた染物の原料の九割までは、ドイツから來たものである。ドイツは其染物の原料

をイギリスから買つて、それを製造して逆輸入をして居るのであつた。ドイツの工業は確かに世界に敵なき勢ひを以て廣がつて居た。ドイツの銀行はドイツの商人を助けて、何處にでも手を伸して其援助をする。世界の商業上の通信は細大漏らさずドイツを中心として集まる。ドイツの商人は恰も手足の如く、ドイツを中心として世界に其事業を廣めて行く。丁度、耶蘇教の宣教師が傳道會社を中心にして、世界の何處へでも宗教を廣める如く廣げて行くから、ドイツの商人は

獨逸の商業

經濟的の宣教師

だと言はれる位である。斯うして、ドイツも帝國たるべく進んで居る。我々の鄰國であるアメリカも、今や世界的帝國たらむと努力して居る。アメリカの帝國主義者の權化であると云ふべきアドミラル　メーハンは力の信者である。彼はパナマ運河に要塞を置いて、アメリカの軍艦を其下に浮べ、太平洋と

米國

力の信者

大西洋の海權を握らなければならぬと主張した。ブレーンは、全アメリカ同盟と云ふことを唱へて、アメリカ南北を統一し、始めには關稅同盟を作り、後には大きな聯邦にしようと云ふ希望を公言した。それは勿論、未だ事實としては現はれないが、アメリカの向つて進まむとする所はそれである。アメリカは南北アメリカを聯邦とし、其ヘゲモニー（覇權）を有つことを以て滿足しようとするものでは無い。更に太平洋を超えて我々の枕の側まで來て其威力を示して居るではないか。アメリカは我々の臺灣と僅かの狹い海を隔てたフイリツピン群島を取つたではないか。アメリカの帝國主義者がフイリツピン群島を取つた理由は明白である。彼等はフイリツピン群島には鑛山が多い、大きな石炭礦があると信じて居た。其石炭礦が若しあるならば、アメリカの太平洋に於ける海權の强味になるべきは勿論である。彼等は又、フイリツピン群島はアメリカの農業と工業に市場を與へるものだと思つて居た。彼等は支那を

世界の最も大いなる市場

だと心得て居る。支那はアメリカの大切な市場であらねばならぬと考へて居る。

極東に足場を要す

其支那の市場を維持する爲めには、どうしても極東に足場が無ければならないマニラ灣を自分のものにして、其マニラ灣にアメリカの艦隊を浮べ、まさかのときは其海權で自分の利益を爭ふ、さうすればアメリカはいつまでも支那の市場を失はないで居られようと考へた。これが帝國主義者が政府を動かし、人民を煽動して、フイリツピン群島を取らせた所以である。其希望が果して其通りウマ〳〵と現出すべきや否やは勿論疑問である。さうなれば御慰みであるけれども、さうならないかも知れない。何處かに邪魔が這入るかも知れない。我々はアメリカの幸福の爲めに邪魔の這入らないことを希望する。さりながら、其ればドウでも宜い。我々は唯アメリカが斯うして帝國たらむと欲して居ることを證明すれば宜い。

タフトの極東に對する意見

タフト氏が大統領となつたときに、彼れの言つた言草は

アメリカの極東に對する意見

を窺ふに足るべきものである。『アメリカは東洋に於ける門戸解放に對して、自國の權利を摑んで自國の主張を貫徹する必要がある。アメリカは是非とも此主義を固く維持しなければならない。國際的の關係を解決する捷徑は、大きな海軍を起すに在る。大海軍の存在が總ての問題を決めるに足りる』と言つて居る。アメリカの眞意は蔽ふことは出來ない。彼れの希望も世界的大帝國たらむとするに在る。

これが現代の勢ひである。此勢ひが更に何處まで進んで行くか。將來の世界はどうなるか。歷史の趨勢を按じて其行く所を考へれば、謂はゆる思ひ半ばに過ぎるものがある。我々は今や大暴風雨の中に立つて居る。我々は今、產業的革命と云ふ大きな革命の未だ結末の著かない火事場の中に立つて居る。

世界の將來は如何に成行くべきか

世界の將來は如何に成行くべきかと云ふことは、世界の人々の心に横はつて居る問題である。

十四　國家創造の努力

前に言つた通り、いつでも世界には二つの力が働いて居る。殆ど世の初めから働いて居る。それは一個人の心の中に起る已むを得ない要求、一口に言へば個人の心。今一つは公共の心、則ち國家の維持。此二つである。世界が

帝國に趣かむとする現代

に於いては個人の活動も同時になか／＼強い。國家が大仕掛になつて大活動をするに連れて、それに治められる個人の中には、いろ／＼な希望が現はれる、いろ／＼な苦痛も起る、いろ／＼な新しい主義も湧いて出る。私は總てのさう云ふ力を假に名けて

國家創造の努力

と云つた。則ち舊い國が新しい國に移る時期に於いて、個人の間に起る樣々の希望である、要求である、已むを得ざる告白である、さう云ふものは時として國家を破壞するものの如く見ゆる。それは佛國革命の前に於けるフランス哲學者の態度と同じく、現代の國家を呪咀したり、現代の法律制度を罵詈したり、根本的に批評を國の存在に向つて加へたりすることが、破壞的に見ゆるのである。さりながら、佛國革命の結果を見れば、其破壞的事業も單純なる破壞ではない。彼等も破壞しながら、同時に新しい國を造ることに努力して居つたのである。子供は物を破壞する。さりながら、子供が物を破壞するのは、決して單純の破壞的動作とのみは言へない。彼等の物を造る力も實は此時に養はるゝのである。

個人は國の細胞

である。其細胞は或は死に、或は活きる。さりながら、其細胞の活動は、畢竟、

舊物破壞の思想

我が宗教

四個格言

個體の生命を維持するものになる。それと同じやうに、非常な破壞性を帶びた恐ろしい思想と見えるものも、實は新時代を造るべき力になることも有るから、私は斯う云ふ力を『國家創造の努力』と言ふ。

此努力の中に於いて著しいものを擧げれば下の如くである。

（イ）舊物破壞の思想。『總ての物は皆な惡るい、現在の總ての制度は皆な可けない、國家は存在する必要は無い』と云ふのは、現代が生んだ一派の思想家の説である。トルストイの著書などは日本に多く讀まれる文學であるけれども、トルストイに言はせれば『國家は虛僞である。卿が政府と呼ぶ所のものは幻影である。非常識な役人が、常識ある人間を掠奪する機關に美い名を付けて國家と言ふだけに過ぎない』と言つて居る。彼は『我が宗教』と云ふ本を書いて

四個の格言

を作つた。『惡に敵すること勿れ』『罪を定むること勿れ』『怒ること勿れ』『唯だ一人の婦人をのみ愛せよ』と云ふのが、其れである。『惡に敵すること勿れ』『罪を定むること勿れ』と云ふことを現實にしようと思つたら、國を維持することは出來ない。國は惡に敵し、罪を定め、敵國の侵略から自國を禦ぐ爲めに存在して居るものである。然るに、彼は此格言に依りて國及び政府の不必要を唱へて居る。彼は舊物破壞を主張する親玉である。彼には限らない、『法律は強い階級の利益を保護するに過ぎないものである』と言つて、法律無用論を唱へる者もある。『私有財產、宗敎、婚姻の現代の形式は、總て人類進步の前に橫はつて居る障碍物である』と言つて居る者もある。イブセンも國家を呪つた。多くのエウロツパの文學には無政府的情調を帶びて居るものが多い。

(ロ) 社會主義。　社會主義も世界に於いて少からざる信者を有つて居る主

メソヂスト運動

張だと言ふことが出來る。私は社會主義に付いて委しく茲に說明することをしない。さりながら、社會主義と云ふやうな病氣も、其病源に溯れば『文明、文明と言ふが、文明の時代に貧乏は昔よりも澤山に起つたではないか。工業が盛んになつて世界の富は增加したとは言ふけれども、勞働者は依然として、寧ろ昔よりも甚い狀態に陷つて、全く奴隷になつて仕舞つたではないか。何も有つて居らぬやうになつたではないか』と云ふやうな社會的缺陷を痛感して、それを憤つて極端に奔つた者である。勿論、社會主義者には、いろ〳〵ある。舊い社會主義者は夢のやうな理想を畫いて、さうして其理想に達しようと思つて居た。中ごろ、イギリスに起つた『メソヂスト運動』と云ふものは、社會主義の運動だと云ふことは出來ないけれども、貧民の狀態にイギリスの人心を向けたのは、此運動の結果である。メソヂスト運動は貧

民の狀態に關して國民の眼を開いたものである。『平民の敎育をしなければならぬ』と云ふ最初の刺撃を與へたものは、此宗敎家の運動である。之と同時に『社會の改革』と云ふことがイギリス文學の問題となつた。さうして、イギリスにも社會改革の運動をする者が多くなつて來た。歷史を科學的に硏究して、其硏究の上に立たうとする、現代の科學的社會主義者もある。國家社會主義者もある。都市社會主義と云つて、電氣や瓦斯や市街鐵道を都市の獨占にしようと主張する者もある。社會主義の形式、其議論の緩急は一つでは無いけれども、兎に角、現代に滿足しないで、新しいものに到達しようと云ふ努力若くは煩悶たることは勿論である。其努力若くは煩悶が合理であつても不合理であつても、それは問題にするには及ばない。どッちにしても、どうか新しい世界に達したいと云ふ努力若くは煩悶が生んだ症狀に相違ない。

（八）民衆の團結。此時代に於いては又た民衆の團結が盛んになつた。昔は勞働者の結合は何處でも禁ぜられたものである。勞働者は數が多いから、數の多い奴が一揆して騷ぎ出したら、社會の秩序は忽ち紊れて仕舞ふ。民衆はいつも愚人が多い。さう云ふ愚人が多く集まつて騷げば、社會の秩序は破壞されるから、勞働者の結合は何處でも禁じて居たものである。イギリスでも永いこと、此禁止は行はれたが、段々それが緩むやうになつて來た。工場が起つて、昔のやうに勞働者が家庭工業に散在せず、團體となつて働くやうになつたから、

勞働者の勢力

が增して來た。さうして、段々勞働者自身が同盟を結ぶやうになつたから、それでは困ると云ふので、千八百年（光格天皇、寛政十二年）に勞働者の結合を禁じた。其禁令に據ると『賃銀を增加すること、勞働時間を減少すること、

勞働の狀態を改めること、これだけの目的を以て、雇人、勞働者の間に行はれた總ての約束は不當なものである。さう云ふ約束をしてはならぬ』と云ふのが、其法律の精神であつた。さうして、其れに違反する勞働者を罰した。併し、勞働者は愈々結合の必要を感じて來たので、或は祕密の結社を結び、或はいろ〳〵の仕掛をして此法律を潜ることに努めた。雇主が使用人を雇はうとするときに、使用人は『どうぞ、どんなことが有つても裁判所に持出して下さらぬと云ふことを約束して下さい。さうすれば貴君の所に行つて働きますから』と言ふ。此約束に主人が應じなければ雇はれない。此約束をすれば、今度は彼等がどんな同盟を結んでも、其れを不法だと言つて訴へることは出來ない。斯う云ふ風にして、勞働者は自分の同盟をする力を保存しようとしたから、同盟禁止の法律は其實、無効になつて仕舞つた。丁度、日本で足利氏の時代に『德政』と云ふ借金棄捐の命令を出すことがあつた。德政の

德政

命令が下れば、今までの公私の貸借關係は悉く無効になつて仕舞つた。これは政府が人民から借金して其借金を拂ふことが出來なくなつたので、此制度に依つて政府も人民も共に總ての貸借關係は此號令の出ると同時に無効にして仕舞ふと云ふことにしたのである。ところが、斯う云ふ風に貸借關係を無効にされては、金を貸す者も困るし、貸す者が無ければ借りる者も困るから、今度は證文の中に『假令德政が行はれても、此貸借關係は無効には致さぬ』と云ふことを書くやうになつた。之が爲めに德政の命令も事實に於いて無効になつて仕舞つた。それと同じやうな譯であつて、勞働者の結合を禁じたところが、勞働者の方では『私どものしたことに付いて、法廷を煩はすやうなことを爲さつては、貴君に使はれるのは、いやで御坐んす』と言つて、雇主が法廷に立たない約束をした後でなければ

雇はれないから、結局、勞働者は勝手に同盟も契約も仲間同士で出來ることになつて仕舞つた。そこで、イギリス政府も我を折つて、とう〳〵勞働者の結合を禁止する法律を廢して仕舞つた。それは千八百二十四年（仁孝天皇、文政七年）のことであつた。

それから段々勞働者の結合が盛んになつて、千八百七十五年（明治八年）には、産業組合は合法的のものだと云ふことになつた。それより更に進んで、今日はイギリスの勞働者が政黨を結び、大きな組合も作つて活動することになつた。ドイツも略〻同じやうな順序を經て、勞働者の産業組合の結合を自由にすることになつた。ドイツのはイギリスより後れて居たけれども、兎に角、自由になつた。斯う云ふ組合の起つたことに依つて、勞働者は製造所に働くとき其團結の力に依り資本家に對し生命の保險をし、勞働時間を短くし、賃銀を引上げ、骨折を減らすと云ふやうなことを要求することの出來るやう

になつた。共同賣店と云ふものも出來た。購買組合も出來、所屬の銀行も出來た。さうして、平民が段々團結の力を強くした。これも矢張り國家が新しい方角に進む時に起る努力若くは煩悶の一現象として見るべきものである。

(二) ストライキ。 ストライキの起るのは、勞働者の團結が出來、其同盟が出來上つた以上は否でも應でも自然の結果であると云ふべきものである。さうして、今では其方法もなか〳〵秩序があるものになつて、其機關は可なり整頓して來た。則ち、ストライキには必ず其中心があり、時期を考へて、中心から命令を發し、宣言書を出して

俸給增加、待遇改善

と云ふやうなことを資本家に要求する態度は、決して亂民の盲動に過ぎないと云ふことは出來ない。勿論それが社會の進歩を害し、製造工業を頓挫せしむる危險は少くはないから、國家が之に干渉して其發動を調節することは必

要であるけれども、兎に角、資本家と勞働者の間の難問題を解決すべき仕掛として自然に現はれた一つの行動であつて、是れ亦、現代の國家の下に於いて更に良い社會の狀態を造り出したいと云ふ、人民の苦惱が具體的に現はれた症狀に他ならない。

個人の躍出

(ホ)　個人の躍出。　社會主義とか、或は國民主義とか、若くはストライキとか云ふやうなことでも、勞働者の團結と云ふやうなことでも、さう云ふものは總て人間の集合力に依つて或る問題を解決しようと云ふのである。併し、さう云ふ集合主義ばかりが現代の潮流ではない。現代の他の方面には集合主義に對抗して、個人主義を唱へる者も多い。

個人主義

と云ふのは一人の利益を圖ると云ふ意味ではない。現代の總ての問題を解決するには、皆なが寄合つても唯だ集合だけでは出來ない、本當の解決はそん

な人寄せでは出來ない、大いなる個人を造つて、其個人の指揮命令に從はなければ、現代の問題は解決は出來ないと云ふのが則ち現代の個人主義の本義である。一個の偉い人間を造り出して、其特別なる人格を基礎とし、之に依つて新しい社會を現出しようと云ふのが、此主義の目的である。自分の心の中に在る掟に從つて、外見だの、批評だの、或は權威だのと云ふものの力を恐れず、それを物の數ともせずして、唯だ自分が正しい、自分が惡いと思つた、其判斷で押通さうと云ふ偉い奴が出なければ、社會の問題は解決されないと云ふ思想である。

千よろづの寇は來るとも我のかじ、のかば巖も共に飛ばなん

『雖千萬人吾往矣』と云ふ、自分の心の已み難き無上命令に從つて、社會に突進する偉大なる人間が出來なければ、社會の問題が解決しないと云ふ思想も之に伴つて湧いて來た。エウロツパの多くの文學者は此思想に執着

して居る。カーライルでも、イブセンでも、ニイチエでも、煎じ詰めれば大いなる個人の躍出を奬勵する豫言者に過ぎない。

（へ）新しき女。　前に產業的革命のことを論ずる場合に、女の位置の變化を言つて置いた。家庭と云ふものが滅びて仕舞つたから女の位置も變はらねばならぬやうに言つて置いたが、此社會狀態は女も新しくならなければならぬと云ふ狀況を生み出した。名高いイブセンの

『人形の家』

と云ふ小說は、今日に於いては決して新しい思想だと云ふことは出來ない。それは丁度、日本の西南戰爭の終つた翌年に、世の中に出た書物であるから、隨分舊いものである。さりながら、此書物は『新しい女』の何ものであるかと云ふことを語つたものである。婦人の個人主義を最も明白に書き現はしたものである。昔の女は貞操を其唯一の美德として自ら好んで男子の犧牲にな

夫は路傍の人

トルストイの意見

つた者もあるが、イブセンの此小說に書いた女は、之に反して社會の繩墨に反抗した女である。俗界の批判を侮る婦人である。俗界の批評の說明者たる其夫を心から侮る婦人である。世の俗に謂ふ所の夫は戀に結んだ眞の意味の夫ではない、全くの異邦人に過ぎない、我と何の關係も無い路傍の人であると看破した婦人である。婦人は自分に對する義務がある、自分自身の面目と自分自身の責任を十分に自覺しなければならない。今やさう云ふ風の自覺した獨立の世俗の敎に反抗し得る婦人の生れなければならぬ時機であると云ふのが、此小說の暗示した敎である。『一體、戀と云ふものは美しいもので、詩のやうなものである。さりながら、從來の社會制度は、戀の詩の意味を奪つて仕舞つた。是非、戀の自由を恢復しなければならない。女を解放しなければならない』と云ふのが、イブセンの心であつた。トルストイも同じやうなことを言つて居る。『今までの女は、女に付いての考へが、まるで違つて居

ショーの意見

る。今までの女自身は、貴婦人でも、娼婦でも、女は男に養はれて、男に著物を著せられて、男に注意されて、男の淫欲を滿足すべきものであると思つて居る。さう云ふ考へは根本的に誤謬である。女は男子から獨立しなければならない』と言つて居る。ベルナルド・ショーも矢張り同じ思想を語つて居る。彼が言ふに『若し若い婦人が、義務だとか、犧牲だとか、其他いろ〳〵これまで婦人に付いて教へられた其說教に對して强い反抗の態度を表はして、さう云ふものは婦人の本能に反した空しい辭令の一握りに過ぎないものだと決めて、それに從ふことは止めて、「妾は自分自身の生活に於いて、さう云ふ馬鹿なことは全く抛ち棄てる」と決心したならば、私はさう云ふ女に對して「あらゆる手段を盡して、あなたの望む通りになさい。あなたはドレほど惡るくなるか、やツて見なさい。これはあなたがドレほど善くなるかと云ふ試みをするのと同じ程の經驗でありませう」と答へやうと思ふ』と言つ

歐米の小説に現はれたる婚姻制度

て居る。ショーも『婦人を消耗させて、それで男の發達をする現代の男女間の制度慣習は罪惡だ』と言つて居る一人である。

斯う云ふ思想の傾向があるから、從來、地上の幸福な狀態として歌はれた婚姻及び婚姻後の生活を、つまらないもののやうに思ふ者が多くなつて來た。エウロッパとアメリカに現はれる多數の小說は『婚姻は目出たいものではない、婚姻其ものは婦人に取つては既に失敗である』と云ふ思想を、多少、隱約の間に現はして、どうしても現代の家庭制度は、革命の時期に迫つて來て居ると云ふことを暗示して居る。家庭制度は今や疑問の雲に包まれて居る。『今の婚姻の仕方は、モウ必要の時期を經過した舊いものでは有るまいかしら?』と云ふ考へもある。『婚姻を御目出たいことだと祝し、婚姻後の生活を幸福だと歌ひ、獨身を御氣の毒だと言ふのは、價値なきものを幸運のやうに喜んで居る小さな滿足に過ぎない。婚姻なるものは其實、婦人の失敗であ

る。極端に言へば婦人が身賣をしたのである。獨立の婦人が男に身賣をしたのである。男女は唯だ愛情に依つて相結び、自由の意思に依つて合ひも離れもするが宜い』と云ふのが、婦人の一部に起つた思想である。此思想に囚はれて出て來たものが『新しき女』である。其『新しき女』のする仕事が、怜悧であるか、馬鹿であるか、道理に適つたものであるか、或は空想に基いたものであるか。それは今茲に說く必要は無いが、兎に角、これも新しい世が生むべき想像的努力若くは煩悶の一つとして差支へ無い。

（ト）享樂主義。　享樂主義も現代に起つた思想である。勿論、昔から享樂主義と云ふものの無いことは無い。ローマにはエピキュリアニズムと云ふものもある。支那の六朝時代の思想家は、多くは今日主義の享樂主義者であつた。併し、それは今のやうな強い意味のものでは無かつた。今の享樂主義と云ふのは、前のと比べて更に強い新しい意味を有つて居る。昔の享樂主義は

自然界を征服して自己の快樂に利用す

人生は朝露の如きものであるから、生きて居る中に旨い物でも、たらふく飲食ひした方が宜いとか、又『使㆑我有㆓身後名㆒。不㆑若㆓生前一杯酒㆒』と云ふやうな悲觀的享樂主義である。兎に角『浮世は三分五厘、旨い物でも食つて樂に暮した方が宜い』と云ふ消極的の享樂主義である。

現代の享樂主義

はそれとは違ふ。一方には世の中を果敢ないものと悲觀して、それ故に他方に快樂を得たいと云ふ兩天秤の享樂主義ではない。詰り悲しき調子を帶びた樂みではない。歡樂と哀情と鄰合つて居る享樂主義ではない。現代の享樂主義は享樂に沒頭した主義である。現代は人間の生活に對して科學の力の應用が最も盛んに現はれた時代である。物質的の成功の凱歌を奏した時期である。陸には汽車があり、海には汽船がある。空中には飛行機がある。自然の世界を征服して、それを皆な人間の快樂に供給する大富豪の繁昌な生活を見れば、

確かに

此世ながらの極樂

である。電車、自動車の縱横に驅回つて居る世界を見れば、我々の生活は痒き所に手の屆く、申し分の無い便宜を享有して居る生活である。斯う云ふ生活に我々は沒頭して殆ど精神界のことは忘れて仕舞つて居る。地獄も極樂も我々の心の中には無い、我々は現代の物質的の富に身も魂も打込んで仕舞つて、其中に居て享樂主義を唱へるのである。これは昔の享樂主義とは違ふ。斯うして、さう云ふ主義を唱へる人の心の中には、宗教などと云ふものは幻影の如く眠つて仕舞つた。昔の享樂主義は無常迅速と云ふことを感じた宗教的の信念が背後にある。今の享樂主義は左右前後、悉く物質で圍まれて居る。自分の命を保存して十分に永く現代の快樂を樂めば宜いと云ふ物質的の富に身も魂も打込んだ享樂主義である。

（チ）非戰論及び休戰論。 國家と國家の競爭が大仕掛になつて、大帝國が起る時分には、其犧牲となつて戰場に死ぬ者も多い。茲に於いてか非戰論若くは休戰論が現はれて來た。トルストイが無政府主義であつて、從つて非戰論者であつたことは前に話した。トルストイのやうな小說家でなくても、科學的に戰爭を研究して『戰爭はどうしても滅びなければならぬものだ』と云ふことを主張して居る者もある。『戰爭は人間を惡るくする。一番强い、一番好い青年を、戰爭では殺す。人間の精鋭が悉く軍の神の犧牲になる。其結果として弱い者が殘る。其弱い者の生んだ子は弱くなければならない。故に、大戰のあつた後には人種が段々墮落する』と云ふことを言ふ者もある。又『戰爭は、王と貴族のする仕事で、文明の人民が國の政治を執るやうになれば、戰爭などと云ふものは有るべき筈は無い、國を開いて貿易

を自由にすれば、四海兄弟、萬國同胞である』と云ふ立場から、戰爭を好まないコブデン　ブライトの輩もあつた。これは戰爭は惡るいものだと云ふ立場から論じた議論であるが、又戰爭は良いものにしたところが、惡るいものにしたところが、戰爭の道德的價値は別として、兎に角、戰爭は殘忍なものだから止めたが宜しいと云ふ意味から、ロシア皇帝ニコラス第二世は、諸國に通牒して平和會議を開いた、其以來、段々、平和主義を唱道する者も殖えた。

萬國平和協會なるものは、其働きは强くても弱くても、今日に於いては兎に角、世界に一個の足場を有するものになつた。

（リ）古道復興。　最近には稍々緩んだやうであるが、それでも未だ人間の心に潜んで居る一つの國家創造の努力若くは煩悶がある。それは何であるかと云ふと、古道を復興したいと云ふ考へである。スコットの小說を見ると、

彼は中世を理想的に畫いて居る。カーライルの『過去及び現在』を讀めば、彼は中世の封建時代に於ける大名の政治の中に、自分の理想を發見しようと試みて居た。近ごろ出來た多くの耶蘇傳を見ると、耶蘇と云ふ人物及び其敎訓の中に世界を敎ふべき眞理を發見しようと試みて居る。ラスキンの書いた物を見ると、彼もカーライルの如く中世を理想にして居る。ウイリアム　モーリスと云ふイギリスのキリスト敎社會主義者は、スカンヂナビアの古道を以て、其中に今日の問題を解決すべき鍵を索めようとして居る。現代をどうとか改めなければならない、其改める摸範を探して、さうして古道を復活しようと云ふのが、斯う云ふ思想の努力である。

動かすべからざる事實

十五　動かすべからざる事實

私は『將來の國家を如何にすべきか』と云ふ現代に於ける個人の努力を擧げて見た。

　武藏野に草は品々多けれど摘菜にすればさても少なし

と云ふ歌もあるやうに、ドレがドンな價値が有るか、ちよッと判斷は出來ない。

私は現代を佛國革命時代のフランスの文化に似て居るやうに思ふ。いろ〳〵の思想が動いて出て革命を生んだフランスの昔の歴史は、産業的革命の大暴風雨に動いて居る此社會の將來を暗示して居るやうに見える。勿論、將來の社會はどうなると豫言することは出來ないが、是れだけは動かすべからざる事實だと思ふものがある。其事實を是れから擧げて見たいと思ふ。

人類の本能は滅ぼすべからず

源泉混々不休晝夜

（甲）人類の本能は滅ぼすべからず。　先づ我々の知らなければならないことは、人間の中に潜んで居る自然の力、人間の生活の奥から溢れ出す力。舊い言葉を假りて言へば『人類の本能』の働きは隱すことも出來ず、押へ付けることも出來ない。それを壓迫しようと思へば、其壓迫の努力は必ず無効に歸して仕舞ふと云ふことである。總ての有機物は始終、發展して進んで行くものである。原形質は進んで動物になり、人間になり、五官を造り、段々高等の動物として發達して來る。此原形質は自分を如何なる境遇にも適用する力を有つて居る。又た原形質同士集まつて、いろ／＼の機關を造る力を有つて居る。光に達せむが爲めには目になる、音響に達せむが爲めには耳にもなる、絶えず舊い殼を剝して、さうして新しい組織を造つて行く。

源泉混々　不レ休二晝夜一

と言つたやうに、此力は何ものも其進みを抑へることは出來ない。或るとき

は此力の活動を制限することが出來る。丁度、堤防が水の活動を制限することが出來るやうに、制限することが出來る。さりながら、其一定の方向に向つて進む力を全く壓止することは出來ない。水の低きに向つて流るゝ如く、本能はどうしても自分の行かうと思ふ所に行かなければ其働きを已めないものである。此道理を近ごろ最も能く言ひ現はしたものはベルグソンであるが、此道理は必ずしもベルグソンが發見したのではない、勿論ベルグソンが作つたのでない。此力は昔からある。孔子の『三軍可奪帥。匹夫不可奪志』と言つたのも此力である。孟子の『吾善養浩然之氣』と言つた其『浩然之氣』も此力である。王陽明の『良知良能』も此力のことである。朱子が『人性者虛靈不昧』と言つたのも、此力を見たのである。此力は何ものも押へることは出來ない。それを押へて仕舞へば、其社會は死んで仕舞ふ、人も死んで仕舞ふ。此世の歷史も無くなつて仕舞ふ。此力は何ものも滅ぼす

ことの出來ないものである。此事實は産業的革命の大騷動の中に在る現代に於いて、いろ／＼の創造的努力若くは煩悶が起り、いろ／＼の議論が、風が西からも吹き、東からも吹くやうに、人を惑はすに拘らず、動かすべからざる眞理、何ものも破壞することの出來ない實在として横はつて居る。

個人滅ぼすべからず

（乙）個人滅ぼすべからず。　同じ意味に依つて、個人の滅ぼすことの出來ないと云ふことも、何人も否定することの出來ない事實である。如何なる場合でも、人民は唯だ受身の群衆ではない。唯だ泥を捏ねて鑄物を造るやうに、勝手に他の力に依つて其好むが儘に造られ得べきものではない。

　一寸の蟲にも五分の魂

と云ふ諺があるやうに、如何なる場合にも人民は上から押へられて、何事も『御無理御尤も』と答へて仕舞ふものではない。ローマ教會の權威の盛んなときでも、それに反抗して新教が起つた。宗教の勢ひが猛烈なときで、異端外

道を火炙りにした時代でも、それに反抗して科學が起つた。勞働者の結社同盟を禁ずれば祕密の結社が直ぐ起り、其擧動は却つて陰險になる。個人の力を無視し、國家の力を絕對にして、個人を國家の犧牲にして仕舞はうとした時代に、ルッソーの民約論が起つた。國を富ますことを唯だ一の目的として、經濟狀態は唯だ國家のみが定むべきものであると云ふ議論の絕頂に於いて、アダム　スミスは『個人は國家よりも自分自身の經濟の狀態をもッと賢く考へるものだ』と云ふ個人主義の經濟論を言ひ出した。『富を增す方法は、勞働者が自分自身の考へに依つて、自分自身の利益を追ひ求めさせるのが一番だ、それが個人の爲めにも國家の爲めにもなるものだ』と言ひ出した。これは眞理の全體と云ふことは出來ないが、半面の眞理には違ひない。如何なる國家でも、個人を全滅させることは出來ない。個人の心の中に存在して居る我慾を無視して、經濟學を立てむとするのは危險な仕事である。アダム　スミスは

此點を強く說いたのである。國家は個人の行を制限することは出來る、或る形を與へることは出來る、或は或る傾向を奬勵をすることも出來る、併し個人の命は滅ぼすことは出來ない。現代の大機械の世は人間を機械の助手にして仕舞つた、大きな車の小さな輪にして仕舞つた、人を機械のやうにして仕舞つた、人を心なき機械のやうにして仕舞つた。さりながら、人は主人で、機械は主人たる人に用ゐらるゝものであると信ずる人の本能を全く滅ぼし得るものでは無い。人は矢張り人が其尊貴な位置を失つて機械の奴隷にならうとする傾向に反對する。個人は遂に滅ぼす譯には行かない。これも明白の事實として我々の學び得た箇條である。

歷史は人を支配す

（丙）歷史は人を支配す。現代に於いて最も明白に我々の分つた事實は、人間の性質は急激に改造する譯に行かぬと云ふことである。總ての有機物、即ち植物、動物、及び人間は、數萬年を通じて進んで來た進化の結果で

人の道義感情は滅びず

ある。今も勿論、其進化の進みの中に在るものである。歴史は連續して居る、其連續の間に人生は造られたものである。未知の遠い過去の時代から、未知の遠い將來まで

幾つもの繋ぎ合せた鎖

である。其鎖は決して離れては居ない、ずッと繋がつて居る。我々は其歴史の連續律の中に在る。過去は人の經驗の總體を貯へる倉である。其過去から流れ出した現代である。過去は決して死んでは居ない、それが現代に動いて働いて居る。國家も人間の心も歴史的の進歩の間に出來た產物である。故に人間の心を今日改めようと思つても、直ぐ改め得られるものでない。歴史の人を支配する力は偉大である。これも我々が動かすべからざる事實として學んだ所である。

(丁)人の道義感情は滅びず。　いろ〳〵な議論が現代には起つて居

仁義の心

慈悲の心

る。非國家主義もある、社會主義もある、無政府主義もある、サンジカリズムもある、爆烈彈を飛ばすやうな奴もある、治者を殺すことを神聖の義務だと心得て居るやうな奴もある。ちよッと見れば、此世は危險思想の充滿した惡魔の國のやうにも感ぜられるが、我々は仍ほ安心することが出來る。さう云ふ人間の大暴風雨の時代に於いても、我々は仍ほ天の彼方に太陽の在ることを隱約の間に認めることが出來る。それは何であるかと云ふに、人間のモーラル　センス（卽ち道義感情）の決して滅びるもので無いことである。トルストイは無政府主義を唱へて居る。さりながら、彼が其無政府主義を唱へるのは、農民の苦痛を訴へる爲めに唱へるのである。彼れの心に仁義はある。彼れの著述が羽なくして世界に飛ぶ所以は、其著述の底に潜んで居る慈悲の心である。ベルナルド　ショーは、フェビアン　ソサイチーと云ふ、一種の社會主義者の驍將である。彼は無論『新しき人』である。さりながら、彼れの思

憤怒の情

憐愍の情

仁義道德の發露

想の底には、社會の不正に對する燃ゆるばかりの憤怒の情がある。彼も亦、人情の爲めに戰ふ鬪士として見るべき理由がある。多くのロシア小說は社會の暗黑面をのみ畫く。併しながら、其小說家の心の底には、不幸なる人類を憐れむ愍れみの情が潛んで居る。人間は戰爭の殘忍を好まない。非戰論者と云ふ者は、縱し無道理であつても、其戰爭の苦痛なることを感ずる心は僞りではない。矢張り

仁義道德の發露

である。歷史を通じて現はれて居る人間の仕事は、道德的の要求である。道德的に高尙にならうと云ふ向上の精神は、人間の歷史が始まつて以來、現代に至るまで、其流れを止めない潮流である。人間は道德的にならなければ已まない良心がある。良心は決して單純の實利主義の上に立つて居るものでない、實利主義を超越して更に高く進んで、何處までも進んで行かうと云ふ人

間の已むべからざる要求である。テニソンは『歴史を通じて一つの線が走つて居る、則ち進歩の線は歴史を通じて走つて居る』と言つたが、我々は歴史を通じて人間が高き道徳に進まうと云ふ向上心を見る。どのくらゐ國家社會を無みし、仁義忠孝を笑ふ者でも、其心の底には、不正を憎み、殘忍を憎み、不人情を憎む道義感情は横つて居る。丁度、磁石が北を指す如く、人間の心は常に道徳に向つて進むものである、道徳に向つて指すものである。此事實は、我々が安心を以て、滿足を以て、眺めることの出來る、人間の心の已むべからざる發動である。

人は超物質のものたること

（戊）人は超物質のものたること。 人間は如何なるものであるかと云ふと、結局、時間と云ふ大きな水の中に這入つて、名の付けやうの無い、底の無い深淵に落行くべきものである。無常は迅速である。人は遂に死ぬべきものである。此世の物質的利害は僅かの瞬間である。さう云ふ瞬間の利害

人は小さき船、宇宙は大なる無限の海

死を歡迎す

に汲々たることは出來ない。人は小さい船である、宇宙は大きな無限の海である。死と生とは此海を航海する旅日記である。人間はさう考へなければ居られない。サンスクリットの『人』と云ふ言葉は『考へる者』と云ふ意味である。人は考へずには居られない。何ほど現代の物質的の誘惑が多くても、享樂主義は殆ど萬能力を有つて居るが如く見えても、我々は其中に沒頭して仕舞ふことは出來ない。我々はモウ少し大きなものを要求する。我々は死ぬることを非常に恐れる。さりながら、死ぬることは必ずしも人間の苦痛ではない。疲れた人間は休みたいと思ふものである。どうかして休みたい、何を擱いても休みたいと云ふ絶大の疲勞に達したときは、我々は死を歡迎することもある。何となれば、死は我々に休みを持來らしむるものであるからである。さう云ふ境遇に在つては、我々は

に無頓著であることが出來る。無頓著を以て眠り得ることが出來る。考へて見れば死生は人間の大問題ではない。人間は善く生活しようとも、美しく生活しようとも、眞に生活しようとも、『眞』『善』『美』と云ふ此三つの要求は、時として我々を喜んで死に行かしむることがある。さうして見ると、人間は死生を超脱すべき本能を有つて居るものである。此世の苦樂、此世に限られた運命の窮達が人間の終局の目的でないのは、今も昔も同じことである。どんな金持でも、どんな顯榮を極めたる王侯でも、此世の生活ばかりが人間の生活である、死は萬事を終はるものである、墓の向ふには何も無いと云ふことを敎へられて、それが眞理であると聞いたらば、人生を悲慘なるものと思はざるを得ないであらう。人は此世の人間の仕事を瑣細なることと見て、其仕事の重い圍みから脱して、更に高尙な所に行かうとする本能がある。現在は過去を征服し、將來は現在を征服する。斯うして人はいつでも物質に

オイケンの意見

超越した物質の主人である。心は物質に勝つべきものである。我々は到底、物質の制御に甘んずることは出來ない。故に、享樂主義は我々に滿足を與へるものではない。我々は段々進んで行く。常に物質を超越して理想に向つて動いて行く。其動いて行く終點は、我々の進むに連れて、更に前方に開展される。結局、我々の指す所は、絕對の宇宙に瀰漫する大いなる命でなければならない。オイケンは『此宇宙的の生命に達しようとするのが、人間の已むべからざる要求である』と言つた。彼は論理的に此生命に到著したのでない。さりながら、斯う云ふ要求が人にあると云ふこと、及び人間は短い此世の生活の範圍を超脫して進んで行くものであると云ふ事實は、誠にオイケンの說く所の通りである。試みに歷史を繙いて見れば此理は能く分かる。東西古今六千年の永い歷史は、人は何者をか信じなければならない、信じようと思ふ心の要求を有つて居ることを示して居る。歷史には種々なる宗敎的經驗が現

人間の最大なる問題は人種としての生存競爭なること

はれて居る。其宗教的經驗は、何れも『我』より大いなるものに調和して、其『我』と『我にあらざる偉大なる世界』との一致結合に依りて安心を得むと努めたものである。總ての宗教が皆な同じ形式である。さうして、同じ努力をして居る。此事實は我々に人間が超自然的の動物であると云ふことを證明する。

（己）

人間の最大なる問題は人種としての生存競爭なること。

スペンサーは、進化論を人間に應用して、社會進化論を說いた最初の哲學者と言つても宜い。さりながら、彼は一の人種の中の內部の個人間の生存競爭にのみ重きを置いて、社會進化を說明しようとした。併し、これは彼れの研究の未だ足りない所であつて、彼れの眼界は尙ほ狹しと言ふべきである。一の人種の中の內部の競爭よりも、もッと大きな競爭がある。則ち

諸人種の間に人種を一團體としての他の團體との競爭がある。前の競爭をイントラ　レーシカル　ストラッグル（一人種間の内部の競爭）と云ひ、後の競爭をインター　レーシカル　ストラッグル（諸人種間の競爭）と云ふ。則ち、一の人種を一團體として、他の人種の諸團體と競爭することが後のものである。

人間の運命を決める重大なる力

は何であるかと云ふと、人種と人種の間の生存競爭である。國家は此生存競爭をする爲めに出來た戰鬪の機關である。これは最近の進化論者が其進化論を國家の發達に適用して發明した事實であつて、科學的の奪ふべからざる原則として定まつたことである。此事は前にも言つた。

立國は虛榮に非ず

（庚）立國は虛榮に非ず。現代には、無政府主義、社會主義、享樂主義、其他あらゆる國家を否定する議論が多い、國家の存在を呪ふ者が多い。

イプセンを見ても、トルストイを見ても、彼等は國家を一種の虚榮に過ぎないものと思つて居る。さりながら、結局、我々は國家は虚榮でないと定めねばならない。國家の虚榮でないことは、既に定まつた事實である。前に言つた進化論を信ずれば、我々が國家を虚榮などと思ふことは毛頭出來ない。國家は夢でも虚榮でもない。人間の實益の爲めに存在して居るものである。國家を虚榮だなどと云ふ人は、

亡國、屬國の悲慘

の光景を見るが宜い。亡國の苦痛、屬國の不平は、決して想像や小説ではない。それが若し想像や小説であるならば、なぜポーランド人は、始終、獨立を夢みて居るであらうか、なぜアイルランド人はイギリス政府に對して不快を感じて居るであらうか。彼等は夢の爲めに、虚榮の爲めに、命を捨てたり、牢屋に投込まれたり、故郷を捨て、漂泊人になつたりするのであらうか。何

故にエジプトの愛國者アラビー　パシャは『エジプトをしてエジプト人の有たらしめよ』と叫んだのであらうか。英佛人のエジプト官吏がエジプトの官界に於いて非常な勢力を逞しうし、エジプト人が不平に堪へず、エウロッパ人を排斥する排斥運動を起したのは、それは虚榮の爲めに起したのであらうか、空しき影を逐ふ爲めにやつたのであらうか。インドの士兵は何故に叛亂を起したのであらうか。インド人は何故に今日に於いても恨を呑んで、泣く〳〵イギリス政府の下に煩悶して居るであらうか。國の無いユデア人の心理狀態は、なぜあんなに寂しいであらうか。彼等は虚榮の爲めに、夢の爲めに、そんな寂しい心を有つて居るのであらうか。決してさうであるまい。

屬國の政治

屬國の政治は他國の指揮に從はなければならない。屬國の政治には自由も自主も無い。屬國の人民は他國の人民に輕蔑される。其敎育も、人種も、根本的に違つて居る人種の、謂はゆる人種的侵擊を甘んじて受けなければならな

國は單純なる個人の集まりたる總計に非ず

い。

國の歴史は國民の思想に織り込まれて居るものである。國は國民の精神的中心である。其國をなくした亡國の民は精神的中心を失つたのである。思想の破産をしたのである。自分の爲めに外國の横暴に抵抗し、正義と權利を主張すべき保證を失つたのである。故に、亡國の民、屬國の民は、それを悲しむのである。此悲しみは虚榮を失つたが爲めに悲しむのではない、權威を失つたが爲めに泣くのではない、事實上どうしても感ぜずには居られない痛みを有つて居るから、其感じを其儘表はしたのである。

國は決して單純なる個人の集まつた總計ではない、豆を桶の中に入れたやうなものではない、砂を積んだやうなものでもない。國とは人間を一つの有機體に組織したものである。工業でも、勞働でも、個人を一個の團體に組織して働かせれば、其個人の働きを總計したものより、幾十倍、幾百倍の仕事を

する。例へば、十人が銘々別々に働いたものの總計は唯だ十である。さりながら、十人が組合つて分業して仕事をすれば、それが十人の別々にした仕事を集めたよりも澤山な仕事が出來る。則ち、其總計は、百にも千にもなる。さう云ふ場合に於ける一個人の價値は、其組合の一部たる價値に在る。門番は小さな役目である。さりながら、門番に依つて門内の總ての祕密が保存され、何人も其門内の事業を妨害することが出來なければ、門番も大事業をしたものである。人間の價値は一人としては發揮しない。

　三人寄れば文殊の智慧

と云ふ諺もある通り、それが組合はされ、組織されて、仕事を好い鹽梅に分けられることに依つて、始めて大きな仕事が出來るのであるから、個人の價値は其社會の一部たる所に存する。國と一個人も同じことである。一個人の仕事に最良の結果を生ぜしめようとするには、他人の仕事と協同しなければ

獸は群を爲すによりて價値あり

ならない。斯う云ふ協同をなして然る後に、一個人一個人だけでは、どうしても出來ない能力を發揮する。さうして、個人個人が何等の關係も無く、獨立して仕事をしては、其總計を合はせたところで、到底達し得ない大きな仕事をすることが出來る。蜂の群や獸の群を見ても分かる。蜂は一疋の蜂としては何でもない、獸も一疋の獸としては恐るゝに足りない。さりながら、彼等が群を爲す所に彼等の價値がある。國家は生存競爭の一機關として發達したものである。其國家を虛榮だの幻影だの無意義なものだなどと非難するのは聞えない沙汰である。

トルストイは非國家主義を唱へて居る。いろ〳〵の現代近代の思想家は勝手な熱を吹いて、非國家主義、無政府主義を、いろ〳〵な形に置いて皷吹して居る。さりながら、考へて見れば、彼等がさう云ふ風に、えらさうなことを言つて居られるのは、實は國家が保證して呉れる平和の生活をして居るから

非國家主義者は矛盾多し

である。若し、國家が今日でも消えて仕舞つたら、さうして社會が野蠻に還つたら、彼等はどうして、そんな

呑氣な『非國家論』

などを喋つて居ることが出來よう。全體、非國家主義者は矛盾が多い。トルストイは、斯樣に一方に於いては國家を罵りながら、『土地は國有にしなければならぬ』と言つて居る。『國有にしても中央集權になり過ぎるから、人民の共有にするが宜い』と言つて居る。彼は四個の格言を作つて、自己流の耶蘇教を唱へて居る。それで、彼は『おれは非國家主義だ』と言つて居りながら、トルストイ流の耶蘇教、其土地の共有主義と云ふものも、言つて見れば一つの檢束に全體の人間が服從するのであるから、矢ッ張り一種の國家ではないか。故に、我々は彼は國家の存在を否認して居ながら、其實、矢張り國家の創造に努力して居る者と見る。立國は虛榮でないと云ふことは

戰爭は止むべからず

英國の革命、立憲君主政を生み出す

佛國の革命、全國民を幸福なる共同生活に結び付く

（辛）現代に於いても證明し得べき事實である。

戰爭は止むべからず。我々はトライチッケのやうに戰爭の福音を唱へるのではない。さりながら、戰爭は決して止むことの出來るものではない。國家の存在を有意義なものとした以上は

戰爭は止むべからざるもの

である。人類は戰ふものである。人類の戰は常に人類に新しい道德的の光を與へるものである。千六百六十九年（靈元天皇、寛文九年）のイギリスの名高い革命は、戰闘に依つて立憲君主政を生み出した。イギリス人は此戰闘に依つて、王の獨裁政治に對して議會の權利を維持した。フランスのルイ十四世は、多くの戰爭に依つて人間の血を流した。併し、彼は此戰爭をした爲めに、フランス語を話す人民の總體を幸福なる共同生活に結び付けることが出來た。一言にして曰へば、文明なるフランスを生み、之を保存することが出來

英國、海權を生命とす

た。若し、フレデリツキ大王が七年戰の大戰鬪をしたのでなければ、何を以てドイツ人は大帝國となるべき基礎を据ゐることが出來たらうか。フレデリツキ大王がボスバツヒで佛軍を破つたに非ざれば、ドイツの人心は、いつまでもフランスの思想の支配を免れることが出來なかつたであらう。關稅政策を維持する爲めに、又た世界の市場を他國に閉鎖されない爲めに、諸國の人民は戰鬪に從事した。イギリス人は海權を其國の生命として居る。インドとの貿易はイギリスの富の源である。併しながら、若し敵國がエジプトを占領したら、イギリスはインドに行くことは出來ない。イギリスはインドを失はなければならない。イギリスがインドを失へば、イギリスの將來はオランダのやうになつて仕舞ふ。故に、イギリスは自分の實益の爲めに、地中海の海權を維持することに努めて居る。イギリスは近頃まで、世界の最強の二箇國の海軍に敵對するだけの海軍を有つて居なければならぬと云ふ標準

を立つて、其標準で海軍を建設して居たところが、段々調べて見たら、フランス一國に對してさへ、十分優勢の位置を占めることの出來ないことを發見して、非常に驚いて、識者は之が爲めに心配した。これは今から二十年ばかり前のことである。イギリスのやうな平和主義者の多い國でも、海權を維持することには極力、骨を折つた。

海權とは何ぞ

海權とは何ぞ。

則ち、他國の海軍と戰はむ爲めの準備ではないか。戰爭の已むべからざることは『ドイツの軍國主義を打破しなければならぬ』などと言つて居るイギリス自身が海權の維持に汲々たることに依つて證明される。

人は好戰的動物なり

人類は天性、戰爭の好きな動物である、人は相撲を好むものである。人間の遊技の中に、勝負事は最も重要な位置を占めて居る。『價値のある敵の無き人は生き甲斐が無く感じる。「怖いものの見たさ」と云ふ諺があるが、それが

人間の本能を言ひ現はしたものである。人は恐ろしいものを見ずに居られるものでは無い、恐ろしいものを發見したいと思つて居るものである。さうして、其恐ろしいものが何處に居るかを發見する爲めに、我が敵となるに足りる敵を求むる動物である』。ニイチエは斯う云ふやうな意味を語つて居た。これはニイチエの新說でも何でもない。人は科學的に言へば、矢張り

生存競爭の產物

である。人は戰鬪して今日の進步を得たものである。今日以後でも進步する爲めには戰鬪をしなければならぬものである。故に、戰爭は已むべからざるものである。

（壬）全民主義。いろ〳〵な現象を通じて現代に於いて疑ふべからざる事實の一は、全民主義の勝利である。則ち、國家のことも國民總體の努力を有たなければならぬ。國を維持するには少數の人の力では出來ない、國民擧つて

國としての生存競爭に從事しない國は時勢後れであると云ふことは、今日に於いては明白なる事實になつて居る。此全民主義の時代は曾てギリシアの小さい國に於いて行はれた。都市の國たるギリシアに於いては全民主義が事實に於いて行はれたことは前に話した。さりながら、都市の國の時代が去つた後の時代に於いては、永い間、全民主義は歴史の面から消えて仕舞つた。文學復興の時代に、新しい元氣が民間に起つて來たけれども、其時代に於いても、其文學復興の感化を受けたものは極少數の人であつて、群衆は文學復興の何ものたることも知らなかつた。其新氣運に對しては何の理會をも有つて居なかつた。故に、文學復興の政治上に於ける勢力は、部分的であつて、全民的では無かつた。其結果は、唯だ君主の專制主義を堅固にするに終つた。佛國革命は之に反して　人權に關する主義を可なり多數の人間に吹込んだ。少數者ばかり其革命の精神に染まつたのではない。併し、言つて見れば、ま

だ中等社會だけの覺醒であつた、平民は之に與からなかつた。さりながら、其後、交通機關は非常な速度を以て發達し、いろ〳〵な文明の利器が進むに連れて、人類全體が政治の趣味を有ち、人類全體が『我々は國を支へる義務が有る』と云ふ感覺に醒めるやうになつた。謂はゆる

人間主義

ヒウマニチー

と云ふ人間主義が起つて來た。イタリーの政治家にして同時に哲學者であつたマジニーが言ふに『人間はヒウマニチーと云ふ大きな仕事場に於いて働く職人の一人である、其一人の人間は仕事をすれば滅びて仕舞ふ、併し全人類の利益になる。全人類の動いて行く其方向は、何人もそれを遮ることは出來ない。例へば、佛國革命の時に、フランス王ルイ十六世が殺されないで、外國に逃げ遂せて仕舞つたとしたところで、フランスの歴史は反對の潮流に

世界の運命

流れるものではない。世界の運命は少數の人の手に依つて變ずることの出來

ないものである。全體の人民の動きは何者もそれに抵抗することは出來ない。人民は遲鈍である。さりながら、我々は群衆の助けが無くては、何事もすることは出來ない』と言つたのは、此群衆の力を認めたのである。此群衆の力は段々政治上に現はれて來た。今から十二年前、千九百〇六年（明治三十九年）に、イギリスでは獨立勞働黨から二十九人の議員が出た。此勞働黨は主もにイギリスの町から選擧されたものであつて、大抵、社會主義者、若くは其れに近い者であつたが、彼等はそれより後、イギリスの政界に於いて見逃がすことの出來ない勢力になつた。彼等の力と、アイルランドの國民黨の力と、自由黨の政府の力に依つて、とうとうイギリスの上院は其歷史的の特權を奪はれて仕舞つた。下院は自己の權利の萬能を謳つた。上院の拒絕權（ヴェート）は其時から滅びて仕舞つた。革命的豫算など、言はれた極めて民主的な政策も行はれるやうになつた。斯うして、イギリスも段々全民主義

に進んで來る。各國の民主黨、勞働黨と云ふやうな者が段々勢力が多くなつて來て、さうして次第に政治は全民的になつて來る。これはどうしても已むを得ない勢ひである。

現代は此意味に於いて、確に全民的の世の中である。

全民主義の世の中

である。人民の主權と云ふことは、ルッソーの言つたことであるけれども、其敎理は勿論、道理には合つて居ないかも知れない。さりながら、現代の人民は自ら尊敬し、自ら尊ぶ念に滿ちて居る。國家は自分の肩に在ると云ふ自負心は甚だ強い。さうして、段々人民全體が國事を擔當するやうになつて來た。其勢ひを助けた者は、例の都市の膨脹である。世界的の大きな都市が出來て、人間が一つ所に集まり、さうして、大きな工場には澤山の勞働者が使はれるると云ふやうになると、例へて見ればギリシア時代の都市を國家とする時

代が半ば復活したのである。さう云ふ時代に於いて全民主義の復興を見むとするは已むを得ない次第である。イギリスの農民は、今日に於いても隨分情けない狀態に在る。イギリスで大地主をロードと云ふが、其大地主は日本の昔に在つた領家のやうなもので、其領家の下に別に地頭が在つたやうに、イギリスには第二の地主がある。理窟から言へば、彼等は借地人であるけれども、事實から言へば其れが本當の地主である。日本の德川時代でも、大名は原則から言へば地主である。其下に又た地主があつた。本當は地主ではないが、永く其土地を有つて居るから、事實に於いては其方が地主である、其地主の下に小作人がある。さう云ふ風に、イギリスにもロードの下に第二級の地主があつて、其下に農業勞働者がある。イギリスの田舍はさう云ふ三階級に別れて居る。さうして、其階級の區別は隨分嚴しく、封建時代の俤を今だに存して居る。併し、イギリスの農家はそれを不平として騷ぎ回るものではない、

都市の膨脹は全民主義を生みたる最大原因なり

默つて居る。イギリスで以て平民の權利を唱へて貴族主義に抵抗して、とう〳〵貴族院の特權さへ事實に於いて奪つて仕舞つた勞働黨は百姓から出たのではない、皆な都市から出たのである。なぜなれば、都市は段々大きくなつて來る、都市の力が段々強くなつて來る。人間が大きな町に集まつた形は、昔の都市が國家であつたギリシアに似て來た。これが都市に於いて早く全民主義を生んで、勞働黨が政治上に勢力を有して來た所以である。此理由から考へて見れば

都市の膨脹は全民主義を生んだ最大原因

であつたと言ふことが出來る。それでなくても、今は何事も大仕掛の時代である、人民大會を催さうと思へば直ぐに出來る、結社も自由である、大きな機械が動いて居る。總ての力が統一し易く、集中し易いから、全民主義は駸々として進んで來た。それが嫌やでも好きでも、さう云ふことは問題でない。

我々は唯だ事實を語らなければならない。今や全民主義は巨人の歩みを以て進んで來た。

（癸）新貴族主義。人民全體が覺醒して、彼等が國事を擔當すべき責任もあり權利もあると云ふやうに自覺した時代に、其自覺が到底何者も抵抗することの出來ない全民主義の時代として現はれて來たことは、前に話した。則ち、是れから先きの世の中は、何人が政局に立つても、此全民主義なるものを覆へす譯には行かない。『民可レ使レ由レ之。不レ可レ使レ知レ之』と云ふやうな議論は、是れから先きの世の中に行はれないことは勿論である。さりながら、之と同時に

新貴族主義

とでも言ふべき新しい貴族主義の起るべき勢ひのあることも、矢張り我々が認めなければならない現代の特徴である。

人民は遲鈍なり然れども其力は侮るべからず

人民の力は強し然れども概して言へば盲目なり

人民は前にも言つた通り遲鈍なものである。併し、人民が遲鈍だからと言つて、其力を侮る譯には行かない。是れから先き、世の中に立つて事をしようと云ふ人は、其遲鈍な人民を敎へ、さうして其人民の力を善い方に導き、それを自身の背後の力にしなければならない。さうする場合には、其人民の輿論、人民の感情と云ふものを、大きな水の力の如くに看做して、其力を國家の狀況に適應するやうに流れさせる工夫をしなければならない。其工夫をすることの爲めに、茲に謂はゆる新貴族主義の起る必要が有るのである。

人民の力は強い、何者も抵抗することは出來ない。それは大きな川の滔々として流れて來るやうなものである。さりながら、人民の力は概して言へば盲目である、決して賢明なものではない。丁度、水が溢れて大きな力となつた場合には、其水の畔に居る者に對して、大きな利益も與へるけれども、同時に大きな損害をも與へる如く、人民の力も其盲目なる發動に委せて置けば、

新貴族の職分

人民が支配すると云ふは外見のみ

人民の熱心は多くの場合に於て藁の火の如し

どれ程の惡るいことをするかも知れない。さう云ふ場合に、其人民の力、即ち其大きな水の力を規定して、良い方向に向けなければならない。これは、人民の中に住んで人民を理會する者のみが爲し得る仕事である。新貴族と玆に言ふのは、斯う云ふ種類の仕事をする人である。人民の中に生活して、人民と同じ感情を有ちながら、しかも人民を善い方角に導く力を有つて居る者である。則ち、人民を導く爲めに說を作り得る者である。其人の向ふ所に人民を向はせるものである。

一體、人民が國家を擔當すると云ふことは、人民が自ら支配すると云ふ意味ではない、人民が賢き支配者を認めて、其賢き支配者の背後の力になると云ふことである。世界に在る今日のいろ／＼の政府だからと云つて、決して人民が自身に政治をする政府ではない。前に言つたやうな支配者の少數が人民を導いて方向を定める政治である。人民の熱心は、多くの場合に於いて藁の

政治上の暴風雨は旋風的なり

黨派は腸詰を造る機械の如し

火のやうなものである。パッと燃出すけれども、容易に消えて仕舞ふことが多い。

輿論が起す政治上の暴風雨

と云ふものは、まるで旋風のやうなものである。今日は東から吹くかと思へば明日は西から吹く。方角も定めず、其風の強さの程度も定まらず、出し抜けに來て、出し抜けに去ることが多い。さう云ふものは決して政治を指導すべき價値は無い。

さりながら、それが恐ろしい力であることは確かな事實である。其恐ろしい力を善い方向に向けて行く人が、則ち我々の謂はゆる新貴族である。人民だけに委して置けば、人民は實よりも名に動くものである。眞の利益よりは寧ろ空しき幻影の爲めに煽動されるものである。黨派に政治を委して置けば、黨派は人材を殺して仕舞ふ。イブセンは『黨派はブッデング（腸詰）を拵へ

社會主義者と雖も案内者を要す

る機械と同じだ。プッデングは、いろ〳〵の肉だの野菜だのを細かく砕いてそれを一つに固めたものである。政黨に這入れば、馬鹿でも怜悧でも、良い頭腦でも惡るい頭腦でも構はずに、それをコナゴナに砕いて、混合物にして仕舞ふ。丁度、プッデングのやうなものになる』と言つた。さう云ふやうな者が寄つて集つて、天下の事を取扱つたところで、それは旋風が方角を定めずに吹くのと、餘り變らない。さう云ふ中に於いて、眞の人材たる者は、其盲者の力に方角を與へて、有用の力にする。力の運動を規定し、紀律と方角を與へれば、水も輿論も良い働きをする。さう云ふやうに、自覺した民衆を背後にして、其力を國の爲めに用ゐる人が謂はゆる新貴族である。

社會主義者のやうなものでも、其案内者は入り用である。例へば、マークス、若くはエンゲルスと云ふやうな人は、社會主義者に其主義を確定すべき知識と、其確定した主義を如何にして實行すべきかと云ふ方角を與へた案内者で

ある。案内者と云ふ者が無しには、如何なる勢力も盲者の力たることを免れない。謂はゆる新貴族は則ち此案内者である。

斯う云ふ思想は、近代及び現代の識者の間には、殆ど一致した考へである。

議會とは何ものぞ

カーライルが『一體、議會と云ふものは何をする所だ？ 議會と云ふものは、二百萬個の

無意味な投票

を集めて、それに依つて出來た議員を以て組織したものではないか。さう云ふものから何の善いものが出來るものか。眞とか或は善とか云ふものは、そんな憐れむべき機械から產出し得べき筈は無い。議會と云ふ場所は、唯だ言語を製造したり、音響を發するだけの役をするもので、其他に議會で何が出來る？ 本當の仕事は賢き人がするのである。賢き偉大なる人が出なければ、

一偉人の出るは十の政治改革よりも有効なり

議會が有つても何の役にも立たない。世界に一人の偉大なる人の出るのは、

輿論は價値なし

單に輿論に盲從する政治家は溺死せし犬の河上に浮ぶ如し

十の政治改革をするよりも世界を善くすることに於いては効の有ることである。輿論だとか人民の叫びだとか云ふことは、政治家の標準とすべきものではない。輿論は何でもないものだ、輿論に諂つて、輿論の儘に動いて行く政治家は、例へて見れば

テームス河に浮いて居る犬の死骸

のやうなものである。犬の死骸は潮が滿ちて來ると、上の方に昇つて來る、潮が退けば下の方に降る、さうして段々腐つて其臭氣は堪へ難くなる。人望とか輿論とか云ふことをのみ自分の行爲の標準として居る奴は、人望が左に行けば左に行き、人望が右に行けば右に行くのだから、丁度、潮流の進退に依つて浮いたり沈んだりする犬の死骸のやうなものだ。さう云ふものから何の善い政治が出來よう？　政治は自ら信ずる所のある偉大なる人物にのみ依つて行はれる』と言つたのは、彼が輿論政治全盛の眞中に於いて發見した新

眞理を多數の意見に求むるは危險なり

案内者の必要

貴族主義であつた。ニイチエが『凡人は意義の無いものである。凡人は唯だ英雄の犧牲となるに依つて意義を生ずるのみである』と言つたのも、此新貴族主義の傾向を強く言つたに過ぎない。『本當に世間の文化を進め、世間の進歩發達を盛んにする力は、輿論とか衆議とか云ふものから起るものではない。さう云ふ事業は全く個人的のものである。個人の中からのみ發するものである。眞理を多數の意見の中に發見しようと思ふのは危險なことである』と云ふのは、オイケンの説であつて、是れ亦、新貴族主義に裏書するものに他ならない。『人民總體を進歩させようと思ふならば、どうしても水先案内が入り用である。水先案内になるには、先づ自分が好んで愚人の水平に沒しなければならない。人民の中に進んで行つて、一番難儀な用を引受ける者にならなければならない。私は死ぬるまで私を民衆の爲めに用ゐ盡さうと思ふ。なぜなれば、私の働きが難儀になれば難儀になるほど、私は人民の水先案内たる

民心一致せざれば社會の根本的革命は成らず

此一致を造る者は大なる人物に非ざれば能はず

改革は盲動の群衆より生れず

生活をするものであるからだ』と、ショーが言つたのも、矢張り此新貴族主義に裏書するものに他ならない。『世の中を本當に改革しようと思つたら、唯だ外側から衆人を一致させて、一つの型に當嵌めて行くだけでは效は無い。どうしても心から改めて行かなければならない。總ての人の心を革命しなければ、

社會の根本的革命

は出來ない。其心を革命する力と云ふものは、矢ッ張り一人の事業でなければならない。一人の大いなる人物が社會全體を敎ふるのでなければならない。一個人の心に起つた眞理が、段々廣がつて世の中を支配するのである。偉大なる男女が出來れば、其偉大なる男女の努力に依つて、眞の民政が出來る。唯だ氣隨に、どッちの方角からも動いて來る盲目のやうな群衆の力を賴んで、それから改革を生み出さうと思ふのは、それは能はざることを求むるもので

眞の自由は賢き制限に服從するに依りて得らる

ある。本當の改革は偉大なる人格から來る』と、イプセンの言つたのも同じ意味である。

歷史の永い敎訓は『敎育の有る者が敎育の無い者を支配するときに、善い政治が起る』と云ふことを證據立つて居る。眞の自由は、無意味の放任ではない。若し、人類を放任して置けば、必ず强い者が弱い者を虐めると云ふ、兼併の弊を起さゞるを得ない。さうして、本當の自由は行はれなくなる。眞の自由は唯だ賢き制限に服從することに依つてのみ得らるゝ。さう云ふ賢き制限の行はるゝときは、人は自分の勢ひを幾分か犧牲にしたやうに感ずるけれども、其實さう云ふ場合にのみ自由は存在するものである。『銘々は唯だ自分の事を爲せば宜い、人の行爲を定むべき最大の標準は感情である』と、ルツソーの議論を其儘實現しようとすれば、我々は野蠻に還るより他は無い。賢き制限に服從しようと思つたら、どうしても賢き人を選んで中心に置かな

株式會社トラストカルテルの起りたる理由

ければならない。これが我等の謂はゆる新貴族主義である。此新貴族主義は、現在に於いて段々頭を擡げて來た。例へば、株式會社とか、或はトラスト、カルテルと云ふやうなものに付いて考へて見ても、其意味は能く分かる。金持は金を持つたばかりで、其金を賢明なる人に持たせて使はなければ、其金は決して有效には使はれない。そこで、財産も、工業も、賢明な管理者を選んで、其管理者の指揮命令に依つて動くと云ふ働きが現はれて來た。これが株式會社や、トラストや、カルテルの起つた理由である。今日は

使用人全勢の時代

である。使用人とは何であるか。會社が俸給を拂つて使ふ人間である。人に使はれる者であるから賤しい者のやうに考へられるけれども、其實は今の世界は段々使用人に實力が移つて來る。さうして、株主即ち資本家は唯だ懷ろ

社會的の職業は俸給を拂はれたる使用人に依りて行はる

里見義實

手をして、使用人のする所を默つて見て居なければならない狀況になつて來た。なぜであるか。金持は唯だ怠けた何も働かない、財產と云ふもので食つて居る雄蜂のやうな、半ば無用の動物である。さう云ふ者に多くの財產を委して置けば、失して仕舞ふか、社會の害をするか、何れ碌なことは無い。そこで、さう云ふ者の金を中心に集めて、それを支配する權を使用人に預けて、其使用人が高い俸給を取つて、金持の全體の金を回して居るのである。これが現代實業社會の特徵である。丁度、

日本の戰國時代

に、安房國は初め安西氏と云ふ者が其土地の地頭であつた。安西氏は今言つた資本家である。ところが、安西氏は唯だ地頭だけであつて、富貴に暮した雄蜂であつた。其身代の切回しが出來ないから、里見義實と云ふ武士を賴んで來て、番頭にした。里見義實は法律上の名義から言へば、安西の長臣であ

る。即ち安西の使用人である。さりながら、安西の持つて居つた安房の領地は、里見の賢明なる智慧に依つて治められたから、後には使用人たる里見が安房の主人のやうになつて仕舞つた。それと同じやうな意味に於いて、今日の使用人は段々、單純に金持の勢力に代るべき一階級となつた。彼等は自分の智慧才覺に依つて、金持の金を株式にし、トラストにし、カルテルにして、運用して行く。彼等が經濟世界に於ける重要の位置を占むるやうになつたのは、其智慧の爲めである。斯うして、産業の世界にも、矢ツ張り新貴族が起りかけて居るではないか。

十六　將來の日本

私は、既に世界が强國の時代より帝國の時代に移らむとしつゝあることを說いた。さうして、大きな革命、卽ち產業的革命が起した暴風雨、現に起りつゝある暴風雨に付いて觀察して、其いろ〳〵の議論の起る中で、いろ〳〵の國家創造の努力が現はれて來た中に就いて、これだけは動かすべからざる事實であると云ふことを研究した。これだけのことを心の準備にして將來の日本を考へて見なければならない。

世界の氣運と吾人の覺悟

世界は既に帝國の起るべき氣運に向いて來た。我々も無論、默つて居るべき時でない。世界がさう云ふ氣運に向いて來たからには、我々も其れに對して相應の仕掛をしなければ、我々の國は損害を蒙るに違ひない。然るに、幸にして我々

日本帝國の大いさ二倍せり

も亦、此世界が小國より大國に移るべき時期に於いて、後ればせながら兎に角

小國から大國に

なつた。二百六十藩を並べた日本から、日本全州を一つの法律、一つの政治で治める郡縣政治に移つた。さうして、世界が大國から强國に移つた時代に於いて、我々も之と共に

大國から强國に

移つた。日清、日露の兩戰役を經て、日本帝國の大いさは二倍した。我々は最早、島の國ではなくなつた。アジア大陸に領土を有する陸上の帝國になつた。我々の支配する人種は、もう昔のやうに日本人種一つではない。我々は朝鮮人をも我々の種類の中に加へた。臺灣は於いては、南支那人をも我々の同胞の中に算へるやうになつた。我々は陸と島とに跨り、朝鮮人、支那人を純粹の日本人に結び付けた大きな國になつた。我々は世界全體に關はる政務に付いて發言

日本、強國となる

し得る強國になつた。我々の發言は、世界の如何なる強國も、輕んずる譯には行かないやうになつた。則ち、我々は矢張り世界の強國と同じ程度の強國になり得たのである。

然るに、他の強國が進んで帝國にならむとする時に方り、我々のみ指を銜へて引込んで居べき筈は無い。我々も矢張り

日本を帝國たらしむべく努力せよ

帝國となすべく努力しなければならない。國の陣立が時勢後れで居ることは、其國を滅亡させるものである例は、前に十分に說いた積りである。世界が既に帝國の起るべき時期になつたからには、我々も帝國になるやうに努めなければならない。幸にして此點に於いては我々は最も好い便宜を有つて居るやうに思ふ。なぜなれば、我々は世界が既に全民主義になつて來たことを前に言つた。全民主義は現代の防ぐべからざる勢ひであることを言つた。世界の諸強國の願ひは、どうか再びギ

日、露に勝つ

ロンドンタイムスの所論

リシア、ローマ時代の全民主義を恢復したいと云ふことである。然るに、幸にして我々は全民主義の實行に付いては、極めて都合の好い國である。寧ろ日本の昔からの國體が全民主義であつたと言つて宜い。

日露戰爭の時に、世界は日本が眞逆に勝ちはすまいと思つて居た。然るに、日本は世界の豫期する所に反して、大國のロシアと戰つて、意外の勝利を博した。世界は日本が勝つたことに付いて喫驚した。ロンドン タイムスが此事を論じて、斯う言つて居る。『日本は丁度、古典の國、即ちギリシア、ローマの昔と同じ國柄である。國民が皆な國の爲めに犧牲になることを喜んで、それを敢てする國である。さう云ふ國家は現代には實に珍しいものであるが、日本人は確かに

古典的の道徳

を實行して居る。これが日本の勝つた所以である。さりながら、此古典的の道

乃木大將の自殺に就いて

忠義

德が今の世界に於いて、いつまで續くであらうか。日本人も段々エッロッパの文明に化せられて來る。さうしたら此犧牲獻身の古典的道德は段々衰へはすまいか。日本の進步は之に依つて止まりはすまいか』と云ふことを言つて居つた。

乃木大將の自殺

したときにも、エウロッパの人は『あゝいふ犧牲的精神は日本の强味であつて、世界に珍しい遺物である。さりながら、日本も追々はさう云ふ精神が少くなりはすまいか』と云ふことを言つた。併しながら何ぞ圖らむ、世界の狀況が逆まに古典のやうな國家を生み出だすべき勢ひになつて來た。どうか、古典のやうな犧牲獻身の熾んな、國の爲めならば如何なる艱難をも憚らない、艱難をも厭はないと云ふ、忠義の心を恢復したいものだと云ふやうな感じが湧いて來た。ローヤリテー(忠義)と云ふ語が、白人種の間に强い意味を有つやうになつて來た。これは、彼等が日本人の成功に鑑みて、自分たちの國家に對する犧牲の精

神が、日本人のやうに強くないことを恥ぢたのではない、それが羨ましいと思つたのでもない、實は彼等の境遇が段々古典的になつたからである。なぜと言つて見ると、前に言つた通り大きな町が出來て、其町が國政を左右するやうになつたことも、古典時代の全民主義に似て居る。おまけに、交通機關の段々發達すると共に、國と國とが接近し、前に言つた人種の侵入と云ふことが國境の間に行はれるやうになつて來ると、丁度、古典の時代に、國が幾つも近い所に並んで居て、國として激烈な生存競爭をしなければならなかつたと同じやうな結果になつたからである。昔は小さな都市の國が、ギリシア半島の中に、或は其小さな島の中に、幾つも散在して、それが距離が近いから互に國の存亡を爭つたのであるが、今は世界が縮まつて、ギリシア半島くらゐの小さな所に(距離の點から言へば)集まつて仕舞つたと同じことなのである。さうして、彼等が互に

古典的全民主義の復活

國として生存競爭

するのであるから、狹い所で押合ふことは古典時代と變らなくなつて仕舞つた。斯う云ふ時代に於いて、古典の全民主義（人民全體が國の事に當り、國の事の爲めには一個人を犧牲にすべき筈であると云ふ考へ）が復活して來たのは無理の無いことである。勿論、世界の列國は日露戰爭に於ける日本の勝利に刺擊されて、忠義とか或は犧牲とか云ふ新主義の必要を著しく感じたに相違ないが、それが無くても彼等は境遇の變化から同じ考へに導かれざるを得なかつたのである。さうして、今やさう云ふ全民主義に還らうと努力して居るのである、則ち古典時代の精神を恢復しようと踠いて居るのである。幸に日本は、昔から萬世一系の至尊の御統治なさる所であつて、人種は早い時代に混同して、一つになつて仕舞つて居る。言つて見れば、日本國は一家のやうに共同生活であつたから、日本人民は全民主義の意味を最も明白に現實にすることが出來た。これ

國家は先づ放任主義の罪惡を深感ぜよ

は日本國が將來に發展すべき爲めには、眞に好い準備である。

現代のやうに、强國から帝國に移るべき氣運の盛んな時代に於いては、國家は先づ

放任主義の罪惡であると云ふこと

を深く感じなければならない。國家は其國家の下に、國家に治められる總ての人民に教育を施さなければならない。若し教育を施さず、國民として活動すべき準備をしなければ、國家は其不行屆に付いて責任が有る。無教育は人間の心を暗くする。人間の心に闇を生ずる。其闇を生じた責任は國家が負はなければならない。さう云ふやうに、是れから先きの國家は自ら其責任を感じなければならない。世界を相手に帝國的經營に從事しようと云ふ國家は『人民のすることはドウでも宜い』と言つて、打遣つて置くべきでない。我々は今日に於いて、國家が國民の思想に於いても、又た物質に於いても、總てを準備する責任の有

非國家干涉論

國是を一定せよ

るものであると云ふ主義を立てたく思ふ。
小國若くは大國の時代に於いては、一個人の間には『國家は人民の事に干涉する必要は無い』と云ふ議論が往々あつた。人民が銘々別々に働くが宜い、國家の仕事には自ら制限が有ると云ふ考へが行はれた。これは謂はゆるローマ人の思想の系統を其儘承けたものである。前に言つたやうに、ローマ人は始めて國家と人民の仕事を分けて、キリスト教を寛容して、宗教と國家は二つのものであると云ふやうにして仕舞つた。それより以來、個人は自分の意思を自由に表はすやうに段々なつて來た。國家の仕事は段々制限される傾きが有つた。併しながら、現代に於いては前に言つた通り全民主義の時代に戻つて來た。國家と國民と一致し、同じ目的に向つて働き、大きな國を立てなければならない時代に進んで來た。故に、今日に於いて最も急務なことは國是を定むること

である。國家も人民も共に向つて進まなければならぬ一つの方角を立てることである。それを立てゝ世界の戰場に乘出さなければ、我々は帝國の時代に於いて劣敗者たる位置に落ちて仕舞はなければならない。我々は是非とも衆心を揃へて、一つの目的に向つて突進しなければならない。全民の力を一つ所に傾注しなければならない。其最大なる國是と云ふのは何であるか。それは言ふまでもない

大いなる大日本帝國の建造

である。世界が大いなる帝國を造らうと云ふ場合に於いては、我々も大いなる大日本帝國を造る土臺を据ゐなければならない。これは我々に取つては相應しい事業である。日本人種としては、其人種的本能の向つて進むべき運命であると言つても宜い。我々は島の中に這入つて、島の帝國を造つて居つたから、世界的帝國には全く縁の無い人種だと思ふのは大きな間違である。我々と一番近

い、人種としては、從兄弟同士の間柄とも言ふべき滿洲人は、曾て支那の北方に於いて金國の朝廷を建て、近ごろは滿洲の朝廷を建て、滿洲朝廷の如きは、世界に於いて最も人口の多い、最も廣大なる帝國を支配して居たではないか。滿洲人ほど我々とは人種的の關係が近くはないが、さりながら同人種とも云ふべき蒙古人種は、曾てはロシアを取り、インドを取り、支那全部を取り、世界に比類なき大帝國を造つたではないか。トルコ人は血液から言へば、蒙古人よりも我々に遠い親類かも知れない。さりながら、彼等は或る意味から言へば、支那人よりも我々に近い親類である。其トルコ人も又永い間、エウロッパ人を怖れさせた帝國の主人ではなかつたか。我々はアジア人たる點に於いて、大いなる帝國を建てるに相應しき人種であると、自ら信ずべきである。アジア人の英雄は權勢を好んだ、權勢と勇氣に於いては、世界の歷史に比類なきものであつた。彼等は一生の間、帝國を造り、王國を造ることに努力して、其他に樂みあ

ることを知らなかつた者が多い。エウロツパ人の怖るゝ所となつたチモールと云ふアジアの豪傑は、蒙古人と云ふよりも寧ろトルコ人と云ふべき血統であつたが、彼れの第一の目的は何であつたかと云ふと、世界を征服して

世界的帝國の君主

になることであつた。天下後世の限り無き尊敬の記憶の中に活きて居たいと云ふことは、彼れの第二の希望であつた。彼は其帝國を造る爲めに、五十年の間、努力した。五十年の間、戰爭と政治に惟れ日も足らざる努力をした。彼れの生涯に本當の幸福な時期と云ふべきものは、則ち政治にも戰爭にも骨を折らない氣樂な時期と云ふのは、たツた二箇月しか無かつたと言はれて居る。彼れは其帝國を建つる爲めに、其身を費やし盡して厭はなかつたのである。日本の德川家康は、七十五歳で死んだ。併しながら、家康が其七十五年の生涯に於いて、本當の樂隱居の境涯を樂しんだのは、纔かに數月に過ぎなかつた。彼は息を引取

亞細亞魂

亞細亞人は人を支配すべく生れ來れり

るまで、日本國の治安を懸念して居た。斯う云ふやうに、大いなる帝國、大いなる王國を建てて、さうして其治安を維持すると云ふことに、一生を費やし盡して厭はなかつたのは

アジア魂

である。アジアの英雄には斯う云ふ人が多い。西洋の歴史家に言はせれば、斯う云ふ權勢慾に對しては可なり惡口も言ふ。さりながら、大きな國を建てようと云ふ慾望、其慾望に並行する努力と、死ぬまで其血の一滴も政務の爲めに費やすことを惜まないのは、アジアの英雄の特徴である。アジア人は恰も人を支配すべく生れて來たやうなものである。我々日本人も亦アジア人であることに於いて

日本帝國を大いなる國と爲し、大いなる帝國を爲すこと

に努力するは、人種として其本能に相應したる事業であると思ふ。

世界を戰場とせよ

然らば、其大いなる大日本帝國と云ふのは、どう云ふことを意味するか。大いなる大日本帝國を建つると云ふのは、如何なることであるか。則ち、日本國の仕事を世界的に廣げることである。例へば、先づ日本國の國の極奧の深い中心から鐵道を造つて、其鐵道を海岸若くは航行することの出來る河まで繋いで、それを日本の船に載せて世界の市場まで持出すと假定する。則ち、日本の山の奧の奧が、之に依つて世界的になつたのである。世界の市場と日本の山の中とが結び付けられたのである。日本帝國を世界的にすると云ふのは、斯う云ふ意味のことである。一言にして曰へば

世界を戰場とすること

である。平和の戰に於いても、或は干戈の戰に於いても、日本國の中心を世界の眞中に持出すことである。

それに付いて、先づ我々の心得なければならぬことは、國を建つるは則ち國の

英人のイエス、ノーの一言は九鼎大呂よりも重し

力を強くするのだと云ふ物質主義のみに執著してはならない。我々は此國を唯だ他國を倒す爲めに用ゐるものであると信ずべきではない。ドイツ人は決してドイツの軍備をのみ誇りはしない。イギリス人は決してイギリスの海軍のみを誇りはしない。イギリスはイギリスの文明を誇る。イギリスの文明が世界を感化したことは、イギリス人の誇りである。イギリス人がインドを支配する言草は斯うである。『インドの王侯がする約束と云ふものは、何枚證文を書いても、人民がそれを當てにしないではないか。どんな宗教上のむつかしい誓ひ事をしても、インドの人民は其恐ろしい誓に重きを置かないではないか。さりながら、イギリス人の「イエス」、イギリス人の「ノー」と云ふ唯だ一言は、インドの土人に取つては、彼等の王侯の約束よりも、證文よりも、又た宗教上の誓約よりも、非常な重みを有つて居るではないか。此信用がインド人をして我等の力に依頼せしめた所以である。我々は、インドを文明にした、インドに鐵道を與へた、インドに健

日本流の文化を以て世界に貢獻せよ

康を與へた。インドに教育を與へた。我等がインドを支配するのは文明の權利である』と言つて居るではないか。ドイツ人は『世界はドイツの文化に對して感謝すべき理由が有る』と言つて居るではないか。我々が世界の中心に日本を押出す場合に『日本は野獸の如き強い國だ』と評價されて、それで滿足すべきものではない。日本も亦日本流の文化を以て世界に貢獻すべきである。

今日でも『文明の敵』と云ふ言葉は非常な重みを有つて居る。『彼は文明の敵なり』と言はるゝときには、何程の強い國も、其衷心に弱味を感ぜざるを得ない。第一、國を建つる者の本心に於いても、疚しき所がある。故に、我々は先づ日本流の文化を世界に布くと云ふことを、國家の最大の目的とすべきことを覺悟しなければならない。如何にして日本流の文化を世界に布くべきか。我々

鮮滿人を日本文化に浴せしめよ

は傳道師を白人の間に派遣する譯には行かない。我々はエウロッパ人に敎へるのに、日本の工藝、科學を以てする譯には行かない。さう云ふ時期は、將來は來るであらう、又來ることを希望する。さりながら、今日のことではない。併し、我々は目前に眼前にすべき文明の事業を有つて居るではないか。我々は既に朝鮮人を我々の同胞の中に加へたではないか。我々は既に滿洲人の幾部分を我々の感化の中に入れて仕舞つたではないか。さう云ふ者に向つて、我々は先づ日本流の文化を布かなければならない。

我々の鄰に支那と云ふ大きな國がある。其向ふにはインドと云ふ一つの世界がある。インドは一國と云ふよりも、寧ろ一世界と云ふべき程のものである。其インドからは、我々に佛教と云ふものが來て居る。其佛教に連れて、多くのインド思想が、我々の文學の中にも、我々の制度の中にも、這入つて居る。支那の法律、制度、文學は、曾て我々の師匠であつた。我々は思想に於いては、殆

印度、支那、西洋の文明と日本の文明を混一、消化して印度、支那に布くべし

ど支那の一つの州であると言つても宜い位に、支那人の恩惠になつて居つた。

今日に於いて我々の爲すべきことは、其インドの文明、支那の文明、西洋の文明と日本固有の文明を混一して、それを消化して、大きな日本文化を造つて、其文化をインドにも、支那にも、布くべき筈ではないか。インド學、漢學を日本人のものにして、日本人の世界から得た文明を以て之を解釋し、新しい日本文化を造つて、彼等を導くべき筈ではないか。先覺の者が後覺の者を導くのは、天の定めたる義務と云ふべきものである。イギリスがイギリス文化を誇り、ドイツがドイツ文化を誇り、文明の權利を主張する場合に、我々が支那やインドを其自然の儘に放任して置くと云ふことは、自ら先覺者たる位置に孤負するものではないか。故に、我々は今日に於いて、新しい

大日本文化

なるものを現出することに努力する必要が有ると思ふ。若し、大日本文化と云ふ言葉を嫌ふ者があつたら、

亞細亞を覺醒せよ

アジア文化

と言つても宜しい。我々はアジア文化を造つて、さうしてアジアの覺醒を圖らなければならないではないか。此精神的事業が出來なければ、軍備が十分出來ても、物質的の富が十分出來ても、我々は未だ世界の帝國的氣運に對して對抗することは出來ない。唯だ『日本が强い』と云ふだけのことであつたら、我々は決して天下後世に感謝せらるべき理由は無い、又た我々の仕事が大きくなるべき譯も無い。日本の心が世界の心と共鳴すべき理由も無い。日本は其アジアに於ける先覺者たる位置より、其早く白人種の文明を消化し得たる位置より、

吾人の任務

アジア文化を造つて、其人種としては親類同士の國民、若くは昔から文明の取遣りをした親しみのある國民を覺醒することは、我々の任務ではあるまいか。

勝算あるに非ざれば戰を好む勿れ

私は、日本の思想家、學者に向つて、先づ此仕事を要求する。我々は無論、軍備を擴張しなければならない。世界的帝國を建つる時に方りて、今のやうな軍備で滿足すべき理由は無論ない。戰爭の已むことを得ないものであることを覺つた我々は、世界が大きな軍備を擴張するのに、我々のみ無腰で居ると云ふ譯には行かない。それかと云うて我々は、容易に平和の頭巾を脫いではならない。我々は、我々の第一の職分は、アジア文化を擴張し、アジアを覺醒する

平和の事業

であることを、世界に知らしめなければならない。我々は努めて戰爭を避けなければならならない。全體として勝算があるので無ければ、我々は戰を好んではならない。さりながら、どうしても我々の立場を守る爲めには必ず戰はなければならない。イギリス人は戰を好まない人民である。併し、ドイツがフラン

國の生産的能力を盛んにせよ

スを蹂躙して、エウロツパの權力平均を破れば、イギリスが危險になるから、彼は遂に今度の戰に戈を執つて起つた。ドイツがベルチアムに突出して來たときは、イギリスの非戰論者も『最早戰をしなければならぬ』と言つて、主戰論に變つて仕舞つた。我々は戰爭は萬一の場合でなければしないと云ふことを覺悟して、先づ我々の世界に對する使命は、アジア文化を我が鄰國に布いて、世界の利益を圖るに在ると云ふことを、心から信じ、且つそれを世界に聲明しなければならない。

次に我々の努むべきことは

國の生産的能力を盛んにすること

である。一體、國家と云ふものを永い間、厄介物のやうに思つて居た自由思想は、我々に取つては實に恐るべき病であつた。『國家は何もしないが宜い、國家が干渉すると碌なことは出來ない、國家は先づ人民の自由に放任するを以て

政治上の良策とすべきである』と云ふことを言ひ出したのは、イギリス人であつて、日本國民が始めて世界の文化に觸れたときに這入つて來た思想は、其非國家干渉論であつた。ミルの『自由之理』、スペンサーの『代議政體』及び『干渉論』などは、其時代の日本の青年の好んで讀んだ本である。さりながら、此思想は多くの眞理を含むと同時に、多くの誤謬をも含んで居た。我々に善い感化も與へたけれども、同時に惡るい感化も與へた。若し、國家が何もしない木偶人であるならば、我々は國家を造つて置く必要は殆ど無いのもある。イギリス人自身の中にも、さう云ふ國家論には反對説が有つた。カーライルなどは斯う云ふ放任主義には極力反對を唱へた。さう云ふ議論が出てから『我々には本當の政治と云ふものが無くなつた。我々の政府は、唯だ公安を維持し、租稅を取るだけのことしかしない。我々の國には政治と云ふものは少しも無い』と惡口を言つた。日本國の思想家は、今日以後に於いては、國に關する古い輸入

思想を捨てなければならない。國の力を十分に利用し、國民の生產能力を盛んにしなければならない。則ち、國家の力に依つて、國家と國民の力を協同し、先づ我々の富を造らなければならない。然らば

科學を盛んにせよ

如何にして我々は富むべきか。

何事を擱いても我々のしなければならぬことは何であるか。それは他ではない、科學を盛んにすることである。科學は實に恐るべき力を有つて居るものである。現代の社會組織も、科學が工業に應用せられた結果から起つて來たものである

科學は自然を人の奴隷とす

ことは前にも語つた。科學は空氣から富を造ることが出來る、距離を滅ぼすことも出來る、天に人間の國を廣げることも出來る、不透明な物を通じて其底に在る物の形を見ることも出來る、バクテリアを養成して、それを動物の病、植物の病、人間の病を治療する仕掛にも應用することが出來る。昔の人間は野獸と戰つて、野獸を馴したが、今日の人間は自然と戰つて、遂に自然を征服した。

全く征服し得たとは言へないけれども、自然は大部分、人間の奴隷になつた。國と國との生存競爭は、今日に於いては、兵隊の多少よりも、或は文學の盛んで有る無いよりも、主として科學の應用の優劣に在る。現代に於いて強い國は、特別の科學教育機關を有つて居る國民である。我々は此事實を忘れてはならない。科學、殊に應用科學に於ける日本の國際的地位を高くすることが、日本國を世界の眞中に押出す仕事としては、最も重大なる事業である。謂はゆる

全民主義を工業社會に應用すること

も、科學の奬勵に次いで重大のことである。勞働者と資本階級と對抗して、いつも喧嘩をして居るのは、決して大いなる富を造るべき原因ではない。我々は是非、其調和を圖らなければならない。或は瓦斯、電氣、鐵道の事業を都市の公有にして、資本家の利益壟斷を和らげようと云ふ政策を執り、若くはそれを主張する者もある。さう云ふ、個人と都市の利害が相反いて、互に相對立して

黨派心を以て天下國家の事を決する勿れ

居ると云ふことも、本當の富の進歩を圖るべき道ではない。我々はそれを混一して、組織あり統一あり調和ある全民主義の事業としなければならない。政黨は主義よりも寧ろ自分の代表して居る階級の利害を固執する傾きがある。現代の代議政治も、其主義が現代の必要に應ずべく變つて來なければならない。黨派心で、天下の事、國家の事を決めると云ふ傾向を一變して、先づ國家全體の利害を打算して政策を定めると云ふやうに仕向けなければならない。一言にして曰へば、國家は其國家の下に出來た總ての階級を調和する役目に忠實でなければならない。さうして、其階級的嫉妬心、憎惡心を滅ぼすことを努めなければならない。ドイツでは、ドイツ皇帝自ら、勞働階級の狀態を改める目的の爲めばかりに、態々國際的の大會を開いて、其大會に於いて『勞働者の要求と希望に應ずる方法を協議したら宜からう、さう云ふことは必ずしも不可能のことではない、プルシアの王としてはドイツ皇帝は、其プルシアの國民の勞働時間と

養老金

强制保險

勞働の狀態とに付いて法を立てるのは、其當然の義務と信ずる』旨を皇帝自ら宣言した。これは千八百九十年（明治二十三年）のことである。それから、段々いろ／＼なことをして、健康を害する危險なる職業に關しては、勞働時間を制限する法を立て、其他いろ／＼な制度を立つて、勞働者の狀態を改めることに骨を折つた。謂はゆるドイツの國家社會主義なるものは其れである。

イギリスに於いても、國家が社會の調和に盡力することは、最近に於いて著しく現はれて來た。殊に、今度イギリスの首相になつたロイド　ジョージの盡力に依つて、千九百〇八年（明治四十一年）には七十歳以上の國民に養老金を給する法を立て、千九百十二年（大正元年）には强制保險法を立てなどして

資本家と勞働者の間に橫はる難問の解決

をしようとして居る。浮浪を簷下から引上げて、それを獨立させて、職業を與へ、良民に化する仕事は、各國の政府が努めて居る。ストライキの仲裁も各國

資本家を教育せよ

勞働者をして其守るべき線を守らしめよ

が國として試みて居る。工場法も次第に整頓して來た。危險な機械に對しては其危險を豫防すべき方法を講ずること、空氣の流通を良くすること、其他、工場內の不健康の狀態を改良すること、婦人小兒の勞働には時間の制限を爲し、又た勞役の種類を輕くすること、十五歲以下の小兒を用ゐないこと、さう云ふやうなことは、各國の工場法が規定して居る。斯う云ふやうなことは、決して政府が勞働者の加勢をして、資本家を虐めるのでは無い、資本家を助けて勞働者を抑へるのでもない。政府の立場から言へば、斯樣な仕事は資本家が其位置から當然爲すべき仕事である。政府は唯だ資本家を誘導して、其當然の任務に還らしめむとするのみである。政府は之と同時に、勞働者をして其守るべき線を守らしめむと欲するものである。政府は全民主義の立場から全體の利益を考へて、銘々の守るべき線を定めたのである。これが現代の國家のする仕事であつて、將來益々此道に向つて進まなければ有力な國になることは出來ない。

『相爭ふ國は立つべからず』と云ふ通り、國と國との競爭が激烈である場合に、國の中が二つに分れて互に鎬を削つて居るやうで、どうして其國が優勝の位置を占めることが出來るであらう?。元來『社會は治める階級と治められる階級、勝つた階級と負けた階級、總ての富を自分の手に收めた階級（則ち資本の持主たる階級）と、自分の生活を他人に依頼しなければならぬ階級（則ち資本を持たぬ階級）の二つに分つて、此階級間の爭鬪が則ち國家の歷史である』と立てたのは、現代の社會主義者の主張であるけれども、これは前に言つた一人種、一國內の內部の爭ひ、則ちイントラ　レーシカル　ストラッグルにのみ重きを置いた舊き進化論に執著した謬りである。本當に

人間の運命を定めるもの

は、さう云ふ一人種、一國內の內部の爭ひではない、人種と人種の間の爭ひである、人種と人種の生存競爭である、則ちインター　レーシカル　ストラッグルで

社會主義者の階級戰

あると云ふことを定めるならば、此議論は餘程改良されなければならない。全體、社會主義者の謂はゆる階級戰なるものは、國内の問題を解釋するにも當つて居ない。勿論さう云ふ場合が決して無いとは言へない。さりながら、社會に於ける生存競爭は、多くの場合に於いては、資本家對勞働者の生存競爭ではない、

甲の資本家＋甲の勞働者　對　乙の資本家＋乙の勞働者

會社盛衰の内面

の競爭である。之を具體的に言へば、甲の會社も乙の會社も共に瓦斯事業をやつて居る。甲の會社でも資本家が勞働者を使つて居る、乙の會社でも資本家が勞働者を使つて居る。此間に起る生存競爭は、其組合せの能く出來たと出來ないとで決まる。則ち、甲の株式會社に於いては、資本家と勞働者の感情が能く調和して居り、重役と職工の分業法も能く整頓して居る。彼等は一つ心になつて規律ある働きをして居る。さう云ふ場合には、其生産物が多く、其働きの效

果が大きい。之に反して、乙の瓦斯會社に於いては、資本家と勞働者が喧嘩をして居る。彼等の感情は相敵視して居る。役員と勞働者間の分業法も一定の組織が立つて居ない、其陣型が亂れて居る、其能力は無益に消磨されて居る。此場合に於いて、乙の會社は生存競爭の失敗者となる。さうして、其資本と勞働の組合せの上手に行つて居る會社のみが榮ゆる。斯う云ふのが現代の生産社會の生存競爭には多く見る現象である。さう云ふ現象を考へないで、唯だ現代に於いては資本階級と勞働階級が二つに分れて戰爭をして居るものとのみ説明する社會主義者の説明は、國內の狀態を說き明かすにしても不足である。社會主義者はどうしても其說を作り直さなければならない。彼等は餘り早く階級爭鬪の原則を作つて仕舞つたことを後悔しなければならない。況や、人種と人種の間、國と國との間の生存競爭が、人間の運命を定める一番大きな原因であつたならば、國の力に依つて資本と勞働が各〻其働くべき分界を定めて、好い組合

資本家と勞働者とは調和せざるべからず

ロイド ジヨージ

せによつて、統一と組織と調和のある有效の働きを爲すに至るべきは當然である。さうなければ決して優等な國ではない、優等な生産社會ではない。兩虎相闘ふときは、兩方ながら傷が附かなければならない。

資本家と勞働者が戰爭をして居る場合には、兩方とも草臥れなければならない、他の統一して居る國に負けなければならない。故に現代に於いては、どうしても資本と勞働は調和しなければならない。統一しなければならない。好い組合せになつて、完全な能力を發揮しなければならない。此必要は事實として既に多く現はれて居る。例へば、ロイドジヨージのことを考へれば能く分かる。ロイド ジヨージは勿論、社會主義者であるとは言はれない。從つて、彼は社會主義のやうな階級爭闘の教理を信仰して居る者とも言へない。さりながら、彼は永い間、階級的の憎惡心を煽動して、平民を代表し、資本家を攻擊する極端の煽動家であると言はれて居つた。

日本をして大工業國たらしめざるべからず

然るに、斯う云ふ人が擧國一致の政策の爲めに、首相の印綬を帶びるやうになつた時代の趨勢を考へて見ると、今や資本と勞働は、國家の按排に依つて、本當に統一しなければならない、さうして其統一から起つた國家の力に依つて、世界の戰場に突出しなければならないと云ふことを、事實に於いて證據立つたものと言へる。我々は此事實を忘れてはならない。勿論、日本も此方針で進まなければならない。

斯う云ふ次第で、我々は資本と勞力を一つの心で一つの目的に結んだ

大きな工業國

にならなければならない。人類の低級な進歩の時代、則ち小國の時代に於いては、國と國との間に於いて一番有力な生存競爭の方法は、動物的の力、即ち腕力と、少しばかりの謀であつた。併しながら、國がもッと大きくなつて來た場合には、どう云ふ國が勝利者であるかと云ふに、其國の力と勇氣とを一定の

規律の下に整頓したものが勝利者でなければならぬ。さりながら、更に進んだ現代は、もう腕力の時代ではない、勇氣の時代でもない。無論、勇氣と腕力は今日に於いても不必要ではない。さりながら、其れよりもッと必要なものがある。それは何であるかと云ふと

富

である。富んで居ること、及び其富を運用することの出來るものが、國として今後の優勝者である。

昔は兵器と云ふものは餘り問題でなかつた。裸體でも相撲は取れた。三尺の劍を提げて、敵の中に飛込んで行つて、武功を立てることも出來た。さりながら、兵器は段々重大な意味を有つて來た。今日の戰爭に於いて、ドイツの強いのは何故であるかと云へば、ドイツは農民の國であるが爲めではない、ドイツが昔からナイトの威張つた武士の國である爲めでもない。ドイツは多くの兵隊を有

兵器は工業に至大の關係を有す

するが爲めでもない。一口に言へば、ドイツに熟練した職工の多い爲めである。ドイツには人口千に對する百人餘りの職工がある。日本には同じ比例に於いて纔かに十八人ばかりの職工があるに過ぎない。此ドイツの職工がドイツの大いなる兵器を造る。いろ〳〵な熟練の職工があつて、其兵器の製造に從事して居る。これがドイツ軍隊の背後から澤山の兵器を供給する。私は前に『今日に於いては人間よりも機械が多く働く』と言つた。此事實はドイツの現狀に能く當嵌まる。

工業は弱兵的傾向を有すとの説

世間の議論家の中には『工業は人間を弱くするから、工業が繁昌して來れば、國の兵は弱くなる』と言ふ人もある。『工業は人間を工場の奴隷にする。婦人小兒を工場に運ぶから。國民の健康は弱る、日本國民は幸にして大部分、農業に從事して居る。農民が良き兵隊を出だし得ることは言ふまでも無いことで

東北人と官軍

あるから、これは日本の爲めに祝すべきことである、日本の武國として喜ぶべきことである。然るに、工業が盛んになれば、日本の軍隊は弱くならなければならない。なぜなれば農民の數が減るからである』と言つて、農民に強い信仰を置く人もある。我々も、實は今度の戰爭の始まるまでは、此理窟は耳を傾くべき價値のあるものと思つて居つた。さりながら、今度の大戰は明かに此重農說は割引をして聞かなければならないものであると云ふ事實を發見した。ドイツの強いのは實に其工業の繁昌の結果である。

良き兵器を澤山に造り出すことの出來る職工を多く有つて居つた御蔭である。考へて見れば、此理窟は簡單明白のものである。明治維新の時、東北の戰爭で官軍と東北の人と戰爭すれば、いつでも東北の人が餘計に死んで居る。官軍が十人も死なゝいのに、東北の人は百人も死んで居る。東北人の勇氣、東北人の健康は、決して官軍に劣るものではない。況

や、彼等は自分の土地に戰ひ、官軍は各地に戰ふのに、どうして東北人が多く死んだか。其理由は明白である。官軍は一番先きに意氣地の無い江戸を降參させた。江戸と横濱を自分の勢力範圍にして仕舞つた。世界の新しい武器は官軍の有つて居る市場でなければ買はれない。官軍は之に依つて良き兵器を澤山準備することが出來た。東北の人は舊式の兵器より他に有つことは出來なかつた。東北人の持つて居た鐵砲の種類は實に憫むべきものであつた。則ち、東北人は惡るい兵器を持つた爲めに敗北したのである。

工業が國の戰爭に影響のあることは此事實が明白に示して居る。何の不思議は無い。ドイツが今日、其人口に於いては殆ど自分に倍するロシアを向ふに回はして、片手でのみロシアを毆り付けて平氣で居る。其理由は何でもない、ロシアは良い職工が乏しくして、ドイツには其れが多いからである。ロシアは農民の國である。さりながら、ロシア

工業の戰爭に與ふる効果

は良い兵器を供給すべき職工が無い。故に、あれだけの大國を以てして、ドイツに片手毆りに毆られて、捗々しい戰爭を爲し得ないのである。工業が國民の健康を惡るくして、兵士を弱くする傾きの有ることは、私も信ずる。さりながら、其れは早晩、改良されべき見込が無いではない。工業の戰爭に與へた効果は、今度の大戰に於いても最も著しく證明された。世界の海に乘出して、今日よりも更に大いなる大日本帝國を建設しようと思ふ者は、此點からでも

工業立國論

を唱へなければならぬではないか。況や、我々は大きな海陸軍を造らねばならぬ。我々の鄰のアメリカは、絶大なる海軍を有つて、我々を環視して居るではないか。我々の同盟國たるイギリスは、其海權を以て極東の海を壓することが出來るではないか。戰爭は大仕掛になつた。機械が戰場に於いても人間よりも餘計に働くべき時代になつた。大きな機械が中心になつて、大將中將が其

世界の市場を掌握すべし

仕拂期限を緩くすべし

手間取をしなければならぬ時期になつた。斯う云ふ場合に於いて、軍備を整頓するに一番必要なるものは金ではないか。其金はどうして出來る?。我が國を大きな工業國にして世界の富を集めるより他に仕方が無いではないか。我々は、もう

淺薄なる重農論

に耳を傾けべき必要は無い。

我々は工業立國を以て今後の方針としなければならない。國民の精力を茲に集中しなければならない。さうして、我々は世界の市場を自分の有にしなければならない。我々の工業を世界の市場に繋がなければならない。我々は大きな資本を積んで、科學の精鋭を應用して、品物の良い、價の低い物を世界の市場に持つて行かなければならない。

そればかりでは可けない。我々は同時に外國に於いて仕拂期限を緩かにして賣

支那人商賣に巧なり

付けなければならない。どんなに良い品でも、どんなに必要な物でも、買つた直ぐ金を拂はなければならず、右から左に金の請求をしなければならぬと云ふやうな仕組では、決して品物は多く賣れるものでは無い。昔の支那人は、日本に來て商賣をして、日本人に品物を貸して、さうして勘定しないで歸つて仕舞つた。其時代の航海は非常に危險なものであつて、一度歸つたら再び來られないかも知れない程のものであつた。さりながら、支那人はさう云ふ危險の場合でも、勘定を急がなかつた。海外萬里の日本に資本を投げて、知らぬ面をして歸つて仕舞ひ、五年も六年も經つて來て、其時に勘定をする。さう云ふ度量が有つたればこそ、

支那人の商業

は、東洋に強い威力を有つて居たのである。世界の市場を制すると云ふ場合に、斯う云ふ度量は最も必要である。此度量はどうしたら養へるかと云へば、今日

銀行と商人の聯絡

戰爭は強からざるべからず商戰は弱からざるべからず

商人は水の方圓の器に隨ふの如くになるべし

では銀行と商人の聯絡を一層密接にするより外に捷徑はない。銀行家が後援をして、二年でも三年でも仕切を取らないでも、仍ほ其商業を維持することが出來れば、商人は其度量を大きくして見せることが出來る。さう云ふ風な銀行は、國家自ら營むか、國家が其利益を保證しなければ出來ないことである。

斯うして、我々は世界の市場に乘出さなければならない。私は平常から思つて居る、國民は戰爭に於いては、どの位でも強くなければならない、強いだけ好い。さりながら、商賣に於いては、どの位でも弱くなければならない、弱いだけ好い。弱いと云ふのは、どう云ふ意味であるか。則ち、世界の何處にでも潜り込むことの出來る柔軟性である。昔から『商賣は弱いものだ』と云ふのは、此柔軟性を意味したのである。日本人が日本人自身の好む物を世界の人に賣付けるのでは、弱い商賣ではない。世界の人の好む所に依り、世界の人の嗜好を考へて、何處までも御客次第に曲つて行くことは、丁度、水の方圓の器に隨ふ

如きものであらねばならない。水には固い所が無い、固執する所が無い。相手次第で、どんな格好にも變つて行く、天下の極めて弱きものである。商賣は水の如くに弱くなければならない。孔子は商賣の事を敎へた人では無い。さりながら、孔子は

孔子、商賣の祕訣を說く

商賣の祕訣

を今から三千年も前に明言して居る。『言忠信行篤敬。雖蠻貊之邦行焉』と云ふのは、則ち此事である。我々の品には僞は無い、我々の品には間違ひが無い、則ち『言忠信』である。其相手の狀況、其購買力、其嗜好を考へて、どんなにでも曲つて行く、どんなにでも形を變へて行く、至つて弱い態度を示して行く。是れ則ち『行篤敬』ではないか。我々はさう云ふ意味に於いて、孔子は商賣の道を敎へたものと思つて居る。世界的に商賣を廣げようと思つたら、此格言を守らなければならない。さうして、國家は國民が此商

國家は商品を檢閲すべし

賣に慣れるまで、其商品に國家の極印を打たなければならない。商品を一々檢査して、此主義に達つたものは刎除けなければならない。僞の物、不正の品を賣るやうなことをしては、商業上の帝國は打建てることは出來ない。

斯う云ふ工業若くは商業の大帝國を建てるときに、一番恐ろしいものは

外國の競爭

である。アメリカの穀物が餘り廉くて、其廉い穀物をドイツに持つて來るから、ドイツ人はそれを恐怖して『アメリカン　ペリル』(アメリカの禍)と言つて居る。これは黄人の禍よりも怖るべき實質上の禍である。故に、ドイツ政府は關稅の城壁を高く築いて、其禍の這入つて來るのを禦いで居る。

佐倉の農會に於て

私は大正五年の夏、佐倉に行つて、佐倉の町の農會で演說をしたことがある。其時は農事上の功勞者に賞品を與へる場合であつたと記憶して居る。其時に、私が演說して言ふに

陸奥宗光

穀物輸入の國は農業衰微す

諸君は意外な所に農業に對する功勞者があることを忘れてはならない。諸君は農業に精を出す當事者のみを、日本の農業社會に功勳の有る者と思つては可かない。又た農業の學問に多く貢獻した學者をのみ、農業の恩人だと思つてはならない。私はそれより、もッと日本全國の農業に偉大な恩惠を與へた人があると思ふ。それは誰であるかと云へば、故陸奥宗光伯である。

陸奥宗光伯は政治家である。農業と何の關係が有るのであらうかと言ふ人が有らう。さりながら諸君、能く考へて御覽なさい。諸君が何ほど農業に出精しても、世界の大きな農業國に於いて、諸君の作つた物より廉い農產物を我々の市場に提供する者があつたら、諸君はどう爲さる。何ほど諸君が良い物を作つても、それが高ければ賣れッこは無いでは無いか。諸君の精出した結果は、徒らに空しき精力の消耗に終つて仕舞ふではないか。穀物を外國から輸入する國は、

其國內の農業は衰へて仕舞ふ。イギリスの農業の極めて憐むべき狀態に在るのは、どう云ふ譯であるかと云ふと、イギリスは穀物を輸入する國であるからである。幸に、日本には陸奥伯と云ふ政治家があつて、條約改正に成功した。さうして稅權を恢復した。此働きに依つて、我々が關稅の堤防を高くして、廉い農產物の輸入を禦ぐことが出來た。之に依つて、諸君が農業に精出して稼いでも、勵み甲斐があるやうになつた。若し、此關稅の城壁を高くすることが出來なければ、交通機關の發達して來た今日に於いては、日本よりも大仕掛な農園を有つて居る廉い農產物が、日本の津々浦々を訪問して、諸君を惱ませるに違ひないと思ふ。さう云ふ禍を免れ得たのは、政治家の稅權を恢復し得た結果であるとすれば、我々はさう云ふ人にも感謝しなければならないでは無いか。

斯う云ふ話をしたことがあるが、これは前の論旨を說明するに最も能く適合し

農産物若くは製造品の輸入を防禦するの必要

重大なる外交は關税の外交なり

て居る。廉價な農産物には限らない、廉價な外國製造品が我が市場に自由に賣られるやうになれば、我々の製造業は衰へなければならない。ドイツ流のダンピングが我々の市場に行はれるやうになれば、物價は下る、不景氣は起る、我々の工業は直ぐと妨害されなければならない。故に、我々はどうしても關税の堤防に依つて、外國の農産物若くは製造品の大波の如く寄せ來つて、我々の農業工業を妨害するのを禦がなければならない。則ち、關税の政策に依つて、我々は世界の市場を按排しなければならない。今日の外交を、唯だ外務省の手の中に在りと思ふのは、極めて近眼の話である。今日の外交で一番重大な外交は關税の外交である。世界の富の波が、日本帝國及び日本帝國の勢力範圍に押掛けて來る場合に、それを日本國民の工業の發達、農業の進歩の爲めに利用する政策は、唯だ關税の仕掛に待たなければならない。唯だ其關税を高くして、國の收入を増

すばかりでは何にもならない。唯だ競爭を抑へるばかりでも可けない。時としては關稅を廉くして他國の物を迎へなければならぬ場合もある。ロシアのやうな、國民が幼稚で、農業が主もなる仕事である國に於いては、農業に用うる蒸氣機關、其他農具の進步した機關は、輸入稅を廉くして歡迎しなければならぬこともある。さう云ふやうな

活殺自在の仕事

は、唯だ世界に於ける日本の位置を能く理會した政治家のみが爲し得る仕事である。若し、國民が關稅の外交に於いて失敗すれば、軍隊が勝つても、外務省が國の光榮を維持することに努めても、國民の世界に於ける位置は、下落したと言はなければならない。今日の農商務大臣は確かに大いなる意味に於ける外務大臣である。

外交上の三位一體

參謀本部と農商務大臣と外務大臣は、外交上の三位一體でなければならない。此調和が取れない外交なるものは、今日に於いては無意味の

農商務大臣には世界的の豪傑を要す

外交である。我々は外務大臣のみの人選に注意してはならない。我々は參謀本部に豪傑を入れたからと云つて安心しては可けない。我々は農商務大臣に世界的の豪傑を得なければならないと思ふ。

貯金と保險

斯う云ふ風にして、工業商業の帝國を世界に擴張する爲めには、まだいろ〳〵なことをしなければならない。貯金も奬勵しなければならない。保險の法も定めなければならない。さりながら、一番重大なことは勿論

軍備擴張

軍備の擴張

である。何ものが完全になつても、其完全なるものを保護する力が無ければならない。我々は大いなる海軍を建てなければならない。我々は効力の多い軍隊を造らなければならない。我々の外交は時としては戰爭の危險を避けない、一六勝負を敢てしなければならない。危險を避ける國民には進歩は無い。馬から落ちたことの無い者は、馬乘が上手になる譯には行かない。負けることを厭つ

では、碁、將棋の名人にもなれない。我々は、どうせ世の中に進むときには、危險を冒すものと覺悟しなければならない。

危險の極みは何であるか。最後の運命は籠城である。我々は海陸軍を盛んにすると共に、籠城の用意もしなければならない。國として

籠城をする準備

をしなければならない。イギリス人の一番苦痛とする問題は何であるかと云ふと、イギリス人はさう云ふ場合に、國として籠城をするだけの糧食を有つて居るや否やの問題である。戰時の糧食の不足であるや否やが問題である。ドイツも此問題を苦心して居る。我々はさう云ふ問題に付いても考へて見なければならない。さりながら、さう云ふことは世の人の多く言つて居る所であるから、暫く茲に略する。

十七　犠牲論

これまでは、國としての我々の心がけを言つた。我々の國はどう云ふやうにして帝國の時代に乘出さなければならぬかと言ふことを語つた。私は是れより更に進んで

國民の性情を鍛練せよ

國民一人一人の教育

に付いて語つて見たい。則ち、斯う云ふ場合に於いては、國民の心と體をどう云ふ風に鍛練しなければならないか、國民の性情をどう云ふ風に陶冶しなければならないかと云ふことを語つて見たい。則ち、全體に於いて國民教育に議論の歩を進めて見たい。先づ、第一に言はなければならぬことは、此問題を解決するには、科學的の基礎に據らなければならないことである。人間の今日まで

科學を基礎とせよ

心理學を重んぜよ

進んで來た進歩に注意し、科學的に『人間なるものは如何なるものか』と云ふことを研究して、其研究の確實な結果の上に仕事をしなければならない。それと同じ意味に於いて、我々は心理學を重んじなければならない。心理學を基礎として、其心理學の我々に教へた原則の上に立つて、我々の教育案を立てなければならない。人は泥のやうなものではない。泥は好む儘に形を造ることが出來る。一つの泥から英雄豪傑の像も出來るし、匹夫野人の像も出來る。蟲の形も拵へられるし、鳥の形も出來る。さりながら、人間の心には一定の法則がある。人の理會の性質には一定の制限がある。我々は其れを知らなければならない。それを知らないで國民の教育案を立てようとするのは、目の無い基盤で碁を打たうとすると同じである。これだけは豫め言つて置かなければならない。我々は無理なことをしてはならない。我々は科學が出來ないと教へたこと、心理學がむつかしいと教へたことを、國民に強ふる譯には行かない。我々は科學

國民教育の基礎を立つべし

罪惡、病氣、貧乏は社會組織より來るてふ教理に抵抗せよ

の研究が許して人間の爲し得る範圍だとしたものに於いて國民教育の基礎を据ゐなければならない。此準備が成つて然る後に、我々の爲すべきことは何であるか。第一に、我々は國民の志を立つることを教へなければならない。則ち、強い個人を作ることを一番先きに努めなければならない。近世の思想の傾向は、個人の責任を餘り輕く視ることである。世の中の罪惡、世の中の病氣、世の中の貧乏は、皆な社會の組織が惡るいから來るものである。個人の責任は無いものであると云ふやうに、近世の文學は教へる。さりながら、我々は斯う云ふ教理に反對しなければならない。矢張り、罪惡、病氣、貧乏は、個人たる我々の責任であると云ふことを強く說かなければならない。我々は『周圍の狀況のみが人を作る』と云ふ教理に抵抗する必要がある。『周圍の狀況のみが決して人を作るものではない、寧ろ其人の

人格が周圍の狀況を作る

ものだ』と敎へなければならない。『社會のいろ〳〵の缺點は個人の責任ではない、さう云ふ所から出た罪惡は、それは周圍の狀況が生み出したものだ』と云ふ敎理に強く抵抗しなければならない。『社會の缺陷は個人の責である、罪は個人の生む所である、狀況だけでは罪と云ふことは生れて來ないものである』と云ふことを、極力主張しなければならない。我々は『社會の改革は唯だ周圍の狀況から來るものである』と云ふ淺薄の敎理を敎育界から排斥しなければならない。『組織、法律、過半數、社會的機關などと云ふやうなものが、社會を改革することは出來るものでない』と云ふ信念を深く國民の心に植ゑなければならない。『社會の改革は個人自らの改革から始まる』と云ふことを敎へなければならない。『人は法律や方法から生れる器械ではない。

人は宇宙の中心

人が自然を征服し得るは科學の働きなり

ケプレルの六千年後の識者を待つ

である。萬物は人の爲めに存在するものである。人生は重荷を負へる獸のやうな憐れむべきものではない。人は宇宙を征服しなければならぬ』と云ふことを敎へなければならない。オイケンは、科學を以て人が自然を征服した働きだと言つて居る。我々はさう云ふ敎理を日本國民に敎へなければならない。日本國民の一人の志を立てなければならない。これが總ての改革の始まる所であると、私は信ずる。昔、ケプレルが天文學を研究して、謂はゆる地動説を明白に明らめ、さうして一冊の本を書いた。彼が言ふに『私の書いた本は、決して今讀んで分かる人はあるまい。私の書いた本は永く其本を讀む人の來るのを待つて居る。

神が世界を造つてから六千年經つて、私のやうな學者を出して、神が造つた此世界の法則を敎へた。さうして見れば、私の此書いた本を理會する人が、今から六千年後に出ないこと

沙翁、我句不滅を豫言す

も無からう』と言つた。彼は自分一人の事業が、假令全世界の人に理會されなくても、自分が惡るいのでは無いと思つて居た。彼は、世界が自分を理會するの日あるべきを信じて居た。彼は、彼を理會せざる當時の全世界の人に對して、數千年後に唯だ一人の彼を理會する知己のあることを確信して居た。シエクスピーヤも同じやうなことを言つて居た。彼は『宇宙の何ものでも滅びることが有らう。さりながら、私の書いた名句は滅びないだらう』と言つた。『文章千古事。得失寸心知』。彼は、自ら其文學の不朽なることを信じて居た。偉大なる個人は、總て斯う云ふやうに信ずる。さう云ふ壯心烈志を、我々は國民の一人一人に植付けなければならない。一個人に自ら神の子の如く感ぜしめなければならない。自分の信じたことが眞であれば、正しくあらば、たツた一人の信念でも

最後の勝利は自分にある

通議

擧國之士有以自立則國立

國の強きは強き個人の集まれるが故なり

と云ふ強い人を作らなければならない。此強い人を以て組織した國家は強からざるを得ない。これは私の發明でもない、昔から識者がさう云ふことを言つて居る。頼山陽の『通議』にも

國之所以爲國。以其有士。士之所以爲士。以其有氣。士有氣。而後有以自立。擧國之士。有以自立。則國立。擧國之士。無以自立。則國仆。

と云ふことを言つて居る。一人の強い者を作り得ない國家の教育は失敗である。國を強くして個人を弱くする教育は失敗である。國の強いのは、強い個人が集まるから強いのである。故に、第一の目的は、強き個人を作ると云ふことにあらねばならない。さうながら、唯だ強い個人と云つたところで、如何なる者が強い個人であるかと云ふことも考へて見なければならない。唯だ我慢が強い、我が強いと云ふのでは、それは獸の強いのと變らない。カーライルは言つて居

るではないか。『獅子は動物の中で一番強い。さりながら、獅子よりも強い者に遇ふと、直ぐに負けて仕舞ふ』。強い個人と云ふのは、斯う云ふ意味のものであつてはならない。唯だ我の強い者であつてはいかない。もう少し高い意味の強い人を作らなければならない。我々は茲に於いて、

國民に宗教の缺くべからざること

を言はなければならない。若しも、人間の強いと云ふことが、動物的の意味に於いてのみ強いと云ふことなら、自分より強い者に逢へば、逃出さなければならない。さりながら『雖千萬人吾往矣』と云ふ、利害成敗を眼中に置かない強さは、どうしても深い信念、卽ち宗教に求めなければならない。宗教を空しき影だと思つてはならない。人は此世の慾望、此世の幸福のやうなことの爲めに、地上に存在して居るものと考へて、それで安心して居る譯にはいかない動物である。人の中には絶えず上の方に進んで行く力がある。人は無限に偉

大の行爲

戀は自然が大なる目的を遂げむが爲めの一計なり

大なるものの活動の一部に自分の身を結び付けて、神と共に歩むと云ふ自覺のある時に、始めて强きものたることを得るのである。人間の仕事を見ると、天の働きだと思はれることがある。人の中に天が働いて居ると思ふやうなことがある。丁度、詩人が詩を作る場合に、詩人自らも自分の腹の中から出たものでないやうな、謂はゆる天籟の妙味が起ることがある。英雄豪傑の仕事を見るのに、酒に醉つた者が酒の勢ひで働くやうな、自分以外の力に動かされて働いて居るやうに見えるものがある。人間は此世の中に生れて來ようと思つて生れて來たものではない。星を其軌道に歩ませ、地球の分子を其中心に向はせる其力は人をして戀を爲さしむる。戀と云ふものは、自然が大いなる目的を遂げむが爲めに

人間に對する一つの計畫

であると言つた者がある。人間は其戀人を得て其子供を有つたときに、決して

幸福は人の事なり偉大は天の事なり

冷靜な計畫で、夫となり父となつたのではない。我を餘儀なくせしむる力に驅まされて、殆ど盲目的に其道を歩んだのである。人間の中に天の働いて居ると云ふことは、夢ではない、事實である。最大多數の最大幸福を圖るのが人類の目的だと云ふことは、イギリスの實利主義者ベンザムの唱へたことではあるが、人間は唯だ幸福であるのみでは滿足しない。幸福は人間の心に全幅の滿足を與へるものではない。人間は幸福ならむよりは、寧ろ偉大ならむことを求むるものである。これは人間の中に天の働くのである。幸福は人間の事である。偉大は天のことである。人間は個人的にどんなことが彼の身に生じて來ても、それには構はないで、偉大なる目的に向つて突進することがある。蛾の燈に集まる如く、流れの低きに就くが如く、我々は時に依り好んで死ぬることがある。好んで幸福を拋つことがある。それは如何なる理由であるか。

幸福ならむよりは寧ろ偉大なれ

人に關する淺薄なる思想家の意見

戀は人を迷はす力なり

と、心の中に囁く天の要求に從ふのである。こゝまで國民の志を持つて來なければ、本當の強い人は出來ない、本當の犧牲獻身は出來ない。斯う云ふ狀態は、心理學を科學的に研究した者でなければ知ることは出來ない。淺薄な思想家は、人は唯だ幸福の爲めに生きて居るものと思つて居る。人は唯だ利害を勘定して、害の少なく、利の多い所に附くものだと思つて居る。さう云ふ信仰を有つて居る人民に向つて、我々は『國の犧牲になれ』と強ふる譯には行かない。さう云ふ人に取つては、赤穗義士が命を捨てたのは無意義である、さう云ふ人に取つては、楠公の一族の悉く湊川に死んだのも無意義である。さりながら、人間の中に天が働いて居る。それが戀となつて現はれるときは、男も女もそれが爲めに利害の計畫以外に飛出す。戀に實利主義は無い。『男が其戀した女の手を握つたときには、全世界を有つたかのやうに感じる』と、ショーは言つて居る。『お前と一緒に暮すなら、深山の奧の其奧の、虎臥す野邊でも、狼の居

戀は人を奴隷にす

抵抗の精神

る所でも厭ひはせぬ』と云ふやうなことを、日本の俗謠は歌つて居るではないか。なぜである？。人間の中に働いて居る天は、人間をして戀を爲さしむるときは、利害の打算を止めて仕舞はせるからである。男子は之が爲めに自由と名譽と自分の身體をすら賣つて仕舞ふことを念としないではないか。女子は身を男子の犧牲にして顧みないではないか。

戀は人を奴隷にす

と云ふ格言は、此事實を指すのである。單り戀のみではない、天が人間の中に働くときは、同じ理由に依つて人間は國の爲めに命を捨てることを恐れない。犧牲獻身の働きは此場合に起るのである。此場合にまで人間を持つて來なければ、則ち個人を宗教的ならしめなければ、本當の強い個人を作ることは出來ない。我々は又た強い個人を作る爲めに

抵抗の精神

心の中に起れる要求は社會の命令よりも重大なり

を教へなければならない。人間は衝突を好むものである、衝突すべき天性を有つて居る。抵抗は人間の力の發現の中で最も良く其人格を發揮するものである。人の性格の露骨に表はれるときである。人の中に天の現はるゝときである。人民の敵となることを厭はない大きな個人は、此場合に現はれる。人は始めは單純な社會の一人である。人と社會と同じ考へで、同じ趣向で、動いて居るものである。さりながら、文明の進むと共に、個人と社會とは別なものになる。それは前にも話した。さうすると、今度は其別なものになつた人間自身は、自分の中に社會全體の利害より貴いもののあることを發見する。獨立の自由を喜ぶ心は、此場合に起る。さうして、社會に反對する彼に取つては、彼れの心の中に起つた要求は、社會の命令よりも重大である。彼は茲に於いて社會に抵抗する、社會を教へる、社會を征服せむと圖る。これが國家創造の努力になる。此努力が若し止んだら、國は死んだものである。細胞が死ねば、身體も死ぬ。斯

大なる思想

王政復古

う云ふ抵抗の心が個人の中にあつて、常に國家社會を監督し『善いやうに、善いやうに』と刺撃して行くから、之に依つて國家が活力を失はないのである。我々は此事實を忘れてはならない。歴史は斯う云ふことを教へて居るではないか。

大いなる思想

は、いつでも始めは一個人の頭腦に來る、さうして永い間、群衆と闘ふ。最後に群衆を征服する。さうして、新しい時代が來る。斯う云ふ風にして、世の中が進んで來たのである。小國から大國になり、大國から強國になり、強國から帝國になるのでも、いつでもさう云ふ國家を造らねばならぬと云ふ最初の暗示は一個人の心の中に來る。さうして、始めは多數の人に反對され、次には少數の友を得、段々廣がつて全民の同意を得るに至つて、始めて國の形は變更するのである。如何なる國に於いても、此順序は決して違はない。日本の王政復古の歴史を考へて見ても、此事實は明白である。始めに新しい國家が少數の有志

衝突の人

抵抗の人

強き個人を養成するは生命ある國家を造るの基礎なり

家の心に來た、國學者の頭腦に來た、歷史家に來た、最後に武士全體に來つて、遂に維新の改革が出來たのではないか。則ち、國家の生命は、いつでも斯う云ふ強い個人の中にあらねばならない。此個人は無論、命を捨てることを厭はない。なぜなれば、大きな思想が一人に來た最初は萬民の敵である。

萬民の敵

の蒙るべき運命は、殉教者たる犧牲に他ならない。死ぬことを厭つては、迚も最初に來た思想を世の中に廣めることは出來ない。最初の人は衝突の人である、抵抗の人である。少數の味方、若くは何者も味方に持つて居ない人でなければならない。さう云ふ人の當然行くべき運命は犧牲である。さりながら、彼は犧牲を厭ふ者ではない、強き個人は利害の打算の外に超絕する。彼は幸福の爲めに生きては居ない。偉大の爲めに生きて居る。彼は自分の爲めに生きて居るのでない。自分を通して現はれる天の爲めに生きて居る。故に、彼は犧牲たるこ

大いなる大日本帝國を造ること

とを敢てする。我々は斯う云ふ強い一個人を養成するのを命ある國家を造る基礎であると思ふ。

強い個人を造つた後に、我々のすべきことは何であるかと云ふと、其個人の壯心烈志の一つの大計畫の中に鑄冶して

大いなる大日本帝國を造る

と云ふ、則ち國造りの仕事に從事せしむることである。『日本國は既に造られたり』と思ふのは、それは老人の考へである、それは老いたる考へである。國は常に造られつゝあるものである。國は大きな生きた木のやうに、常に創造されつゝあるものである。國は社會の狀態境遇の變はる度に、其陣型を變へなければならないものである。それは小國の時代が帝國の時代まで移つて來た變遷で能く分かる。我々は今、國を造りつゝある、我々の元氣が常に新しく、常に勇ましいのは、之が爲めである。昔の支那の哲學者の荀卿は『天地之始

個人の心を造國の事に集中せよ

神の意に柔順なることと神の意を行ふこと

今日是也。百王之政。後王之政也』と言つた。我々は今、日本國を開いて、日本國を造つて居るのである。我々は國民の一個人を強くして、一個人の心を此造國の事に集中しなければならない。我々は唯それを考へたのみでは何の役にも立たない。我々はそれを直ぐとしなければならない。我々は活動と生活と同じ意味であると考へなければならない。我々は唯だ考へて居たばかりでは何にもならない。我々は世界と共に、世界の中に日本國を造ることに努力しなければならない。『我々は神の意に柔順なることを以て主義とする代りに、神の意を行ふを主義としなければならぬ』と、ショーは言つて居つたが、我々は此見識に從はなければならない。我々は日本國を現に今創造しつゝあるものであると考へなければならない。我々は新しい道德を造らなければならない。我々は產業的革命の生んだ物質的の進步を歡迎する。さりながら、之と同時に、其大きな富を賢く用ゐ、正しく分配すべき

精神的基礎たる新道徳

を造らなければならない。人間を人間らしくしなければならない、機械の奴隷としてはならない。唯だ人間に『自由なれ』と教へるばかりでは可かない。人間を自由ならしむべき力を新しく建てなければならない。何よりも大切なことは、調和の精神、寛容の精神である。世界に乗出して内容の豐富な帝國を造らうと思ふ國民は、小さな腹では面白くない。小さな腹では其使命を遂げることは出來ない。我々は國の中にいろ〳〵なものを包容しなければならない。さう云ふ道徳を國民に教へなければならない。『世の中の思想は、三つの順序を經て纏まるものだ』と、ヘーゲルが言つて居る。最初に發論をする者がある、其次に『それは可けない』と言つて反對をする者がある、第三に雙方の意見を合せる者がある。最初に『イエス』と言ふ者があり、それから『ノー』と言ふ者があつて、今度は『イエス』と『ノー』を合せて、本當の結論に達するものが

狹量の國家は國の內容を貧弱ならしむ

ある。此三つが無い場合には、本當の結論に達し得ない。これは人が一人で物を考へるのでも同じことで、最初には斯うである、斯うではあるまいか、今度に其裏を考へて、最後に正しき結論に達するものであると云ふ。國にも是れだけの種類の人が要る。發論家も要る、それに反對する人も入り用である、反對論者があつて嚴しく發論者の說を批評するので無ければ、其議論の正しい價値を知ることが出來ない。さうして、最後に第三者が出て、始めて好い結論を得るのである。然るに、無闇に『斯う言つてはならぬ』の『斯う考へてはならぬ』のと、個人の議論を制して、最初から一定の仕掛で國民を導かうとするやうな、さう云ふ腹の狹い國家であつては、國の內容は貧弱にならなければならない。

私は、近頃の犧牲だの獻身だのと云ふことを說く人に、斯う云ふ腹の狹い消極主義を土臺にする者の多いことを悲しむ。

土耳其の盛時

トルコでも、其盛んを極めたときには、其國の內容は豐富であつた。其時代の

空論を自由ならしめよ

病人をして其苦痛を訴へしめよ

トルコ人自身は回教の信者であつたに拘らず、キリスト教を信ずる貴族の子弟を連れて來て軍隊を組織した。此軍隊は極勇氣の有る美しい少年を擇んだものである。トルコ人には限らない、蒙古人、滿洲人、日本人、漢人、總てのアジア人の大きな帝國を建つた者は、何れも斯う云ふ風にして、他の人種、他の國、他の宗教の民を、自分の國の軍隊として使つた。國民として包容の大きいことを示したものである。我々は此

包容の偉大なるアジア人の特性

を失つてはならない。例へば、どの位な空論であつても、其空論を左まで怖がる必要が無い。ルツソーが『自然に還れ』と叫んだのは、空論に相違ない。さりながら、彼れの『自然に還れ』と言つた其叫びの中には、其時代の弊害に反抗する煩悶の響が有る。言つて見れば、病人が其苦痛を訴へたのである。どうせ病人の訴へる苦痛であるから、正當に其容態を言現はしたものでは無い。さ

創造は空想に伴ふ

りながら、我々は時としては病人の苦悶に耳を傾けなければならない。それで無ければ、病氣は何處にあるか分らない。新しい善い議論は、いつでも多少の空想の伴つて居るものである。其空想が樣々の抗論に逢つて、然る後に本當の物が現はれて來るのである。錬金術のやうな空想が化學を生んだ。進化論も始めは空想であつた。後には科學上に明白に決められるものになつた。我々は空想でも或る程度までは自由に告白するを許すが宜いと思ふ。狹隘な形式を好む人は、空想や妄想を寛容すべしと云ふ私の說を、矛盾を喜ぶものだとも云はう。併し

矛盾は人の天性

矛盾は人間の天性、

である。フレデリッキ大王の如きは、プルシアの國を建つた英傑である。ドイツは此人に依つて、始めて一國民として將來に發展すべき希望を有つことが出來た。ドイツ主義の神と言つても宜い人である。さりながら、我々はフレデリ

國の精神的内容を豐富ならしめよ

ツキ大王の行儀を考へて見なければならない。彼は不信者であつた、其國民の信仰を輕蔑する懷疑家であつた。彼はドイツ人でありながら、フランス語を話した。文章はと云へば、フランス文をのみ作つた。風俗はフランスの風俗を喜んだ。さうして、ドイツ人の作つたドイツ文學を輕蔑した。さう云ふやうなハイカラ男、さう云ふやうな他國の文學を奴隸の如く崇拜した人が、ドイツ國民主義を打建つた英雄であつたとすれば、我々は人生の矛盾を思はざるを得ない。然らば則ちどんな議論でも、どんな說でも、成るべく寬容するが宜しい。それが國の精神的内容を豐富にする道である。我々は、總ての思想を統一し、綜合し、有機的にし、良いやうに組合せなければならない。總ての思想を滅ぼし、總ての議論を沈默せしめて、獨り貧弱な國家の意思をのみ國民に强ひようとするならば、それは古典時代の國家主義にして、現代の國家主義ではない。

以上の研究を綜合して我々の達した

結論

は他ではない。個人の心の中に在る要求は、到底滅ぼすことは出來ない。それと同時に、國は人間が動物から離れて人間となつた時から發展し來つたもので、決して虚榮でもなく幻影でもない、國家の存在は實在中の實在である。其國の眞實なる繁昌は強き個人、其強き個人の好んでする犧牲の精神に在ると云ふことである。さうして、此犧牲の精神は、則ち個人の國家の維持若くは創造の爲めに自ら好んで趣く死は、世の初めから未來永刧、人類の存する限りは、人類の幸福の基礎、人類社會を支へる根軸になるものであると云ふことである。

林　茂　淳　速　記

世界の過去現在未來　終

大正六年四月二十六日印刷
大正六年四月二十八日發行
大正六年五月一日再版發行
大正六年五月二十八日三版發行

『世界の過去現在未來』並製
定價金八拾五錢

不許複製

著作者　山路愛山

東京市日本橋區西河岸町十五番地
發行兼印刷者　大江保吉

東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社

東京市日本橋區西河岸町十五番地
發行所　大江書房
振替口座二二一九四六番

愛山山路彌吉先生と保吉と交誼を結ぶこと茲に二十有一年間。大正元年の夏、保吉、獨立斯業を開始するや、先生、保吉の擧を賛せられ、數年後に著書を出版せしむることを約せらる。大正五年春、先生が曾て各地に於て講演せられしもののの覺書に就き之を敷衍講演し、林茂淳氏をして速記せしめ、之を公けにすることとし、同年七月を以て『山路愛山講演集』第一編を發行せり。續いて十月、第二編を發行せり。第三編以下に掲ぐる爲め『神道論』其他の講演あり。八月より本年一月まで『世界の過去現在未來』の講演あり。尚ほ續いて、史學、文學、社會問題等に就いて、特に講演せらるゝ豫定なりしに、遽に病魔の侵す所となり長逝せらる。先生健在なりしならむには、尙ほ各種の講演、各種の著書を公けにするを得べかりしに、誠に痛惜に堪へず。されど『世界の過去現在未來』及び講演集第三編に掲げたる『神道論』は、先生が多年研究の結晶にして、其獨立不羈の言論、自ら時流に殊なるものあり。之を公けにするを得たるは實に先生の賜にして、保吉の幸榮とする所なり。唯だ第三編を講演集の終刊とすること、實に遺憾とす。茲に講演集の終刊を愛讀者に告ぐると同時に、謹んで愛山先生の靈に感謝す。

大正六年五月

大江書房主　大江保吉

山路愛山講演集

第一編、第二編
定價各參拾錢郵稅各四錢
第三編
定價五拾錢郵稅六錢

第一編

開國五十年史梗概　見る人、導く人、治むる人
三將論

第二編

源氏物語を讀む　修養論　近世文明の淵源
西鄉隆盛

第三編

神道論　神道論(再び)　キリスト教に就いて
諸子研究の必要　莊子論
弘法大師

大江書房出版圖書目次

村上浪六先生著（第十八版）

居家處世 人間學

前編・後編 定價各八十五錢 郵税各八錢

村上浪六先生著（第十版）

小説 いたづらもの

前編・後編 定價各八十五錢 郵税各八錢

村上浪六先生著（第五版）

生きたる 人間の解剖（くびより以上）

定價七十五錢 郵税六錢

帝國教育會長男爵辻新次閣下序
日本弘道會青年部編纂

乃木大將謹書 教育勅語正義

定價二十五錢 郵税四錢

德富健次郎著

（第十六版發行）

新刊 死の蔭に

定價 壹圓八拾錢
上製定價貳圓參拾錢
郵稅 各拾貳錢

何處からともなく死の宣告が下つた。死神の甘い囁やきも頻に誘ふ。踏止まる力はぬけて、ずるずると死の方へ引きずられる。一思ひに死んでのけやうか。何處やらにまだ未練が殘る。いよ〳〵殺す氣か、それとも生きる路の一筋を糸程にも殘してあるのか、五尺何寸眇たる此身を父の宇宙に投げつけて、はつきりした答を聞かう。若しまたどうせ死ぬものなら、死ぬ其前に愛したすべてに今生の別を告げ、死刑囚が絞臺に上る前にふかす名殘の莨三本、許されるかぎり歡樂も取つて見やう。こんな心から著者は家族引連れ、九州から南滿洲朝鮮、さては山陰道かけて秋の三月を半死半生にさまよふた。今から四年前の事である。」死は到頭やつて來た。それは必しも彼が期待した死ではなかつたが、死には違ひなかつた。長旅から歸つて唯半歳、父の死と共に彼の死は來た。閉門三年、墳墓の蔭に彼は住んだ。「死の蔭に」は其墳墓の蔭に書かれたさまよひの旅の追憶記である。

早川貞水師講演

教育講談

第一編　中江藤樹
第二編　馬のわらぢ
第三編　中吉の忠義
第四編　人の母
第五編　愛國心千人針
第六編　人の一心
第七編　二宮金次郎
第八編　般若面
第九編　宮本武藏
第十編　木村長門守
第十一編　烈女秀
追次刊行

毎編定價十錢
郵稅各二錢

伊藤桃水氏著

古今英傑 最後の悲劇

定價三十五錢
郵稅四錢

元帥海軍大將伯爵東郷平八郎閣下題字
素行會長伯爵松浦厚閣下序
松浦伯爵家文庫樂歳堂編纂

山鹿素行先生精神訓

並製定價八十五錢
上製定價一圓五十錢
郵税各十二錢

公爵毛利元昭閣下御母公題歌
伯爵寺内正毅閣下題字
子爵小笠原長生閣下題字
男爵石黒忠悳閣下序文
愛山山路彌吉先生跋文
早川貞水師講演
（第三版）

講談 乃木大將實傳

定價八拾五錢
郵税十二錢

猪飼香石先生書（習字用）

教育勅語帖

定價二十錢
郵税四錢

德富蘇峰先生題字
坂本箕山先生著（第三版）

公爵桂太郎

定價金六拾五錢
郵稅金八錢

伯爵松浦厚閣下題字
男爵石黑忠悳閣下題字
佐藤獨嘯先生編

長谷川泰翁

奇人の奇言

定價金五拾錢
郵稅金六錢

發行所
東京市日本橋區西河岸町一五
振替口座二二九四六番
大江書房

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

purchased from the
MELLON FOUNDATION GRANT

for

EAST ASIAN STUDIES

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03048 9819